福井県勝山市
古宮遺跡発掘調査報告書

平安博物館考古学第2研究室
渡辺　誠・編

1978年3月
平安博物館

福井県勝山市
古宮遺跡発掘調査報告書

平安博物館考古学第2研究室
渡辺　誠・編

1978年3月
平安博物館

序　　文

先人の残してくれた貴重な文化的遺産を保護活用し，また後世に守り伝えることは，現在に生きる我々の重大な使命である。

本書は1975，76年度に実施した勝山市村岡町古宮遺跡の調査結果を収録したものである。

この調査は，国道157号線道路改良事業に伴って，その一部が消滅せざるを得なかった縄文時代遺跡を事前に調査し，記録にとどめたものである。この記録を市民各位に知っていただき，勝山市の黎明を知る上での一つの資料として，広く活用されることを希望するものである。

最後にこの調査の実施および報告書発刊にあたり，深いご理解と御協力を示された勝山土木事務所，現地での調査・報告書の執筆・編集に当られた平安博物館の渡辺誠先生をはじめ，調査に参加いただいた方々，御指導・御協力いただいた福井県教育委員会，土地所有者の山本繁治氏に対して，深く謝意を表する次第である。

昭和53年3月

勝山市教育委員会

教育長　斎　藤　　忠

凡　　例

1. 水平基準線は，センターライン杭№171（地盤高226.72m）を0とし，層序などの基準線には，このレベルよりのマイナス数値を示す。地盤高は巨視的にみて，海水準に準じるとみなされる。
2. 遺物番号は，遺物台帳と同一のものを記す。台帳および遺物との直接対比を，容易に行ない得るようにするためである。

   たとえば，フ・ト5—C1とあれば，フルミヤイセキ（本報告書ではこれのみ省略）の，ト5区における石器（C）の第1である。アルファベットは，A・土器，C・石器，E・自然遺物（石片）の類別を示す。
3. 遺物の計測値の単位は，cmおよびgであり，（　）は現存値を示す。
4. 図版中の遺物の大きさは，特に記していない限り約3分の1である。
5. 遺物・諸記録は，勝山市教育委員会において保管されている。なお，遺物番号に基づく収蔵遺物目録は，同教委と平安博物館に各1通備え，遺物の検索・閲覧に便ならしめてある。
6. 本報告書に掲載の地図は，建設省国土地理院長の許可を得て，同院発行の5万分の1地形図を複製したものである。（承認番号）昭和53北複第121号。

執筆分担一覧表 （括弧内は現職名）

第1・2・5章　付編	渡辺　誠	（平安博物館考古学第2研究室助教授）
第3章	渡辺　誠	
	小沢一弘	（名古屋大学文学部考古学研究室嘱託）
	上野修一	（立命館大学文学部学生）
第4章	鈴木忠司	（平安博物館考古学第1研究室助手）
	南　博史	（関西大学文学部学生）

目　　次

序

凡　　例

第1章　遺跡の位置と環境 …… 13
　第1節　遺跡の位置 …… 13
　　1—1. 位　　置
　　1—2. 立地条件
　　1—3. 道路の変遷
　第2節　周辺の遺跡 …… 17
　　2—1. 各遺跡の概要
　　2—2. 立地条件の再検討

第2章　発掘調査の経過 …… 21
　第1節　第1次発掘調査 …… 21
　　1—1. 契機と調査団の編成
　　1—2. 調査経過
　　1—3. 結　　果
　第2節　第2次発掘調査 …… 22
　　2—1. 調査団の編成
　　2—2. グリットの設定
　　2—3. 層　　位
　　2—4. 柱穴様ピット

第3章　出土遺物1・土器 …… 33
　第1節　I 群土器 …… 33
　　1—1. 分　　類
　　1—2. 出土状態
　　1—3. 編年的位置
　第2節　II 群土器 …… 36
　　2—1. A類・茅山下層式類似土器
　　2—2. B類・極楽寺式類似土器
　　2—3. C類・北白川下層2b式土器
　　2—4. E類・北白川下層2c式土器
　　2—5. E類・朝日下層式土器
　第3節　III 群土器 …… 39
　　3—1. 分　　類
　　3—2. 出土状態
　　3—3. 鷹島式土器との比較
　第4節　IV 群土器 …… 44
　　4—1. 分　　類
　　4—2. 分類の大別
　　4—3. 出土状態

第5節　土師器・須恵器・陶器……61
第6節　圧　痕　類……62
6—1.　器壁中における種子の圧痕
6—2.　アンペラ圧痕
第7節　土器群と層序の関係……64
第4章　出土遺物2・石器……65
第1節　出土状態……65
第2節　打製石斧……67
第3節　石　皿……73
第4節　敲　石……73
第5節　磨　石……80
第6節　石　錐……83
第7節　礫石錘……84
第8節　編物石……89
第9節　磨製石斧……89
第10節　石　匙……90
第11節　削　器……92
第12節　石　錐……92
第13節　礫　器……94
第14節　石器組成……94
第5章　考　察……96
第1節　北陸地方の押型文土器……96
第2節　北陸地方中期初頭土器群の動向……99
第3節　石器にみる生活文化……101
付　編　勝山市東部における〝もじり編み〟用錘具の民俗調査……105
第1節　民俗調査の目的……105
第2節　調査地点の概要……107
第3節　事例報告……109
3—1.　寺尾部落の場合
3—2.　暮見部落の場合1
3—3.　暮見部落の場合2
3—4.　谷部落の場合
第4節　比較検討……121
第5節　礫石錘の用途……123
引用文献目録……125
謝　辞……127

図 版 目 次

図版 1　遺跡遠景　上・東北方より
　　下・同近接
図版 2　上．自然湧水点
　　下．遺跡より自然湧水点のある林を望む
図版 3　上．旧北谷道脇の塚，西より
　　下．もと同所にあったお地蔵様
図版 4　三叉路付近人家跡　上・三叉路西側
　　下・同南側
図版 5　上．第1次調査開始時の状態
　　下．同終了状態
図版 6　上．発掘終了後のⅡトレンチ，南より
　　下．発掘終了後のⅨ～Ⅺトレンチ，東より
図版 7　上．発掘終了後のⅨトレンチ，南より
　　下．第2次調査開始時の遺跡全景，西北より
図版 8　上．道路敷の石塊
　　下．東部杉林中発掘光景
図版 9　上．標準的な層序，フ3区南壁
　　下．撹乱の著るしい層序，ミ3区南壁
図版 10　上．礫層断面，ヨ1～3区西壁
　　下．礫層発掘終了光景，東北より
図版 11　柱穴様ピット　上・北より
　　下・東より
図版 12　Ⅰ群土器出土状態　上・ヘ4区
　　下・同近接
図版 13　上．Ⅰ群土器
　　下．ⅡA類土器
図版 14　上．ⅡB～ⅡE類土器
　　下．ⅢA類土器
図版 15　ⅢA類土器
図版 16　上．ⅢA類土器
　　下．ⅢC類土器
図版 17　ⅢB・ⅢC類土器
図版 18　上．ⅣB類土器出土状態，セ2区

下．ⅣA・B類土器
図版 19　左．ⅣA類土器
右．ⅣB類土器
図版 20　ⅣC・D類土器
図版 21　左．ⅣD類土器
右．ⅣE類土器
図版 22　上．ⅣD類土器出土状態，フ5区
下．ⅣE類土器
図版 23　上．ⅣE・F類土器
下．ⅣE・G類土器
図版 24　ⅣF類土器
図版 25　上．ⅣH・I・J類土器
下．ⅣE類土器
図版 26　上．ⅣE類土器
下．ⅣJ類土器
図版 27　ⅣJ類土器
図版 28　ⅣKa類土器出土状態，へ5区
図版 29　左．ⅣKa類土器
右．ⅣKc類土器
図版 30　上．ⅣKa類土器の展開
下．ⅣKb類土器
図版 31　上．ⅣKb類土器
下．種子類圧痕
図版 32　上．アンペラ圧痕
下．同モデリング陽像
図版 33　石皿出土状態，ト5－C1～3
図版 34　石皿出土状態　上．ト5－C3
下．ニ4－C6
図版 35　上．削器・石皿出土状態，ノ5－C4・5
下．石皿出土状態，フ2－C4
図版 36　上．石皿出土状態，マ2－C3
下．敲石出土状態，ッ3－C3
図版 37　敲石出土状態　上．ハ3－C1
下．Ⅷ1－C2
図版 38　敲石出土状態　上．モ2－C1

下．マ2－C4
図版 39　上．敲石出土状態，ノ5－C9
下．磨石・敲石出土状態，フ4－C2・3
図版 40　敲石出土状態　上．ヘ4－C2
下．ト3－C1
図版 41　磨石出土状態　上．ノ2－C1
下．Ⅶ1－C1
図版 42　磨石出土状態　上．ヘ2－C1
下．フ3－C1
図版 43　石鏃出土状態　上．チ4－C2
下．Ⅵ4－C3
図版 44　上．石鏃出土状態，ニ5－C3
下．礫石錘出土状態，セ4－C2
図版 45　ニ4区における礫石錘出土状態
上．北より，下．南より
図版 46　ニ4区における礫石錘出土状態近接
上．ニ4－C1・2，下．ニ4－C3・4
図版 47　上．Ⅵ5区における礫石錘出土状態
下．礫石錘出土状態，Ⅶ4－C3
図版 48　上．Ⅶ5区における礫石錘出土状態
下．礫石錘出土状態，Ⅶ1－C3
図版 49　磨製石斧出土状態　上．Ⅰ2－C4
下．ニ5－C5
図版 50　磨製石斧出土状態　上．Ⅶ2－C3
下．セ4－C1
図版 51　上．石匙出土状態，セ5－C1
下．石錐出土状態，Ⅵ5－C4
図版 52　上．打製石斧
下．石皿
図版 53　石皿
図版 54　石皿
図版 55　上．石皿
下．敲石
図版 56　敲石
図版 57　敲石

図版 58　磨石
図版 59　磨石
図版 60　上．石錐・石錐・石匙
　　下．礫石錘
図版 61　礫石錘
図版 62　上．礫石錘・編物石
　　下．磨製石斧
図版 63　上．削器
　　下．礫器
図版 64　左，寺尾・前田家のツチノコ
　　右．同　背中アテ
図版 65　上．寺尾・前田家の目盛板
　　下．同　フゴ
図版 66　上．巻見・嶋田家のツチノコ
　　下．同　編み台
図版 67　左．巻見・嶋田家のツチノコ
　　右．同　雪囲いのス
図版 68　上．巻見・嶋田家のフゴ
　　下．同　背中アテ
図版 69　上．巻見・嶋田家のテゴ
　　下．同　炭俵と糞取のス
図版 70　上．巻見・田村家のツチノコ
　　下．同編み台
図版 71　北谷・出水家のツチノコ
図版 72　左．北谷・出水家のツチノコ
　　右．同　目盛板
図版 73　上．北谷・出水家の編み台
　　下．同　目盛板
図版 74　北谷・出水家の背中アテ
図版 75　上．北谷・出水家のフゴ
　　下．同　ベタベタ（背中アテ）
図版 76　上．立てかけられた雪囲いのス
　　下．出荷される雪囲いのス

挿 図 目 次

第1図　遺跡の位置……13
第2図　遺跡付近地形図……14
第3図　遺跡付近実測図……15
第4図　勝山市内縄文時代遺跡分布図……17
第5図　グリット設定図……23
第6図　断面実測図作成地区説明図……23
第7図　断面実測図1……24
第8図　断面実測図2……26
第9図　礫層分布図……30
第10図　柱穴様ピット実測図……31
第11図　P_2 出土土器拓影……32
第12図　土器拓影1……34
第13図　Ⅰ群土器の出土状態……36
第14図　土器拓影2……37
第15図　土器拓影3……40
第16図　土器拓影4……42
第17図　土器拓影5……45
第18図　土器実測図1……46
第19図　土器実測図2……47
第20図　土器拓影6……48
第21図　土器実測図3……49
第22図　土器拓影7……50
第23図　土器拓影8……52
第24図　土器拓影9……53
第25図　土器実測図4……54
第26図　Ⅳ群G類土器文様展開図……55
第27図　土器拓影9……56
第28図　土器実測図5……57
第29図　アンペラ圧痕拓影……63
第30図　土器群の層位的出土状態図……64
第31図　石器の層位的出土状態図……65
第32図　器種別石器分布図……66
第33図　石器実測図1　打製石斧……72
第34図　石器実測図2　石皿……74

第35図　ツ5区における敲石の出土状態 …… 76
第36図　石器実測図3　敲石 …… 77
第37図　石器実測図4　敲石 …… 78
第38図　石器実測図5　敲石・磨石 …… 79
第39図　石器実測図6　磨石 …… 80
第40図　石器実測図7　磨石 …… 81
第41図　敲石・磨石の重量分布図 …… 82
第42図　石器実測図8　石鏃・石錐 …… 83
第43図　礫石錘出土状態実測図 …… 84
第44図　石器実測図9　礫石錘 …… 85
第45図　石器実測図10　礫石錘 …… 86
第46図　石器実測図11　礫石錘 …… 87
第47図　石器実測図12　礫石錘 …… 88
第48図　礫石錘の重量分布図 …… 89
第49図　礫石錘の長さと巾の関係図 …… 90
第50図　石器実測図13　磨製石斧・礫器・縄物石 …… 91
第51図　石器実測図14　石匙 …… 92
第52図　石器実測図15　削器 …… 93
第53図　北陸地方における押型文土器出土遺跡分布図 …… 97
第54図　おんだし第5号住居址実測図 …… 105
第55図　おんだし第5号住居址出土礫石錘実測図 …… 105
第56図　正木原Ⅰ第2号住居址実測図 …… 106
第57図　正木原Ⅰ第2号住居址出土礫石錘実測図 …… 106
第58図　前の原第1号住居址実測図 …… 106
第59図　前の原第1号住居址出土礫石錘出土状態図 …… 106
第60図　民俗調査の実施地点 …… 108
第61図　昭和38年1月豪雪積雪分布図 …… 109
第62図　寺尾・前田家のツチノコ実測図 …… 110
第63図　寺尾・前田家の目盛板の図解 …… 111
第64図　暮見・嶋田家のツチノコ実測図 …… 112
第65図　暮見・嶋田家の目盛板の図解 …… 114
第66図　暮見・田村家のツチノコ実測図 …… 116
第67図　暮見・田村家の目盛板の図解 …… 118
第68図　谷・出水家の目盛板の図解 …… 119
第69図　製品群とツチノコの長さ・重量との関係 …… 121

付　表　目　次

第1表　Ⅰ群土器地区層位別出土数量表 …… 35
第2表　Ⅲ群土器層位別出土数量表 …… 43
第3表　Ⅳ群土器数量表 …… 58
第4表　Ⅳ群土器層位別出土数量表 …… 61
第5表　石器組成表 …… 65
第6表　石器一覧表 …… 68
第7表　北陸地方主要遺跡石器組成表 …… 102
第8表　寺尾・前田家ツチノコ計測値一覧表 …… 110
第9表　暮見・嶋田家ツチノコ計測値一覧表 …… 113
第10表　暮見・田村家ツチノコ計測値一覧表 …… 116
第11表　北谷・出水家ツチノコ計測値一覧表 …… 119
第12表　製品群とツチノコの関係 …… 121

第1章　遺跡の位置と環境

第1節　遺跡の位置（第1～3図・図版1～4参照）

1—1. 位　　置

古宮遺跡は，行政区画上は福井県勝山市村岡町寺尾3字古宮に属し，勝山市市街地の東北方約3kmの位置にある。

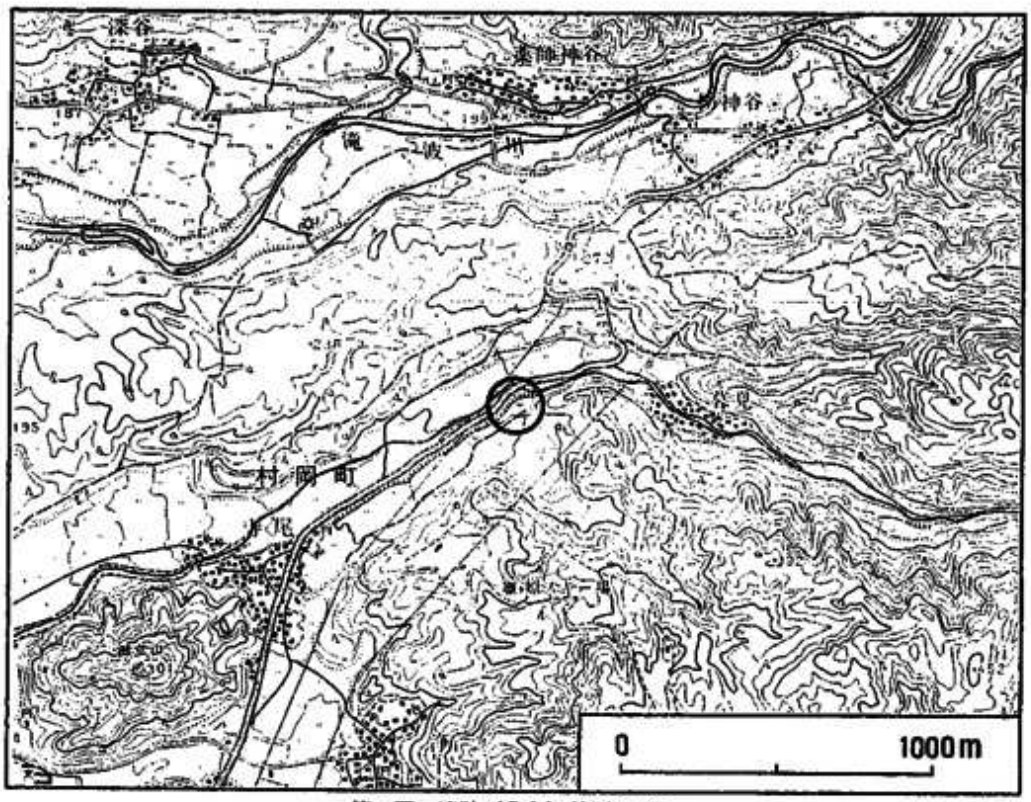
この勝山市は福井県東北部に位置し，九頭龍川中流域の勝山盆地と，これをとり囲む周辺山地を含めた地域である（第1図参照）。さらに詳しくみれば，勝山地方の地形は山地と平地とに大別され，山地は加越山地と越前中央山地，平地は勝山盆地と志比地溝とに区分される。加越山地は九頭龍川以北の山地で，石川県と福井県との県境をなしている。この加越山地の鞍部は，石川県と福井県を結ぶ交通路として利用され，著名な峠がいくつか存在するが，その1つとして，勝山市北谷町谷から五所ケ原を経て，石川県白峰村に至る牛首道の谷峠がある（佐野1974）。

第1図　遺跡の位置

この牛首道がほぼ現在の国道157号線である。九頭龍川沿いに北上した国道157号線は，勝山市市街地において県道福井—勝山線と分かれて東北に向う。そして御立山の東麓と寺尾部落を抜け暮見部落に達するまでが，暮見川の水系内にある。さらにここから隧道を北へ抜けて滝波川水系に入り，栃神谷から北谷を経て谷峠に達するのである。このうち寺尾—暮見間は，南岸の河岸段丘の中腹を157号線は走る。そして暮見谷に入る約300m手前，隧道の南西にあたる地点に，暮見川を横切る暮見橋がある。その付近の段丘面上に，古宮遺跡が存在している（第2図・図版1参照）。

1—2. 立　地　条　件

この段丘面の海抜は220～230mであり，滝波川水系の3段に分類されている河岸段丘と



第2図　遺跡（○印）付近地形図

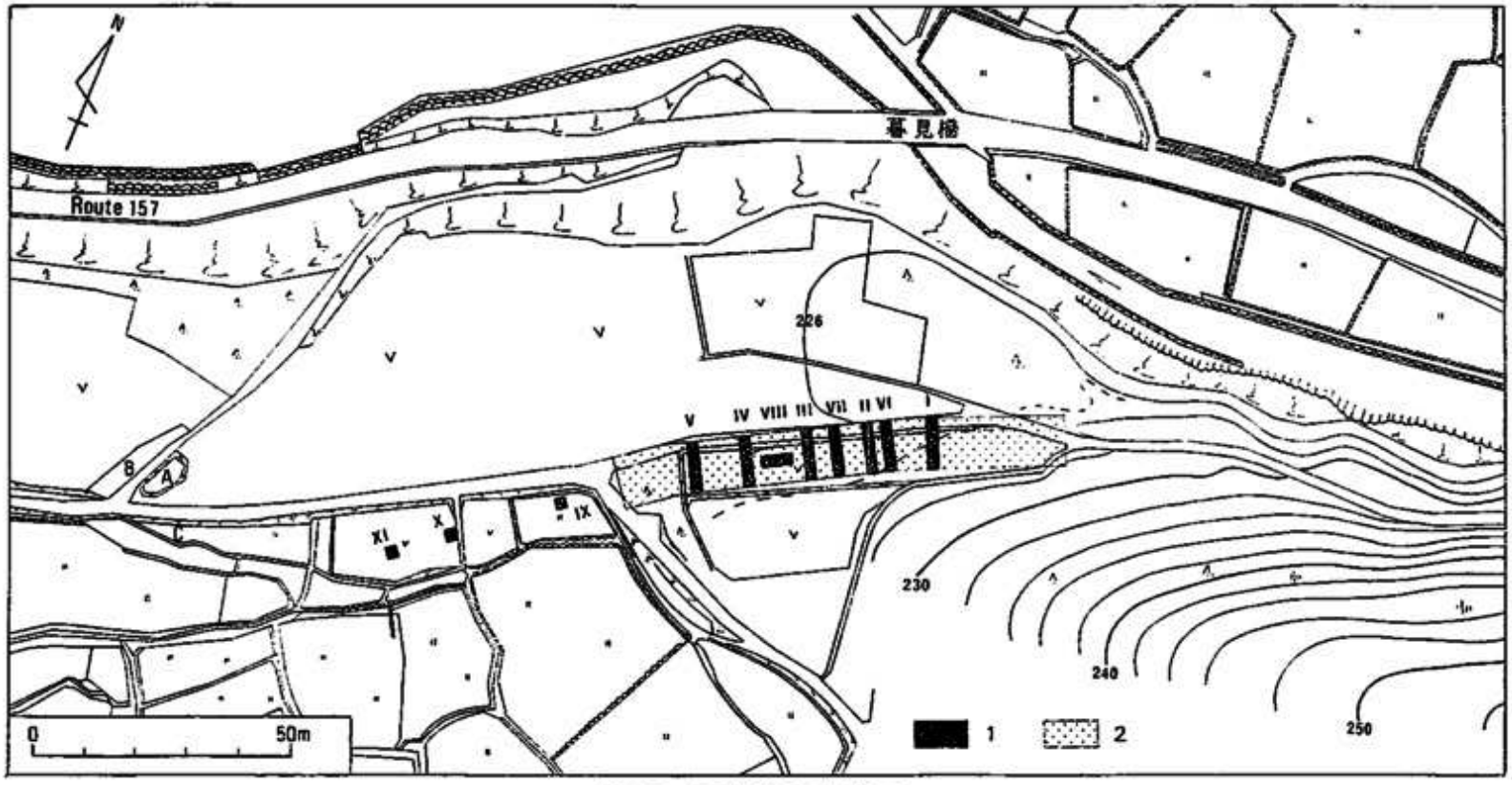
比較すると，低位段丘に対比される（佐野 1974）。段丘面は東西に長く，南北巾は約 50m であり，東の山塊下から南西にかけて徐々に高度を減じている。段丘のつけ根にあたる東端の遺跡付近では，北側の喜見川との比高約 12m，南側の谷水田との比高約 2 m である（第 3 図参照）。遺跡とその周辺は畑地であるが，西に向って徐々に高度を減じるにつれて，水田化されている。

段丘南側の浄土寺方面より浸入した谷水田は，くびれ部をすぎて段丘つけ根の遺跡付近に近づくと，南方に大きく開けて広くなる。この南縁に接した杉林中に自然湧水点があり，不動明王が祀られている（図版 2 参照）。遺跡からの直線距離は約250mである。

周辺山地および段丘崖は，ほとんど植林されて杉林となっており，杉林以外はアカマツを中心とした雑木林となっている。この地域を含めた勝山地方の潜在植生は，300～400m までは常緑広葉樹（カシ類）の優占する照葉樹林帯で，400m 以上は落葉広葉樹（ブナ・ミズナラ）の優占する落葉広葉樹林帯であったらしい（小林1974）。

本遺跡は縄文中期初頭を主体とするから，これらの植生をもって旧景観を推定することはできる。しかし，ごく小量の早期前半の押型文土器も出土しており，この寒冷気候から温暖気候への回復期には，落葉広葉樹林帯が遺跡付近まで低下していたと推定される。

段丘上の畑地は，近年水田化が進められているが，東端の遺跡付近では，水圧の関係と遺跡の保存のために，水田化を免れている。この畑地の作物の主なものを列挙すると，ソ



第3図　遺跡付近実測図

本図は勝山土木事務所より提供されたもので，レベル数値は国道157号線改良工事用の測量基点を0としている。したがって，海水準よりの絶対高を示すものではないが，ほぼこれに準拠して考えることができる。また，断面図中の実測原点は，センターライン上の杭 No. 171（地盤高 226.72m）を0とした。1・2は調査年次を示す。A～Cは本文参照。

バ・サツマイモ・サトイモ・ヤマイモ・ダイズ・ニンジン・ダイコン・カブラ・ハクサイ・キャベツ・ネギ・ニンニク・ラッキョウ・イチゴなどである。

1—3. 道路の変遷

近年福井県勝山土木事務所によって，国道157号線の改良工事が施行されることになった。このため本遺跡付近では段丘中腹を通っていた国道が，遺跡の存在する段丘上に移されることになった。このため発掘調査が実施されることになったのであるが，この工事によって遺跡付近では，再び旧牛首道の一部が復活することになった。

遺跡付近における旧牛首道は，第3図左端の三叉路において，遺跡を抜けて暮見部落に通じる東西の道路と分岐し，東北向して段丘崖を斜めに暮見橋に向って下りる道であった。現国道の段丘中腹に移ったのは，昭和10年代である。この間の事情は，『勝山の歴史』（勝山市教委1970）に次のように記されている。

> 牛首道は，袋田で勝山道とわかれ，猿倉，浄土寺，寺尾，暮見，栃神谷，中尾，北六呂師，河谷，谷，谷峠を経て石川県に行く。しかし当時は現在の国道157号線（昭和28年5月指定）とは趣きが異なり，浄土寺をすぎると爪先あがりの難路であった。しかし，此の道も明治の終わりには県道となり，昭和6年から10数年を費やしての大改修で，各所の曲折を直し，幅員を5.5メートルに広げた。その間，昭和14年（1939）大野土木出張所勝山分所を勝山土木出張所（今の土木事務所）に昇格して工事に取り組み，16年には谷トンネル新設工事を起し，23年（1948）ついに550メートルを貫通させた。

さらに『福井県大野郡誌』（大野郡教育会1911）には，次のような記載がみられる。

> 河合まで県費にて改修されし分，2里21町，通じて延長3里35町，明治36年3月23日甲種郡道に編入されたり。勝山町端を出で，爪先上りに行くこと少頃にして，路右に一碑あり，能く，此道開修の顛末を詳にすることを得。

この牛首街改修紀年碑は，明治37年7月の建立であり，現在寺尾部落南の工事中の新国道脇に移築されている。

先に記した三叉路の塚（第3図A・図版3上参照）の上には，お地蔵様5体が南面して並んでいたというが，現在は2体のみ残っている。それも旧位置ではなく，ここより約1,000m西方の157号線北側の，長谷川静子さん宅前の小祀中である（図版3下参照）。長谷川氏宅はかつてこの塚の前にあり（第3図B，図版4上参照），牛首道に面していた因縁で，現在地に移した由である。

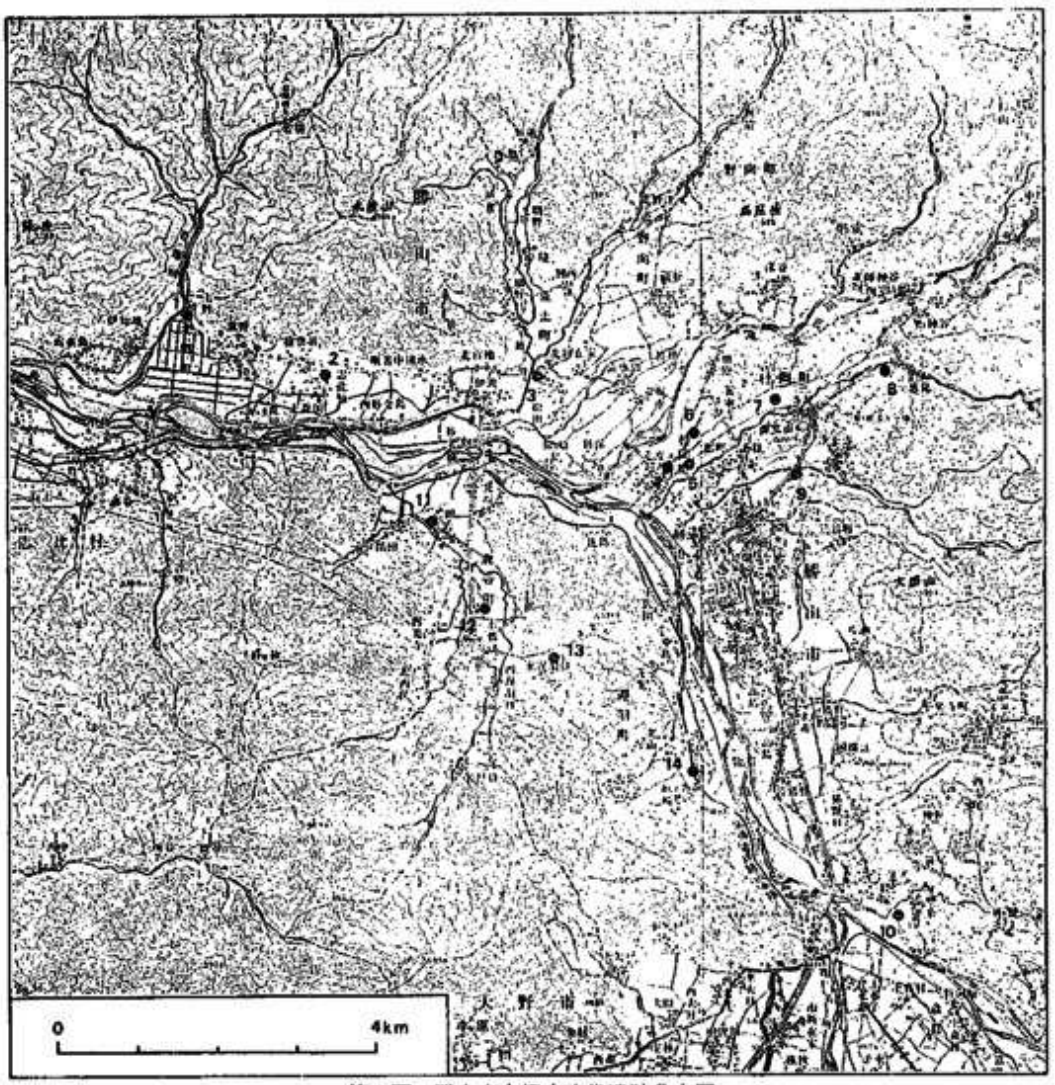
図版3下に示すこの石仏には，第1例（右）には，「釋全甫童子 明治三十年八月四日」，「澤沢町田野屋和三郎俗名さと」と刻され，第2例（左）には，「澤町田野屋和三郎」とのみ刻されている。澤町は現勝山市澤町であり，国道157号線と県道福井—勝山線の分岐する交通の要衝である。

塚の南側にも，暮見へ向う道をはさんで家が1軒あった。約1.5mの崖下で，荒地となっているところである（第3図C，図版4下参照）。ここは茶店で，ワラジなどが売られていたそうである。峠を越して北の流波川の谷に入る歩荷（ぼっか）の中継地として，賑わっていたことが偲ばれる。

第2節　周辺の遺跡（第4図参照）

2—1.　各遺跡の概要

勝山市内における縄文時代遺跡の分布は，中司照世氏（中司編1977），および木下哲夫



第4図　勝山市内縄文時代遺跡分布図

1．上野遺跡，2．志比原遺跡，3．伊波遺跡，4．皎入遺跡，5．刀清水遺跡，6．落橋遺跡，7．堂山遺跡，8．古宮遺跡，9．山村遺跡，10．幕根遺跡，11．志田遺跡，12．本郷遺跡，13．東竜羽口遺跡，14．三室遺跡．

氏（仁科編1977）によって明らかにされている。本項では本遺跡との関係に焦点をしぼって両氏の成果を紹介し，次項において，立地条件についてのみ再検討を試みたい。なお遺跡の通し番号は，木下氏の場合を使用させて頂いた（第4図参照）。

1.　北郷町上野（うわの）遺跡

御物石器・石冠・石棒片が出土しており，晩期の遺跡であるが，若干地点を異にして，中期初頭の土器片も出土しているという。

2.　北郷町志比原（しいわら）遺跡

中期後葉より後期前半の遺跡であるが，独鈷石の出土が正しければ，晩期に及ぶ可能性がある。

3.　荒土町伊波（いなみ）遺跡

圃場整備事業によって発見された中期後葉の遺跡。

4.　村岡町波入（はにゅう）遺跡

早期押型文土器を主体とする遺跡であるが，若干中期の土器片も出土している。1976年7～8月，福井県教育庁文化課の仁科章氏によって発掘調査され，すでに報告書が刊行されている（仁科編1977）。

5.　村岡町刀清水遺跡

中期後葉より後期の遺跡。圃場整備事業で発見され，試掘後設計変更により公園化された。

6.　村岡町落橋遺跡

前期末より中期全般にわたる遺跡。

7.　村岡町堂山遺跡

中期前葉の土器片を出土しているが，すでに消滅しているという。

8.　村岡町古宮（ふるみや）遺跡

本遺跡であり，少量の早・前期土器を出土するが，主体は中期初頭である。

9.　村岡町出村遺跡

実体が不明確であるが，後期らしい。

10.　平泉寺町幕根遺跡

早期押型文土器と中期後半土器を出土する。圃場整備事業によって発見されたが，試掘後設計変更によって保存された。

11.　鹿谷町志田遺跡

中期の遺跡。

12.　鹿谷町本郷遺跡

後期中葉より晩期にかけての遺跡。1975年3月，福井県教育庁文化課中司照世氏指導のもとに，勝山市教育委員会によって発掘調査され，すでに報告書も刊行されている（中司編1977）。

13.　鹿谷町東遅羽口遺跡

若干の中期土器片が出土している。

14.　遅羽町三室遺跡

吉田森氏の1954年の調査によってよく知られている遺跡であり，福井県指定史跡である（吉田1963）。中期より後期にわたるが，越前における中期後半の代表的な遺跡とされてきた。

以上14遺跡を時期別にみると，早期3・前期2・中期12・後期5・晩期2であり，最盛期が中期にあることは明瞭である。14遺跡のうちで中期の認められないのは，2遺跡にすぎない。また，早・前期で資料の多いのは破入遺跡のみで，他は零細な資料にすぎない。これに対して遺跡数は少ないが，後・晩期の遺跡は上野遺跡・本郷遺跡にみるように，内容は充実しているとみなされる。

2—2.　立地条件の再検討

木下哲夫氏は以上の14遺跡のうち，落橋遺跡を除く13遺跡について，個別に立地条件を記載している。

それによると，13遺跡中もっとも多いのは河岸段丘上の遺跡であり，8遺跡が指摘されている。しかし，これらになんらの説明も加えず，単に河岸段丘上遺跡とするのには，大きな誤解を伴う危険性がある。確かに志比原・古宮・幕根・三室の4遺跡は，志比原・幕根遺跡が九頭龍川右岸，三室遺跡が同左岸，古宮遺跡が幕見川左岸といったように，特には問題がない。

しかし，上野・伊波・破入・志田の4遺跡については，段丘化した扇状地上の遺跡とするのが正しいであろう。上野遺跡は岩屋川，伊波・破入遺跡は滝波川，志田遺跡は鹿谷川の扇状原に立地し，木下氏が扇状地末端とした刀清水遺跡や，立地条件不記載の落橋遺跡も，滝波川扇状原上の遺跡群に含められる。鹿谷川氾濫原中と記されている本郷遺跡も，志田遺跡同様に鹿谷川の扇状原上に立地している。

埋積丘陵上と記されている堂山遺跡は，幕見川の氾濫原中ともいえるし，浄土寺川氾濫原中と記されている出村遺跡と同一グループに含められよう。

東遅羽口遺跡のみは，山すその遺跡である。

以上の立地条件と遺跡数の関係を整理すると，次のとおりである。

- 高地型（5遺跡，35.7%）
  - 山すそ（1遺跡，7.1%）
  - 河岸段丘上（4遺跡，28.6%）
- 低地型（9遺跡，64.3%）
  - 段丘化した扇状原上（7遺跡，50.0%）
  - 氾濫原上（2遺跡，14.3%）

河岸段丘上の遺跡と，段丘化した扇状原上の遺跡の区別を重視するのは，河岸段丘としての形成過程を異にすることによって，高地型遺跡と低地型遺跡との分類に通じるからで

ある。後者は少なくとも北陸地方に関するかぎり，豊富な地下水によって扇状原上を水田化せしめており，発掘条件，遺構・遺物のあり方は正に低地型というべきである。近年多数の住居址が検出された大野市右近次郎遺跡は，その代表的な例といえよう（大野市教委 1974）。

このような扇状原上や自然堤防上などの低地に，縄文時代遺跡が多数存在することは，高地型遺跡の卓越する東日本と異なり，フォッサマグナ以西の西日本の重要な特色であることが，近年ようやく注目されるようになってきた（渡辺 1978）。今後さらに低地型縄文遺跡が発見される可能性はきわめて大きいのであり，従来の大きな盲点であったのである。勝山市内の多くの縄文遺跡が，扇状原上における近年の圃場整備事業によって発見された遺跡であることも，この間の事情をよく反映している。遺跡数においても，高地型の約2倍を占めている。

このような低地型遺跡は，破入遺跡を典型とするように，すでに早期から存在しているのであって，木下氏の説くところの，後期になってしだいに低地立地の様相を帯びてくるというのは，必ずしも正しくはないのである。

第2章　発掘調査の結果

第1節　第1次発掘調査（第3図，図版5～7参照）

1—1.　契機と調査団の編成

福井県勝山土木事務所による国道157号線改良事業により，本遺跡付近において段丘中腹を走る国道が，遺跡の存在する段丘上に移されることになった。このため勝山市教育委員会は，福井県教育委員会文化課と連絡をとり，勝山土木事務所と折衝の結果，遺跡の性格と範囲を確認するための第1次発掘調査を計画し，その実施を平安博物館に依嘱した。

これにもとづき同館では，考古学第2研究室の担当事業として，調査団を次のように編成し，昭和51年3月17日より同月31日までの15日間にわたり，発掘調査を実施した。

調査主任	平安博物館考古学第2研究室	助教授　渡辺　誠
調査員	同	助手　片岡　肇
	同　考古学第1研究室	助手　鈴木　忠司
調査補助員	同志社大学	奈良崎和典・佐々木広充・大河　憲二
	関西大学	南　博史
	立正大学	中山　修宏
	東北大学	松井　章・小林　和彦
	勝山高校	酒井　智子・三屋　厚子・山根　恵子
事務局	勝山市教育委員会社会教育課	指導主事　皿沢　賢一

1—2.　調査経過

調査範囲は，第3図に示すように，南北は路線巾の10m，東西は約200mである。地形条件からみて，東西2地域に大別される。

東地区は段丘面のつけ根にあたり，山麓に接する畑地である。西地区は約5m低い畑地および水田である。

東地区は東西両端に杉林が存在し，実質的に発掘することができたのは，平坦面での東西約50mである。ここに当初東よりⅠ～Ⅴトレンチ，後にⅥ～Ⅷトレンチを設定して発掘した。これらはⅧトレンチを除き，予定路線のセンターラインを直交して，2×10mの大きさに設定された（図版5・6上参照）。しかし，各トレンチとも北端は川原石敷の道路にかかっているため，発掘できなかった。

水田などの西地区は，地山が大きく削平されているため，遺溝・遺物の検出は期待できなかったが，確認のためセンターラインに沿って，2×2mのⅨ～Ⅺトレンチを設定し，

発掘した（図版6下・7上参照）。

1—3. 結　　果

東地区の層序は，次のとおりであった。

第1層（耕作土層）　約20～30cm。

第2層（黒色土層）　約40～60cm。

第3層（漸移層）　約10cm。

第4層（地山・黄褐色土層）

遺物が包含されているのは，主として第2層の上半であり，同層下半では散見するにすぎなかった。発掘は各トレンチとも第3層，または第4層上面まで実施したが，遺溝は検出できなかった。

出土遺物は，鷹島式・新保式・新崎式などの縄文中期土器片と石器47点である。しかし，第2次調査において，第3層より早期の押型文土器片が少量ながら検出されるに及び，第1次調査区内の第3層は再調査されることになった。また，層序についても，第1・2層間に複雑な様相がみられることとなり，第2～4層は，第3～5層と変更されることになった。

以上の結果から，東地区においてはさらに第2次調査の必要性があると認められた。

なお，第1次調査の概要は，渡辺誠編『福井県勝山市古宮遺跡第1次発掘調査概報』（勝山市教育委員会，昭和51年3月）として，公刊された。

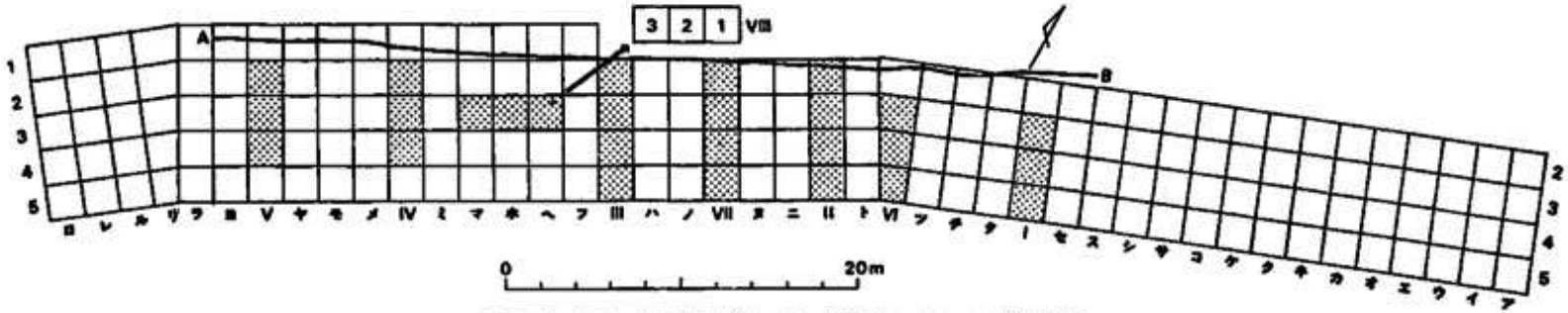
第2節　第2次発掘調査（第3・5～10図，図版7～11参照）

2—1. 調査団の編成

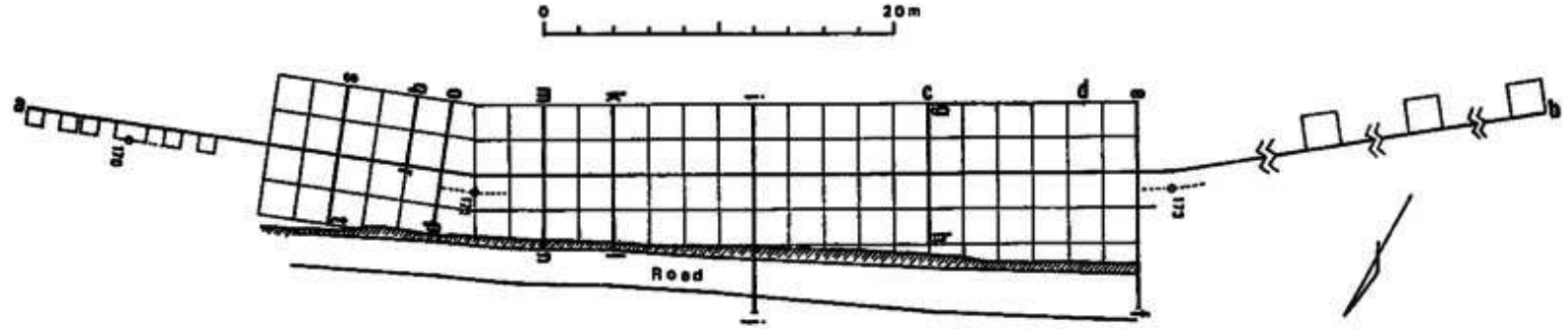
第2次発掘調査は，昭和51年10月20日より11月10日まで実施された。

調査団の編成は，次のとおりである。

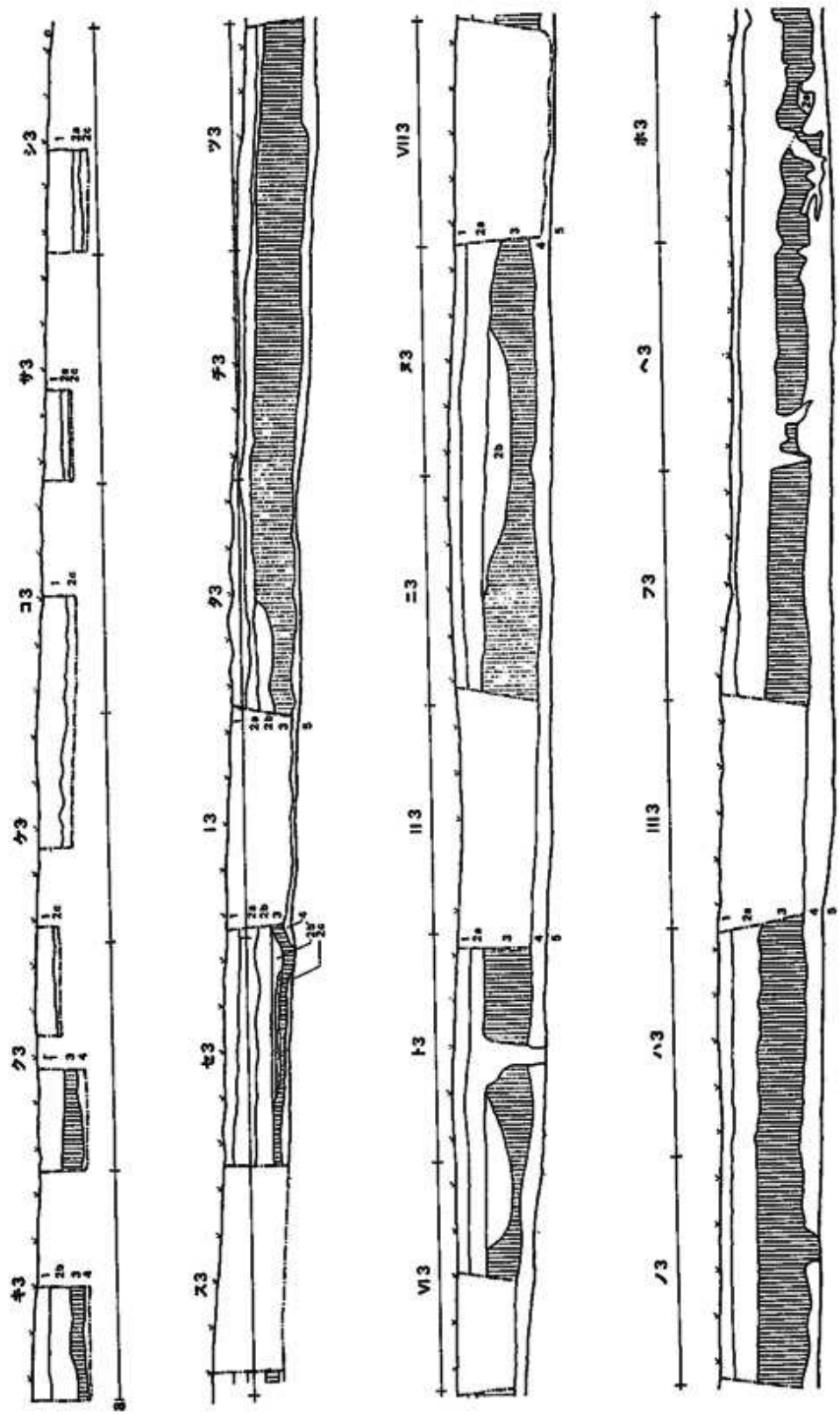
調査主任	平安博物館考古学第2研究室	助教授　渡辺　　誠
調査員	同　　考古学第1研究室	助　手　鈴木　忠司
調査補助員	同志社大学	奈良崎和典・佐々木広充
	関西大学	南　　博史・河田　智子・山口　卓也
	立命館大学	上野　修一
	慶応義塾大学	中山　清隆
	別府大学	栗田　勝弘・黒田　裕司
	鳥取大学	寺西　健一

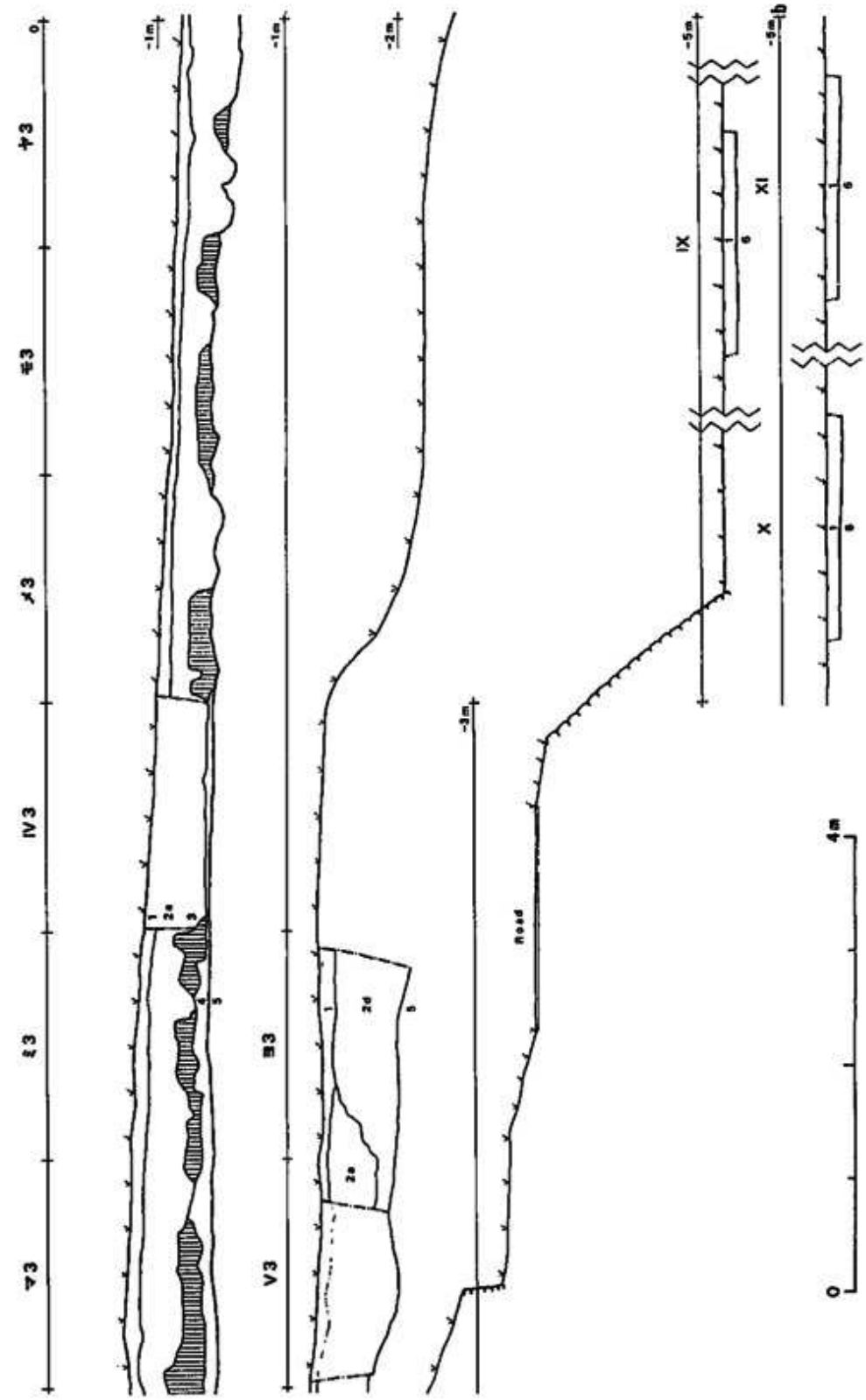


第5図　グリッド設定図（Ⅰ～Ⅵ：第1次，ア～ロ：第2次）

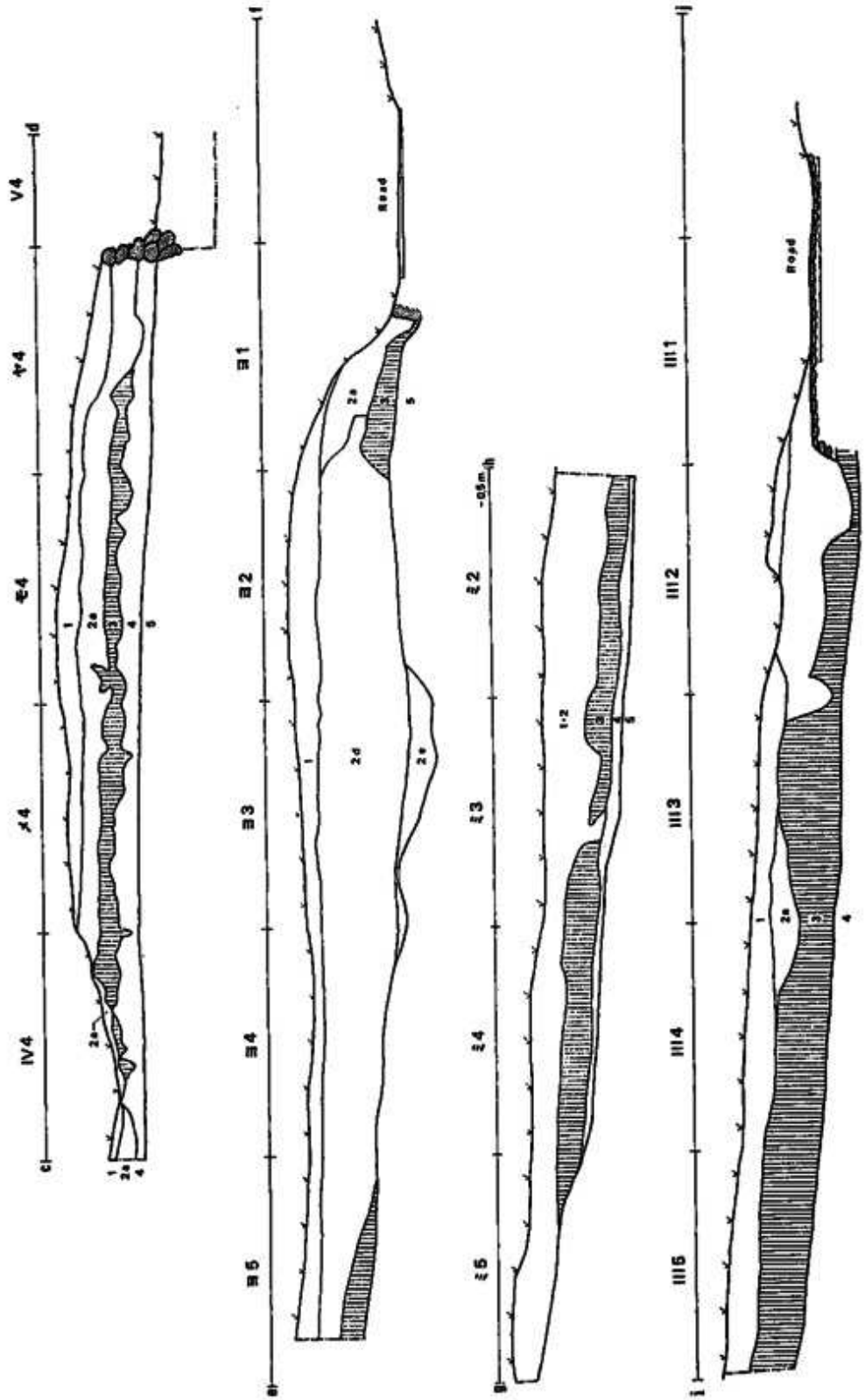


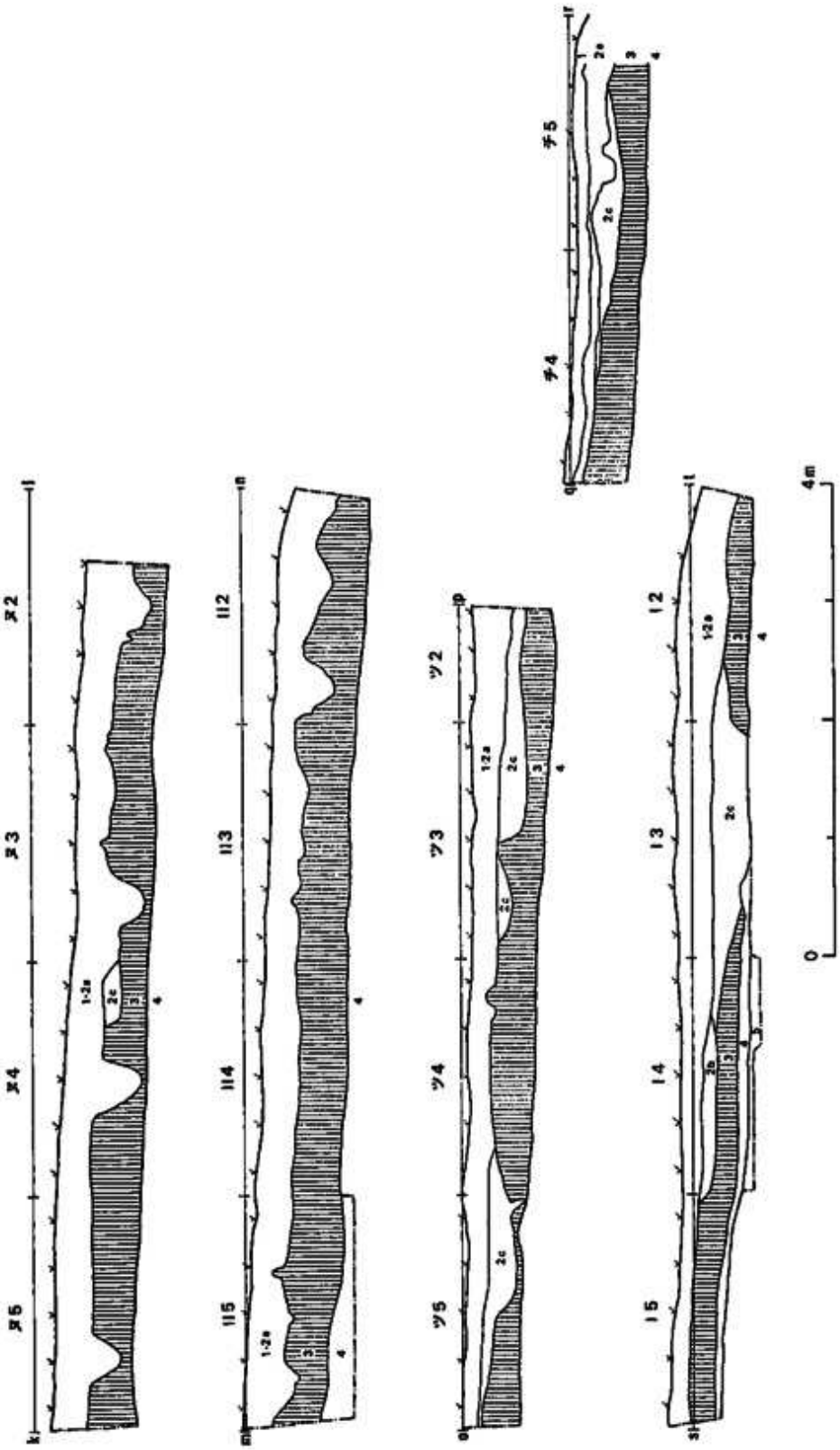
第6図　断面実測図作成地区説明図





第7図　断面実測図1（層序の説明は本文参照）


V4
Ⅳ4
Ⅲ4
Ⅱ4
Ⅰ4
Ⅲ1
Ⅲ2
Ⅲ3
Ⅲ4
Ⅲ5
Ⅱ2
Ⅱ3
Ⅱ4
Ⅱ5
Ⅱ1
Ⅱ2
Ⅱ3
Ⅱ4
Ⅱ5
Road
Road



第8図　断面実測図2（層序の説明は本文参照）

2—2.　グリットの設定

第2次調査の対象となったのは，第1次調査の結果に基づき，西地区の水田などを除いた東地区の畑地，および若干の隣接山林で，約500㎡である（第3図参照）。すなわち，南北10m，東西約100mの路線巾全域であり，これら全域に，第1次調査のⅠ～Ⅷトレンチを含めて，2m四方のグリットを設定し，東よりア～ロ列，北より1～5列とし，各グリット名はその組合せでよぶこととした（第5図参照）。

しかし，北端は現道路の基礎工事によって，著るしく破壊されている。工事は地表面の道路巾よりやや拡張して行なわれており，数10cm大の河原石が敷きつめられている（第5図のA—Bライン，図版8上参照）。また，東と西の杉林（ス列以東とラ列以西）中も攪乱が著るしく，ほとんど遺物も出土しなかったので，ヰ～シ列の3区に50cm四方の小発掘を試みるなど，部分的な発掘にとどめた（図版8下参照）。

したがって，発掘の主体は，セ～ヨ列間の中央畑地地域に限定されることになった。この地域の地表面は，東から西，南から北にかけて，2～3°のゆるい傾斜をなしているが，各層とも同様である。南側に隣接している一段高い畑地があるが，本来は落差がなかったらしい。

2—3.　層　　位

断面実測図作成地区は第6図，実測図は第7・8図に示すとおりである。

遺跡を横断するa—b断面とc—dは東西方向で北から，他のe—tは南北方向で南からみることを原則として実測したが，全域調査前の第1次調査については不統一な場合もあり，反転して統一することとした。Ⅸ～Ⅺ区，Ⅳ・Ⅵ・Ⅶトレンチの東壁の場合がそれである。

本遺跡の層序は次のとおりである。

第1層　黒褐色土層（耕作土層）
第2層　攪乱層群
　第2a層　黒褐色土層
　第2b層　焼土層
　第2b′層　小礫混在黒褐色土層
　第2c層　黄褐色混土礫層
　第2d層　暗黄褐色礫層
　第2e層　ローム混在黒褐色土層
第3層　黒色土層（遺物包含層）
第4層　暗褐色土層（漸移層）
第5層　黄褐色土層（地山）

第6層　礫混在赤褐色粘質土層（水田下地山）

第1層は表土の耕作土層であり，畑地では厚さ5～15cm，IX～XI区の水田では約10cmである。

第2層は撹乱層群であり，5層に細分される。

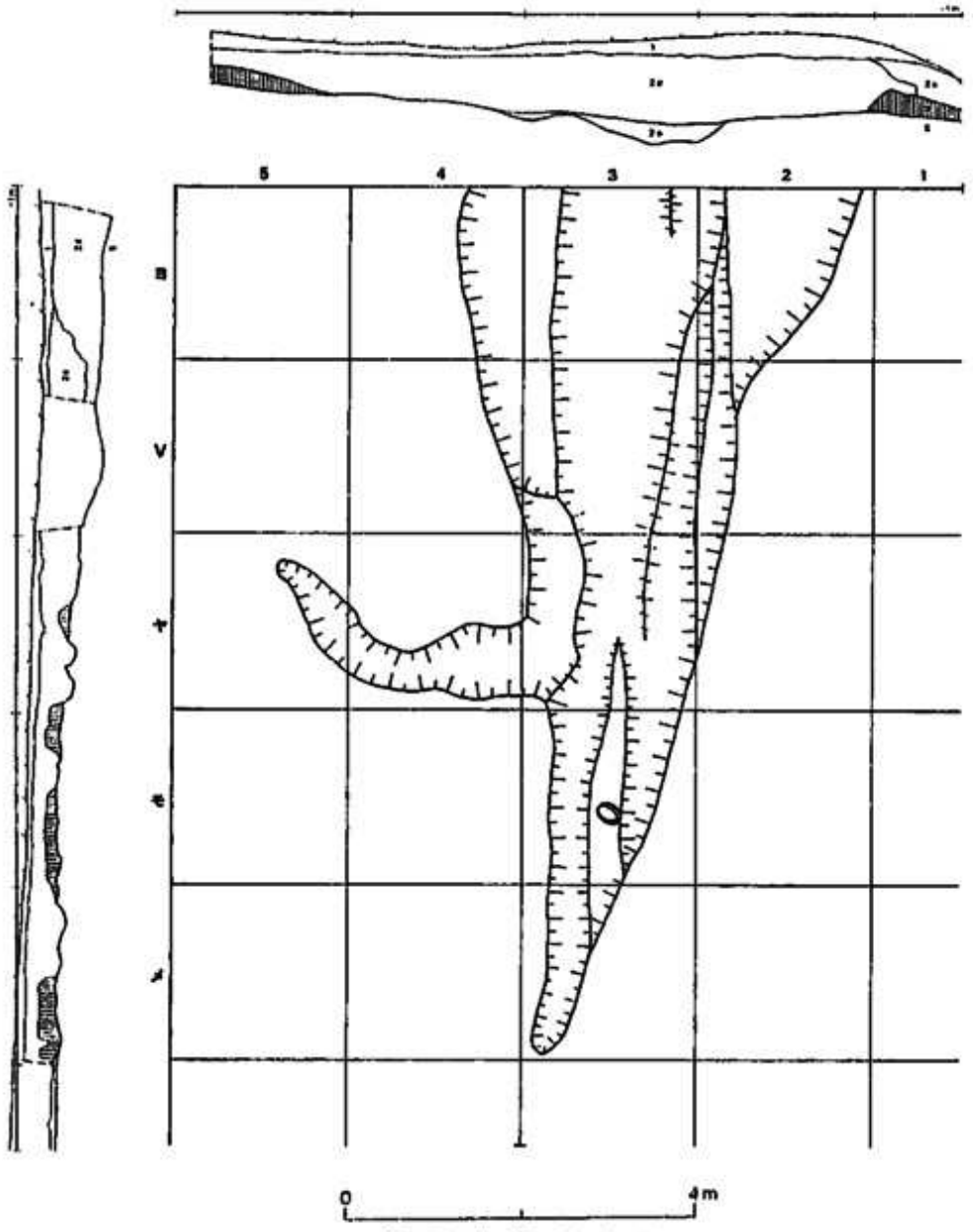
第2a層は，第2b～e層と異なり，東地区のほぼ全域に分布しており，深耕による撹乱層とみられる。第1層同様黒褐色土層である。第1次調査では，第1層と第2a層とをあわせて第1層としている。厚さは5～65cmであり，西へ向うほど厚さを増している。中央部の標準的な地域（図版9上参照）では，平均15～30cmであり，30cmを越す西よりの地区では，より下層の第3層，時には第4層までが分断，あるいは欠除している（図版9下参照）。

第2b層は，赤褐色の焼土層であり，また3区以東の地区にのみ，断続的にみられるにすぎない。厚さは15～20cmである。第2c層も同様に，VII3区以東に断続的にみられる堅い混土礫層であるが，特にチ3・4区以東に顕著である。厚さは5～10cmであるが，I2～3区では30cmを越す。Iトレンチ西壁断面（o～p参照）に典型的にみられるように，第2b層と第2c層は密接な関連が推定される。しかし，両層ともその成因は不明であり，遺物はまったく含まれていない。セ3区南壁にのみ，小礫を若干包む黒褐色土層がみられ，これを第2b'層とした。

第2d層は，大形の角礫が大量につまった礫層である。東寄りの地区に発達した第2b～2c層と異なり，西寄りの地区に発達している。厚さは80cmに達し，その下面は第5層を削っている。そしてもっとも厚いヨ3区では，第5層との間に削られた地山のローム塊をも含む厚さ30cmの黒褐色土層（第2e層）が堆積している（図版10上参照）。これら第2d・e層は，明らかに第3・4層を破壊し，第5層上部を削った上で堆積している。その下面の平面形態は，メ3区を頂点にして，ヨ2～4区にかけて広がる細長い三角形状を呈し，西に向うほど深くなっている（第9図・図版10下参照）。それらの下面には，東西方向の溝やテラス状の掘り跡がみられ，人為的なものであることを明示しているが，その成因は不明である。ボーリング探査の結果では，さらに西よりの杉林中（ラ～ロ列）にかけて，この礫層は一段と発達しており，杉林中の石垣もあるいはこれに関係があるかも知れないと思われる。

第3層は，遺物包含層である黒色土層であり，第1次調査における第2層である。厚さは20～40cmで，西に向うほど薄くなり，断続的になる。これに反比例して第2a層の厚さが増すことは，すでに記したとおりである。

第4層は，暗褐色を呈する漸移層であり，第1次調査の第3層である。a－b断面（第7図）にみるように，ハ3～ヘ3区付近がもっともよく発達しており，厚さ20cmを越えるが，その両側の地区ではしだいに厚さを減じ，メ3区以西では第4層を欠く。第2次調査において，第1次調査ではまったく出土していなかった縄文早期の押型文土器の小破片が，



第9図　礫　層　分　布　図

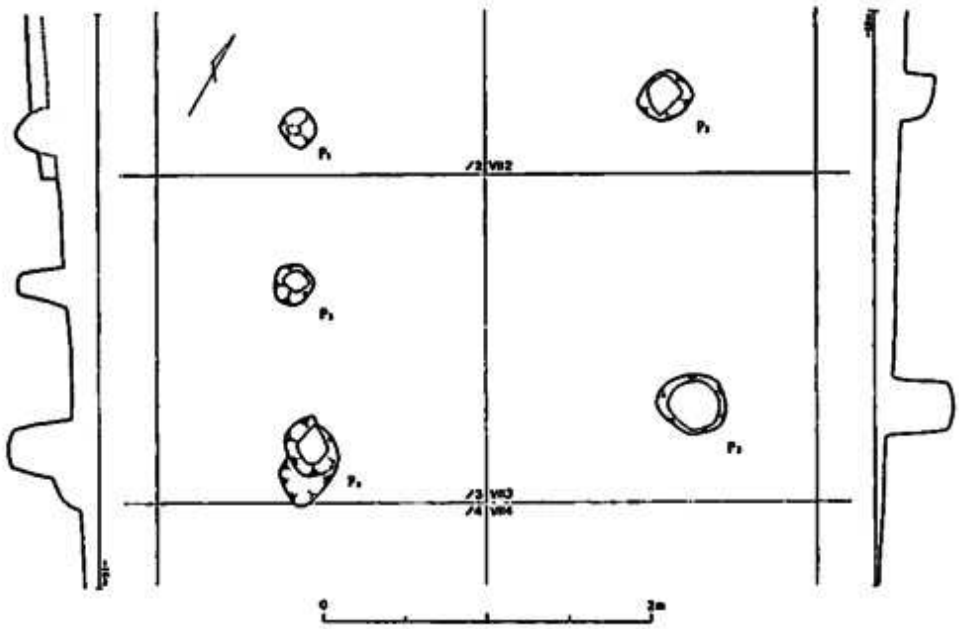
第3層最下部および本層より検出され，第1次調査の既調査区も改めて全面的に再検討が行なわれた。このため第1次調査の断面実測図は，第4図に関しては不完全なものとなった。

第5層は，東地区の地山であり，黄褐色のローム層である。

第6層は，水田下の地山であり，礫を多量に含む粘質土層である。

2—4.　柱穴様ピット

東地区のほぼ中央部分北寄りの，Ⅶ2・3区およびノ2・3区において，柱穴様ピット



第10図　柱穴様ピット実測図

が5例検出された。これらは第4層上面において検出されたが，ノ2区のみはすでに第4層の発掘が終了しており，P_1 のみは第5層上面において検出された。ピット内の土は黒色土層であり，第3層から掘られたものである（第10図，図版11参照）。

5例のピットのうち，P_1—P_4 はほぼ長方形をなして整然と配列されており，長辺の P_1—P_2，P_3—P_4 間は約2.2～2.4m，短辺の P_1—P_4，P_2—P_3 間は約1.9mである。また，P_5 も P_1 と P_4 のほぼ中央に直線的に並んでいる。もしこれを住居址に伴うピットとみなしても，大きさの上からは通常の大きさの長方形住居址が予測され，大きな矛盾はない。長軸の向きは北東一西南である。

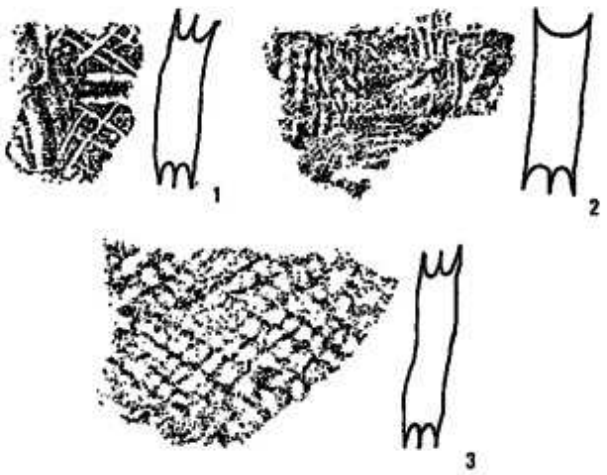
ピットの口径は，P_1 が約20cm，P_5 が約25cm，P_2・P_4 が約30cm，P_3 が約40cmである。P_1 がやや小さいのは，すでに第4層部分が欠失しているためである。第4層は北にかけて約2°のゆるい傾斜をしているが，ピットの底面はほぼ水平であることも注意される。

この付近での第3層の厚さは約40cmであるから，全体として少なくとも80cm以上の深さといえる。

以上は説明の都合上もあり，住居址の柱穴の可能性を前提にして記したのであるが，住居址の床面，炉，および竪穴の立上りなどといった積極的な証拠は，第3層中には見出せなかった。これらがすべて破壊されて検出されなかったとする想定も成り立つが，積極的にこれを肯定する資料もない。しかし，一方これらがいかなる性格をもつものであるかについては，上記以外の想定も見出し難い。

なお，P_4 よりは，斜縄文土器破片が2点検出された。これらはⅣ群J類b種に属するものであるが，大きさは数mmであり，図示し得るほどではない。P_2 よりは15片検出され

た。Ⅳ群C類に属する半截竹管文と格子目文のみられるもの1（第11図1），同JC類に属する木目状撚糸文1（同2），同H類に属す羽状縄文1（同3），同細片8，無文4である。したがって，これらピット群は，北陸系中期初頭土器群中の第2グループに属すといえよう（第3章第4節参照）。



第11図　P_2 出土土器拓影

第3章　出土遺物1・土器

出土した遺物は，土器類と石器類とに大別される。

土器類は，次の5群に大別される。

Ⅰ群　縄文時代早期の押型文土器

Ⅱ群　Ⅰ群を除く縄文時代早・前期の土器

Ⅲ群　縄文時代中期初頭の西日本系土器

Ⅳ群　縄文時代中期初頭の北陸系土器

Ⅴ群　土師器・須恵器・陶器

このうち主体となるのはⅢ・Ⅳ群であり，他は少量である。

第1節　Ⅰ群土器（第1表，第12・13図，図版12・13上参照）

1—1.　分　　類

縄文早期前半の押型文土器の小破片が26片，およびこれに伴うとみなされる無文土器の小破片が18片検出された。これらは文様によって，次の4類に分類される（第12図，図版13上参照）。

A類　山形押型文（第12図1～6）

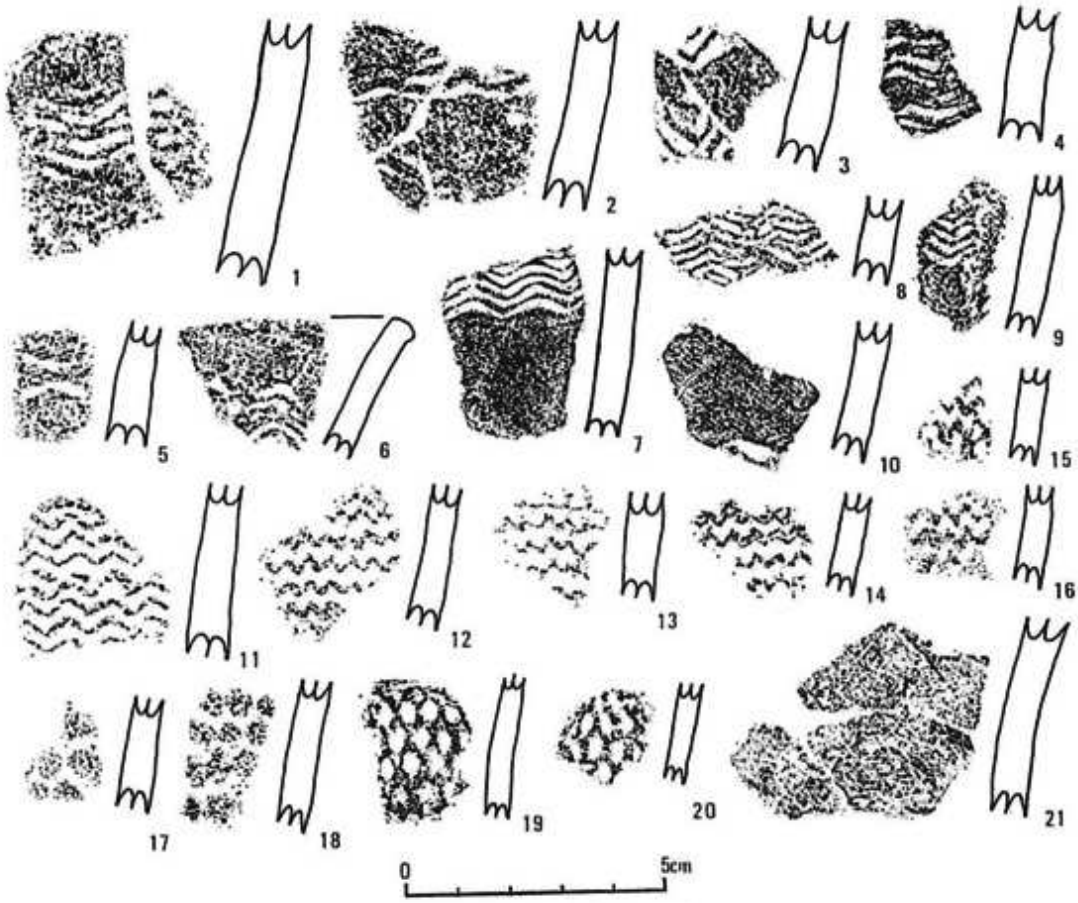
これらは施文方法，および器厚などから，さらに4種に細分される。すなわち，施文方法においては，山形押型文を間隔をおいて施文するものと，密接して施文するものとの2者があり，器厚は7㎜を目安として，相対的に厚いものと薄いものとがある。

a.（第12図1～5）　山形文を間隔をおいて回転施文したもの。器厚は7～9㎜で，相対的にやや厚い。1つの山の大きさは，巾16～18㎜，高さ3㎜で，きわめてなだらかである。褐色・橙褐色を呈す。5片出土。

b.（同6～10）　施文方法はa種と同じであるが，器厚は5～7㎜で，相対的に薄い。1つの山の大きさも，巾13～14㎜とやや狭くなるが，高さは2～3㎜で変らない。赤味を帯びた黒褐色を呈す。6片出土。

c.（同11）　a・b種と異なり，密接して施文されている。1片のみで，黒褐色を呈す。器厚8㎜で，薄手のd種と区別される。1つの山の大きさは，巾9㎜，高さ3㎜である。

d.（同12～16）　密接した施文で，器厚は5～7㎜であり薄い。7片出土しており，赤味を帯びた黒褐色を呈する場合が多く（5片），a種に類似する。他の2片は橙褐色を呈す。1つの山の大きさは，巾4～5㎜，高さ2㎜である。



第12図　土器拓影 1　I群

a～dの4種は，個別に記してきたように，山形の形態にも顕著な差異がある。山形の高さは変化が少ないが，巾はそれぞれ16～18，13～14，9，4～5㎜としだいに減少し，これに伴って相対的に山形が鋭くなってくる。

胎土はb・c種において良好であるが，aはやや粗粒砂を含み，ザラザラした感じがある。d種は薄手でもろい。

いずれも小破片のため，原体の観察は十分にできないが，第12図1・9・11・12などは，4条とみられる。原体の末端は，山形に沿って斜截されているとみなされる。

B類　楕円押型文（第12図17・18）

わずかに4片出土しているのみである。器厚6㎜で，山形文の薄手のb・d種に相当し，色調も赤味を帯びた黒褐色を呈するものが3片，橙褐色を呈するものが1片である。1つの楕円の大きさは，5×6㎜程度である。胎土はAd種に近い。

C類　格子目押型文（第12図19・20）

わずかに3片出土。器厚は4～5㎜で，薄手である。色調は褐色を呈すが，A・B類に多い赤味を帯びた黒褐色に連続する感じである。1つの格子目の大きさは，4×5㎜程度

である。胎土はAd種に同じである。

D類　無文（第12図21）

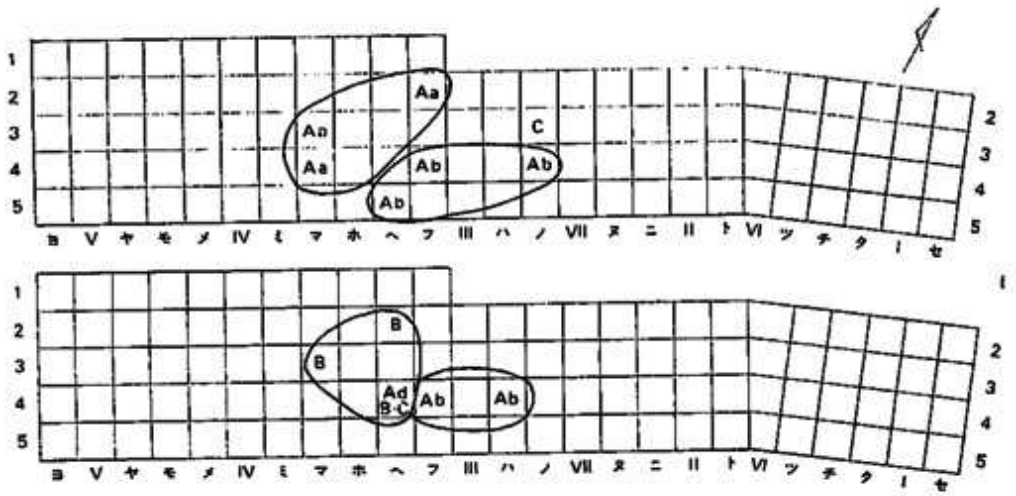
胎土・色調などからみて，A～C類に伴うと思われる無文破片が，18片出土している。

1—2. 出土状態

以上のI群土器の分類と，出土地区・層位との関係を表示したのが第1表である。発掘時の所見では，I群土器の本来的な包含層は，第3層最下部と第4層であったが，この両層からの出土率は，50%である。また，第3層最下部をも含む第3層下部として検出された例は，18.2%を占めている。上記の層から検出されているのは，Ab・Ad・B・C・Dの5種であり，最下部を除く第3層および第2a層からは，Ad・B・C種がみられず，Aa・Ab・Ac・Dの4種が出土している。これらの関係を図示したのが第13図である。両層に共通するAb種の出土グリットは，きわめて近接している。また，本来的な層のB類と，これをも含む二次層中のAa種もよく対応している。

第1表　I群土器地区層位別出土数量表

層位＼分類＼地区		A a	A b	A c	A d	B	C	D	小計	合計	%
第2a層	マ 4	1							1	1	2.3
第3層	ヌ 4							2	2		
	Ⅶ 2							1	1		
	ノ 3			1					1		
	ハ 5							1	1		
	フ 4		1					4	5	10	22.7
第3層上部	ノ 4		1						1		
	ヘ 5							1	1		
	Ⅷ 3	1							1	3	6.8
第3層下部	ヌ 5							2	2		
	フ 2	1							1		
	ヘ 2							1	1		
	ヘ 5		2						2		
	Ⅷ 3	2							2	8	18.2
第3層最下部	ヘ 2					1			1		
	ヘ 4				7	1	3	1	12		
	Ⅷ 3					2			2	15	34.1
第4層	ハ 4		1					1	2		
	フ 4		1					4	5	7	15.9
合計 (%)		5 (11.4)	6 (13.6)	1 (2.3)	7 (15.9)	4 (9.1)	3 (6.8)	18 (40.9)	44 (100.0)	44	100.0
		19 (43.2)									



第13図　Ⅰ群土器の出土状態　上・二次層，下・本来層

注目されるのは，ヘ4区の第3層最下部におけるＡｄ・Ｂ・Ｃ種の出土状態である。これらはまとまって，このグリットの西北部において出土しており，共伴関係を認めてよいであろう（図版12参照）。胎土・色調などの共通性は，すでに記したとおりである。また，文様の1単位も小形で，共通している。

1—3.　編年的位置

本来的な包含層と，これを含む二次層出土の資料の間には，若干の差異が認められるが，Ａｂ種のあり方などや，資料の絶対数が少ないことなどから，細分は避けておきたい。

無文の破片が約40％を占めるが，これを除いて比率をみると，山形文が73.1％で圧倒的に多く，楕円文は15.4％，格子目文は11.5％である。また，この山形押型文の約6割は，間隔をおいての回転施文である。これらの特徴からみて，巨視的には信州の樋沢式に並行する時期とみなしておきたい。しかし，樋沢式を特徴づける帯状施文の典型的な例がみられないことも，注意されねばならないであろう。

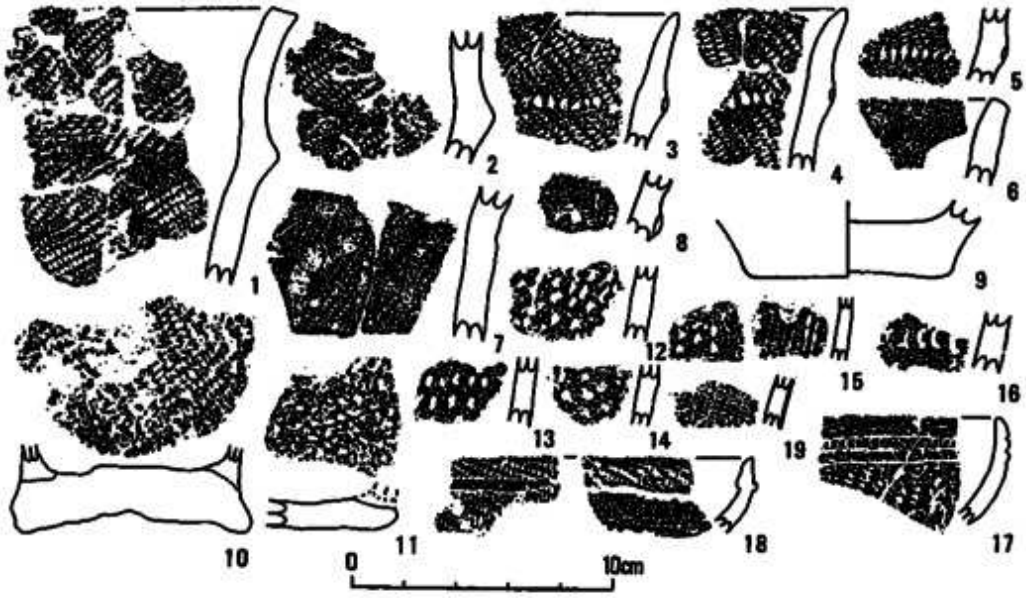
福井県下における押型文土器出土遺跡は，本遺跡で6例目にすぎず，まとまった資料は勝山市破入遺跡のみである（仁科編1977）。他地域との比較研究は，今後の課題である。

第2節　Ⅱ群土器（第14図，図版13下・14上参照）

縄文早期後半～前期の土器が少量出土しており，ほぼ5型式に相当する。このうち3片までは1型式1点にすぎない。

2—1.　Ａ類・茅山下層式類似土器

器壁に少量の繊維を含む厚手の斜縄文土器，およびこれに伴うとみられる無文土器の破



第14図　土器拓影2　Ⅱ群

片が168片出土した。それらは文様と出土状態とによって，少なくとも次の4個体が確認される（第14図・図版13下参照）。

1.　口頸部と胴部の境が「く」の字状に大きく屈曲し，口頸部の巾は約5cmで広い。器壁は厚く約11mmあり，口唇は平坦である。黒褐色を呈し，LRの縄文が横位に施文されている（第14図1・2）。

2.　1と同形態であるが，「く」の字状の屈曲は軽く，この部位に刺突文がみられる。口頸部の巾も狭く，約3cmである。器壁は約9mmで，口唇はゆるく尖る。黒褐色を呈し，RLの縄文が横位に施文されている（同3～5）。

3.　1と同形態で，器壁も厚く約12mmあり，口唇も平坦で，LRの縄文が横位に施文されていることも共通するが，屈曲部の刺突文は2に共通する。褐色を呈す。口頸部の巾は5cm以上あり，ここに指頭によるとみられる凹線文が施文されている。この凹線文は，前2者と異なる特徴である。

4.　1～3はヌ4・5区より出土しており，これらに属する細片を含んでいる可能性もあるが，別にヘ2区を中心として，繊維を含む縄文土器片が46片みられる。

5.　同様に繊維を含む無文土器片が，29片みられる。これらは1～4に伴うものである。このなかには底部が2片あり，いずれも平底である（同9）。2片ともヌ4区の出土で，2・3と同一地区であることが注意される。第14図9の底部には，後に記すようにドングリ状の圧痕がみられる。

次に出土地区をみてみると，1はヌ5区より26片（口縁部3・胴部23），2はヌ4区より37片（口縁部3・胴部34），3はヌ4区より28片（胴部），4はヘ2区を中心に，ツ4～ミ

4区にかけての地区より46片（胴部），5はヌ4・5区を中心に，チ3区よりⅦ2区にかけての地区より29片（胴部27・底部2）出土している。

層位的には，1は第3層最下部より8片，第3層下部より17片，同上部より1片，2はすべて第3層，3は1片のみ第3層下部，他の29片は第3層，4は第3層下部より29片，第3層より14片，第2a層より3片，5は第3層下部より13片，同上部より5片，第3層より11片である。

総数は168片で，第3層最下部8片（4.8%），第3層下部60片（35.7%），第3層上部6片（3.6%），第3層91片（54.2%），第2a層3片（1.8%）である。第3層最下部と第3層下部で約40%を占め，撹乱層である第2a層よりの出土をみないことは，第3層下部が主なる包含層であるとみなされる。

これら繊維を含む平底の斜縄文深鉢は，「く」の字状屈曲と刺突文などの特徴において，1群のものとみなされる。凹線文もまた特徴的である。この種の土器は，隣接県である滋賀県大津市石山貝塚の例が報告されており（坪井他1956），南関東地方の茅山下層式に類似する（赤星・岡本1957）。しかし，斜縄文とともに特徴的な条痕文は，本遺跡では確認することができなかった。資料数の少ないこと，地域性などが考慮されるが，今後この地域における類例の増加を待ちたい。

2—2.　B類・極楽寺式類似土器

北陸地方前期初頭の極楽寺式に比定される土器群で，次の3種に分類される（第14図，図版14上参照）。

1.　縄文の施文された底部が2例みられる（第14図10・11）。このような例は，関東地方の花積下層式や，これに並行する北陸地方の極楽寺式に特徴的である。10は褐色を呈し，ハ3区第3層出土。11は淡褐色を呈し，12片にわかれて出土したが，ヘ5区第3層上部より出土。10は器壁に繊維が含まれているが，11には含まれていない。

2.　刺突文の施文された小破片が5片出土した（同12～15）。褐色・淡褐色を呈し，器厚は5～8㎜である。15のみは裏面に条痕文が認められる。繊維は含まれていない。類例は富山県極楽寺遺跡（富山県教委1965），石川県甲・小寺遺跡（四柳編1972）などにみられる。Ⅵ4区よりフ4区にかけての地区から，散発的に出土しているが，5点のうち2点は第3層，3点は第3層下部の出土である。

3.　逆C字形爪形文のみられる厚手の土器が1片みられる（同16）。器壁の厚さ約10㎜で，黒色を呈す。繊維は含んでいない。北白川下層式系統の薄手の爪形文土器とは様相を異にし，甲・小寺遺跡のX類土器に類似する（四柳編1972）。ヌ2区第3層上部出土。

富山県上市町極楽寺遺跡を標式遺跡とする極楽寺式は，石川県穴水町甲・小寺遺跡によって，一層その内容が豊富に理解できるようになった。本類の2・3などは，この甲・小

寺遺跡などに類例がたどれる。しかし，極楽寺式の主体になる土器群を本遺跡では欠いており，問題が残るが，一応上記のように分類しておきたい。

2—3.　C類・北白川下層2b式土器

表面採集品で，1点のみである。内曲する口縁部破片で，2列のC字形爪形文を伴う平行沈線下に，LRの縄文が横位に施文されている。淡褐色を呈し，器厚7㎜（第14図17，図版14上参照）。

2—4.　D類・北白川下層2c式土器

ツ5区第3層より，1点出土。内曲する口縁部破片で，口縁部内面は肥厚しており，その部位にRLの縄文が横位に施文されている。外面の縄文も同様であるが，口唇より約1㎝下に，凸帯が横に1周しているらしい。これとは別に，斜位の凸帯が中央部分に痕跡的にみられる。黒褐色を呈し，器厚6㎜（第14図8，図版14上参照）。

2—5.　E類・朝日下層式土器

表面採集品で，1点のみである。小さな胴部破片で，5列の小さな密接した爪形文をもつ細い凸帯文がみられる。褐色を呈し，器厚6㎜（第14図9，図版14上参照）。

第3節　Ⅲ群土器（第2表，第15～17図，図版14下～17参照）

3—1.　分　　類

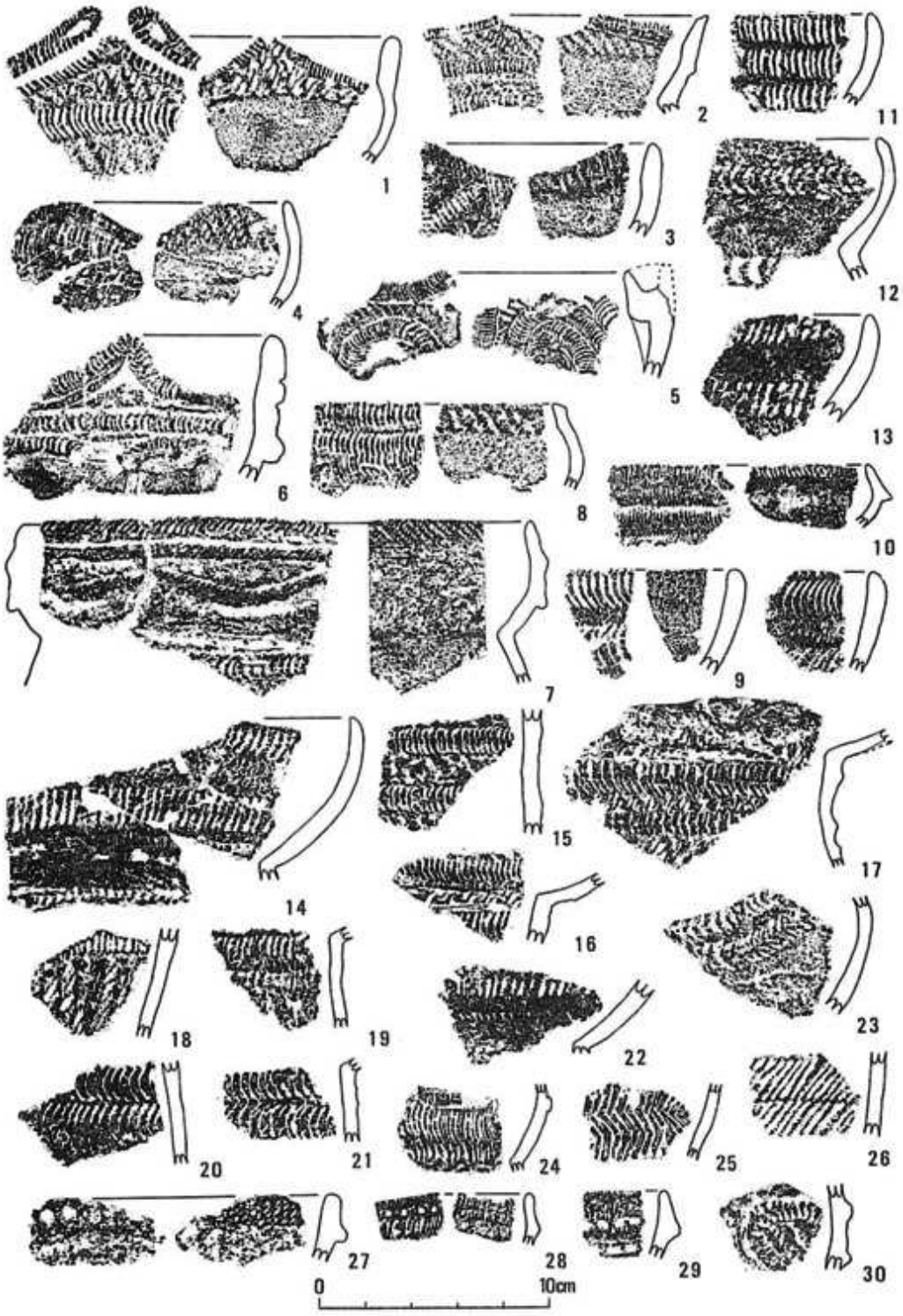
縄文中期初頭の西日本系土器である。鷹島式・船元Ⅱ式土器であり，次の3類に大別される。

A類　鷹島式に特徴的な大形爪形文を主文様とする1群（第15図1～26，図版14下～16上）

巾10～20㎜の大形のC字形爪形文を，隆帯上（第15図1・2・5～7・15～17）や，隆帯を伴わずに施文している。この退化した形態として，へらによる直線化した文様に変化した例もある（同13・14・25・26）。これらの巾は約20㎜あり，爪形文の巾のなかでも大形に片寄っている。

本類はいずれもキャリパー形深鉢であるが，口縁部の形態から次の3種に細分される。

a．口縁部が軽く山形をなす例が11片あり（1～3・6），波状突起を有する例（5）も，本種に含められる。1はその典型的な例で，口唇にも爪形文を有し，頂部はやや平坦で，その両側にくぼみを有している。3は山形に平行して爪形文が施文されているが，他は水平に施文され，3角形の空間には，1・2では横位にRLの縄文，6は



第15図　土器拓影 3　Ⅲ群A・B類

三叉文が施文されている。口縁部内面には，10～15mmの巾でRLの縄文が横位に施文されている。その下端は水平で，やや段をなしている。11片中8片にこれがみられる（1～3・9）。

b．口縁部の軽く波形をなす例が，3例みられる（4・12・14）。4にはa種と同様に，口縁部内面にRLの縄文施文がみられるが，12と変形した類爪形文をもつ14には，これを欠く。

c．口縁が平縁の例が14例ある（7・8・10・11・13）。a種と同様の口縁部内面におけるRLの縄文の横位施文は，11例にみられる（7・8・10）。その下端は同様に，軽く段をなしている。

以上の口縁部破片の他に，口唇部を欠く口縁部や胴部破片中にも，大形C字形爪形文を施文された破片が68片出土している（16～26）。そしてこのなかにはすでに記したように，へらによる類爪形文も2片含まれている（25・26）。胴部にはこれらの地文として，撚りの粗い斜縄文が縦位に施文されている（17・18）。これについては，C類のところで詳しく記す。

これらの器厚は5～9mmであるが，5～6mmの薄手が多い。色調は，褐色・赤褐色・橙褐色・淡褐色・黒褐色などを呈すが，前3者が多い。

B類　船元Ⅱ式に属する1群（第15図27～30，図版17）

第15図27～30に図示した4片が出土した。27～29は口縁部破片，30は胴部破片である。

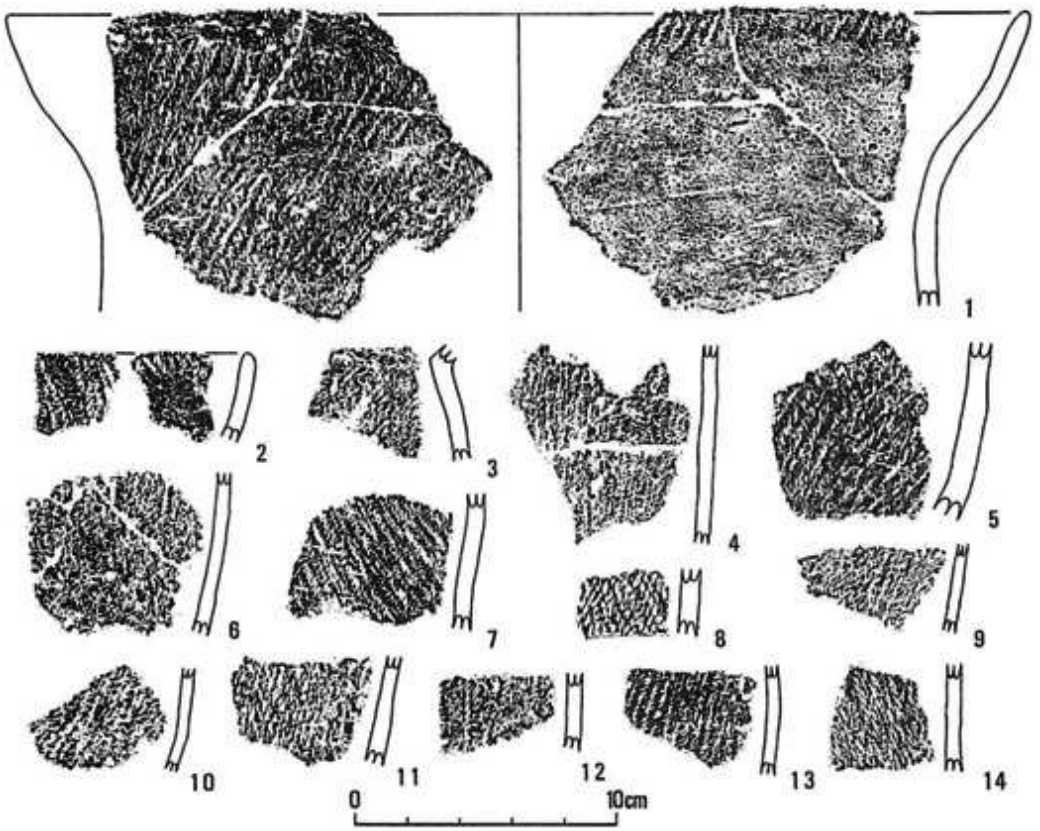
27は口縁下に一条の隆帯がめぐり，その下には爪形文が伴う。隆帯と口唇の間には，アナダラ属の貝の殻頂部による貝殻背圧痕がめぐっている。口縁部内面にはA類と同様に，RLの縄文が横位に施文されているが，段の形成はみられない。褐色を呈し，器厚6mm。ニ5区第3層上部出土。

28も27と同様に，爪形文を伴う隆帯が口縁下をめぐり，口唇部寄りに小さな円形刺突文が施文されている。また口唇と口縁部内面に爪形文が施文されているが，これはA類の縄文帯に相当し，段の形成もかるく認められる。黒褐色を呈し，器厚5mm。ヌ5区第3層上部出土。

29は前2者と同様に口縁下に隆帯がめぐるが，その上下に，28と同様の小さな円形刺突文が施文されており，これらと口唇部との間に爪形文がみられる。口唇には爪形文の施文された痕跡があるが，口縁部内面には認められない。褐色を呈し，器厚5mm。チ5区第3層下部出土。

30はRLの斜縄文の上に，爪形を伴う隆帯が施文された胴部破片である。この爪形文は，A類およびB類の3点のそれと異なり，両端に特徴がある。それにはあたかも上記2点の小形円形刺突文と同じような，施文効果が認められる。橙褐色を呈し，厚さ6mm。Ⅱ5区第3層出土。

C類　撚りの粗い特徴的な斜縄文をもつ1群（第16図，図版16下・17）



第16図　土器拓影 4　Ⅲ群C類

硬質の材質を用いているため，撚りが粗く十分にきかず，原体を口辺に直角において横位に回転しているので，縄文が縦走に近くなる特徴をもつ。この縄文は，鹿島式や船元式の特徴でもある。

口縁部は2点のみで，平縁のキャリパー形深鉢である（第16図1・2）。1はLR，2はRLの縄文であり，ともに口縁部内面には，10～15㎜の巾の縄文が横位に施文されている。しかし，段の形成はともにみられない。

胴部破片は，111点出土している。これらには本類の他，A類などに伴うものが多数混在しているとみなされるが，一括しておく。

口縁部を含めた113点の縄文の原体をみると，RLが89点（3・4・6～10・12・13），LRが24点で（5・11・14）で，前者が78.8%を占めている。A類における口縁部内面の縄文も，すべてRLの横位回転であることも注目される。

色調は，淡褐色・褐色・橙褐色・赤褐色・黒褐色などを呈す。器厚はA・B類と同様に，5～6㎜の薄手が多い。

なお，4～5角形を呈すとみられる，いわゆる3角底の底部破片が3点出土している（図版17の下段）。

第2表　貝群土器層位別出土数量表

分類 / 層位	A類		B類		C類			計	%
	口縁部	胴部	口縁部	胴部	口縁部	胴部	底部		
表面採集	3	2			2	5		12	5.5
第1層	1					4		5	2.3
第2a層	3	5				5		13	6.0
第3層	8	17		1		23		49	22.6
第3層上部	13	37	2			64	3	119	54.8
第3層下部		6	1			7	1	15	6.9
第3層最下部						1		1	0.5
第4層		1				2		3	1.4
小計	28	68	3	1	2	111	4		
計	96		4		117			217	100.0

3—2.　出土状態

以上の資料の層位別数量を示したのが，第2表である。これによれば，第3層上部として検出された例が約55%を占め，第3層下部は約7%にすぎないし，第3層最下部と第4層はあわせて約2%にすぎない。細分せず第3層として検出された例は約23%を占め，上記の細分した場合と比較しても，主要包含層が第3層上部にあることは明らかである。

3—3.　鷹島式土器との比較

和歌山県有田郡広川町鷹島遺跡出土資料を標式資料とする鷹島式土器については，巽三郎・中村貞史氏などによって詳細に報告されている（巽・中村1969）。

本遺跡資料をこの鷹島遺跡出土資料と比較すると，若干の差異のあることに気がつくのである。それらを列挙すると，本遺跡では洒坏状突起が少ないなど，口縁部の変化に乏しいこと，逆C形爪形文がみられないこと，鷹島遺跡にない類爪形文のみられること，口縁部内面の縄文帯がみられないのは，鷹島遺跡では2例のみであるが，本遺跡では28点中6点の21.4%に文様帯がみられず，それを欠く率が高いことが指摘される。また，斜縄文についても，鷹島遺跡ではLRは1例のみであるが，本遺跡では21.2%と高率である。これは北陸系のⅣ群土器E類e種にみられる，LRの優勢（51.7%）と関係がある。また，縦走する胴部の縄文帯の間にみられた刺突文も，本遺跡ではこれを欠く。

以上の傾向は，鷹島式分布圏内におけるところの，周辺的地域色とみなすことができるであろう。

第4節　Ⅳ群土器（第3・4表，第17～28図，図版18～32参照）

4—1.　分　　類

縄文中期初頭の北陸系土器である，新保式・新崎式土器であり，次の11類に大別される。

A類　口縁部文様帯に，沈線による斜め格子目文のみられる1群（第17図1～9，第18図・図版18下・19左）

高堀勝喜氏提唱の新保式中第2類に相当する。これについて高堀氏は，「口辺に斜行する半隆起の平行線を引き，次に反対方向に斜線を加えて格子目文を作るもの」と記している（高堀1952）。これらは形態上さらに次の2種に細分される。

a．口縁部が内曲しないところのバケツ状の深鉢で，小島氏分類（小島1977）の第Ⅰ3型式に相当する（第17図1）。1点のみ。淡褐色を呈し，器厚7㎜。口唇には，C字形爪形文を伴う隆帯がめぐっている。

b．ジョウゴ状の屈曲の強い深鉢で，口縁部が立ち上り，この口縁部文様帯に格子目文がみられる深鉢である。口頸部文様帯には，次のB類にみられるような，半截竹管文による長方形区画文がみられる。小島氏の分類には該当する型式はなく，しいてあてはめれば，第Ⅰ2型式と第Ⅱ4型式を折衷した形態である。

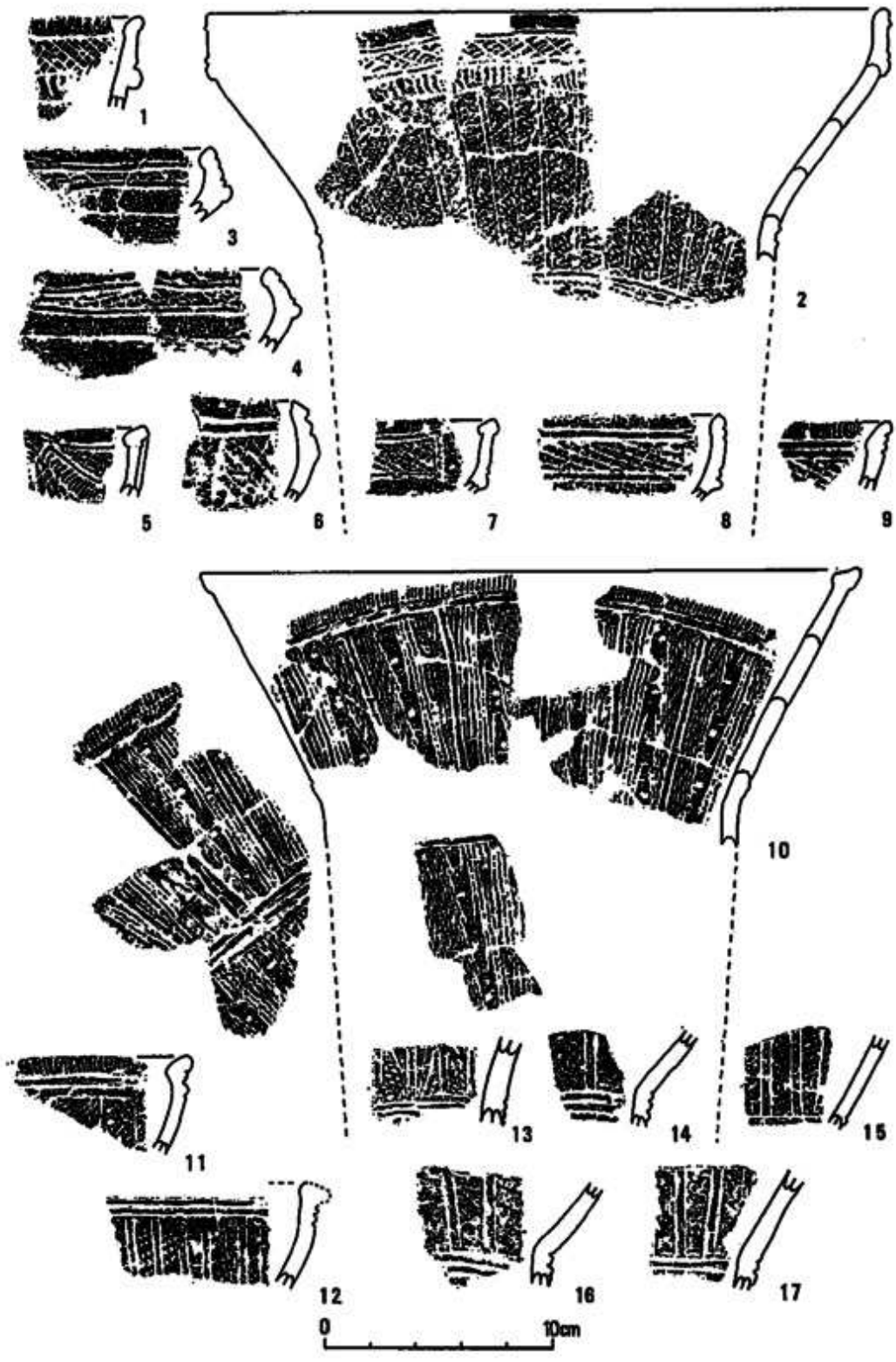
第17図2（第18図，図版19左）に示す土器がその典型である。この胴部は推定復元である。推定口径30㎝，推定高31㎝。ニ3区第3層上部出土。口縁部文様帯と口頸部のそれとはC字形爪形文をもつ隆帯で画され，口頸部と胴部のそれは，半截竹管文によって画されている。半截竹管文による長方形の区画を施す前に，いわば地文として，RLの縄文が縦位に施文されている。色調は暗褐色を呈し，器厚7㎜。

この他に13点出土している（第17図3～9）。色調は，淡褐色・褐色・黒褐色を呈し，器厚は6～8㎜である。口唇および口縁部文様帯下には，しばしばC字形爪形文を伴う隆帯がめぐっている。

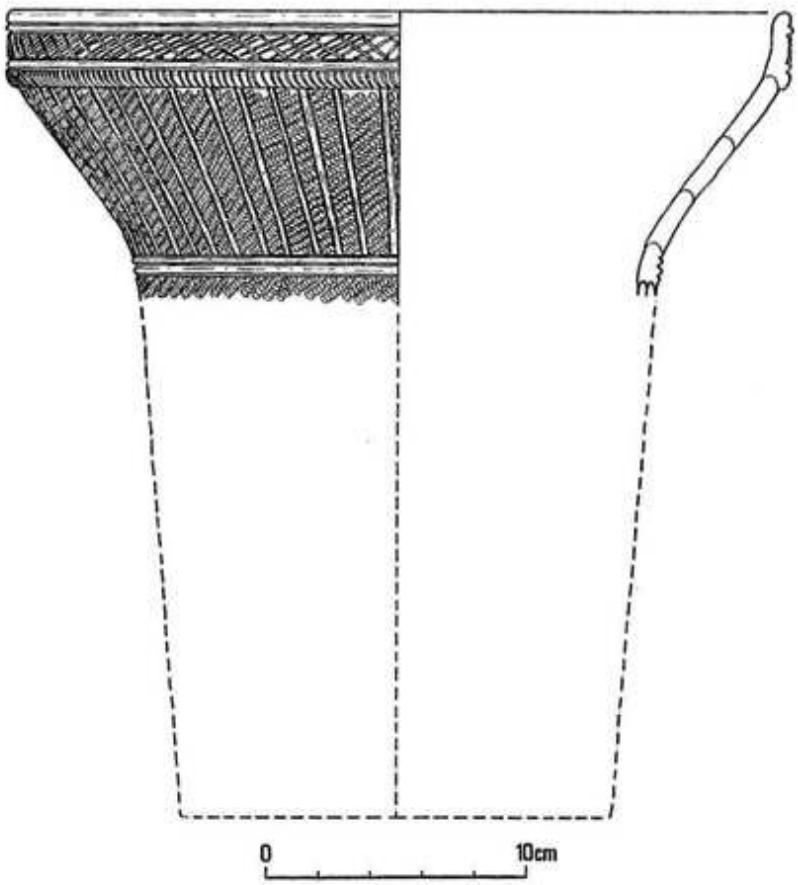
B類　半截竹管文による長方形区画文を特徴とする1群（第17図10～17，第19図，図版18・19右）

Ab22同様のジョウゴ状の屈曲の強い深鉢であるが，口縁部の立ち上りと，その文様帯を欠くところに差異がある。

第17図10（第19図・図版19右）に示す土器がその典型である。この胴部もまた推定復元で，推定口径29㎝，推定高30㎝である。セ2区第3層上部出土（図版18上）。口縁にはC字形爪形文を伴う隆帯がめぐり，内面はやや肥厚している。口頸部文様帯と胴部のそれは半截竹管文によって画され，半截竹管文施文以前に，両文様帯を区別せずに木目状撚糸文



第17図　土器拓影5　Ⅳ群A・B類



第18図　土器実測図 1

が施文されている。この木目状撚糸文は縦位であるが，上からの施文と下からの施文が交互に行なわれている点に特徴がある。撚糸は l である。暗褐色を呈し，器厚7㎜である。

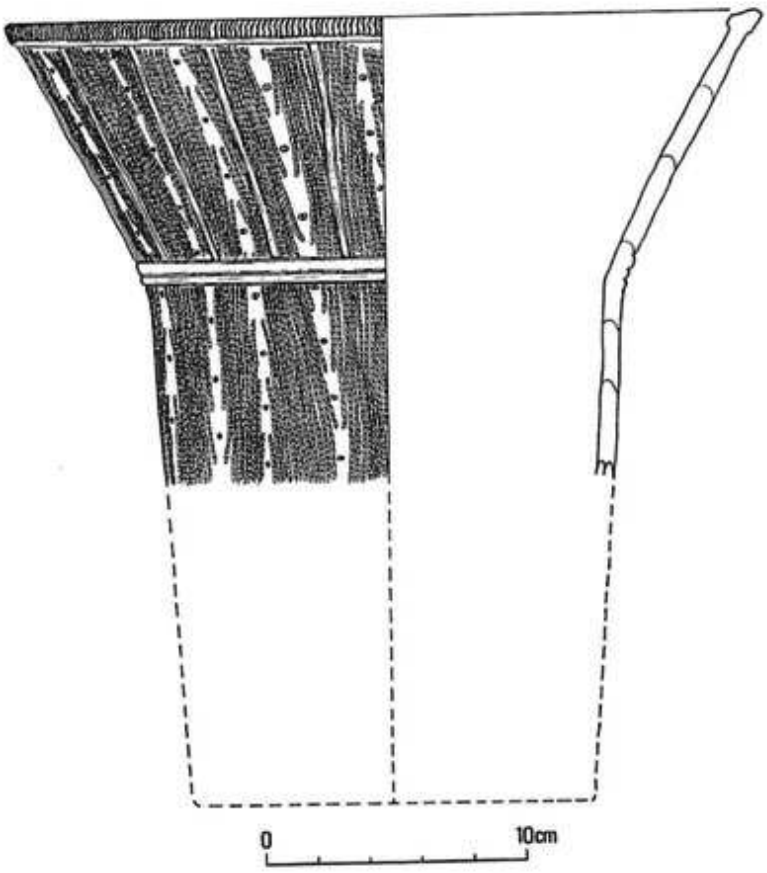
他に口頸部破片は13点出土している。地文にはRLの縄文を有する例が5点（第17図11・12・14・15），同LRが1点（13），木目状撚糸文が1点，無文が6点（16・17）である。色調は，淡褐色・褐色を呈し，器厚は6～10㎜であるが，6～7㎜が多い。

これらは高堀氏提唱の新保式の第1類に相当し，小島氏分類の第Ⅱ4型式に相当する。

C類　3角形の沈刻を伴う斜め格子目文をもつ1群（第20図1～3，図版20）

A類の格子目文とは，3角沈刻の有無ばかりでなく，間隔が広くかつ横長になり，その器形はキャリパー形深鉢であること，文様帯を画すC字形爪形文を伴う隆帯を欠くことなどにおいて，差異がある。この格子目文をもつ口縁部文様帯の上下は，爪形文を伴わない半截竹管文によって区画され，さらにその下部には，縦位の半截竹管文もみられる（第20図2）。8点出土。淡褐色・褐色を呈す例が多く，器厚は6～7㎜である。

D類　密接した縦位の半截竹管文による平行沈線上に，斜位に沈線を施した1群（第20図4～16，第21図，図版20・21左・22上）



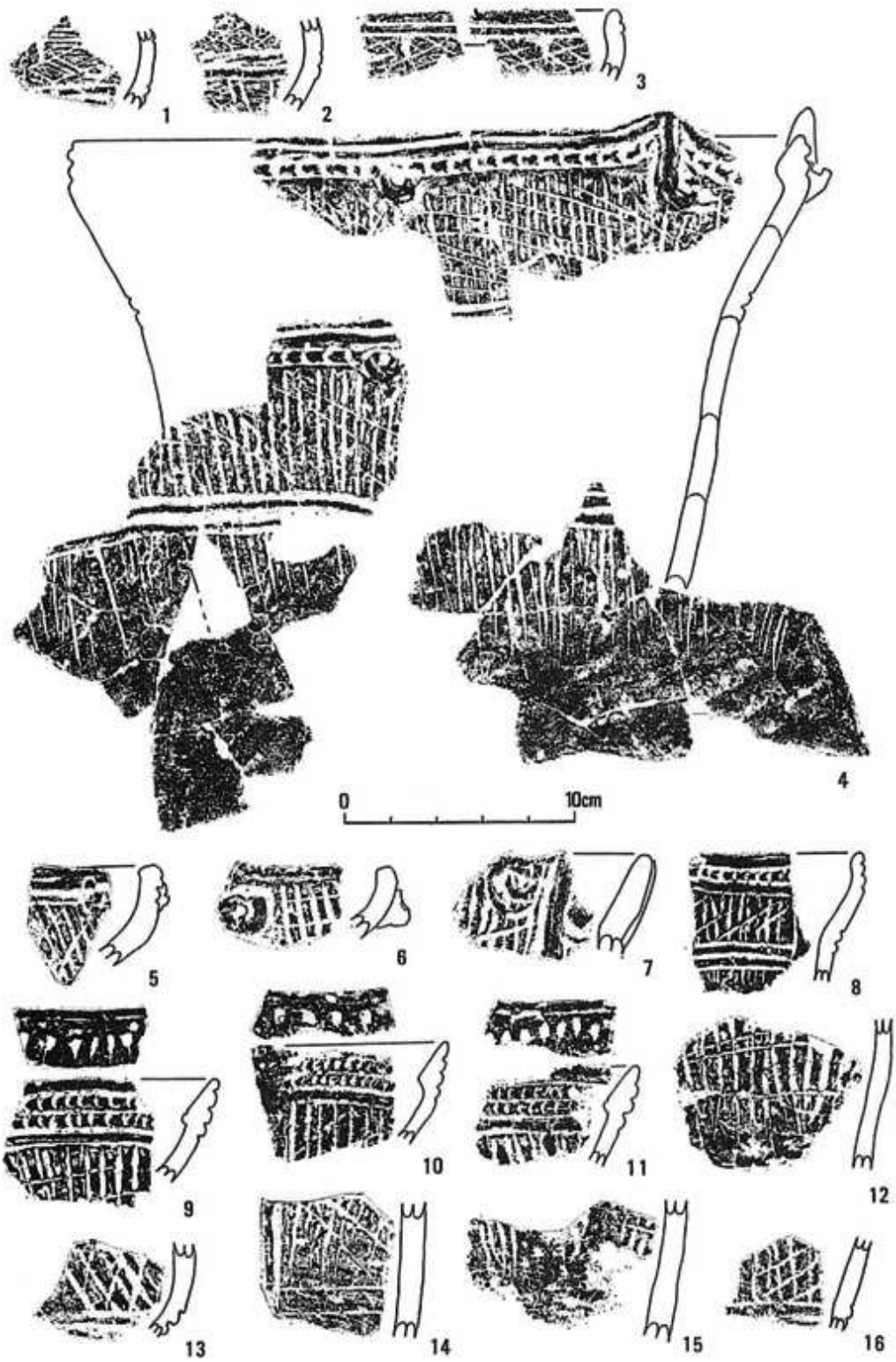
第19図　土器実測図 2

本類はC類と同様に，キャリパー形深鉢の口縁部文様帯，および一部これに接する胴部文様帯によって，縦位に密接して太さ数㎜の半截竹管による平行沈線を施文した上に，斜位にへらによる沈線を巾広い間隔で施文していることに特徴がある。そして口縁部文様帯の上下は半截竹管文によって画され，さらにこの上部の半截竹管文には，しばしば数㎜から1㎝間隔ぐらいの，間隔の広い爪形文を伴っていることも，大きな特徴である。

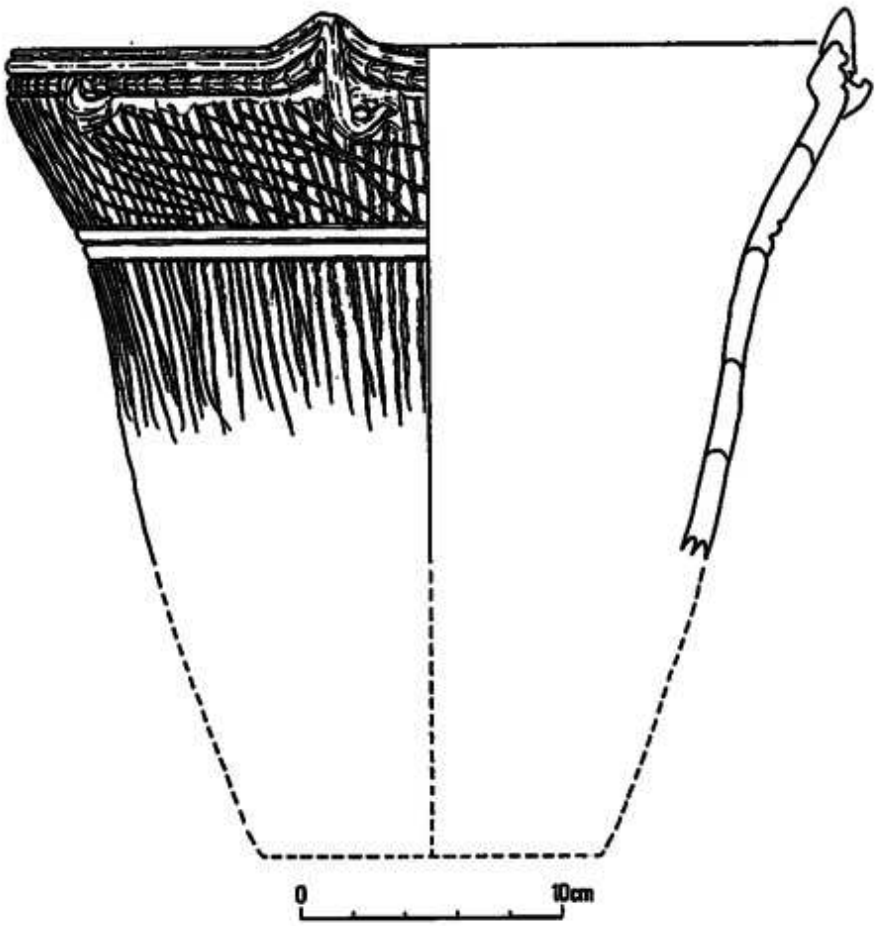
これらは口縁部内面における文様帯の有無によって，次の2種に細分される。

a．口縁部内面に文様帯をもたない場合で，間隔の広いC字形爪形文をもつ場合は1例のみで（第20図4・8），単に半截竹管による平行沈線のみの場合もあるし（5），これを欠く場合もある（6・7）。8点出土。淡褐色・褐色・黒褐色を呈し，器厚は7～12㎜で，やや厚くなる。

他に推定によって復元された例が1点ある（第20図4，第21図，図版21左）。推定口径32㎝，推定高32㎝で，小さな山形突起をもつキャリパー形深鉢である。口縁部内面は肥厚しており次のb種に似るが，文様はみられない。口縁部文様帯の上下には，半截竹管文による3条の平行沈線をめぐり，上の第2・3列間に間隔の広いC字形爪形文が施文されている。山形突起下には「し」の字形の隆帯が施文され，3～4個と推定され



第20図　土器拓影 6　Ⅳ群C・D類



第21図　土器実測図3

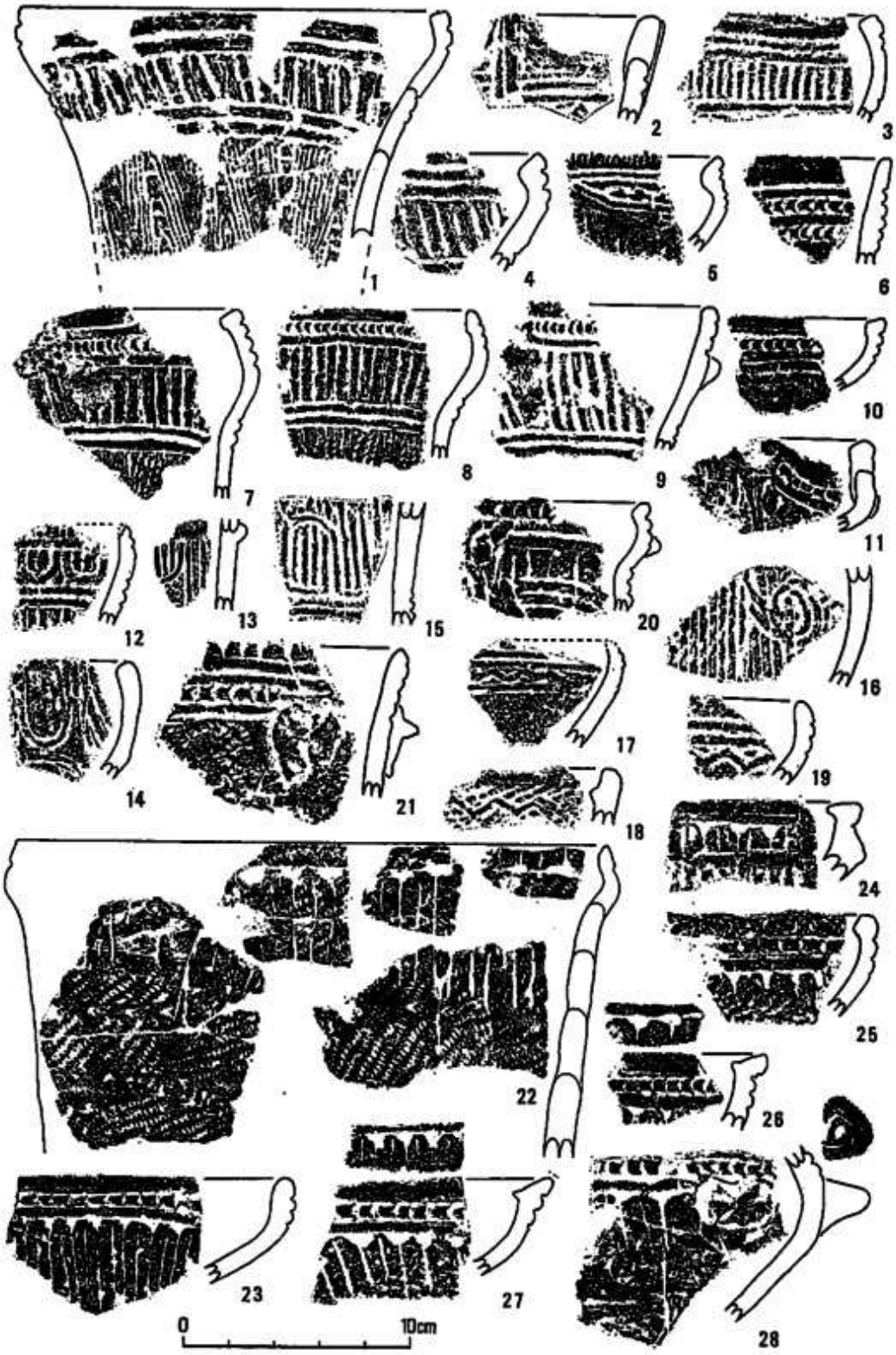
る　この山形隆帯間には，「し」の下端のみをつけたような円形隆帯があったらしく，2例まで確認されている。第20図6・7にも類例がみられる。色調は暗褐色を呈し，器厚は10㎜で，やや厚い。フ5区第3層上部出土（図版22上）。

b．口縁部内面が20～25㎜巾で肥厚し，この面に3角沈刻を伴うことが特徴的である。そして外面の半截竹管による平行沈線も4列と多く，しかもC字形爪形文も2列となり，a種より装飾性に富む（9～11）。5点出土。黒褐色を呈す例が多く，1例のみ橙褐色を呈す。器厚は逆にやや薄く，6～7㎜である。

c．この他に，いずれとも決しがたい胴部破片が14点出土している（12～16）。淡褐色・黒褐色を呈す例が多く，器厚は8～12㎜である。

E類　D類のへらによる斜めの沈線を除いたところの，半截竹管による密接平行沈線を主文様とする1群（第22～23図，第25図1，図版23・25下）

器形はC・D類同様に，キャリパー形深鉢であり，半截竹管による密接した平行沈線は，この口縁部文様帯にみられる。その上下端は3～5条の半截竹管による平行沈線によって



第22図　土器拓影 7　Ⅳ群E類（1～21）・F類（22～28）

画されている。特に口唇部に接する上端には，平行沈線間にD類と同様の，間隔の広いC字形爪形文が1条めぐるもの（第22図7～11），2条めぐるもの（5・6），およびこれを欠くもの（1～4）とがある。これらはさらに次の4種に細分される。また胴部破片は1括してe種とする。

a．口縁部文様帯中に，半截竹管による平行沈線が縦位に密接して施文された1群で，不明または無文の諸例も本種に含める（第22図1～11）。口縁部は平縁であるが，小さな山形突起を有する例（2）や，波状縁をなすらしい例（11）もある。この頂部下には，隆帯が垂下し，また平縁でも円形の張りつけがみられ（9），D類のそれに共通している。

第22図1（第25図1，図版21右）はその典型であり，推定復元されたものである。推定口径19cm，推定高21cmであり，やや小形である。胴部は木目状撚糸文が縦位に施文されているが，その施文法はB類の復元土器（第17図10，第19図，図版19右）と同様に，交互に上下方向から回転施文している。撚糸は*l*である。色調は淡灰褐色を呈し，器厚は8㎜である。フ5区第3層上部出土。

復元された土器の他に，本種は97点出土している。胴部の文様の明確な例は復元土器を含めて9例のみであるが，いずれも木目状撚糸文である。撚糸はすべて*l*である。色調は淡褐色・褐色・黒褐色を呈す例が多く，赤褐色を呈す例は少ない。器厚は6～10㎜で，6～8㎜が多い。

b．a種のヴァリエイションとみられるが，半截竹管文によってU字文（12～15）や円形文（16）の施文された場合である。地文はa種と同様に，半截竹管による平行沈線の施文されている場合（12・15），斜縄文の施文されている場合（13・16），および無文の場合(14)がある。6点出土。褐色・赤褐色を呈す例が多く，器厚は7～9㎜である。

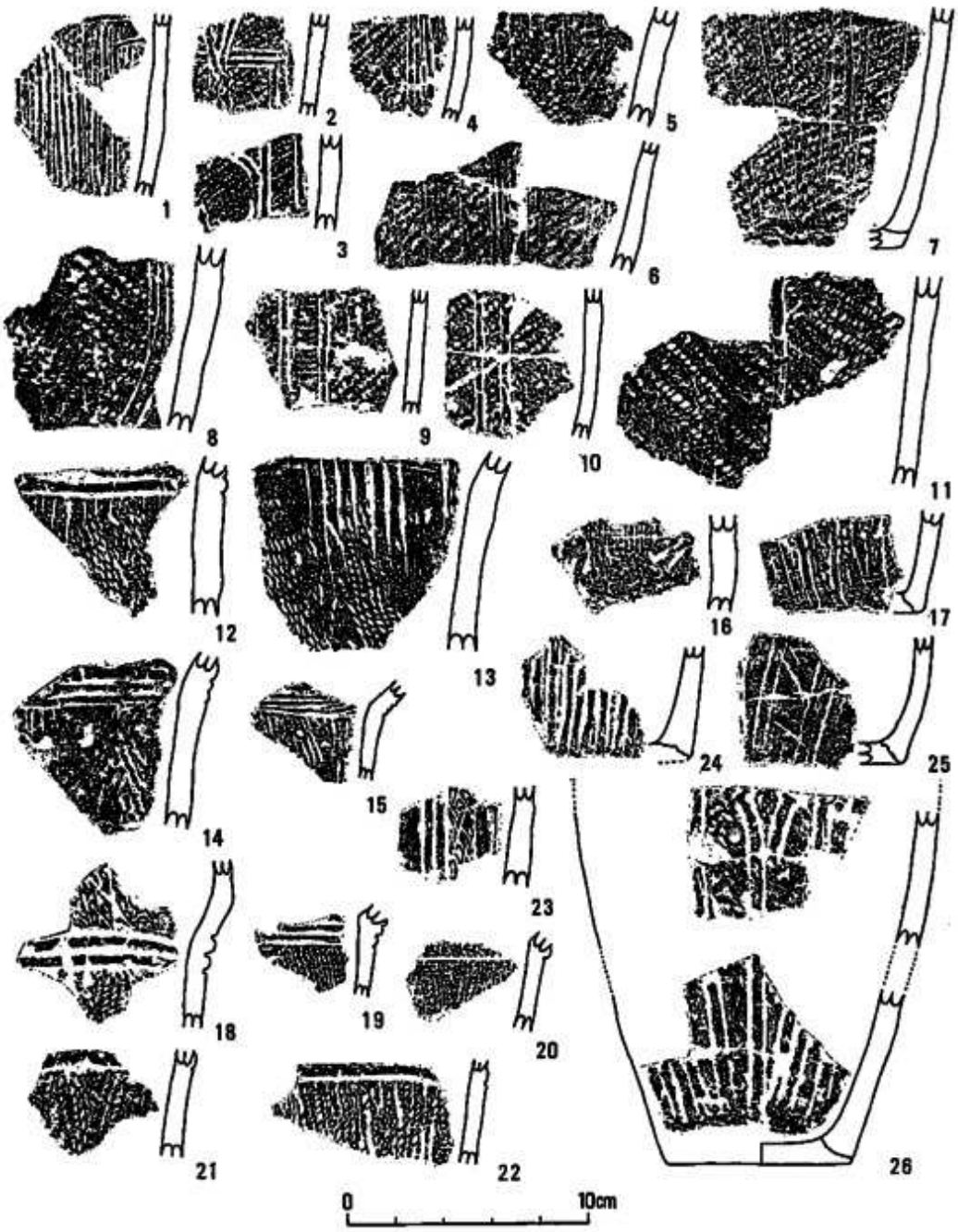
c．U字文などの代りに，半截竹管による連綴山形文をもつ場合である（17～19）。3例のみで，いずれも淡褐色を呈し，器厚7～9㎜である。

d．a～cと類似した文様帯をもちながら，縦位の密接した半截竹管による平行沈線を欠く（21）か，痕跡的になっていて（20），b種にみられた斜縄文が施文されている場合である。21点出土。黒褐色を呈す例が多く，赤褐色を呈す例も少量みられる。器厚は6～9㎜である。

e．a～d種に伴う胴部破片とみられるもの220点を一括した。半截竹管文下に，斜縄文・羽状縄文・木目状撚糸文が施文されたもの，半截竹管文のみのものなどがみられる。斜縄文の例は58点みられ，RLを縦位に回転施文した場合が28点で48.3%（1～7・9・10），LRの場合は30点で51.7%（11）で，前者が多い。羽状縄文の場合は1点のみである（8）。木目状撚糸文は28点みられ，撚糸がrの場合が17点で60.7%（12～17），*l*の場合が11点で39.3%（18～22）で，前者が多い。地文を欠き，半截竹管文による文様のみの場合も133点みられる（24～46）。

F類　長目の沈線を伴う3角形沈刻を特徴とする1群（第22図22～28，図版23上・24）

口縁下に間隔の広いC字形爪形文をもつところの，半截竹管による平行沈線を伴う場合（第22図23・25～28）と，それを欠く場合（22・24）とがあるが，後者の場合は典型的なキャリパー形とはならず，22のように退化した形態を示す。22は平行沈線に代わって，巾約1cmの折返し口縁となっている。この折返し口縁部や平行沈線の下縁に接して，深く鋭

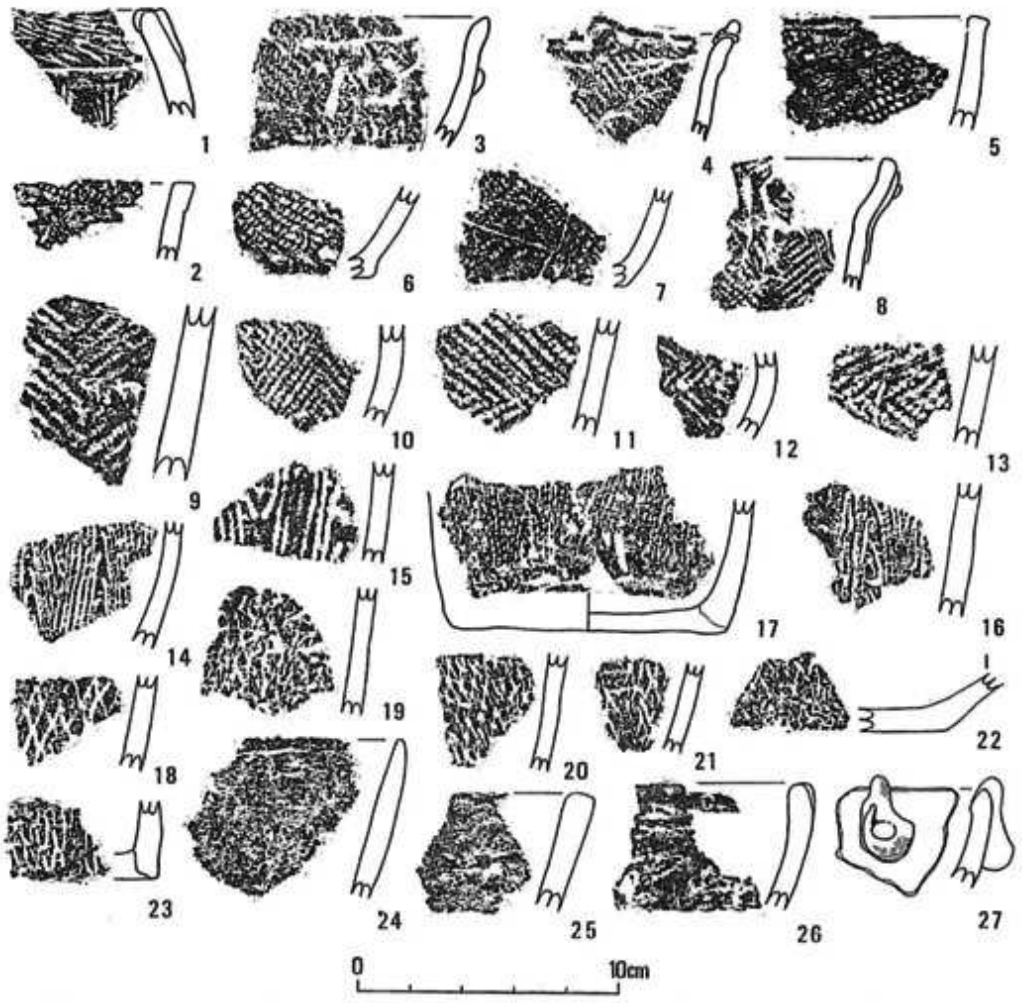


第23図　土器拓影 8　Ⅳ群E類

い3角形の沈刻が連続してみられ，この頂部と底部とから長く沈線が垂下し，口縁部文様帯を形成している。25のみはこれを欠く。また口縁部内面に，同一文様が施文される場合もある(26・27)。これはC類・Db種にも共通する特徴である。いわゆる蓮華文の先駆形態である。胴部にはLRの縄文が横位に回転施文されている（22・25)。28は無文らしい。色調は，22は赤褐色を呈すが，他は淡褐色を呈す例が多く，黒褐色を呈す例もある。23点出土している。

G類　斜縄文のみの1群（第23図1～5，図版23下）

斜縄文のみの口縁部破片が14点出土している（第23図1～5)。折返し口縁をもつ例が約半数の7点にみられる（1～4)。これはF類中に類例が認められる（第22図22)。RLの縄文を横位に回転施文した場合が6例（1～4)，同縦位に施文した場合が1例（同5)，LRの縄文を横位に施文した場合が7例である。色調は灰褐色・褐色を呈す例が多く，器厚は6～8㎜である。



第24図　土器拓影 9　Ⅳ群G類（1～5)，H類（6～13)，I類（24～27)，J類（14～23)

H類　羽状縄文のみの1群（第24図6～13，図版25上）

羽状縄文のみの口縁部破片1点と，胴部破片5点が出土している。施文方向が上下方向の場合（8～10）と，水平方向の場合（11～13）とが同数である。赤褐色を呈す例が多く，器厚は7～13mmである。

I類　無文の1群（第24図25～27，図版25上）

無文の口縁部破片が10点出土している。このなかにはG類にみられる折返し口縁的要素をもったもの（第24図24・26）や，Da種に典型的にみられた「し」の字状隆帯をもつもの（27）などがみられる。褐色・淡褐色を呈すものが多く，器厚は7～10mmである。

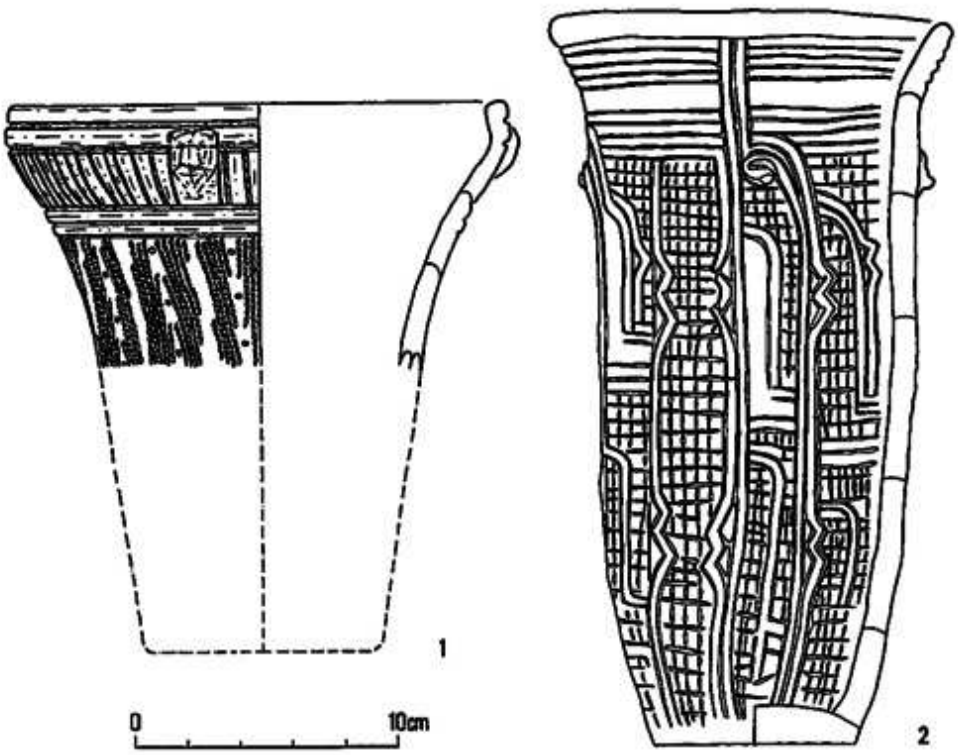
J類　以上のA～I類に伴うとみられる把手・胴部・底部の破片（第24図14～23，図版25）

次の5種に分類される。

a．把手類が8点みられ，図版25左上は獣面把手で，間隔の広いC字形爪形文がみられる。3角沈刻のみられるもの，半截竹管による平行沈線がみられるなど，A～I類のうちでもC～F類に伴う可能性がもっとも強い。

b．斜縄文のみの破片が174点みられる（第24図6・7）

c．木目状撚糸文の胴部破片が129点みられる。撚糸はlが多く77点で59.7%（第24図14～17），rは52点で40.3%である。



第25図　土器実測図　4

d．網目状撚糸文の破片が6点出土している。胴部4点，底部2点。撚糸は不明2点の他は，すべてrである。第24図18・19～21・22は，左下り方向の撚糸を，右下り方向の撚糸がすべておおっている。20のみはところどころに結び目がみられる。23はこれらと異なり，絡んで網目を構成している。淡褐色・橙褐色を呈す。器厚は7～10mmである。

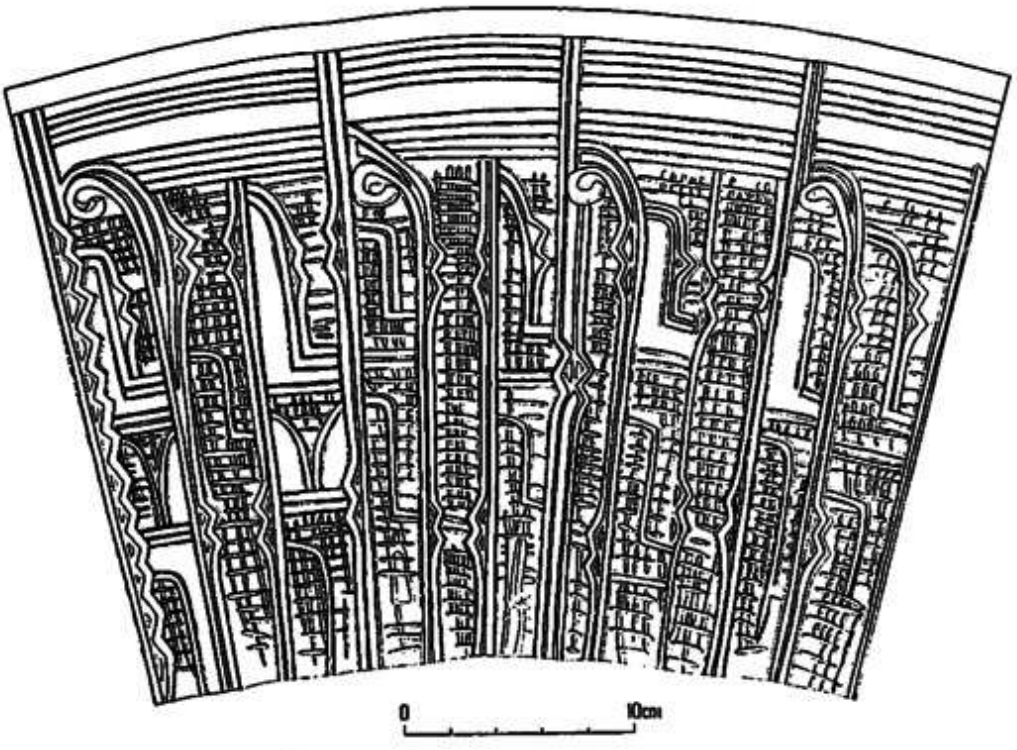
e．無文の胴部破片が514点，底部破片が45点出土している。底部破片中には，後に記すように，アンペラ圧痕をもつ例が4点含まれている。

K類　半截竹管文による胴部文様帯の発達と，口縁部文様帯との間に無文帯を区画するキャリパー形深鉢を中心とする1群（第25図2，第26～28図，図版28～31上）

次の3種に分類されるが，主体はb種である。

a．本遺跡唯一の完形土器であり，次のb種の変形とみなされる筒形土器である。ヘ5区第3層下部より，北西方向にやや傾斜した状態で出土した（図版28参照）。

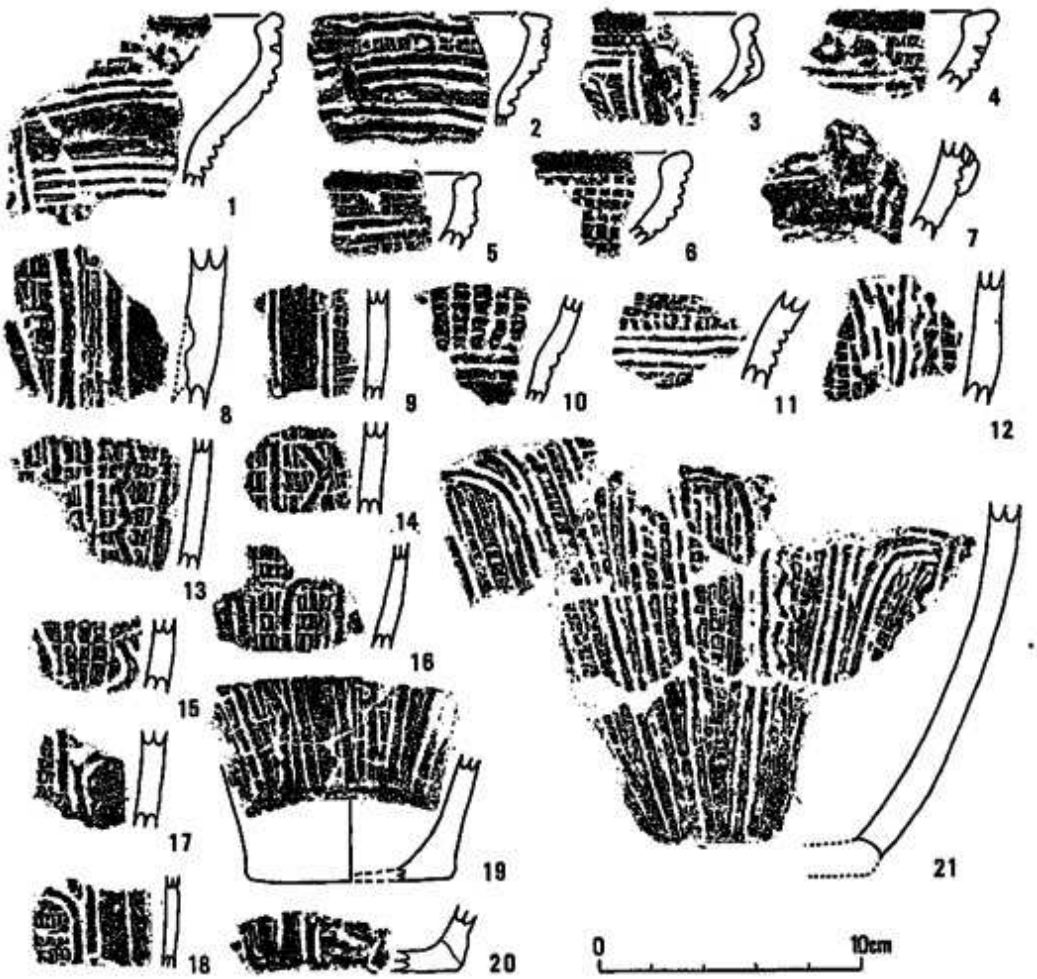
高さ28.0cm，口径15.4cm，底径7.6cm，器厚10mmで，明るい褐色を呈し，焼成は良好である。口縁部は軽く外反し，約1cmの無文帯をおいて，半截竹管による平行沈線が5列めぐり，口頸部にも巾約1cmの無文帯を設けている。胴部は口縁部文様帯を含めて，2条の半截竹管による半隆起文によって縦に4区画されている。口頸部無文帯に接しては，口縁部文様帯と対応するように，4条の半截竹管による半隆起文がめぐっている。



第26図　Ⅳ群G類土器　文様展開図

この部分左の縦区画文に接して，Ｄａ種に典型的にみられた「し」の字状隆起文を，逆さにしたような隆起渦巻文を設け，この末端が4等分された各区画内を，高さを減じつつさらに縦に細分している。各区画は3分割が基本であるらしく，山形文をもつ縦の半截竹管による平行沈線が，渦巻文を伴う区画線の右に垂下している。3分割された縦長の各区画内は，Ｌ字状ないしは鍵手状にさらに細分され，若干の無文部を設けるとともに，大部分は格子目文で充填している。本土器を含め，Ｋ類の格子目文は，Ａ～Ｃ類の斜め格子目文と異なり，井桁状である。しかも縦にへらで線を引き，その後で横線を強く引いているために，縦線が変形していて横線が非常に強く感ぜられるのが特徴的である（第25図2，第26図，図版29左・30上）。

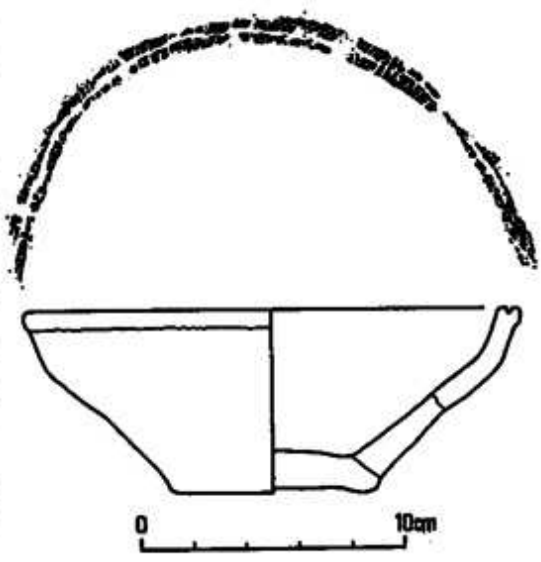
ｂ．本類の主体となるもので，キャリパー形深鉢である。口縁部と胴部は，ａ種にみられた格子目文や，半截竹管による山形文やＬ字文がみられる。口縁部破片7点（第27図1～6），胴部破片40点（7～18・21），底部破片2点（19・20）が出土している。



第27図　土器拓影 9　Ⅳ群H類

色調は淡褐色・淡橙褐色・褐色・黒褐色を呈す例が多い。器厚は8～11㎜で，やや厚手である。

e．本遺跡唯一の浅鉢形土器である。高さ7.0cm，口径19.0cm，底径8.0cmで，器厚10㎜である。褐色を呈す。約2分の1程度の残存率である。口縁部は，F・G・H類中にみられる巾の狭い折返し口縁になっている。口唇上には，a・bと同じ格子目文が施文されている(第28図・図版29右)。この土器には後に記すように，種子の圧痕がみられる。ヌ5区第3層上部出土。



第28図　土器実測図 5　Ⅳ群H類

4—2. 分類の大別

前項において11類に分類したⅣ群土器の数量は，第3表に示すとおりである。これらは形態学的に，次の3群に大別される。

第1グループ { A類 / B類 }

第2グループ { C類 / D類 / E類 / F類 / G類 / H類 / I類 } J類

第3グループ　K類

胴部破片を主とするJ類は，第1グループと第2グループにまたがる可能性が大きい。このJ類を省く意味で，口縁部破片を主に相互の比率をみると，第3表右のようになる。すなわち，大多数の約83%を第2グループが占め，第1グループは約13%，第3グループは約4%にすぎない。すなわち，北陸系中期初頭土器群は，第2グループを最盛期としていることが明らかである。

いずれも深鉢形土器を主体とするが，第3グループにのみ，1個体の浅鉢形土器が登場していることは注目される。深鉢自体にも形態上の差異がある。第1グループはバケツ状またはじょうご状の屈曲の強い深鉢，第2・3グループはキャリパー形で，口縁部形態は

第3表　Ⅳ群土器数量表

（右表は口縁部のみの数量表，カッコ内は完形または復元土器の数量を示す）

分類＼部位		口縁部	胴部	底部	小計	計	%
A	a	1	0	0	1		
	b	14(1)	0	0	14	15	1.1
B		14(1)	0	0	14	14	1.0
C		8	0	0	8	8	0.6
D	a	8	0	0	8		
	b	5	0	0	5		
	c	0	14	0	14	27	1.9
E	a	98(1)	0	0	98		
	b	6	0	0	6		
	c	3	0	0	3		
	d	21	0	0	21		
	e	0	220	0	220	348	25.0
F		8	15	0	23	23	1.7
G		14	0	0	14	14	1.0
H		1	5	0	6	6	0.4
I		10	0	0	10	10	0.7
J	a	8	0	0	8		
	b	0	174	0	174		
	c	0	129	0	129		
	d	0	6	0	6		
	e	0	514	45	559	876	62.9
K	a	1(1)	0	0	1		
	b	7	40	2	49		
	c	1(1)	0	0	1	51	3.7
計		228	1,117	47	1,392	1,392	100.0
%		16.4	80.2	3.4	100.0		

分類		数	%	
			小計	計
A	a	1	0.4	
	b	14	6.1	6.5
B		14	6.1	6.1
C		8	3.5	3.5
D	a	8	3.5	
	b	5	2.2	5.7
E	a	98	43.0	
	b	6	2.6	
	c	3	1.3	
	d	21	9.2	56.1
F		8	3.5	3.5
G		14	6.1	6.1
H		1	0.4	0.4
I		10	4.4	4.4
J	a	8	3.5	3.5
K	a	1	0.4	
	b	7	3.1	
	c	1	0.4	3.9
計		228	99.7	99.7

ゆるやかである。しかし，胴部は筒形であり，ふくらみをもたない点は第1グループに共通する。そして第2・3グループを比較すると，前者には口縁部文様帯と胴部文様帯の区別は明らかであるが，胴部文様帯の装飾性は乏しい。これに対し後者では，両文様帯の中間に口頸部の無文帯を設け，かつ文様による装飾の主体が胴部文様帯に片寄りはじめている。

次に文様は，主文様の施文具に半截竹管を用いる点では共通しているが，その文様は，第1グループは斜め格子目文と長方形区画文，第2グループは密接した平行沈線文，第3グループでは，井桁状格子目文が特徴的である。また蓮華文のプロトタイプ状の文様が第

2グループにみられ，地文の羽状施文の木目状撚糸文，網目状撚糸文が第1・2グループにのみみられることも注目される。胴部の装飾性が強くなる第3グループでは，これらを含め斜縄文の施文すら衰退するらしい。また，爪形文を伴う隆帯も衰退する。このC字形爪形文も，第1グループでは間隔は狭く密接しているのに対し，第2グループでは広くなる傾向があり，その文様効果には大きな差異が認められる。

器厚においても，第1グループから第3グループにかけて，6～7㎜，6～10㎜，8～11㎜と，しだいに厚くなってくる。

さて，これらを既往の北陸地方の編年表と対比すると，問題になるのは新保・新崎の2型式であろう。

新保式は，石川県珠洲郡松波町新保遺跡の資料に基づいて，高堀勝喜氏が提唱したものである（高堀1952）。その内容は，主に文様に基づいて，次の3類であるという。

第1類　縄文あるいは撚糸文地に半截竹管で施文するもので，出土量の90％を占めるもの。

第2類　口辺に斜行する半隆起の平行線を引き，次に反対方向に斜線を加えて格子目文を作るもので，約10片。

第3類　無文地上に半截竹管で格子目文以外の施文するもので，これも約10片。

なお，第3類については，「上山田貝塚出土土器に近いもの」，と記されているのが注目される。

本遺跡Ⅳ群のA類とB類は，この高堀氏分類のそれぞれ第2類と第1類に相当することは，すでに記したところである。したがって，第1グループは新保式とみなすことができる。

しかし，器形については問題が残る。近年新保遺跡標式資料を再検討した小島俊彰氏は，文様に加えて器形を検討し，11型式に分類した（小島1977）。同氏の分類と高堀氏分類との関係は，次のように理解される。

高堀第2類　小島第Ⅰ2型式（16％）
　　第Ⅰ3型式（7％）
高堀第1類　小島第Ⅱ1型式（50％）
　　第Ⅱ4型式（2％）
　　第Ⅱ6型式（5％）
　　第Ⅱ7型式（1％）
　　第Ⅲ3型式（4％）
　　第Ⅲ5型式（2％）
高堀第3類　小島第Ⅳ2型式（2％）
　　第Ⅳ3型式（10％）
　　第Ⅳ5型式（1％）

本遺跡出土土器は，小島氏の第Ⅰ3・Ⅱ4型式などの，バケツ状または屈曲の強いジョウゴ状の深鉢であって，50%を占め新保式を特徴づけている第Ⅱ1型式を欠いている。この型式は，文様は長方形区画文を特徴とするキャリパー形深鉢であり，B類と第2グループのD・E類との中間形態といえよう。これを欠くことは，本遺跡の性格を探る上で重要であり，第5章において改めて考察することとする。

次に第2・3グループであるが，これらに対比される新崎式の概念については，目下きわめて混乱しており，その原因の学史的整理作業は小島俊彰氏の労作がある（小島1974）。この小島氏論稿を踏まえて，近年神保孝造氏は次のような見解を示された（神保他1977）。

従来，新崎式と呼称されてきた土器群は，高堀勝喜氏によって再検討され，それぞれ新崎式・上山田古式土器に区分された。しかし，その区分基準は必ずしも明確に示されずこのため小島俊彰氏は，特に新崎式を再検討する動きを示した。一方，神保・橋本らは，城端町西山B遺跡の土器群を新崎式土器のより古い群として抽出し，新崎式土器の新たな区分基準を呈示した。これには，小島氏も賛意を示している。しかし，その後，当初高堀氏が設定した上山田古式と富山県側で理解していた上山田古式の内容に差異があり，高堀氏の上山田古式は富山県側による同式の一部分を示すことが判明し，さらに再々検討する必要が生じた。

巌照寺遺跡出土の土器群に認められた土器製作第2・第3段階での製作技術の違いは，時間差をもって変遷したものであり，これを時期差を有する土器群としてとらえる根拠となる。この点を踏まえ，広義の新崎式土器を再度区分し，内容的にもっともまとまりを有し区分基準も明瞭な本遺跡出土の土器群を標式として，巌照寺Ⅰ式・同Ⅱ式・同Ⅲ式土器と仮称したい。

そしてさらに註のなかで，「巌照寺（ごんしょうじ）Ⅰ式を広義の新崎式の古式，巌照寺Ⅱ式を新崎式，巌照寺Ⅲ式をほぼ上山田古式に比定したい」，と記している。

北陸地方における最も新しい新崎式に関する見解であるが，巌照寺Ⅰ・Ⅱ式はともに口頸部の無文帯が顕著であり，かつ胴部文様帯の装飾性も顕著になりつつある。本遺跡Ⅳ群土器と対比するとき，第3グループをこれらに比定することはできるが，第2グループに比定することは難しい。新保式と巌照寺Ⅰ式との間には，本遺跡の第2グループが介在する可能性が強く，神保氏が慎重を期して註でしか記さなかったように，巌照寺Ⅰ式をただちに新崎古式とすることには問題がある。

こうした研究の現状下においては，本遺跡資料の提示が一層の混乱をまねくことは避けなければならないので，第2・3グループについては，一応新崎式の古い段階と新しい段階に対比されるのではないかという前提のもとに，北陸系第2グループ・第3グループとし，仮称といえども型式名は使用しないことにする。今後の研究の進展に期待するところが大きい。

第4表　Ⅳ群土器層位別出土数量表

層位 / 分類	第1層		第2 a層		第3層		第3層上部		第3層下部		第3層最下部		第4層		表面採集		合計	
	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%
A			1	6.7	2	13.3	8	53.3	1	6.7			1	6.7	2	13.3	15	100.0
B			1	7.1	2	14.3	5	35.7	2	14.3			3	21.4	1	7.1	14	99.9
C			1	12.5	3	37.5							4	50.0			8	100.0
D	1	3.7			9	33.3	14	51.9	1	3.7			1	3.7	1	3.7	27	100.0
E	1	0.3	18	5.2	91	26.1	178	51.1	25	7.2	1	0.3	13	3.7	21	6.0	348	99.9
F			2	8.7	8	34.8	12	52.2							1	4.3	23	100.0
G			1	7.1	6	42.9	5	35.7	1	7.1			1	7.1			14	99.9
H			2	33.3			4	66.7									6	100.0
I			1	10.0	3	30.0	4	40.0	1	10.0					1	10.0	10	100.0
J	8	0.9	78	8.9	255	29.1	365	41.7	94	10.7	3	0.3	25	2.9	48	5.5	876	100.0
K			5	9.8	23	45.1	17	33.3	5	9.8	1	2.0					51	100.0
計	10	0.7	110	7.9	402	28.9	612	44.0	130	9.3	5	0.4	48	3.4	75	5.4	1,392	100.0

4—3.　出　土　状　態

第3表に示したⅣ群土器の数量を，層位別に記したのが第4表である。

これによれば，出土傾向は2大別される。第1はB・C類を除くA・D～K類であり，第4層や第3層最下部には皆無か若干量みられ，第3層上部において急増するタイプである。これに対しB・C類は，第3層上部において急増することは同様であるが，第4層および第3層下部において，すでに高率で出土している。しかし，絶対量が少ないので，過大評価はできない。結論的には，主要包含層は第3層上部であり，それより下層でも皆無でないとみなしてよいであろう。この出土傾向は，Ⅲ群の場合と同様である。また，第1グループ（A・B・J類），第2グループ（C～I・J類），および第3グループ（K類）との間には，なんらの差異も見い出せなかった。

このような出土状態からみて，第3層下部から出土したK類a種の完形土器は，なんらかの事情により，第3層上部より堀って埋められたとみることができるであろう。

第5節　土師器・須恵器・陶器

形態学的特徴の不明確な土師器・須恵器・陶器の細片が，下記のように少量出土している。

土師器　表面採集2点，第3層上部1点。

須恵器　表面採集5点。

陶　器　表面採集2点。

第6節　圧痕類（第30図，図版31下・32参照）

6—1.　器壁中における種子の圧痕

次の3例が認められた。

第1例　ドングリ状圧痕（図版31下1）

Ⅱ群A類5に記した平底の底部（第14図9）に接合する底部破片中にみられた。1aは土器片，1bはそのモデリング陽像であり，1cは比較資料としてのアラカシの種子である。斜めに破れているので計測できないが，長さは12㎜以上，巾は9㎜である。

第2例　サンショウ状圧痕（図版31下2）

図版31下の2aに示す土器片は，Ⅳ群K類c種に分類された浅鉢形土器の一部分である（第28図参照）。2bはそのモデリング陽像で，長さ3.4㎜，巾2.9㎜である。2Cは比較資料としてのサンショウの種子である。

第3例　不明の圧痕（図版31下3）

Ⅳ群E類e種に属するところの，半截竹管文のみられる胴部破片に，種子状の圧痕がみられた（図版31下3a）。3bはそのモデリング陽像であり，長さ5.4㎜，巾3.6㎜である。なにの圧痕であるかは不明である。

6—2.　アンペラ圧痕（第29図，図版32）

4点の底部にみられた（Ⅳ群J類e種）。

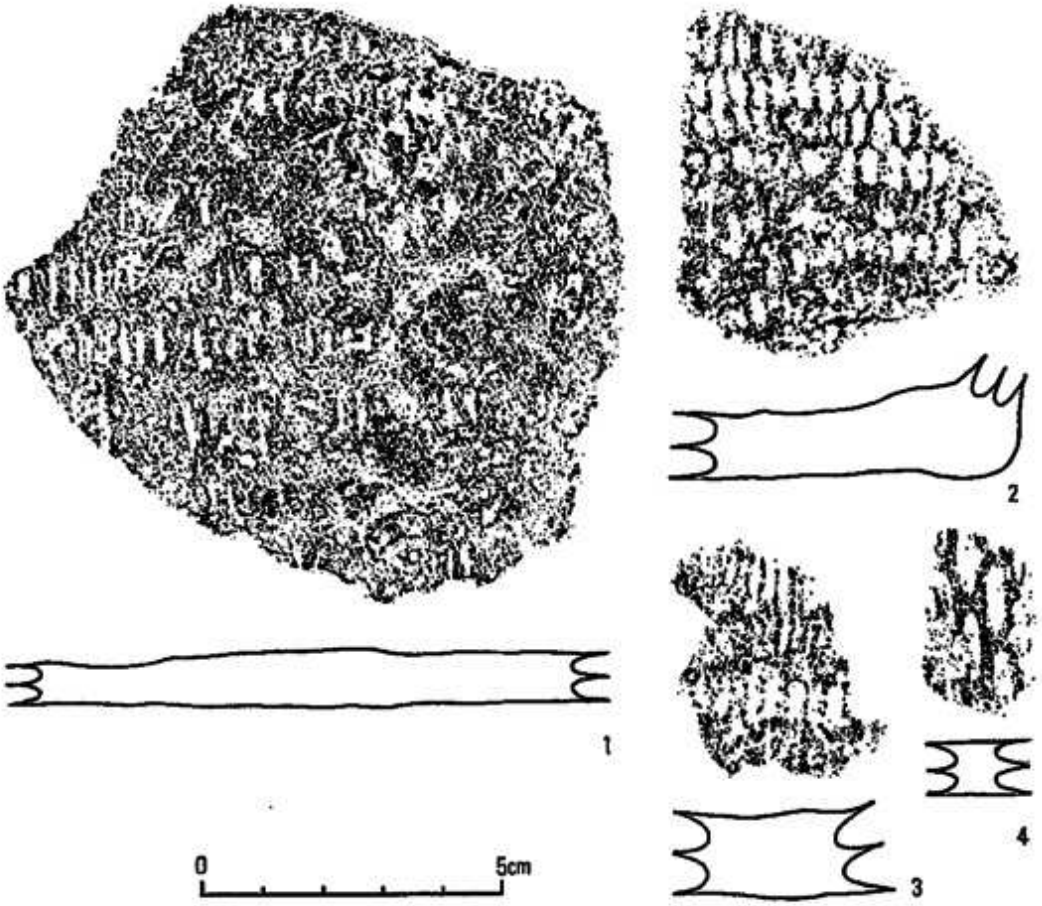
第1例（第29図1）

推定径約10㎝の底部破片で，厚さ10㎜，色調は赤褐色を呈す。アンペラはタテのみがみえ，ヨコは確認できない。しかも押圧の状況にむらがある。これは押圧時点における土器底面の乾燥度にもよるが，原体の性格にも影響を受けていると推定される。タテの1単位の巾1.3㎜，間隔1.3～2.0㎜で，長さは6～8㎜までたどれる。この間隔からみて，ヨコは1本超えとみなされる。タテについても1本超えであることは明らかであるが，潜って現われるまでの長さが異常である。潜っている6～8㎜と，その前後約5㎜の無文帯2列とをいれて，10数㎜を数える。このことから，このアンペラの原体はタテとヨコとでは異なり，ヨコには巾が広く厚味のあるところの，タテとは異なる原体を使用していると推定される。

第2例（同2）

底径約11㎝の底部破片の約4分の1の破片であり，厚さ11㎜，色調は橙褐色を呈す。

第1例と同様「1本超え・1本潜り」の例であるが，同様にヨコは確認できない。タテの1単位の巾は2㎜，長さ5～7㎜で，図版32でよく判明するように，ヨコは1列おきに深



第29図　アンペラ圧痕拓影

く押圧されている。ヨコの列は第1例と異なり密接しているから，原体は第1例のようには巾広くないにしても，タテとは異なった厚味をもつものが使用されているとみなされる。

第3例（同3）

淡褐色を呈す小破片で，厚さ15㎜である。

第2例同様に，ヨコ列は1列おきに深く押圧されている。同じく「1本超え・1本潜り」であり，1単位の巾は1.5㎜，長さは8～9㎜である。

第4例（図4）

黒褐色を呈す小破片で，厚さ9㎜である。

第1～3例と同様に，「1本超え・1本潜り」の例である。これらと同様に，ヨコは確認できないが，タテの1単位は，巾2.3㎜で，長さは約10㎜である。

以上の4例とも，「1本超え・1本潜り」という，アンペラの編み方のなかではもっとも単純な形態を示す。しかし，その原体について考えてみると，ヨコのあり方は通例の場合と著るしく異なっているのであり，土器整形用に転用される以前の編み物として，どのような品物であったのか，非常に興味がそそられる。民具の調査などによって，こうした

問題が解決されることを期待したい。

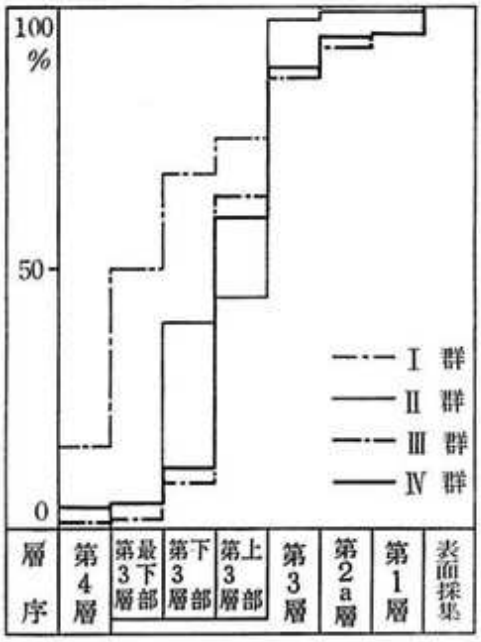
第7節　土器群と層序の関係（第30図参照）

5群に大別された土器群の数量構成を総括すると，次のとおりである。

Ⅰ群	44点	(2.4%)
Ⅱ群	179点	(9.7%)
Ⅲ群	217点	(11.8%)
Ⅳ群	1,392点	(75.6%)　完形土器1点，復元土器5点を含む
Ⅴ群	10点	(0.5%)
計	1,842点	(100.0%)

主体になるのはⅣ群であり，これにⅢ群が伴出する。これら縄文中期初頭の土器群に対し，縄文早・前期のⅠ・Ⅱ群は少量であり，Ⅴ群にいたってはごく少量で，しかもほとんどが表面採集品である。

このⅤ群を除き，Ⅰ～Ⅳ群の層位的な出土状態を累積グラフに示したのが，第30図である。これに明らかなように，Ⅰ・Ⅱ群は第4層～第3層下部における出土率が高い。特にⅠ群は第3層最下部に集中する。これに対しⅢ・Ⅳ群はほぼ同一傾向を示し，第3層上部における出土率が高い。しかし，少量ながら第4層～第3層下部にもⅢ・Ⅳ群土器がみられることは注意されるべきである。



第30図　土器群の層位的出土状態図

最後に第3層の細分と層位図の関係を説明しておく。層位図では第3層は細分されていない。しかし，実際の発掘作業では，第3層の上部と下部では，出土量に大きな差異が気がつかれていたので，記録は上部・下部と分けて記されることが多かった。その境界面は，各区とも第3層の中央であった。第3層下部以下を主にするⅠ・Ⅱ群が約12%にすぎないことをあわせて考えれば，出土量がここを境に急減することが判明するであろう。

Ⅲ・Ⅳ群土器は，それぞれ2～3型式に細分されたが，これらの層位的関係はまったく混在した状態で，識別できなかった。しかし，両群の諸型式の対応関係は，本地域における縄文中期初頭の文化的動向を知る上で重要な問題を含んでおり，第5章において詳述する。

第4章　出土遺物2・石器

第1節　出土状態（第5・6表，第31・32図参照）

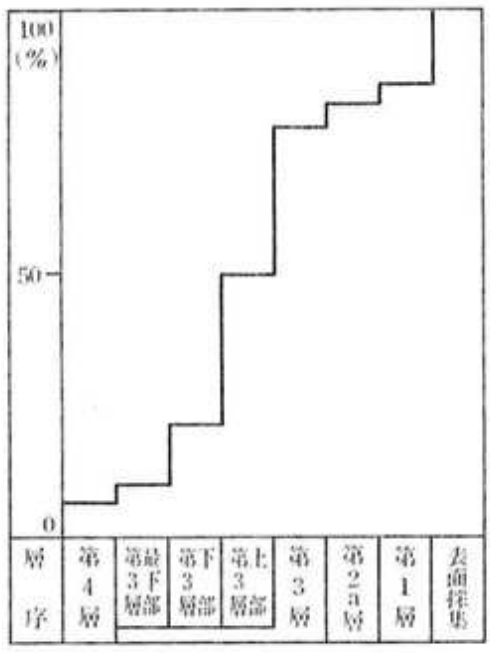
第5表　石器組成表

器種	発掘資料				表面採集	計
	第1次	第2次	小計	%		
打製石斧	3	0	3	2.3	1	4
石皿	1	11	12	9.4	0	12
敲石	6	19	25	19.5	6	31
磨石	4	18	22	17.2	2	24
石鏃	1	5	6	4.7	4	10
礫石錘	19	18	37	28.9	3	40
楔形石器	0	1	1	0.8	0	1
磨製石斧	3	4	7	5.5	1	8
石匙	2	1	3	2.3	2	5
削器	1	8	9	7.0	0	9
石錐	2	0	2	1.6	0	2
礫器	1	0	1	0.8	1	2
計	43	85	128	100.0	20	148

本遺跡よりは，第1次調査において43点，第2次調査において85点，合計128点の石器が出土している。この他に表面採集品が20点みられる（第5表参照）。第1次調査の概要（渡辺編1976）においては47点としたが，調査終了直後の判断であり，器種の内容を含めて検討が不十分であり，訂正する。

これらの層位的出土状態を検討すると，次のとおりである。

表面採集	20点（13.5%）
第1層	4点（2.7%）
第2a層	8点（5.4%）
第3層	42点（28.4%）
第3層上部	42点（28.4%）
第3層下部	17点（11.5%）
第3層最下部	5点（3.4%）

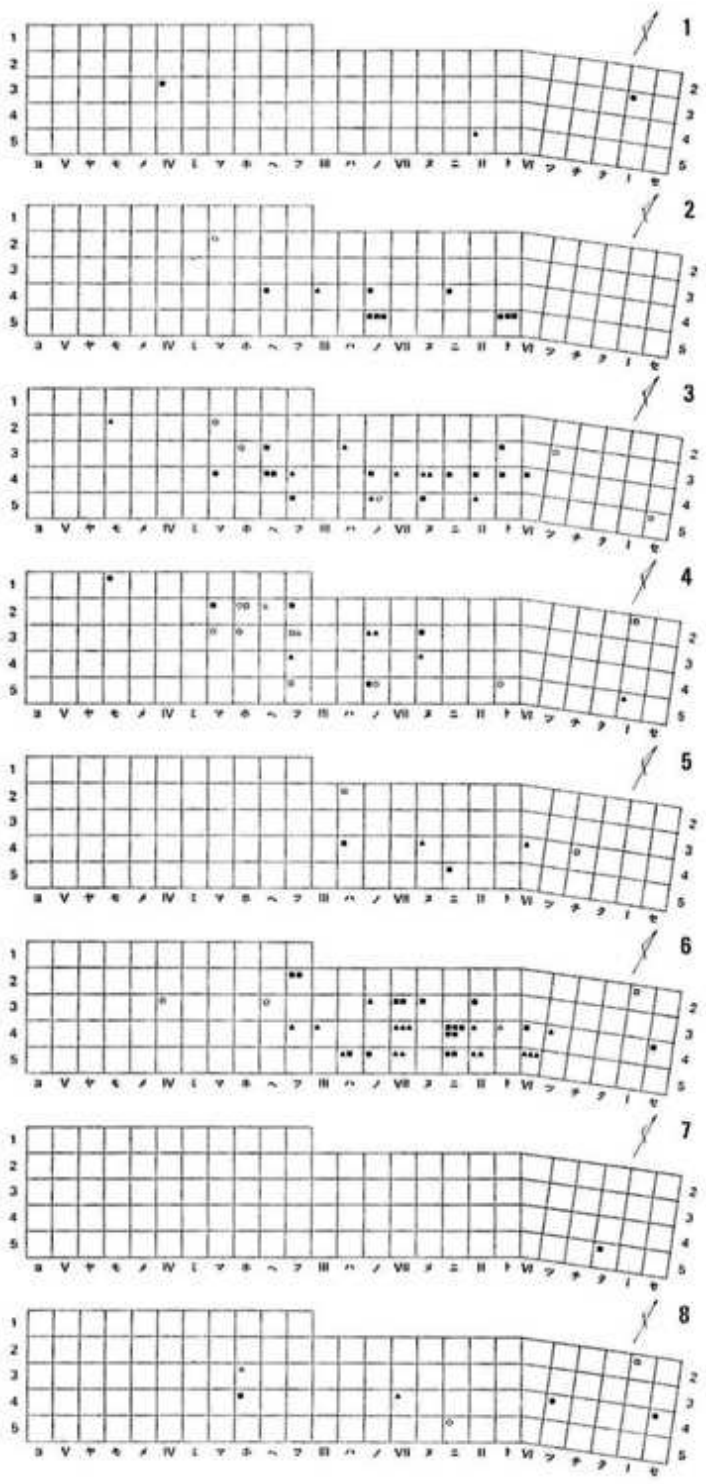


第31図　石器の層位的出土状態図

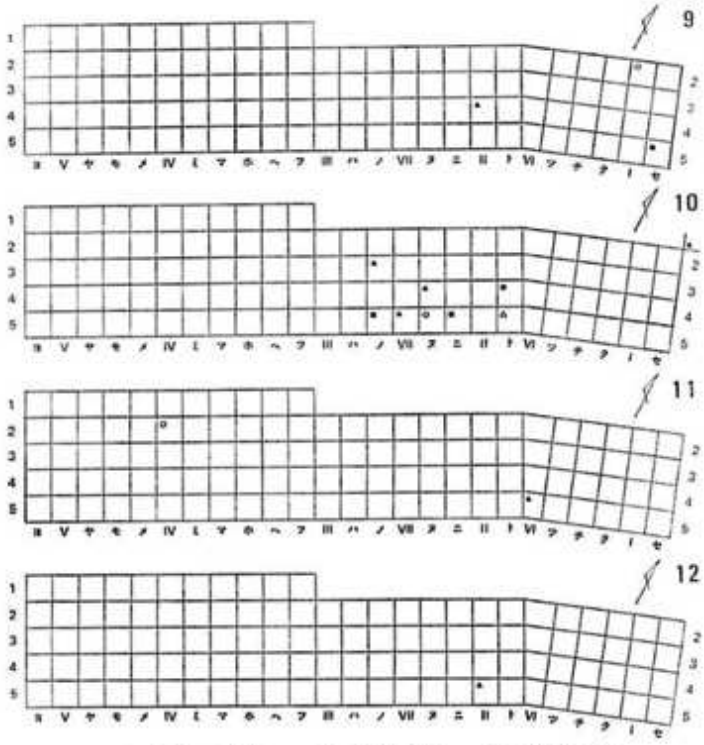
第4層

10点　(6.8%)

もっとも出土量の多いのは第3層上部と第3層で，各28.4%を占める。この第3層として取扱う資料は，第3層上部・同下部・同最下部の細分がなされていない地区の発掘品である。したがって，第3層下部・同最下部の合計14.9%と比較する時，その約3分の2が，第3層上部に属すると推定される。これらは土器の5分類のうちでも，Ⅲ・Ⅳ群の出土状態と対応している。これを図示した第31図と，土器の層位的出土状態を示した第30図とを比較すると，両者の対応関係が一層明らかになるであろう。Ⅰ・Ⅱ群土器に伴出した可能性を考慮しつつも，両群土器の絶対量の少なさも考慮し，石器の大部分はⅢ・Ⅳ群土器に伴出したとみなされるのである。



石器の器種ごとの出土状態をみても，各器種とも層位による断絶はなく，類似した出土状態を示す（第32図参照）。すなわち，第3層最下部および第4層特有の器種というような，層位的な変化と器種の構成との対応関係には，大きな変化はみられないのである。



第32図　器種別石器分布図

148点の石器の器種を用途に応じてみれば，植物質食料の採集・調理用具としての打製石斧・石皿・磨石・敲石，狩猟具としての石鏃，樹木の伐採・加工具としての磨製石斧，石・骨角・皮革・木材・樹皮・繊維・草本の茎などを材料にした道具類の製作・加工などに関与したと推定される削器(スクレイパー)・石錐（ドリル）・礫石錘・編物石・礫器などがみられる。漁具とみられるものはないなど，本遺跡の時期・地域を反映した石器組成を示すが，その具体的な検討は最後に行なう。

これらに用いられた石材は，京都大学理学部教授亀井節夫氏の鑑定によって，両輝石安山岩・砂岩・チャート，花崗岩・流紋岩・グレワッケ砂岩・玢岩・閃緑岩・細粒閃緑岩・凝灰岩の10種が利用されていると判明した。このうち両輝石安山岩が圧倒的に多く，58%を占めている。これに次ぐのは砂岩であり，18点で12%である。その他は2～6%で少量ずつであるが，流紋岩は主に磨製石斧に，チャートは石鏃・削器・石錐などの剥片石器に利用されるなどの特徴がある。

第2節　打製石斧（第6表，第32図1，第33図，図版52上参照）

打製石斧は4点出土した。このうち3点が発掘資料で，各地区に散発的に出土したにすぎない。

石材は，すべて両輝石安山岩を用いている。

形態はすべて短冊形であり，概して偏平である。すべて周辺から簡単に加工を施しただけのものである。また，全体に風化が著るしく，そのために明確な使用痕を認めることが

第6表　石器一覧表

〔単位は cm および g，（ ）を付したものは現存値を示す〕

遺物番号	器種	分類	遺存状態	出土層位	材質	長さ	巾	厚さ	重さ	挿図番号
表採-C19	打製石斧	—	頭部欠	——	両輝石安山岩	(11.0)	5.6	1.9	(131)	33-1
Ⅰ 3-C1	打製石斧	—	完形	第2a層	両輝石安山岩	9.8	5.1	1.7	97	33-2
Ⅱ 5-C1	打製石斧	—	完形	第3層	両輝石安山岩	12.2	4.7	1.4	77	33-3
Ⅳ 3-C1	打製石斧	—	頭部片？	第2a層	両輝石安山岩	(6.8)	5.5	1.9	(37)	33-4
ト 5-C1	石皿	—	完形	第3層上部	両輝石安山岩	59.5	37.0	15.4	44,800	34-1
ト 5-C2	石皿	—	完形	第3層上部	両輝石安山岩	33.2	19.6	14.2	14,200	34-2
ト 5-C3	石皿	—	完形	第3層上部	両輝石安山岩	30.5	23.7	7.6	8,000	34-3
ニ 4-C6	石皿	—	一部欠	第3層上部	花崗岩	(16.0)	16.2	6.3	(1,910)	34-4
ノ 4-C2	石皿	—	完形	第3層上部	両輝石安山岩	30.2	21.2	6.0	4,300	34-5
ノ 5-C1	石皿	—	一部欠	第3層上部	両輝石安山岩	(30.4)	27.2	7.3	(6,500)	34-6
ノ 5-C5	石皿	—	完形	第3層上部	両輝石安山岩	15.3	9.5	4.2	680	34-7
ノ 5-C7	石皿	—	完形	第3層上部	両輝石安山岩	39.5	25.8	9.2	11,000	34-8
Ⅲ 4-C2	石皿	—	側縁部片	第3層	花崗岩	(12.1)	(7.5)	(4.6)	(470)	34-9
フ 2-C4	石皿	—	完形	第4層	両輝石安山岩	37.5	43.0	13.5	21,100	34-10
ヘ 4-C3	石皿	—	完形	第3層上部	両輝石安山岩	19.0	13.2	5.6	1,710	34-11
マ 2-C3	石皿	—	完形	第3層下部	両輝石安山岩	25.0	24.8	8.0	4,800	34-12
表採-C3	敲石	Ⅰ	完形	——	両輝石安山岩	9.4	7.0	4.1	340	36-1
表採-C5	敲石	Ⅰ	完形	——	砂岩	9.8	8.1	4.0	460	36-2
表採-C21	敲石	Ⅰ	完形	——	両輝石安山岩	8.6	6.7	4.2	275	36-3
セ 5-C2	敲石	Ⅰ	完形	第3層下部	両輝石安山岩	11.8	5.8	3.3	175	36-4
ツ 3-C3	敲石	Ⅰ	完形	第3層下部	両輝石安山岩	12.6	8.5	6.5	735	36-5
Ⅵ 4-C1	敲石	Ⅰ	完形	第3層上部	両輝石安山岩	9.4	7.6	5.1	430	36-6
ト 4-C2	敲石	Ⅰ	完形	第3層上部	両輝石安山岩	9.8	8.8	4.3	410	36-7
Ⅱ 4-C2	敲石	Ⅰ	一部欠	第3層	両輝石安山岩	(9.6)	(4.9)	4.9	(250)	36-8
Ⅱ 5-C6	敲石	Ⅰ	完形	第3層	両輝石安山岩	12.7	5.2	4.1	350	36-9
ニ 4-C5	敲石	Ⅰ	完形	第3層上部	両輝石安山岩	10.1	8.5	5.3	525	36-10
ハ 3-C1	敲石	Ⅰ	完形	第3層	両輝石安山岩	7.9	6.5	5.0	280	36-11
Ⅷ 1-C2	敲石	Ⅰ	完形	第3層上部	砂岩	18.1	10.9	7.4	1,350	36-12
モ 2-C1	敲石	Ⅰ	完形	第3層	両輝石安山岩	9.4	7.2	3.4	265	36-13
ヌ 4-C1	敲石	Ⅱ	一部欠	第3層	花崗岩	9.3	8.2	5.2	(495)	36-14
マ 2-C4	敲石	Ⅱ	完形	第3層下部	砂岩	13.7	7.1	4.6	595	37-1

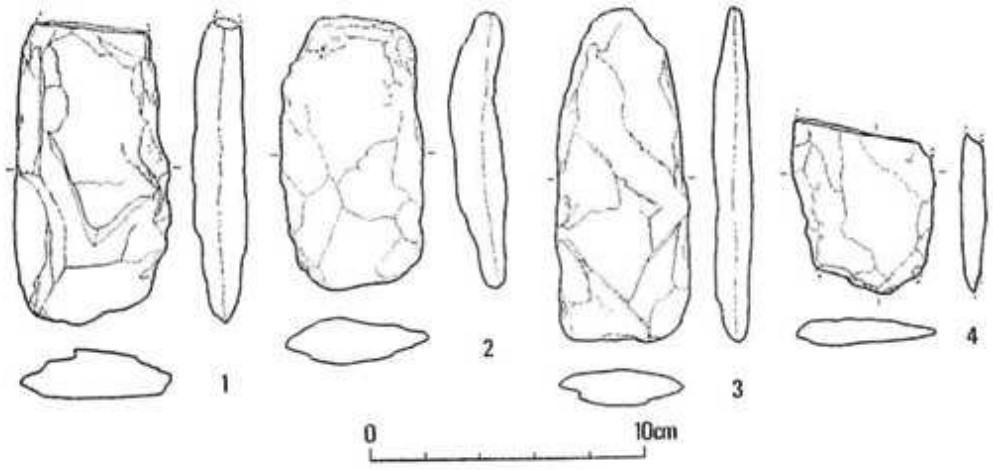
遺物番号	器種	分類	遺存状態	出土層位	材質	長さ	巾	厚さ	重さ	挿図番号
表採-C24	敲石	Ⅲa	完形	——	両輝石安山岩	9.1	8.4	4.4	355	37-2
ヌ 4-C4	敲石	Ⅲa	完形	第3層	砂岩	10.0	8.3	3.0	370	37-3
ヌ 5-C1	敲石	Ⅲa	完形	第3層上部	両輝石安山岩	10.3	8.5	5.1	460	37-4
ノ 4-C1	敲石	Ⅲa	½欠	第3層上部	砂岩	(10.9)	7.6	4.9	(550)	37-5
ノ 5-C9	敲石	Ⅲa	完形	第3層	砂岩	8.8	7.3	3.7	320	37-6
フ 4-C2	敲石	Ⅲa	完形	第3層	砂岩	10.7	6.5	3.9	320	37-7
ヘ 4-C2	敲石	Ⅲa	完形	第3層上部	両輝石安山岩	10.3	8.8	3.8	505	37-8
Ⅷ 2-C1	敲石	Ⅲa	完形	第3層下部	砂岩	9.6	8.4	3.5	430	37-9
マ 4-C1	敲石	Ⅲa	完形	第2a層	両輝石安山岩	9.7	7.8	4.0	355	37-10
表採-C2	敲石	Ⅲb	完形	——	両輝石安山岩	10.0	7.2	4.5	400	37-11
表採-C4	敲石	Ⅲb	完形	——	砂岩	13.4	8.2	6.2	835	37-12
ト 3-C1	敲石	Ⅲb	完形	第3層上部	両輝石安山岩	10.1	7.4	5.5	615	38-1
Ⅶ 4-C5	敲石	Ⅲb	完形	第3層	砂岩	10.1	7.5	3.0	305	38-2
ノ 5-C8	敲石	Ⅲb	完形	第3層下部	両輝石安山岩	10.7	7.2	4.4	405	38-3
フ 5-C1	敲石	Ⅲb	完形	第3層上部	両輝石安山岩	10.2	7.3	6.1	565	38-4
ヘ 4-C4	敲石	Ⅲb	完形	第3層上部	両輝石安山岩	10.7	7.2	6.0	610	38-5
ノ 2-C1	磨石	Ⅰa	完形	第4層	花崗岩	10.1	9.1	3.4	445	38-6
ノ 5-C6	磨石	Ⅰa	½欠	第3層上部	花崗岩	(10.8)	(9.6)	4.3	(480)	38-7
フ 5-C2	磨石	Ⅰa	完形	第4層	両輝石安山岩	9.6	8.8	4.2	380	38-8
フ 4-C3	磨石	Ⅰb	完形	第3層	閃緑岩	10.5	6.6	4.5	540	38-9
表採-C22	磨石	Ⅱa	完形	——	閃緑岩	10.5	9.3	3.4	480	38-10
Ⅰ 2-C5	磨石	Ⅱa	完形	第4層	両輝石安山岩	9.8	7.5	5.3	625	38-11
Ⅰ 5-C3	磨石	Ⅱa	側縁部片	第3層	両輝石安山岩	(5.8)	(5.5)	(3.7)	(105)	38-12
ト 5-C4	磨石	Ⅱa	一部欠	第3層下部	花崗岩	(20.0)	(11.0)	(9.4)	(2,700)	39-1
ノ 3-C3	磨石	Ⅱa	完形	第3層	両輝石安山岩	10.1	8.3	4.0	575	39-2
ホ 2-C1	磨石	Ⅱa	完形	第3層下部	両輝石安山岩	10.3	8.5	3.7	460	39-3
ホ 2-C2	磨石	Ⅱa	完形	第4層	流紋岩	10.0	8.9	4.9	390	39-4
Ⅷ 2-C2	磨石	Ⅱa	完形	第3層下部	両輝石安山岩	9.6	7.2	6.6	545	39-5
マ 2-C1	磨石	Ⅱa	完形	第1層	砂岩	8.5	7.5	3.7	320	39-6
Ⅷ 3-C1	磨石	Ⅱa	完形	第3層下部	両輝石安山岩	9.6	9.3	4.3	535	39-7
モ 1-C1	磨石	Ⅱa	完形	第2a層	両輝石安山岩	10.1	8.9	4.0	515	39-8
ヘ 2-C1	磨石	Ⅱb	完形	第3層最下部	閃緑岩	17.2	7.7	5.3	1,010	39-9
表採-C15	磨石	Ⅲ	完形	——	両輝石安山岩	9.7	9.1	5.0	655	39-10

遺物番号	器種	分類	遺存状態	出土層位	材質	長さ	巾	厚さ	重さ	挿図番号
ヌ 3-C2	磨石	Ⅲ	完形	第3層上部	両輝石安山岩	10.2	9.0	3.0	405	40-1
ヌ 4-C2	磨石	Ⅲ	½欠	第3層	両輝石安山岩	(9.6)	(8.2)	(4.3)	(385)	40-2
ノ 3-C5	磨石	Ⅲ	完形	第3層	花崗岩	9.5	7.7	4.5	470	40-3
ノ 5-C10	磨石	Ⅲ	完形	第3層下部	花崗岩	9.9	9.5	4.5	560	40-4
フ 2-C1	磨石	Ⅲ	完形	第1層	砂岩	8.9	6.7	3.2	260	40-5
フ 3-C1	磨石	Ⅲ	完形	第4層	両輝石安山岩	9.3	7.9	2.9	255	40-6
フ 3-C2	磨石	Ⅲ	完形	第3層最下部	両輝石安山岩	9.9	8.6	3.9	410	40-7
表採-C6	石鏃	Ⅰ	完形	——	チャート	1.8	1.3	0.4	0.7	42-1
表採-C18	石鏃	Ⅰ	完形	——	チャート	1.4	1.3	0.3	0.5	42-2
表採-C20	石鏃	Ⅰ	完形	——	チャート	2.3	1.6	0.3	0.6	42-3
表採-C23	石鏃	Ⅰ	一部欠	——	チャート	2.0	(1.5)	0.5	(1.3)	42-4
チ 4-C2	石鏃	Ⅰ	完形	第3層下部	両輝石安山岩	3.0	1.6	0.4	1.4	42-5
Ⅵ 4-C3	石鏃	Ⅰ	完形	第3層	細粒閃緑岩	2.4	1.6	0.6	1.5	42-6
ニ 5-C3	石鏃	Ⅰ	完形	第3層上部	細粒閃緑岩	2.3	1.6	0.5	1.5	42-7
ハ 2-C2	石鏃	Ⅰ	完形	第4層	チャート	2.2	1.6	0.4	1.1	42-8
ハ 4-C1	石鏃	Ⅱ	完形	第3層上部	チャート	2.5	1.9	0.8	3.3	42-9
ヌ 4-C3	石鏃	不明	脚部欠	第3層	細粒閃緑岩	(1.5)	(1.6)	0.4	(0.9)	42-10
表採-C7	礫石錘	—	完形	——	砂岩	6.2	4.8	2.2	63.2	44-1
表採-C10	礫石錘	—	完形	——	グレワッケ砂岩	7.8	3.7	1.9	68.5	44-2
表採-C11	礫石錘	—	完形	——	砂岩	6.2	3.9	1.9	65.7	44-3
セ 4-C2	礫石錘	—	完形	第3層上部	グレワッケ砂岩	7.4	4.6	1.5	69.0	44-4
Ⅰ 2-C1	礫石錘	—	完形	第4層	砂岩	5.8	4.6	2.1	82.4	44-5
ツ 4-C2	礫石錘	—	完形	第3層	両輝石安山岩	5.7	3.2	2.0	42.7	44-6
Ⅵ 4-C2	礫石錘	—	完形	第3層上部	両輝石安山岩	7.2	6.3	2.3	147.4	44-7
Ⅵ 5-C1	礫石錘	—	完形	第3層	両輝石安山岩	5.6	4.7	1.9	61.8	44-8
Ⅵ 5-C2	礫石錘	—	完形	第3層	グレワッケ砂岩	4.3	3.5	1.8	32.2	44-9
Ⅵ 5-C3	礫石錘	—	完形	第3層	砂岩	3.8	3.6	1.3	42.7	44-10
ト 4-C3	礫石錘	—	完形	第3層最下部	両輝石安山岩	5.1	3.6	1.6	36.1	44-11
Ⅱ 3-C1	礫石錘	—	½欠	第2a層	両輝石安山岩	(4.2)	(4.1)	(1.8)	(24.0)	45-1
Ⅱ 4-C1	礫石錘	—	完形	第3層	両輝石安山岩	5.9	4.3	1.7	55.7	45-2
Ⅱ 5-C2	礫石錘	—	完形	第3層	両輝石安山岩	5.6	4.6	2.1	63.0	45-3
Ⅱ 5-C3	礫石錘	—	完形	第3層	砂岩	7.1	4.8	2.4	111.7	45-4
ニ 4-C1	礫石錘	—	完形	第3層上部	両輝石安山岩	7.0	4.9	1.8	86.6	45-5

建物番号	器　種	分類	遺存状態	出土層位	材　質	長さ	巾	厚さ	重　さ	挿図番号
ニ 4-C2	礫石錘	—	完　形	第3層上部	阿蘇石安山岩	6.8	4.3	1.7	60.9	45-6
ニ 4-C3	礫石錘	—	完　形	第3層上部	阿蘇石安山岩	6.2	4.1	1.7	48.8	45-7
ニ 4-C4	礫石錘	—	完　形	第3層上部	玢　　岩	5.8	5.0	1.9	70.5	45-8
ニ 4-C7	礫石錘	—	完　形	第3層上部	玢　　岩	5.1	4.2	2.2	58.4	45-9
ニ 5-C1	礫石錘	—	完　形	第3層上部	阿蘇石安山岩	5.8	4.5	2.0	66.2	46-1
ニ 5-C2	礫石錘	—	完　形	第3層上部	阿蘇石安山岩	5.8	3.9	1.6	40.8	46-2
ヌ 3-C1	礫石錘	—	完　形	第3層上部	阿蘇石安山岩	5.1	3.9	2.3	57.4	46-3
ノ 3-C4	礫石錘	—	完　形	第　3　層	阿蘇石安山岩	5.5	4.0	1.7	46.7	46-4
Ⅶ 3-C1	礫石錘	—	完　形	第3層上部	阿蘇石安山岩	5.3	3.6	1.7	40.0	46-5
Ⅶ 3-C2	礫石錘	—	完　形	第3層上部	阿蘇石安山岩	4.9	3.4	1.7	25.5	46-6
Ⅶ 4-C1	礫石錘	—	完　形	第　3　層	阿蘇石安山岩	4.4	3.7	1.9	20.7	46-7
Ⅶ 4-C3	礫石錘	—	完　形	第　3　層	阿蘇石安山岩	5.7	4.6	1.4	52.0	46-8
Ⅶ 4-C6	礫石錘	—	完　形	第　3　層	阿蘇石安山岩	6.0	2.9	1.7	38.3	46-9
Ⅶ 5-C1	礫石錘	—	½ 欠	第　3　層	阿蘇石安山岩	(6.6)	(4.7)	1.9	(46.7)	46-10
Ⅶ 5-C2	礫石錘	—	完　形	第　3　層	グレワッケ砂岩	5.8	3.6	1.7	53.0	46-11
ノ 5-C2	礫石錘	—	完　形	第3層上部	阿蘇石安山岩	5.1	3.5	1.7	36.7	46-12
ハ 5-C1	礫石錘	—	完　形	第　3　層	阿蘇石安山岩	9.7	8.7	3.3	302.0	47-1
ハ 5-C2	礫石錘	—	完　形	第3層上部	グレワッケ砂岩	7.3	5.2	2.4	102.6	47-2
Ⅲ 4-C1	礫石錘	—	完　形	第　3　層	阿蘇石安山岩	6.4	4.1	1.6	53.9	47-3
フ 2-C2	礫石錘	—	完　形	第2a層	阿蘇石安山岩	4.6	4.0	1.6	35.0	47-4
フ 2-C3	礫石錘	—	完　形	第2a層	阿蘇石安山岩	5.9	4.3	1.9	56.2	47-5
フ 4-C1	礫石錘	—	完　形	第　3　層	阿蘇石安山岩	5.7	5.5	1.9	73.2	47-6
Ⅷ 1-C3	礫石錘	—	完　形	第3層下部	阿蘇石安山岩	6.9	5.5	1.9	82.5	47-7
Ⅳ 3-C2	礫石錘	—	完　形	第3層下部	グレワッケ砂岩	6.6	4.1	1.9	66.0	47-8
タ 5-C2	編物石	—	完　形	第3層上部	阿蘇石安山岩	7.0	14.0	4.3	485	50-11
Ⅰ 2-C4	磨製石斧	Ⅰ	完　形	第　4　層	砂　　岩	8.4	4.9	2.2	142	50-1
ツ 4-C1	磨製石斧	Ⅰ	½ 欠	第2a層	流　紋　岩	(7.9)	(4.8)	2.2	(134)	50-2
Ⅶ 4-C2	磨製石斧	Ⅰ	刃部片	第　3　層	玢　　岩	(2.3)	(4.6)	(1.5)	(14)	50-3
ホ 4-C1	磨製石斧	Ⅰ	完　形	第　1　層	流　紋　岩	13.9	4.7	3.3	317	50-4
ニ 5-C5	磨製石斧	Ⅰ	完　形	第3層下部	流　紋　岩	6.9	4.6	1.3	67	50-5
Ⅷ 2-C3	磨製石斧	Ⅰ	完　形	第3層最下部	流　紋　岩	6.1	3.5	0.9	24	50-6
表採-C12	磨製石斧	Ⅱ	完　形	——	流　紋　岩	8.1	3.3	1.4	47	50-7
セ 4-C1	磨製石斧	Ⅱ	完　形	第3層上部	阿蘇石安山岩	10.8	6.2	2.9	125	50-8

遺物番号	器種	分類	遺存状態	出土層位	材質	長さ	巾	厚さ	重さ	挿図番号
I 2-C6	石匙	I	完形	第4層	凝灰岩	7.1	2.9	1.1	11.0	51-1
表採-C13	石匙	II	完形	——	両輝石安山岩	3.7	4.2	0.7	7.8	51-2
表採-C16	石匙	II	完形	——	両輝石安山岩	4.2	5.3	1.1	18.0	51-3
セ 5-C1	石匙	II	完形	第3層上部	両輝石安山岩	3.7	5.8	0.8	19.0	51-4
II 4-C3	石匙	不明	頭部片	第3層	凝灰岩	(3.2)	(1.9)	(0.7)	(2.8)	51-5
ス 2-C1	削器	—	完形	第3層	両輝石安山岩	2.8	6.8	1.4	20.8	52-1
ト 4-C1	削器	—	½欠	第1層	両輝石安山岩	4.4	(4.7)	0.8	(13.5)	52-2
ト 5-C5	削器	—	完形	第3層最下部	流紋岩	4.0	7.0	1.7	49.5	52-3
ニ 5-C4	削器	—	完形	第3層上部	チャート	5.3	6.2	1.9	42.0	52-4
ヌ 4-C5	削器	—	破片	第3層	チャート	(1.8)	(3.7)	(0.7)	(3.5)	52-5
ヌ 5-C2	削器	—	完形	第3層下部	チャート	3.9	5.4	1.1	20.0	52-6
VII 5-C4	削器	—	完形	第3層	両輝石安山岩	3.1	3.1	0.6	4.2	52-7
ノ 3-C2	削器	—	一部欠	第3層	凝灰岩	3.8	(5.6)	1.3	(11.0)	52-8
ノ 5-C4	削器	—	完形	第3層上部	両輝石安山岩	8.3	13.0	1.8	152.0	52-9
VI 5-C4	石錐	—	完形	第3層	チャート	2.8	1.5	0.7	2.0	42-11
IV 2-C1	石錐	—	完形	第3層下部	両輝石安山岩	4.9	1.9	0.9	7.0	42-12
表採-C14	礫器	—	完形	——	砂岩	16.5	14.3	6.0	1,310	50-9
II 5-C5	礫器	—	完形	第3層	両輝石安山岩	16.8	10.9	4.2	987	50-10

できない。これは石材の性質によるものであるのかもしれない。



第33図　石器実測図 1　打製石斧

第3節　石　　皿（第6表，第32図2，第34図，図版34～36・52下～55上参照）

石皿は12点出土した。すべて発掘資料で，完形品は9点である。

第32図2に示すように，石皿はト5区・ノ5区より3点ずつ出土したのを中心に，調査地域の中央部から東寄りの地区にかけて出土した。また，同図3・4に示す敲石・磨石の集中的に出土した地区に，あたかも重複するように分布する傾向がみられた。

石材は，両輝石安山岩が10点で圧倒的に多く，その他の2点は，花崗岩を用いている。

本遺跡の石皿は，概して大型の偏平な礫を使用している。最大のものは，長さ59.5cm，巾37.0cm，厚さ15.4cm，重さ44.8kgと，他に比べかなり大きい（第34図1）。また，長さ15.3cm，巾9.5cm，厚さ4.2cm，重さ680gと，かなり小形の例（同7）もあり，大小の差が大きい。

これらは，すべて中央部が使用によって浅く皿状にくぼんでいる。それらのうち，表裏とも使用している例（同2～5・9・11）や，作業面が一面に2カ所あり，その間に稜のみられるもの（同10）もある。しかし，周縁部が明瞭に発達した典型的な石皿はない。

第4節　敲　　石（第6表，第32図3，第35～38図，図版37～41・55下～57参照）

円礫・角礫の上・下面の中央に，敲打痕のある凹みが認められるものを，敲石として分類した。敲石は31点出土した。そのうち25点が発掘資料であり，発掘地域のほぼ全域から出土した。なかでも，ヌ4区・ノ5区・ヘ4区の3地区において，比較的集中して出土した。

25点の出土状態は単独出土例が多く，ッ5区において数個の集石の中に混じっていた例（第35図・図版36下），フ4区において磨石と並ぶように出土した例（図版39下）を除いては，特に注目される出土状態はみられなかった。

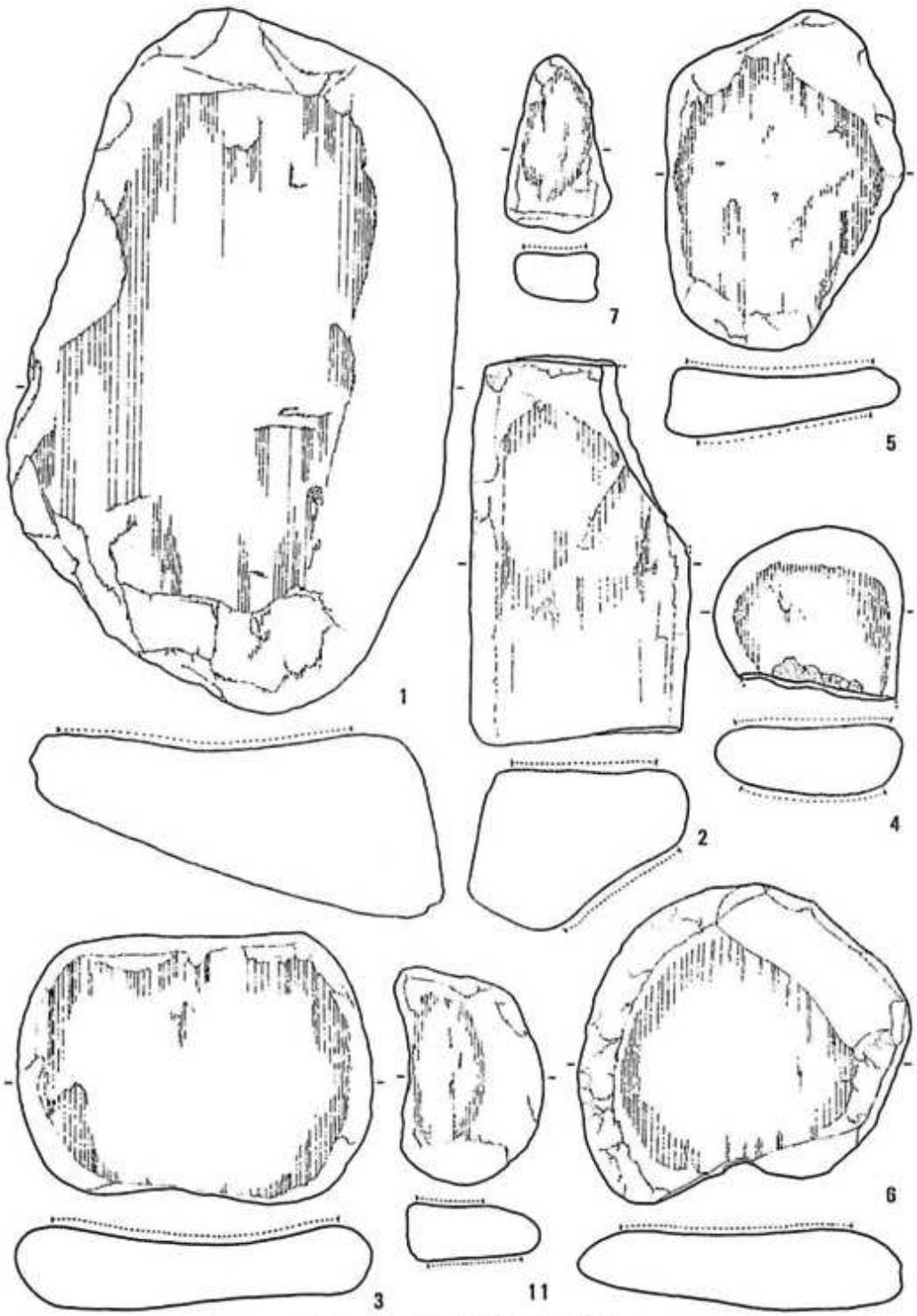
石材は，両輝石安山岩を用いているものが20点と最も多く，砂岩を用いているものが10点これに次ぐ。他に花崗岩が1点だけみられる。

その多くは手で持てるぐらいの大きさで，均整のとれた形態であり，平均重量は465gである。

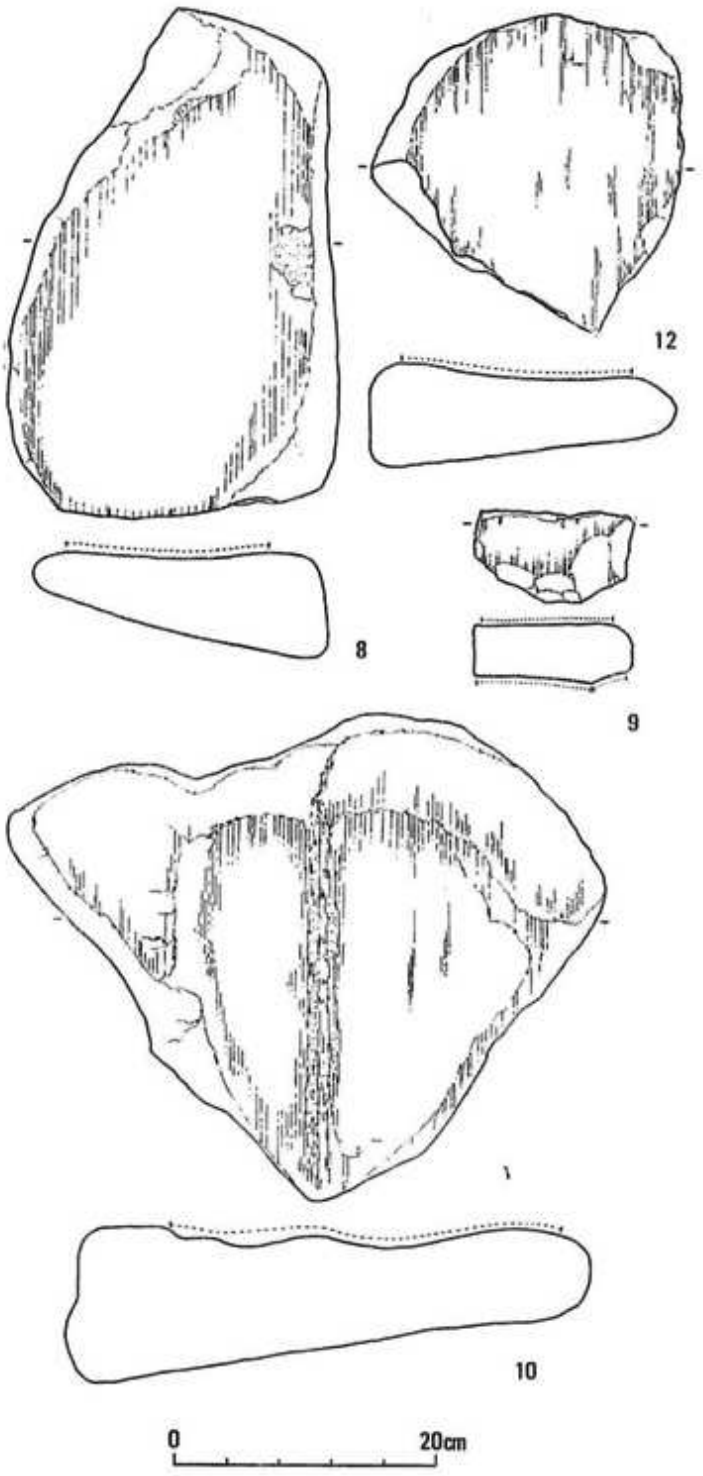
これらの敲石の使用痕を観察すると，分類の標識とした表面中央の凹みの他に，表面が磨耗したもの，周縁部に敲打痕の認められるものがある。この3種類の使用痕の組合せから，敲石は次のように分類することができる。

Ⅰ類　上・下面に，敲打痕による凹みが残されているだけのもの（第36図1～13）。

Ⅱ類　上・下面の敲打痕による凹みの周辺部に，磨耗痕がみられる他，周縁部にも敲打痕がみられるもの（第36図14，第37図1）。

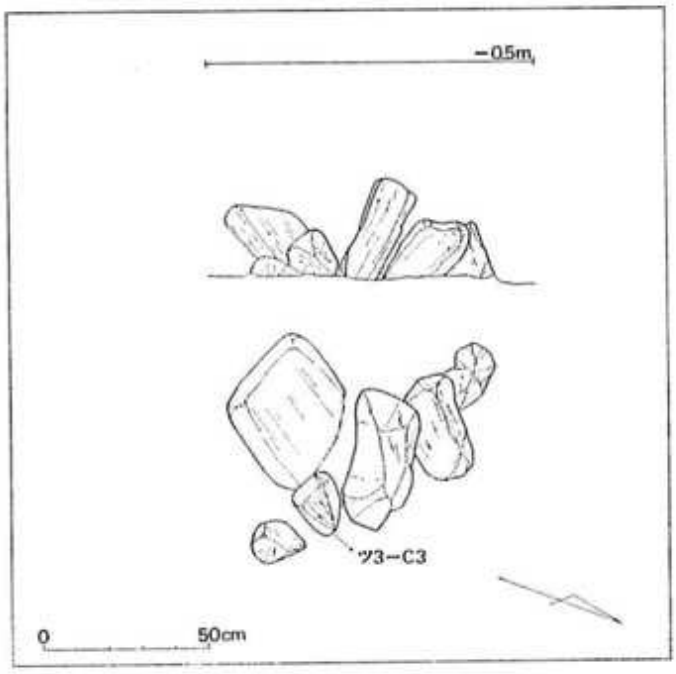


第34図　石器実測図 2　石皿



Ⅲ類　上・下面の敲打痕による凹みの他に，周縁部にも敲打痕がみられるもの。これらは，周縁部に荒い敲打痕が認められるⅢa類（第37図2～10）と，周縁部が細かい敲打のために面をなしているⅢb類（同11・12）とに分けられる。

Ⅰ類は13点みられ，敲石のなかで最も多い。長方形の角礫を用いたものが2点ある他は，みな円礫を用いている。片面だけに凹みがあるものが8点，両面にあるものが5点ある。凹みの状態は，表面の中央がわずかに敲かれているだけで，明瞭な凹部を形成しないもの（第36図13）と，顕著な凹みを残しているもの（同5・12）とがある。しかし，敲石全体をみても，あまり不明瞭な凹みを残しているものは少ない。これは，石材の主体を占める両輝石安山岩・砂岩の性質によるものであろう。



第35図　ツ5区における敲石の出土状態

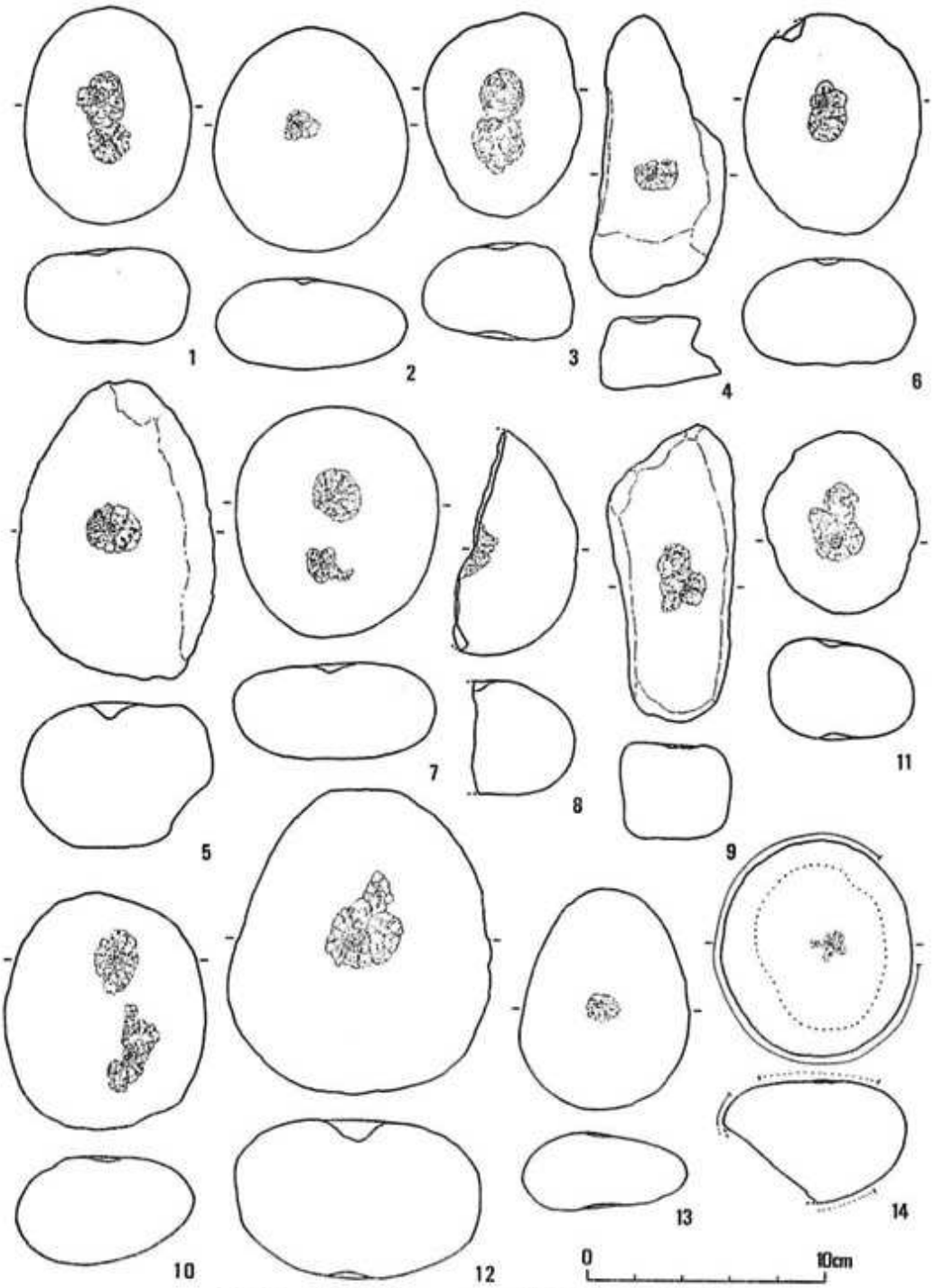
また，凹みの状態の差異は，使用された時間の長短を，ある程度反映しているものと考えられる。凹み穴の数は，片面に2個あるのを最高としている。深さはもっとも深いもので，約8㎜を測る。また，全体に風化が著るしく，分類に問題のあるものがある。これらは面が磨られている可能性をもつもので，もし面が磨られていたとすれば，当然別の類に属するものである（同7・8）。

Ⅱ類に分類されるものは，2点みられるにすぎない。円礫を用いているもの（同14）と，やや長細い楕円礫を用いているもの（第37図1）がある。どちらも周縁部に，一部を除いて敲打痕認められる。また，磨耗痕は表面の最も高い部分を中心として，凹みの周辺に認められる。さらに裏面にも磨耗痕が認められる。

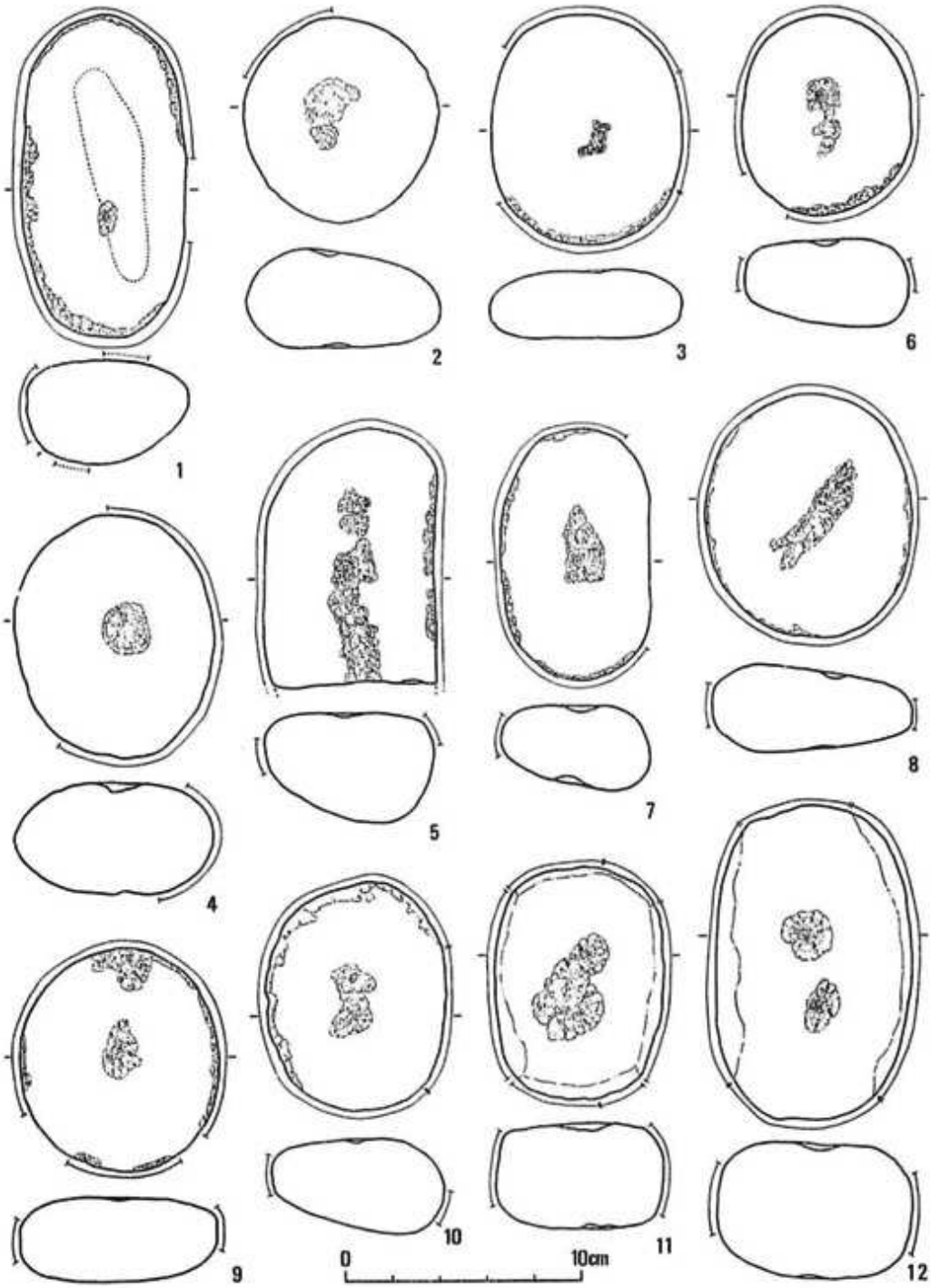
Ⅲa類に分類されるものは，9点ある。すべて円礫ないし楕円礫を用いている。凹みの状態は，アバタ状の敲打痕が帯状に広がっているものがある（同5・8）。周縁部の敲打痕は，2/3周からほぼ全周におよんでいるものが多く，周縁部の一部だけに敲打痕を残すものは，1点だけである（同2）。

これらの中には全体に風化が著るしく，分類に問題があるものがある。これらは面に磨耗痕がある可能性をもっているもので，もし面が磨られていたとすれば，Ⅱ類に分類されるものである（同3・6・9）。

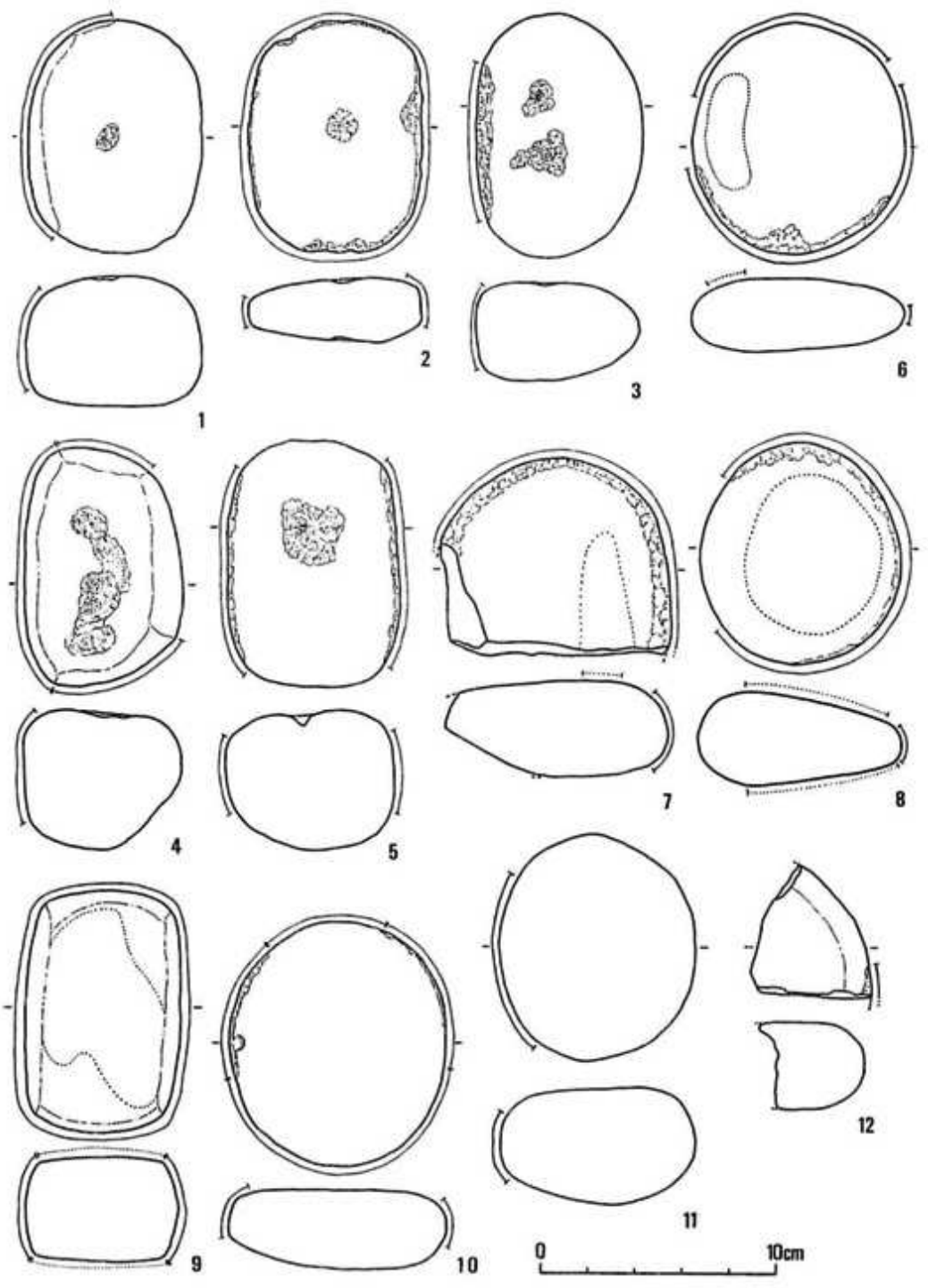
Ⅲb類に分類されるものは，7点ある。すべて円礫ないし楕円礫を用いている。これらの中には，細かい敲打痕によって上下・左右両側縁が面をなしているもの（同11・第38図4）と，片方ないし両側縁だけが面になっているものがある。凹みの状態は，概して明瞭であるが，アバタ状の敲打痕が帯状に広がっている例もある（同4）。



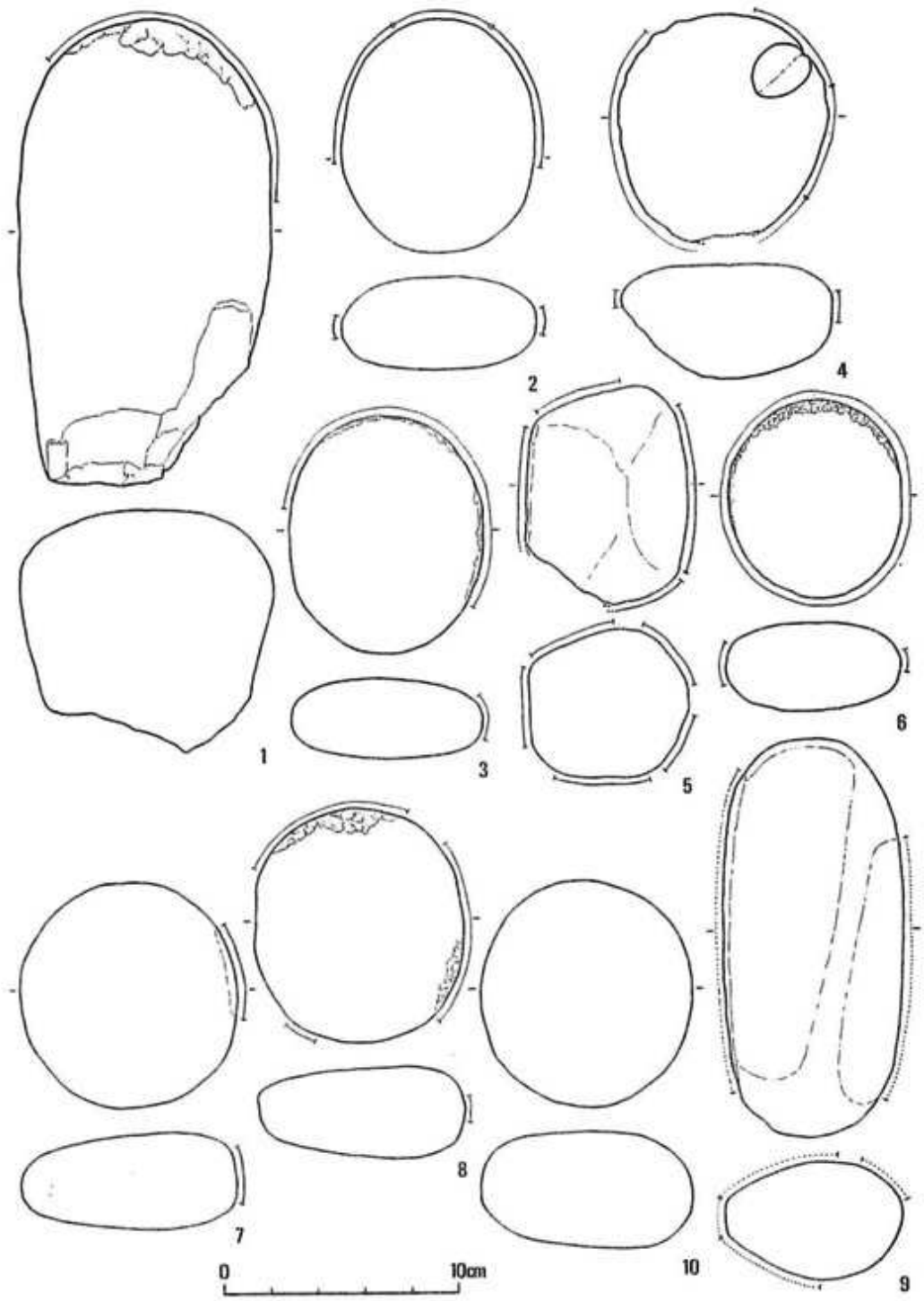
第36図　石器実測図3　1～13：黒石Ⅰ類，14：同Ⅱ類．



第37図　石器実測図4　1：敲石Ⅱ類，2～10：同Ⅲa類，11・12：同Ⅲb類．



第38図　石器実測図5　1～5：敲石Ⅲb類，6～8：磨石Ⅰa類，9：同Ⅰb類，10：同Ⅱa類．



第39図　石器実測図6　1～8：磨石Ⅱa類，9：同Ⅱb類，10：同Ⅲ類．

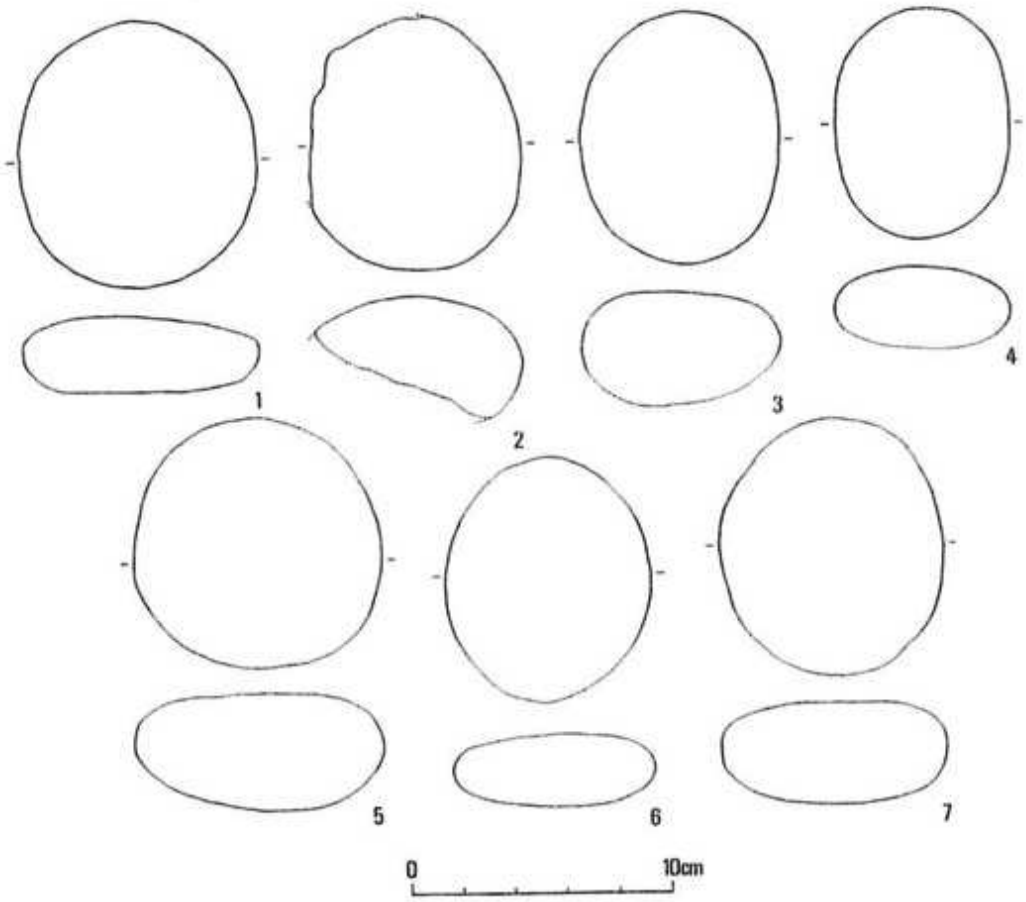
第5節　磨　　石（第6表，第32図4，第38～41図，図版39下・40～42・58・59参照）

敲石にみられた表面中央の凹みがなく，磨耗痕と周縁部の敲打痕が組み合わさったものを磨石とした。敲石と同様に，調査地域のほぼ全域から発見された。特にノ3・5区，フ3区，ホ2区を中心とした地区から，ややまとまって出土している。また両者の分布の中心は，ほぼ重複している。24点出土した。特別な出土状態はみられなかったが，すでに記したように，フ4区では敲石と並ぶように出土した例が1例ある（図版39下）。

石材は，両輝石安山岩を用いているものが13点と最も多く，他に花崗岩が5点，閃緑岩が3点，砂岩が1点，流紋岩が1点である。敲石と同様に，両輝石安山岩を多用している。平均重量は492gである。

これらの磨石は敲石と同様に，使用痕の組合せから，次の5類に分類される。

Ⅰa類　楕円礫の表面に磨耗痕がみられ，さらに周縁部に敲打痕のあるもの（第38図6～8）。



第40図　石器実測図　7　磨石重類。

Ⅰb類　Ⅰa類の特徴をもち，さらに周縁部が細かい敲打によって四角い面をなしているもの（第38図9）。

Ⅱa類　周縁部に敲打痕をもつもの（第38図10～12，第39図1～8）。

Ⅱb類　通称コクズリ石と呼ばれているもの（第39図9）。

Ⅲ類　風化のため明確ではないが，磨耗痕のある可能性が大きいもの（第39図10，第40図1～7）。

Ⅰa類に分類されるものは5点ある。2点が完形品で，磨耗痕が表面に一部分だけあるものと，両面に広くあるもの（第38図8）がある。敲打痕は，どちらもほぼ全周に及んでいる。

Ⅰb類は1点だけである。これは，周縁部が細かい敲打痕によって四角い面をなしている。これに凹みがあれば，敲石のⅢb類に属するものである。磨耗痕は両面にかなり広くみられ，特に表面では磨耗痕が，左上から右下にわたって斜めに残されている。

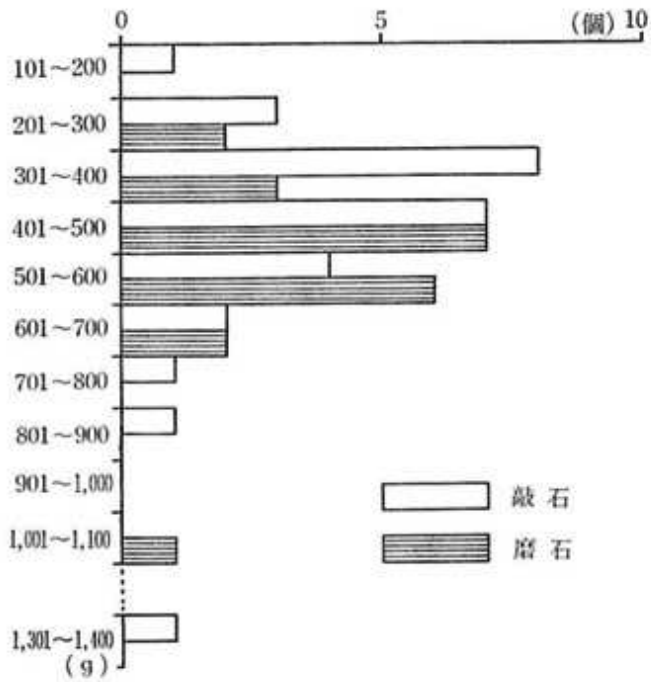
Ⅱa類に分類されるものは11点を数え，磨石の中で最も多い。破損品2点のうち1点は，磨石の中では非常に大きく，現存値において長さ20.0cm，巾11.0cm，厚さ9.4cm，重さ27kgもある（第39図1）。完形品には，敲打痕がほぼ全周にみられるものと，一部分だけみられるものがある。

これらの中で，風化が著るしくは明確でないが，磨耗痕のある可能性を有する例がある（同2・4・8）。これらがもし磨耗痕をもつとするならば，Ⅰa類に属するものである。

Ⅱb類は1点だけである。楕円礫が用いられ，左側縁と裏面が細かい敲打痕，または磨耗痕によって面をなしている。

Ⅲ類に分類されるものは，8点ある。すべて円礫を用いている。全体に風化が著るしく明確でないが，磨耗痕のある可能性が大きい例である。特にこれらの中には，表面に平坦な面をもつ例もある（同10，第40図3・5・7）。周縁部に敲打痕は認められない。

以上にみてきた磨石は，周縁部に敲打痕がみられるだけのⅡa類が，数の上では主体を占める。しかし，この中には，表面に磨耗痕と周縁部に



第41図　敲石・磨石の重量分布図

敲打痕をもつⅠａ類に含まれる可能性のあるものもあり，Ⅰ類とほぼ同数と考えてよいであろう。また，Ⅲ類とも同数となる。このようなことを考慮に入れれば，実際には，Ⅰ類が磨石の主体を占めるとみるべきであろう。機能面においては，Ⅰ類はⅡａ類，Ⅲ類の機能をあわせもっているわけであり，磨石には磨る機能とともに，周縁部を用いての敲く機能をも備えた石器であると考えられる。

第41図は，敲石と磨石の重量分布を，完形品につき100ｇごとの階級値によって表わしたものである。敲石のピークが300ｇ台にあるのに対して，磨石のピークは400ｇ台にある。磨石は，敲石に比べてやや重い傾向が認められる。

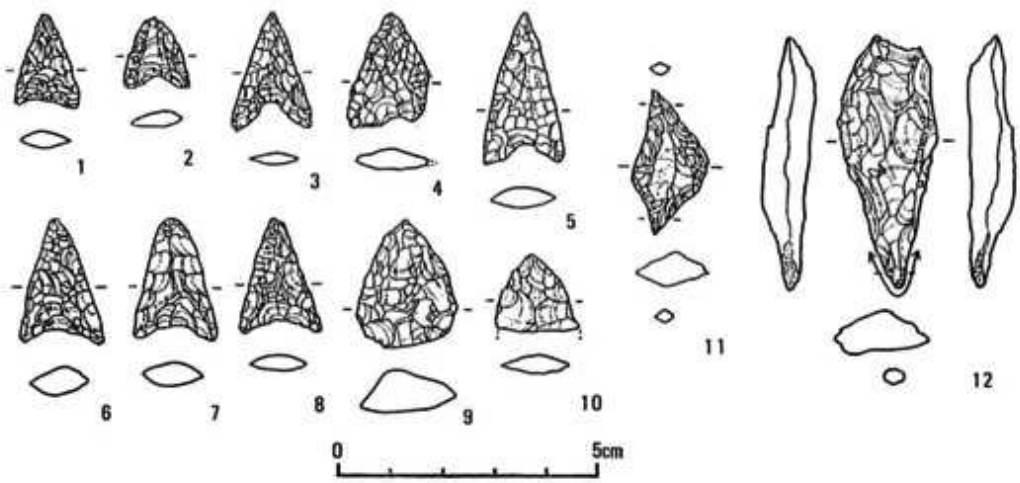
また，敲石と磨石の異なる点は，上・下面中央の凹みの有無のみであり，磨石のもつ磨る機能と敲く機能は，敲石のもつ機能の一端であるにすぎない。このことを考慮に入れれば，ここに分類した敲石と磨石の両者は，当時行なわれた一連の作業の中で，きわめて密着した関係にあったと考えることができる。

第6節　石　　鏃（第6表，第32図5，第42図，図版43・44上・60上参照）

石鏃は10点出土した。すべて打製石鏃である。それらのうち4点が表面採集品である。6点は発掘資料で，第32図5に示すように，調査地域の中央部から東寄りの地区にかけて散発的に発見された。

石材は，チャートが6点と最も多く，他に細粒閃緑岩が3点，両輝石安山岩が1点ある。加工状態は，表裏全体をくまなく加工しており，全体にかなり入念な感がある。

10点のうち2点が破損品である。破損品は，どちらも脚部を欠損している。完形のものはすべて無茎で，基部の抉られたⅠ類と，基部が平らな木葉形のⅡ類とに分類することができる。また破損品ではあるが，脚部の残り具合から，Ⅰ類に入れることができるものが



第42図　石器実測図　8　1～8：石鏃Ⅰ類，9：同Ⅱ類，10：同不明，11・12：石錐．

1点ある（第42図4）。Ⅱ類は1点だけである。これは，Ⅰ類のものに比べると，大きさに比べてて厚い（同9）。したがって重さも3.3gと，Ⅰ類の0.5～1.5g，平均1.0gに比べて，かなり重い。

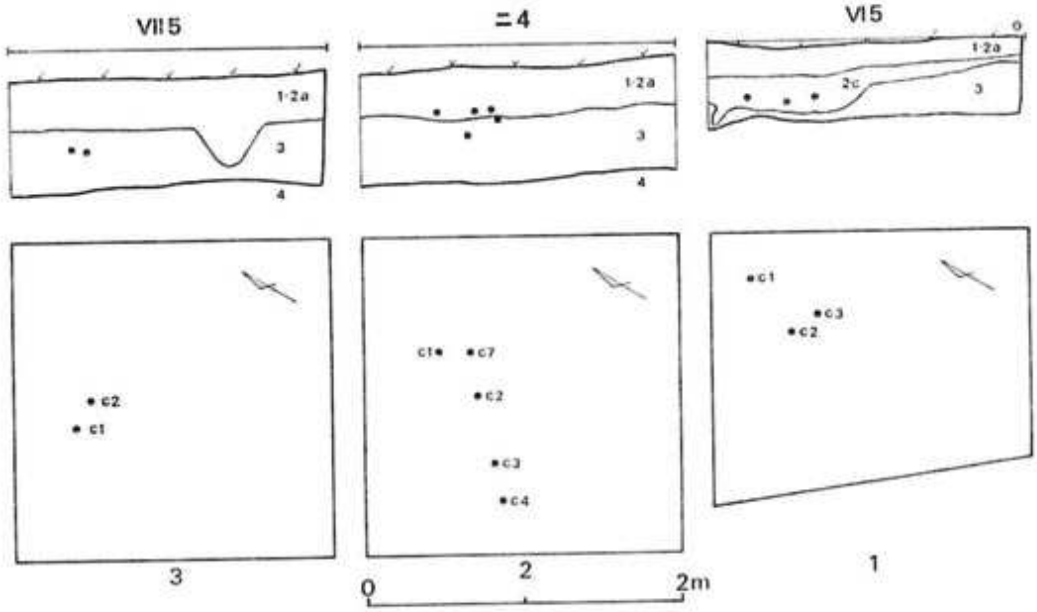
石錘の長さは，最も短いもので1.4cm，最も長いもので2.5cmである。重さは，最も軽いもので0.5g，重いもので3.3gであり，平均値1.3gである。

第7節　礫石錘（第6表，第32図6，第43～49図，図版44下～48・60下～62上参照）

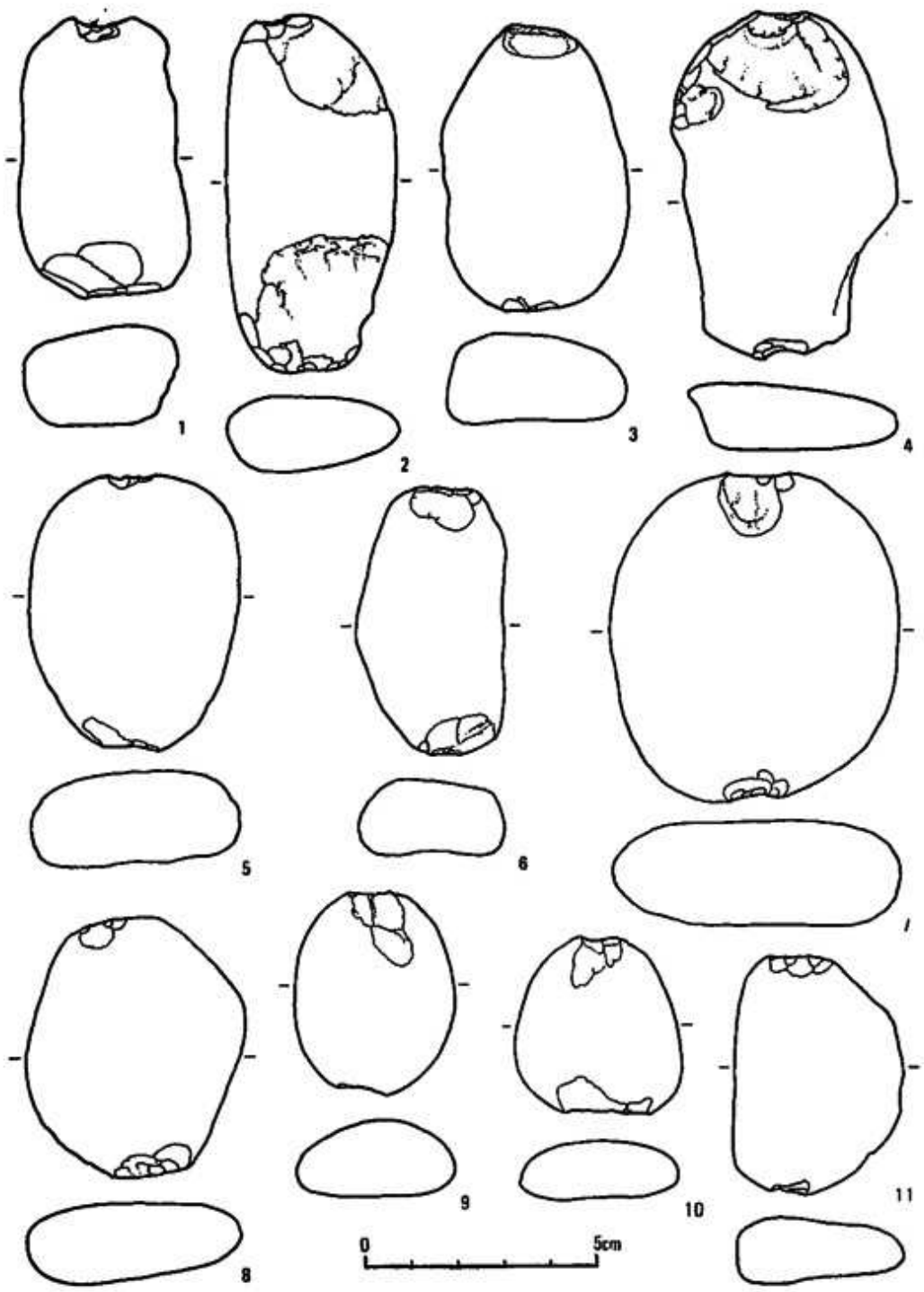
礫石錘は40点出土された。このうち3点のみが表面採集品である。発掘資料の37点は，調査地域の中央部から東寄りの地区にかけて出土した。特にⅥ5区・ニ4区・Ⅷ4区を中心とした地区より，集中して出土している。

Ⅵ5区では，第3層より3点が集中して出土した（第43図1，図版47上）。遺物番号Ⅵ5－C1～C3の3点（第44図8～10）で，下面のレベルで最大3.5cmの高低差があるのみで，ほぼ同一レベルから出土したとみなされる。その間隔は，C2とC3が近接して約21cmであり，C1とC2との間隔は42cmである。

ニ4区では，第3層上部より5点出土した（第43図2，図版45・46）。遺物番号ニ4－C1～C4，およびC7の5点（第45図5～9）である。このうちC1～C4はほぼ同一レベルで，その下面での高低差は6.2cmにすぎない。C7のみが，C1・C2に接近して10cm下から出土している。C1～C4は，C1・C2とC3・C4がそれぞれ近接し，前者が約38cm，後者が約25cm間隔であり，C2とC3の間隔は44cmである。これらは，全



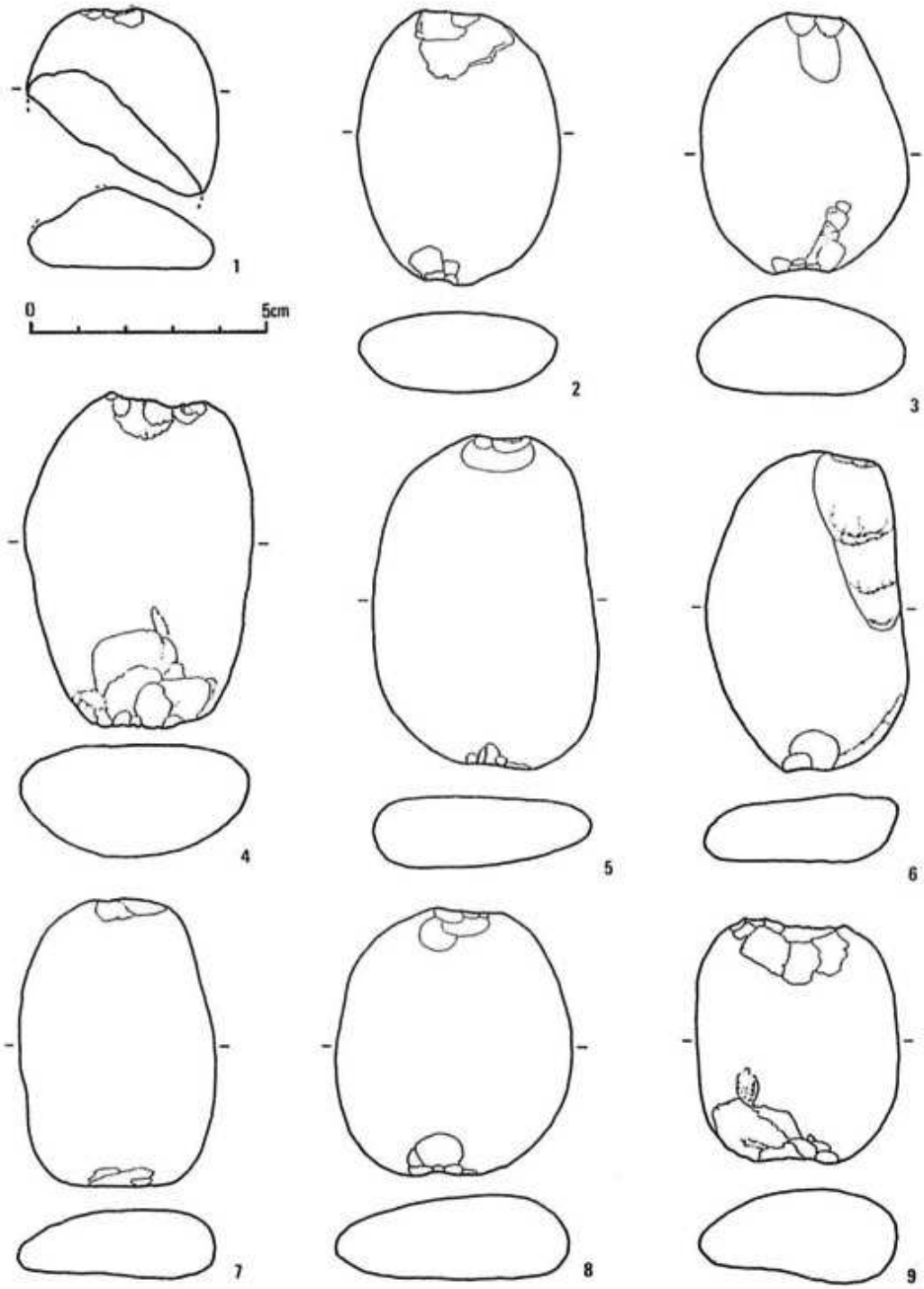
第43図　礫石錘出土状態実測図



第44図　石器実測図9　礫石錘

体として弧を描くような状態で出土している。

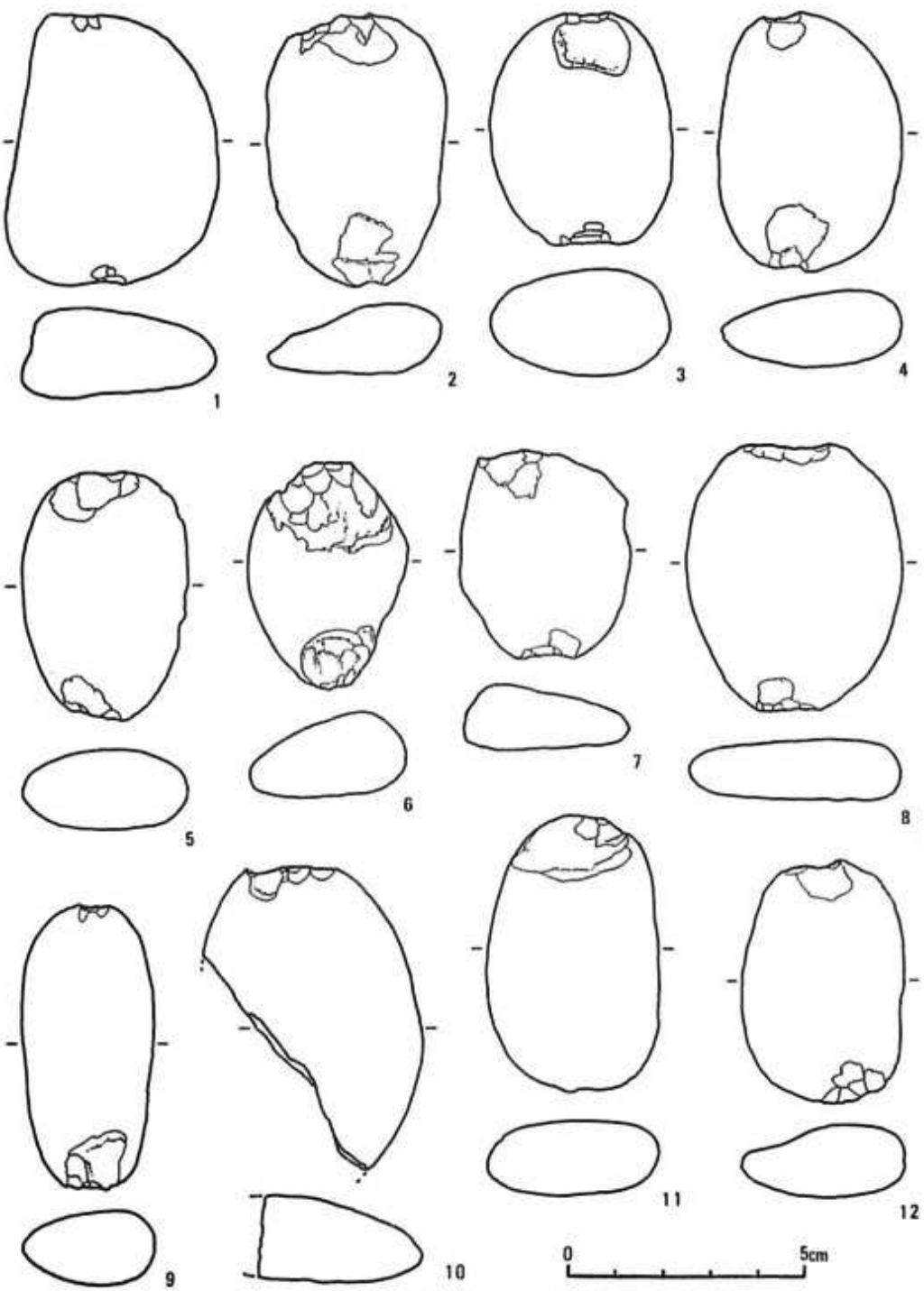
Ⅶ5区では，第3層より2点が近接して出土した（第43図3・図版48上）。遺物番号Ⅶ5－C1・C2の2点である（第46図10・11）。そのレベル差は下面で1.5cmにすぎず，間



第45図　石器実測図 10　礫石錘

隔は20cmである。

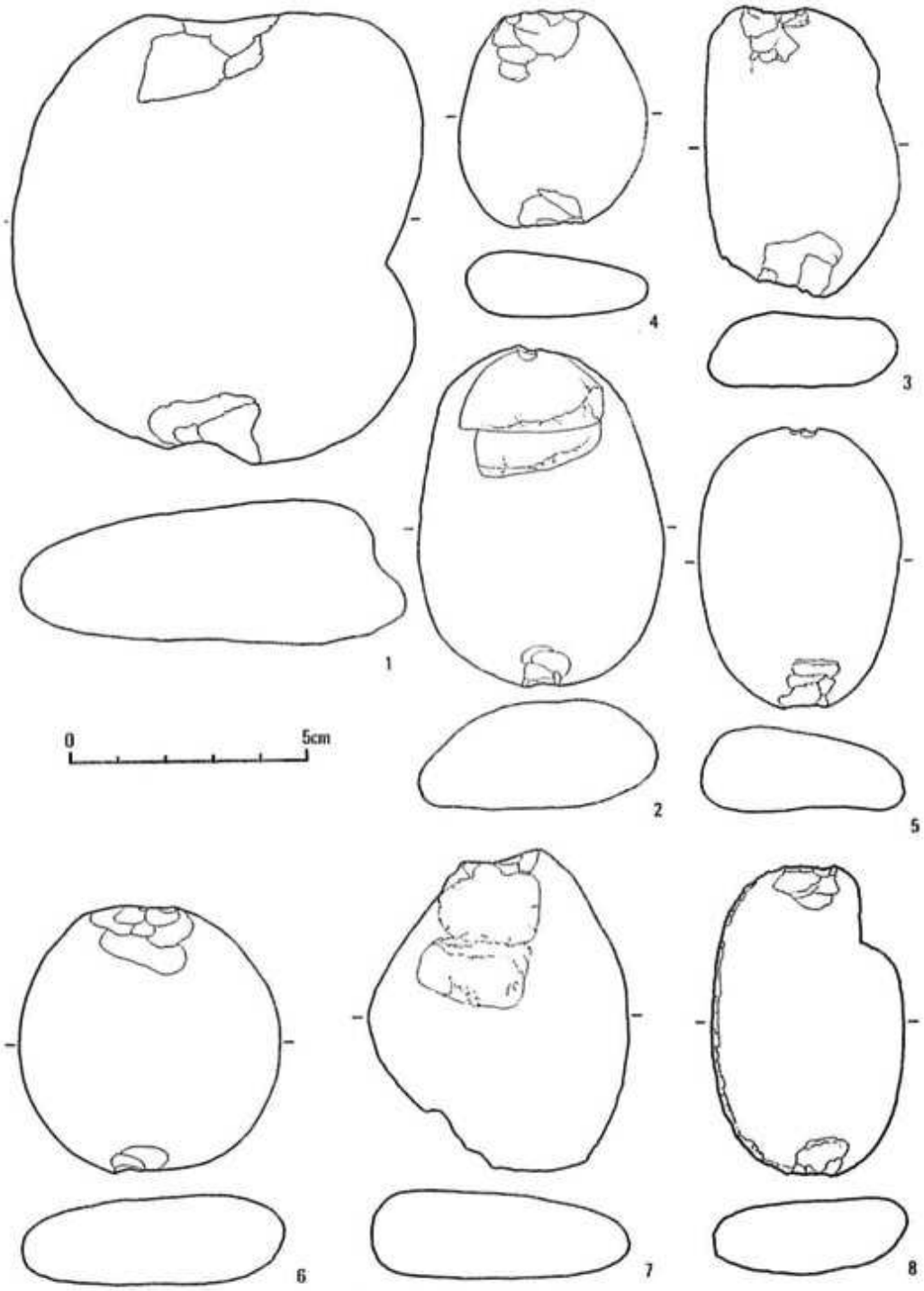
石材は，両輝石安山岩が27点と最も多い。他に，砂岩，グレワッケ砂岩，珪岩が数点ずつみられる。



第46図　石器実測図 11　礫石錘

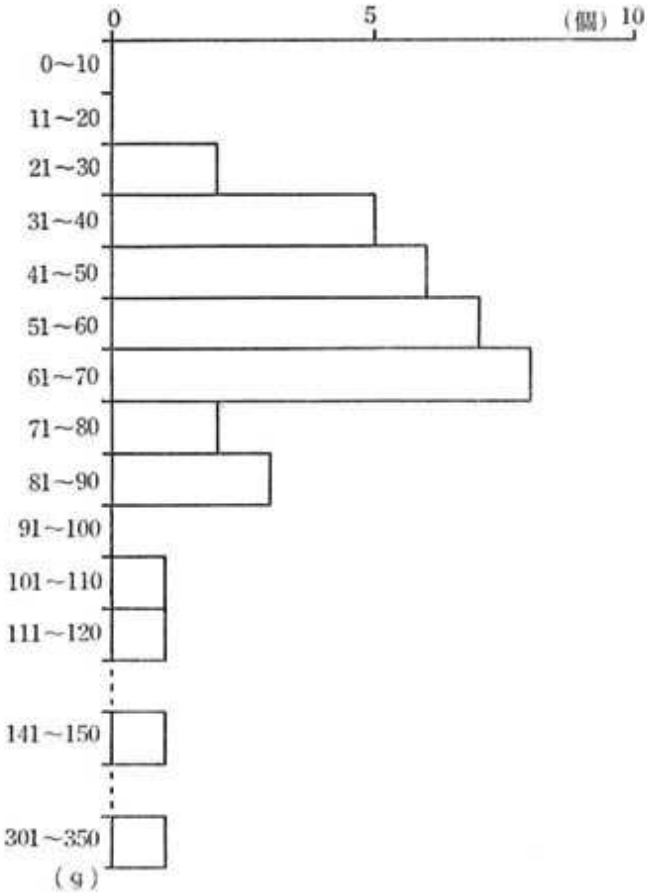
形態は概して小形で，扁平な楕円礫を用い，上下両端に数回の打撃を加えて抉りを作出し，糸掛りをつけている。

これらの礫石錘の重量を，完形品についてみると，最も重いもの 302 g，最も軽いもの



第47図　石器実測図 12　礫石錘

20.7ｇで，平均66.2ｇである。また第48図は，礫石錘の重量の分布を，完形品につき10ｇごとの階級値によって表わしたもので，重量のピークは60ｇ台にある。そして，30ｇ台から60ｇ台に26点と，ほぼ7割が集中しているものの，このピークから大きくかけ離れて，



第48図　礫石錘の重量分布図

重量のあるものが数点散在しており，その分布範囲は広い。

また，長軸の長さは，最大9.7cm，最小3.8cmで，平均6.0cmである。巾は，最小2.9cm，最大8.7cm，平均4.4cmである。第49図は，長さと巾との関係を示したものであるが，長さ6cm，巾4cmを中心として，やや集中しているものの，変差がかなり大きい。厚さは平均1.9cmである。

この礫石錘は，漁網錘であることが明らかな切目石錘とは，形態上，また分布上差異が多く，その機能を同一視することはできない。近年編物の錘具としての可能性が一段と強くなってきた。その詳細は，付論において記すことにする。

第8節　編物石（第6表，第32図7，第50図11，図版62上参照）

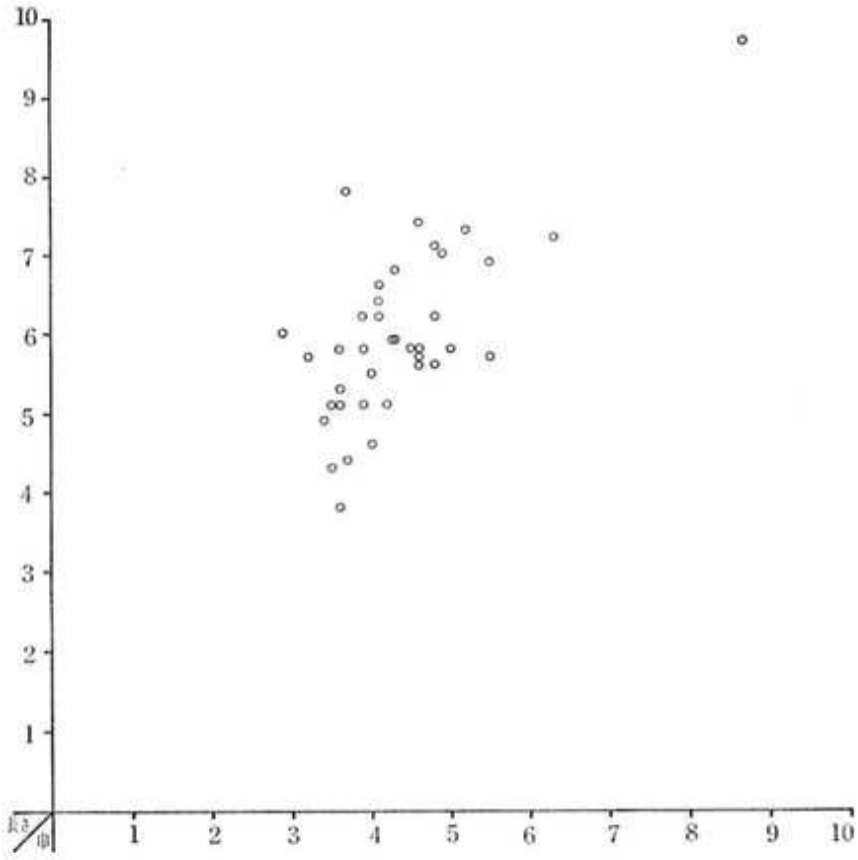
タ5区から1点のみ出土したもので，その形態などから，編物の錘具と考えた。しかし，同じように編物の錘具の可能性が強いと指摘される礫石錘とは，形態などにおいて同一に扱うことができない点もあり，あえて別にとりあげた。なおこの機能に関する問題は，付編において詳しく検討することにする。

石材は，両輝石安山岩を用いている。重さは485gである。

平面は長方形で，縦断面は三角形を呈している。中央部がくぼんでおり，上下に糸を掛けたために生じたと思われる擦痕が認められる（第9図11）。

第9節　磨製石斧（第6表，第32図8，第50図，図版49・50・62下参照）

磨製石斧は8点出土した。そのうち7点が発掘資料であり，調査地域の中央部から東寄



第49図　礫石錘の長さと巾の関係図（単位cm）

りの地区にかけて出土した。完形品は6点ある。

石材は，流紋岩を用いているものが5点，両輝石安山岩・砂岩・珪岩を用いているものが，それぞれ1点ずつある。

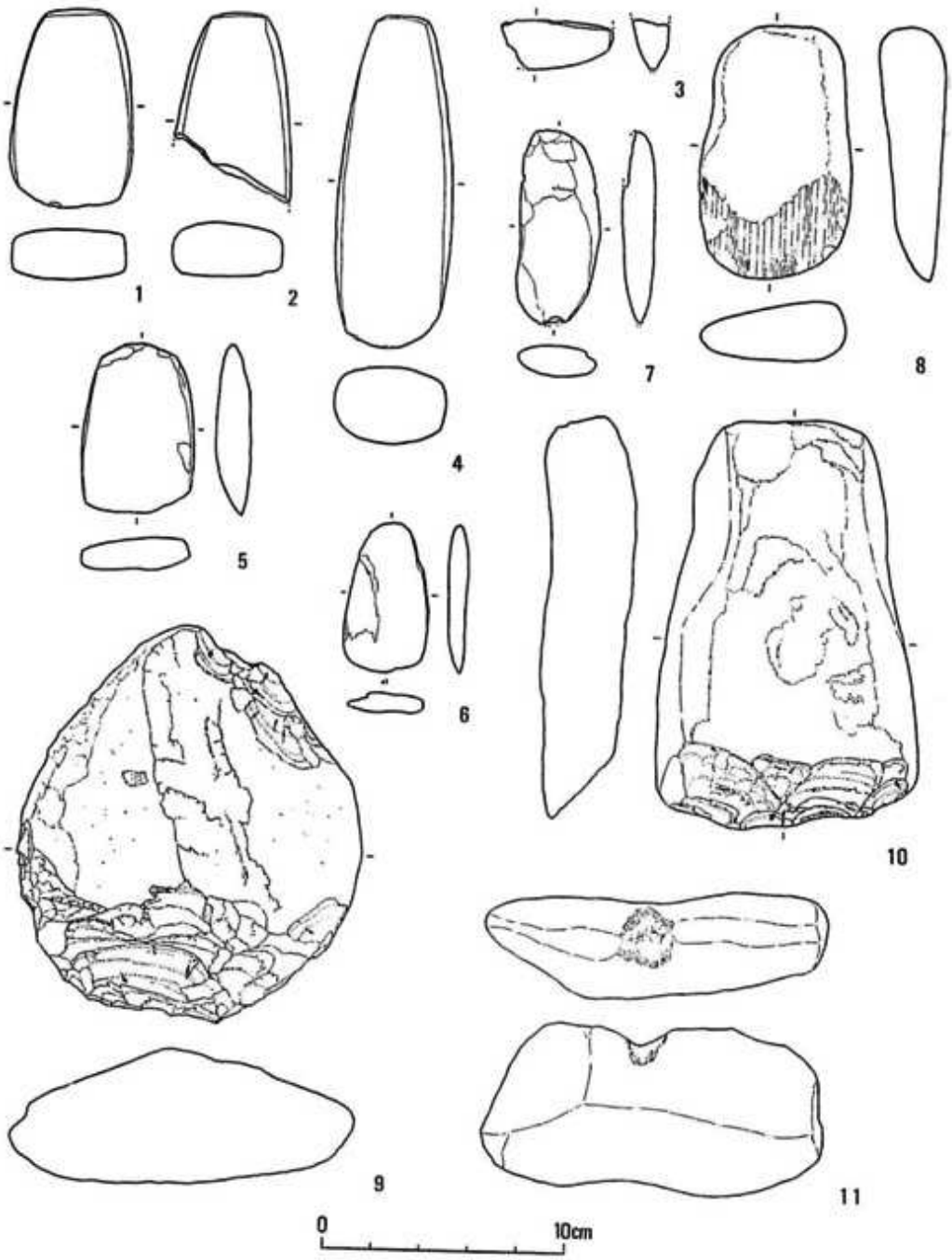
これらは定角式磨製石斧のⅠ類と，それ以外の横断面が楕円形のもののⅡ類に分類される。Ⅰ類は，表裏左右両側縁をていねいに研磨して作出されており，片刃のもの（第50図3・5・6）と，両刃のもの（同1・4）がある。Ⅱ類は，大型のもの（同7）と小型のもの（同8）とがあり，どちらも円礫面を多く残し，刃部だけに研磨加工を施しており，片刃である。

第10節　石　匙（第6表，第32図9，第51図，図版51上・60上参照）

石匙は5点出土した。そのうち3点が発掘資料で，調査地域の東寄りの地区から散発的に発見された。

石材は，両輝石安山岩と凝灰岩である。

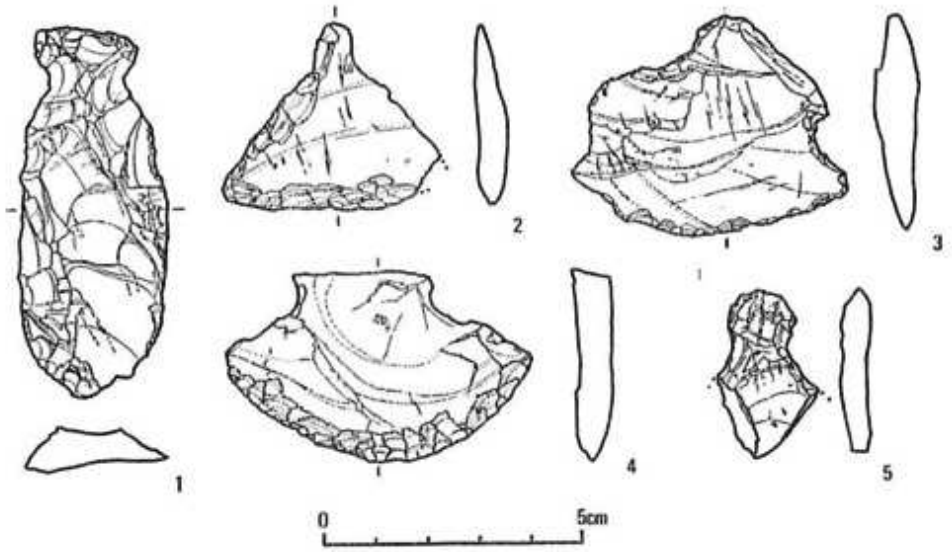
これらの石匙は，縦形のⅠ類と，横形のⅡ類とに分類することができる。



第50図　石器実測図 13　1～6：磨製石斧Ⅰ類，7・8：同Ⅱ類，9・10：礫器，11：編物石．

Ⅰ類は1点ある（第51図1）。これは縦長剝片を用いており，主剝離面である裏面はあまり加工せず，表面の上端近くに，両側から浅い抉りを作出し，さらに左右両側縁に細部加工を施している。

Ⅱ類は3点ある（同2～4）。いずれも貝殻状の横長剝片を用いており，打瘤をとど



第51図　石器実測図 14　1：石匙Ⅰ類，2～4：同Ⅱ類，5：同不明．

める上端につまみを作出し，残りの周縁部に細部加工を施している。

残りの1点は，つまみの部分だけの破損品であるため，分類は不明である（同5）。

第11節　削　器（第6表，第32図10，第52図，図版35上・63上参照）

削器は9点出土した。すべて発掘資料である。第32図10に示すように，調査地域の中央部から東寄りの地区にかけて出土した。とくに中央部東側，つまりト～Ⅶ列の3～5区で8点出土している。

石材は，両輝石安山岩を用いている例が4点，チャートを用いている例が3点で，その他に凝灰岩・流紋岩が1点ずつある。

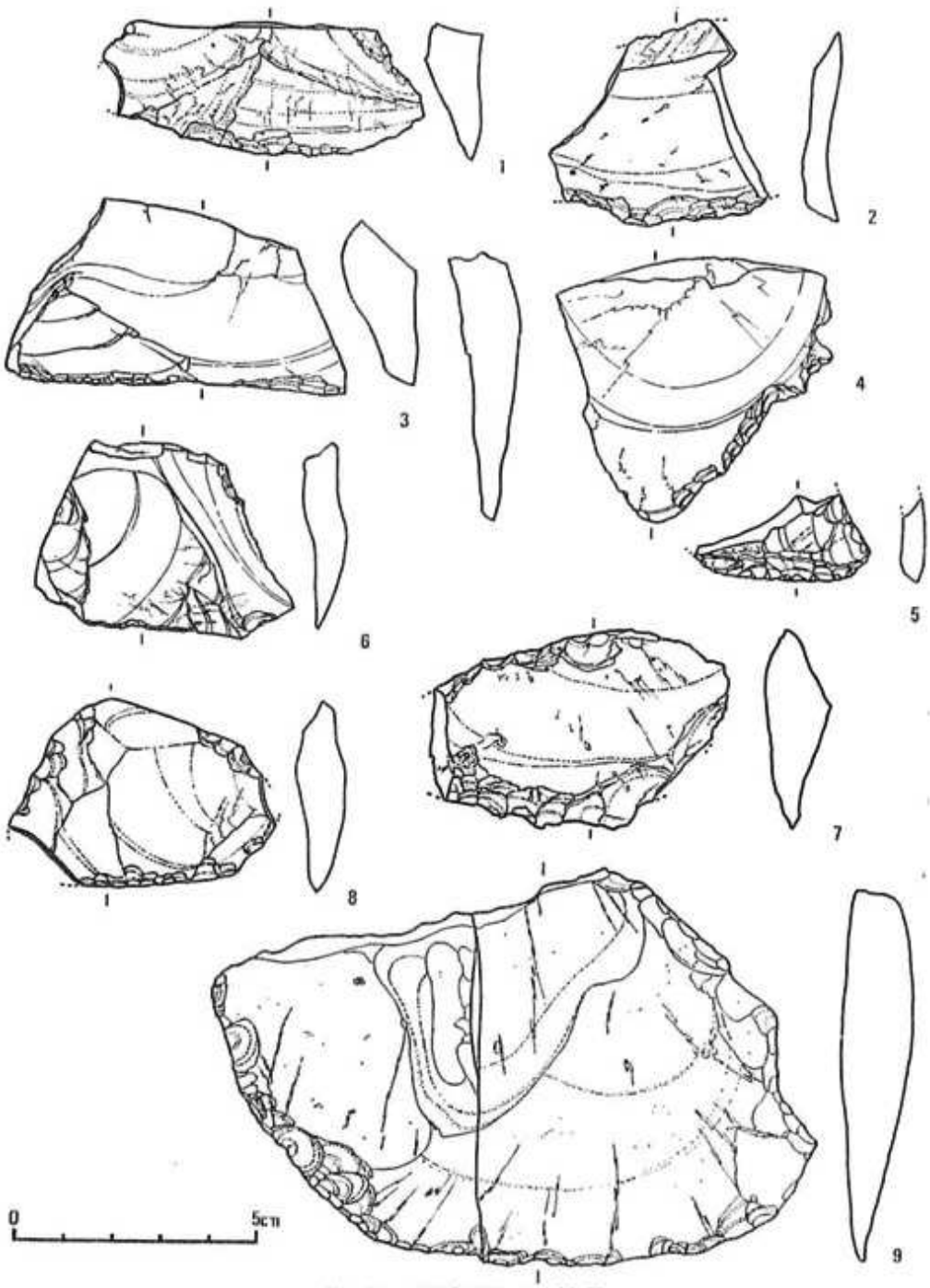
大きさには大小のばらつきがあるが，総じて貝殻状の横長剥片を用いており，剥片の下端の弧をなす円辺に，集中して加工を加え，刃部を作出している。大型の例（第52図9）は，中央で縦に割れており，割れ口から剥離加工を施した跡があるので，欠損したのを再利用しようとしたのであろう。

この例はノ5区の出土で，割れた2片が折り重なった状態で，石皿のそばから出土している（図版35上）。

第12節　石　錐（第6表，第32図11，第42図，図版51下・60上参照）

石錐は，わずか2点出土したにとどまる。石材は，チャートと両輝石安山岩である。

上下両端を錐部として作出している例は，先端部がかなり鋭い（第42図11）。また他の1点は，先端部に使用によるものと考えられる損耗が認められる（同12）。



第52図　石器実測図 15　削 器

第13節　礫　　器（第６表，第32図12，第50図，図版63下参照）

本遺跡からは，大型の礫の先端に荒く加工を加えただけの，礫器が２点出土した。このうち１点が発掘資料である。

石材は，砂岩と両輝石安山岩である。

扁平で大型の円礫を用い，一端に打撃を加えたもの（第50図９）と，上下両端から打撃を加えたもの（同10）がある。

第14節　石 器 組 成（第５表参照）

本遺跡出土の148点の石器についての器種と内容は，以上に記したとおりである。最後にその組成に関して，若干の検討を行なうこととする。

12種の器種のうち，直接生産用具に関するものは，打製石斧・石皿・敲石・磨石・石錐の５種であり，全体の53％である。このち狩猟具である石錐を除けば，他は食用植物の採取および加工・調理用具であり，漁具はみられない。漁具として形を残さないことが，そのまま漁業が行なわれなかったことを示すわけではないが，一応狩猟・採集民的様相が強いといえよう。

他の47％のなかでは，礫石錘の比重がきわめて高く，29％を占める。全体の約３分の１弱の出土量であるが，すでに指摘したように，これは漁網錘ではなく，編物用の錘具であろう。その重量は，平均6.2ｇであり，これによって編まれた製品は，コモやカゴなどであったことが推定される（詳細は付篇参照）。

このような石器組成は，北陸地方の縄文中期の例として，特に変わった点はない。ごく平均的な様相を示しているといえるが，その反面，この中期初頭の新保・新崎式期の石器組成ということでは，数量的に明示された具体例はない。すでに記したように，北陸地方のこの時期の土器型式の編年は，未だに十分に確立された状態ではないのであり，このためか石器の研究も未発達である。こうした状況下において，本遺跡において中期初頭の石器組成が明確になった意義は，決して少なくはないのである。

この石器組成の特徴は，伴出した西日本系の鷹島式土器に伴う石器群のそれと比較すれば，一層明確になるであろう。

鷹島式の標式遺跡である和歌山県鷹島遺跡では，鷹島式の他に後期の土器なども若干出土しているが，石器は総数48点である。その内訳は，石錐２点（4.2％），石匙５点（10.4％），削器24点（50.0％），異形石器１点（2.0％），礫石錘16点（33.3％）である（巽・中村1969）。本遺跡と比較してきわめて特徴的なことは，打磨石斧・石皿・敲石・磨石が絶無なことである。逆に削器（スクレイパー）の比率はきわめて高い。共通するのは，とも

に明確な漁具をもたないこと，礫石錘が約3分の1を占めることなどである。

2遺跡のきわめて重要なこの差異は，植物質食料の採取・加工・調理体系のパターンの差異として認識される。打製石斧および磨石・石皿が単なる掘り棒や製粉具でないことは，これらの差異が，それぞれ東日本と西日本の一般性を代表していることからも，うかがうことができる。東日本は落葉広葉樹林帯，西日本は照葉樹林帯が卓越しており，敲石も落葉樹のクルミなどの堅果を割る道具とみなされるから，上記3者とは機能上ばかりでなく，分布上もきわめて密接な関係にあるのである。

この森林相の差異に基づく石器群の差異は，野生植物中でも，トチ・ドングリ類などの堅果類，クズ・ワラビ・ユリ・テンナンショウなどの根茎類を，アク抜きや水さらしによって高度に利用する技術の有無に帰因すると推定されるのである。しかし，これらはまた土器群の組成その他とも密接不可分な関係にあるので，第5章において，さらに包括的に検討することとする。

第5章　考　　察

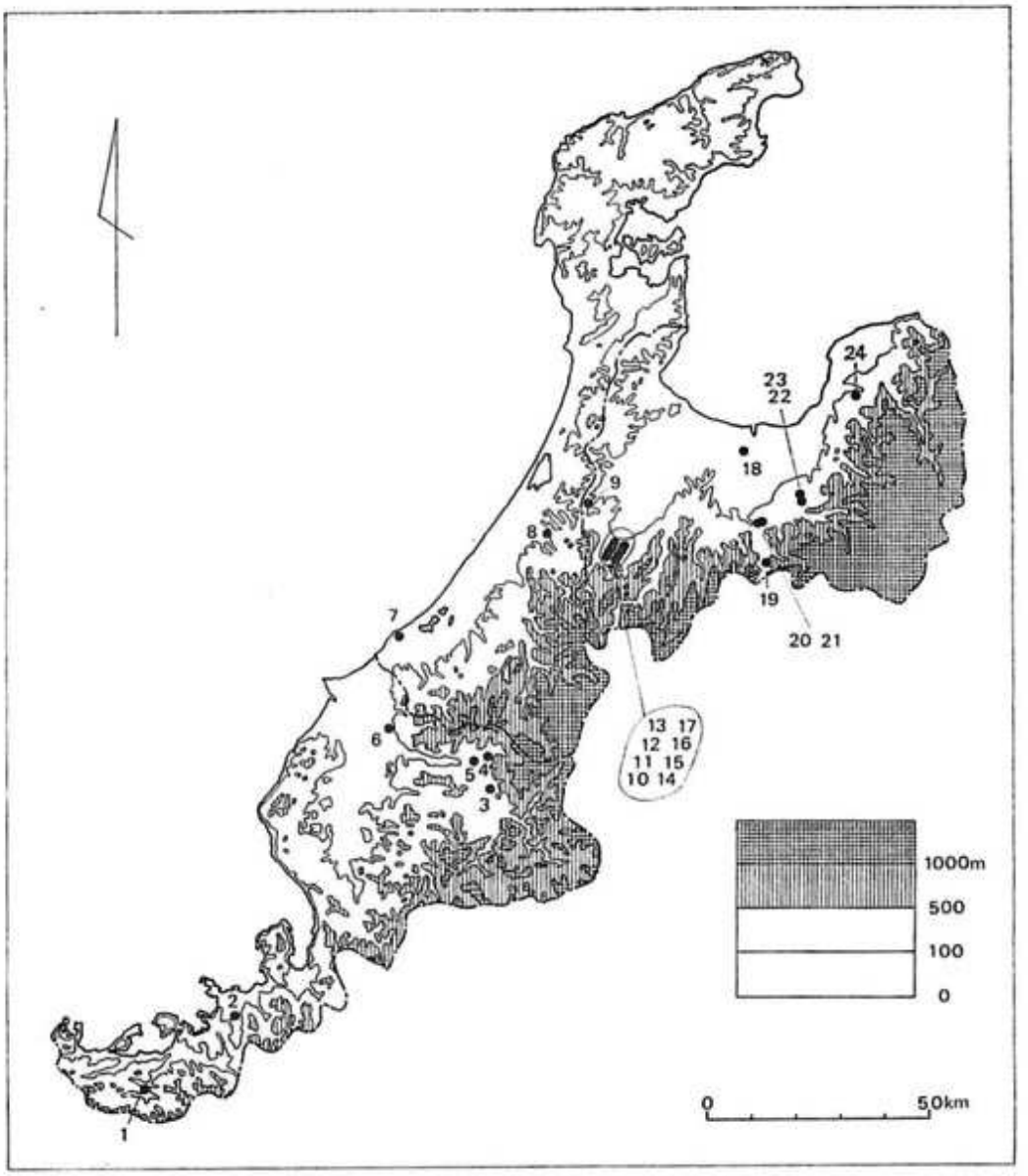
第1節　北陸地方の押型文土器（第53図参照）

当初全く予測していなかったことであるが，本遺跡の下部からは，縄文早期前半の押型文土器が少量出土した。このため従来福井県下で出土した押型文土器の資料を検討してみると，編年上の問題はすでに記したとおりであるが，その立地条件や分布状態の上では，注目すべき点が少なくないことに気づいた。

結論から先に記せば，福井・石川・富山の北陸3県における押型文土器出土遺跡のなかでは，標高220～230mの本遺跡は，高度ではもっとも高いグループに属す。

この立地条件を主として，北陸地方における押型文土器遺跡を列挙すれば，次のとおりである。なお，福井県下の例については，近年の木下哲夫氏の集成（木下1977）を利用させて頂いた（第53図参照）。また富山県下の例は，小島俊彰・橋本正両氏の御教示によるところが大きいが，同県下における近年の押型文出土遺跡の増加は著るしいものがあり，ここに文献として引用できたのは，約2分の1程度であるらしい。

1. 福井県遠敷（おにゅう）郡名田庄村岩の鼻遺跡
   南川左岸の段丘上に立地し，標高約50mである。山形文。
2. 同　　三方県三方町鳥浜見塚
   鰣（はす）川河川敷内。山形・楕円・格子目文。
3. 同　　勝山市幕根遺跡
   九頭龍川右岸の段丘上に立地し，標高約185～190mである。楕円文。
4. 同　　勝山市古宮遺跡
   暮見川左岸の段丘上に立地し，標高220～230mである。山形・楕円・格子目文。
5. 同　　勝山市破入（はにゅう）遺跡（仁科編1977）
   滝波川の扇状原上に立地し，標高約130m前後である。楕円文。
6. 同　　坂井郡丸岡町上銭瓶支群第2号墳封土
   丘陵上の高向古墳群の上銭瓶支群第2号墳の封土より出土。標高約70m前後。楕円文。
7. 石川県加賀市大野山遺跡（上野1953）
   加佐ノ岬に近い海岸段丘上に立地し，標高45～50m。楕円文。
8. 同　　金沢市若松町遺跡
   金沢市東部の若松町より，楕円押型文1点が出土している。出土地点の詳細は不明であるが，高堀勝喜・小嶋芳孝両氏の御教示によれば，標高50～80m前後の山麓丘陵



第53図 北陸地方における押型文土器出土遺跡分布図

上であることは確かであるという。

9. 富山県西砺波郡福光町人母(ひとう)遺跡（橋本1968）
   渋江川左岸の舌状台地上に立地し，標高70mである。楕円文。
10. 同　西砺波郡福光町向山島遺跡（小島他1973）
    標高約254mの丘陵上に立地している。楕円文。
11. 同　西砺波郡福光町立野新H遺跡（西井他1975）
    標高190～200mの丘陵上に立地する。楕円文。
12. 同　西砺波郡福光町立野新I遺跡（上野他1977）

海抜191～193mの丘陵上に立地する。

13. 同　西砺波郡神明原A遺跡（上野他1977）
海抜171～181mの丘陵上に立地する。山形文。

14. 同　西砺波郡城端町西原A遺跡（上野他1977）
海抜238～242mの丘陵上に立地する。山形文。

15. 同　西砺波郡城端町西山D遺跡（上野他1976）
海抜210～218mの丘陵上に立地する。山形文。

16. 同　西砺波郡城端町南原I遺跡（上野他1977）
海抜160～165mの丘陵上に立地する。楕円文。

17. 同　西砺波郡城端町南原J遺跡（上野他1977）
海抜165～167mの丘陵上に立地する。山形文。

18. 同富山市北代（きただい）遺跡
呉羽丘陵先端に立地し，海抜約10mである。山形文。小島俊彰・橋本正氏御教示。

19. 同　上新川郡大沢野町布尻遺跡（柳井他1977）
神通川右岸の河岸段丘上に立地し，標高約150mである。山形・楕円文。

20. 同　上新川郡大沢野町直坂（すごさか）I遺跡（橋本1973）
神通川右岸の河岸段丘上に立地し，海抜約170mである。山形・楕円文。

21. 同　上新川郡大沢野町直坂II遺跡（橋本1976）
神通川右岸の河岸段丘上に立地し，直坂I遺跡に近接する。海抜約170mである。楕円文。

22. 同　中新川郡立山町天林北遺跡（橋本1968）
常願寺川右岸の丘陵上に立地し，海抜260～280mである。楕円文。

23. 同　中新川郡立山町吉峰遺跡（橋本1968，柳井・神保1975）
常願寺川右岸の丘陵上に立地する。標高約230m。山形，楕円文。

24. 同　魚津市桜峠遺跡（橋本1968）
丘陵の鞍部に立地し，標高約150mである。楕円文。

以上24遺跡の立地条件を検討すると，最も多いのは丘陵上の14遺跡で58.3%，次いで河岸段丘上の7遺跡が29.2%を占める。他は海岸段丘上，扇状原上，沖積平野が各1遺跡で各4.2%である。

次に標高を50mごとに区分して，24遺跡を分類すると，次のとおりである。

標高0m以下	1遺跡（4.2%）	2・鳥浜。
0～50m	3遺跡（12.5%）	1・岩の鼻，7・大野山，18・北代。
50～100m	3遺跡（12.5%）	6・上銭瓶，8・若松町，9・人母。
100～150m	2遺跡（8.3%）	19・布尻，24・桜峠。
150～200m	9遺跡（37.5%）	3・幕根，5・破入，11・立野新H，12・立野新

Ⅰ，13・神明原A，16・南原Ⅰ，17・南原J，20・直坂Ⅰ，21・直坂Ⅱ。

200～250m　4遺跡（16.7%）　4・古宮，14・西原A，15・西山D，23・吉峰。

250～300m　2遺跡（8.3%）　10・向山島，22・天林北。

標高150～200mの間がもっとも多く，これに次ぐのは200～250mで，250m以上は2遺跡にすぎない。300mを越す例は皆無である。これらの高度はまた，加越山地と周辺平野部との傾斜変換点にも相当している。いわば平野部とその辺縁部に立地し，山間部に分布していないのが大きな特徴である。そしてこの加越山地の地形が急峻であることも，きわめて重要である。こうした分布状態に対比されるのは，飛騨や信州の場合である。標高は高いが，高原状を呈している点に環境の差が認められる。

福井県の九頭龍川，石川県の手取川，富山・岐阜県の庄川の上流域の山間部に遺跡が増加するのは，前期から中期にかけてである。

従来しばしば中期になると平野部へ，正しくは諸河川の扇状原上に，遺跡も山間部より進出している現象がみられるとされてきた。しかし，早期の押型文土器出土遺跡の分布状態からみると，この流れは逆であろう。少なくともこのような観点を導入することは，研究の現状からみて，決して無意味ではないであろう。平野部への進出というのは，おそらく山間部を含めたところの，全般的な遺跡の増加に関係があるのではないだろうか。

この早期から中期へかけての山間部への進出は，この進出をはばむ制限要因の後退と相表裏する現象であろう。この中間の縄文前期こそ，縄文海進の最大海進期であり，その背景をなす気候の温暖化に注目される（前田1977）。

落葉広葉樹林帯から照葉樹林帯への推移もこれに並行したが，おそらく積雪量の減少もこれに伴ったであろう。現代でも積雪量が多く，かつ地形が急峻である加越山地において，積雪量の多い寒冷気候の優占した時期には，これらが縄文人の行動半径を制限する大きな要因であったと推定されるのである。

山間部に中期遺跡が増加するようになることは，こうした制限要因が緩和されるようになったことの他に，積雪量の多い北陸地方の風土に根ざした地域文化が，この時期に確立されたことにも重要な原因がある。次にこうした様相を，縄文中期初頭における西日本系土器と，北陸系土器との消長関係を通じて検討してみよう。

第2節　北陸地方中期初頭土器群の動向

本遺跡の主体を構成するのは，縄文中期初頭の西日本系土器群（Ⅲ群）と，北陸系土器群（Ⅳ群）である。

Ⅲ群土器は鷹島式と船元Ⅱ式であり，Ⅳ群は新保式，古宮第2グループ（新崎古式？），古宮第3グループ（新崎式？）である。これらの対応関係は次のように整理されよう。

	西日本系	北陸系
第1段階	鷹島式	新保式
第2段階	船元Ⅱ式	第2グループ
第3段階	ナシ	第3グループ

これらの対応関係について層位的には何らの区別も見い出せなかったことは，すでに記したとおりである。しかし，形態学的には，相互の関係を間接的に反映しているとみなされる側面がある。

その第1は，新保式と第2グループ（新崎古式？）とにみられるところの，隆帯上の爪形文の差異である。爪形文の間隔は，前者では狭く密接しているが，後者は広くなる傾向がある。鷹島式を特徴づける爪形文は前者に類似するが，後者とは特徴を異にしている。

第2は，器形の構成に関する問題である。本遺跡の新保式の器形は，バケツ状およびジョウゴ状の深鉢のみで，キャリパー形深鉢を欠く。標式遺跡である石川県内浦町新保遺跡では，このキャリパー形（小島氏分類の第Ⅱ1型式）が50%を占め，バケツ状およびジョウゴ状の深鉢（同Ⅰ2・Ⅰ3・Ⅱ4型式）は25%である（小島1977）。すなわち，新保式の分布域では本遺跡は南限に近く，器形に脱落現象があるとみなされる。この欠を補うものが，胴部の膨みも豊かな鷹島式のキャリパー形深鉢と考えられる。なお，新保遺跡からは，鷹島式は1片も検出されていない。

次に，各段階における西日本系・北陸系土器の量的構成をみてみよう（第2・3表参照）。

まず第1段階では，北陸系の新保式を，西日本系の鷹島式が凌駕している。これに対し第2段階では，西日本の船元式は著しく後退し，北陸系の古宮第2グループが圧倒的に優勢になる。そしてキャリパー形深鉢の器形も，鷹島式から古宮第2グループ（新崎古式？）へと引き継がれることになる。この第2段階が本遺跡の盛行期であり，第3段階になると急速に衰退する。西日本系土器も，全く検出されていない。この一たん西日本系土器を凌駕した北陸系土器の優勢は，以後縄文時代の各時期を通じて，一貫して北陸地方に堅持されたのである。

こうした北陸系土器の発達過程中にあって，本遺跡では第3段階になって，はじめて浅鉢形土器が出現することも注目される。新保遺跡でもすでに出現しているが，ごく少量である（小島1977）。浅鉢形土器が北陸地方において発達し始めるのは，さらに時期の若干下がる中期中葉からである。いずれにしても浅鉢形土器の出現は北陸系土器群中においてであり，西日本系土器群中ではない。そして西日本は照葉樹林帯であり，北陸を含めた中部地方の低山帯は照葉樹林帯であるが，山地帯は落葉樹林帯であった。浅鉢形土器の出現も，このことと密接な関係があると推定される。これらを発達せしめた生活の内容については，次節において記すこととする。

鷹島式土器は，本遺跡以外の北陸地方では次の4遺跡にしか出土していない。

1.　福井県小浜市阿納塩浜遺跡（若狭新古研1972）

2. 同　　福井市三十八社遺跡（沼・広嶋1969）
3. 同　　足羽郡足羽町篠尾遺跡（同上）
4. 富山県氷見市大境洞穴（氷見高校1964）

これらは量的には断片的である。鷹島式土器をかなりの量出土した遺跡としては，本遺は現時点では北陸地方における北限である。鷹島式の形態学的な周辺的退化現象については，先に記した。

近畿・中国・四国地方および九州・中部の一部に分布する鷹島式に対し，新保・新崎式跡は福井・石川・富山県を中心にしている。そしてその一部は近畿地方にも及んでいる。

たとえば，新保式は和歌山県広川町鷹島遺跡（巽・中村1969）にみられ，京都府丹後町平遺跡では古宮Ⅲ D・F類が出土し（堅田編1966），和歌山県有田市地ノ島遺跡では，古宮Ⅳ K類が出土している（中村1971）。

東北地方の縄文前期に発達した各種の撚糸文は，北陸地方にも前期末に伝播し，中期初頭の新保式と古宮第2グループ段階まで残存する。これには2種あり，第1の網目状撚糸文は本遺跡が南限である。第2の木目状撚糸文はさらに南下し，京都府丹後町平遺跡にまで及んでいる（堅田編1966）。この中間の福井県下でも，次の諸遺跡より出土している。

1. 福井県福井市三十八社遺跡（沼・広嶋編1969）
2. 同　　鯖江市西大井遺跡（沼・広嶋編1969）
3. 同　　足羽郡足羽町篠尾遺跡（沼・広嶋編1969）
4. 同　　小浜市阿納塩浜遺跡（若狭考古研1972）

第3節　石器にみる生活文化（第7表参照）

本遺跡の性格を明らかにするために，本遺跡と西日本系鷹島式土器の標式遺跡であるところの，鷹島遺跡との石器群の比較検討は，すでに記したとおりである。直接生産用具とはみなされない礫石錘を除き，直接生産用具である器種に限定すれば，ともに漁具はなく，狩猟具としての石鏃に大差は認められない。大きく異なるのは，植物質食料の採取・加工処理に関連するところの，打製石斧・石皿・敲石・磨石が本遺跡では53.1%を占めるのに対し，鷹島遺跡ではこれを全く欠いていることである。

この石器群の特徴は，本遺跡を含めた中部地方全域の中期遺跡の特徴でもある。そして北陸地方においては，中期中葉の古府式期になると，このなかでもとりわけ打製石斧の占める比重が高くなることが，すでに指摘されている。

石川県の場合については，高堀勝喜氏が次のように記している（高堀1965）。

> 磨製石斧が定角式とよばれる形態に発展するのは，新崎期からであるが，石錘はいまだ大形・不整形であり，打製石斧にいたっては小形・扁平なものが，まれに発見される程度である。それが古府期にいたって，打製石斧の各種形態ならびに石錘の規格

化がはじまり，にわかに量産が開始されるのである。

富山県の場合については，橋本正氏が次のように記している（小島他1972）。

中期中葉の石器　打製石斧と石錘が，牛滑式期になって激増するようである。

この動勢は，石川県でも同様である。

福井県の場合については，データがなく記せないのが残念である。しかし，後・晩期にかけて打製石斧が増大することは事実であり，後期の勝山市本郷遺跡においては，打製石斧は56.5%を占めるに至っている（中司編1977）。

第7表は，近接する地域の関連遺跡の石器組成を，本遺跡と比較したものである。

厳照寺（げんしょうじ）遺跡は，富山県砺波市に存在し，古宮第3グループに相当する時期である（神保他1977）。中期中葉以前であり，本遺跡より打製石斧は少量増加するものの，大差はない。

串田新遺跡は，富山県射水郡櫛田村に存在し，中期後半の代表的遺跡である（小杉高校1952）。ここでは41.2%を占めるに至っている。

勝山市本郷遺跡は，本遺跡の西南方約1Kmの地点にある，後期中葉から晩期初頭にかけ

第7表　北陸地方主要遺跡石器組成表

時期	中期初頭						中期後半		後・晩期		晩期	
遺跡名	（鷹島）		古宮		厳照寺		串田新		鹿谷本郷		御所の館	
器種	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%
打製石斧	—	—	3	2.3	6	4.9	101	41.2	148	56.5	35	68.6
石皿	—	—	12	9.4	2	1.6	—	—	3	1.1	1	2.0
蜂窩石	—	—	—	—	—	—	1	0.4	—	—	—	—
敲石	—	—	25	19.5	6	4.9	12	4.9	7	2.7	10	19.6
磨石	—	—	22	17.2	20	16.4	—	—	55	21.0	—	—
石錐	2	4.2	6	4.7	14	11.5	24	9.8	—	—	—	—
切目石錘	—	—	—	—	—	—	11	4.5	3	1.1	—	—
礫石錘	16	33.3	37	28.9	45	36.9	43	17.6	38	14.5	3	5.9
編物石	—	—	1	0.8	—	—	—	—	—	—	—	—
磨製石斧	—	—	7	5.5	26	21.3	49	20.0	6	2.3	2	3.9
石匙	5	10.4	3	2.3	2	1.6	2	0.8	1	0.4	—	—
削器	24	50.0	9	7.0	—	—	1	0.4	—	—	—	—
石錐	—	—	2	1.6	1	0.8	—	—	1	0.4	—	—
礫器	—	—	1	0.8	—	—	—	—	—	—	—	—
砥石	—	—	—	—	—	—	1	0.4	—	—	—	—
異形石器	1	2.0	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
計	48	99.9	128	100.0	122	99.9	245	100.0	262	100.0	51	100.0

ての遺跡である（中司編1977）。ここではさらに比率が高くなり，56.5%である。

御所の館遺跡は，石川県石川郡尾口村に存在する晩期の遺跡である（平田1975）。本遺跡下の国道157号線で北に接する白峰村を過ぎると，次が尾口村である。ここではさらに比率が増し，68.6%にも達している。

福井県下の縄文時代遺跡において，石器組成が明らかにされた例がきわめて少ないため，近接石川・富山県下の例で補いながら巨視的に通観した結果をみると，本遺跡の石器組成のあり方は，本格的な中期的様相の現われる直前期にあたり，いわばその胎動期的様相を示しているといえよう。これがさらに後期から晩期へと発展し，本地域の生産活動を非常に特徴づけることになるのである。

このような中期的石器群の様相は，同じ中部地方でも信州では中期初頭まで遡り，さらに西関東地方を含めて，前期まで遡ることが判明している（村田1970）。この前期から中期にかけての石皿などを伴った打製石斧の急激な増加は，古く大山柏氏が提唱し，近年故藤森栄一氏等によって強力に推進された，いわゆる縄文中期農耕論の中核をなす石器群なのである（藤森1970）。

この新しい文化的胎動は，中部地方から西関東地方を含めた中部山岳地帯の太平洋斜面に当る，諸磯＝勝坂式文化圏において自生的に胚胎したものであり，北陸地方には中期中葉，近畿地方には後期中葉（渡辺編1975），九州地方へは後期後葉にかけて，時間的傾斜をもちながら伝播していったのである。すなわち，東から西への流れであり，その逆ではない。予想された栽培植物がすべて渡来植物であり，自生していないものばかりであって，上記の文化現象の大きな流れとは全く矛盾しているのであり，ここに縄文農耕論の1つの限界があった。

しかし，藤森栄一氏が生前強調して止まなかったように，縄文中期とそれ以前とでは文化的に大きな格差がある。これをどう理解するということが縄文農耕論の真に目指すところであったことは，藤森氏が折に触れて強調されていたところである。

そして近年中尾佐助氏等による『照葉樹林文化論』（上山編1969）が登場し，単なる採集段階と焼畑段階との中間に，半栽培段階が設定されるに及び，中期農耕論は発展的に解消するようになった。この半栽培段階の重要なメルクマールは，野生植物の移植管理と，水さらしやアク抜きによる植物澱粉の獲得である。打製石斧をはじめとする石器群は，この半栽培段階の道具として，最もふさわしい位置を占めるようになったのである（佐々木1971，渡辺1975）。

アク抜きや水さらしの対象になった植物は，トチやドングリ類の堅果類と，クズ，ワラビ，ヤマユリ，テンナンショウなどの根茎類であり，近年の植物遺体の研究からも，これを裏づけることができる。打製石斧は根茎類の採取活動に，石皿・敲石・磨石は，この根茎類や堅果類のつきくだきや製粉に使用されたのであろう。これはアク抜きや水さらし作業の過程で，必然的に生じてくる工程なのであり，豊かな自然湧水も必要である。また先

に記した浅鉢形土器も，これ鉢・なべ・椀などとして必要な道具なのである。

本遺跡の石器群は，いわばこの半栽培段階への胎動期を示しているのであり，より東の地域から影響が増大するきざしを見せ始めたのであって，西日本系土器の後退は，こうした動向を間接的に反映しているとみることができるのである。

福井県下では，植物遺体の大量に出土した遺跡として三方郡三方町鳥浜貝塚がきわめて有名である。これは縄文前期を主体とする貝塚であるが，植物遺体の調査を担当した西田正規氏（近畿大学医学部）の御教示によれば，トチの実はごく少量であり，京都府舞鶴市桑飼下遺跡（後期）のような，むかれた皮の大量出土といった状態ではなく，未だそのアク抜き技術は習得されていなかったとみなすことができる。ドングリ類中ミズナラや，上記のトチの実などは落葉広葉樹林帯の重要な構成樹種であり，この加越山地においても，近世まで重要な救荒食料であったし，現代でもトチモチにその名残りをとどめている。このような積雪量の多い北陸地方の風土に根ざした文化が，縄文中期に早くもしっかりと形成されていたとみることができるのである。

先に引用した打製石斧と組み合わさって増大したとされる礫石錘についても，付編に記すように，堅果類や根茎類の採取用具としての腰カゴ類や，天日乾燥時に必要なコモ類を編む時の錘具とみなすことができるので，両者を統一的に理解することは可能なのである。

最後に，本格的な中期文化の開花を待たずして本遺跡が終焉を遂げたことについては，アク抜き・水さらし作業にとって最も重要な時期である冬期における本地域の積雪の深さと，そのために必須とされる自然湧水点とは若干距離のあることが，問題であったのではないかと，予測していることを記しておく。

付編　勝山市東部における〝もじり編み〟用錘具の民俗調査

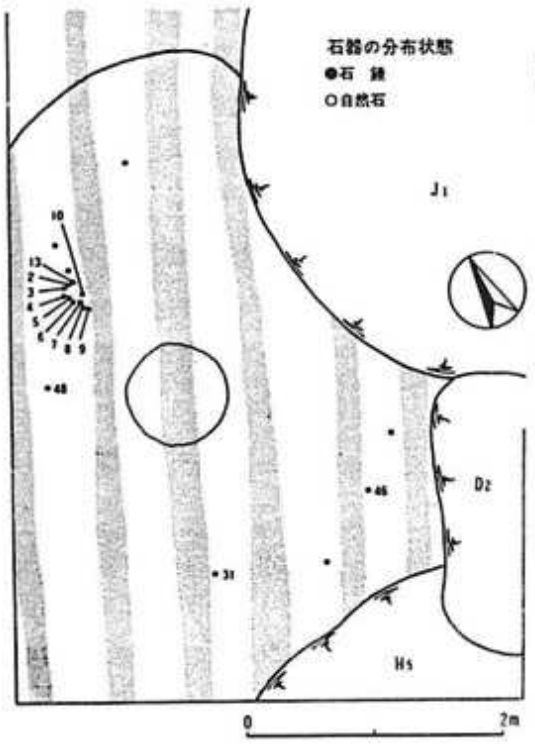
第1節　民俗調査の目的（第54～59図参照）

民俗資料における〝もじり編み〟用錘具を，勝山市東部地域において調査した目的は，古宮遺跡出土の礫石錘の用途を考察する上での，比較資料を得るためであった。本地域ではこれをツチノコとよんでいる。

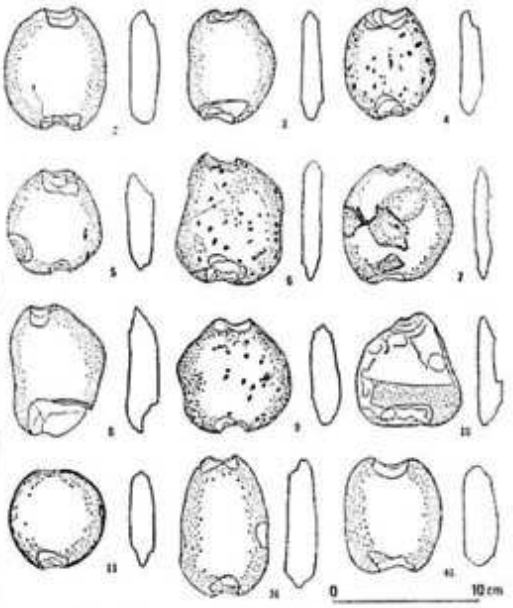
礫石錘を漁網用錘具とみなすことには疑問点が多いことを，筆者は折にふれて強調してきたことであり（渡辺1973他），ここでは詳論しない。その上近年の発掘では，〝もじり編み〟用錘具とみなすことに有利な新知見が知られてきている（渡辺1976）。具体的には，次の4遺跡5住居址の礫石錘の出土状況がそれである。

1.　茨城県東茨城郡大洗町おんだし遺跡第5号住居址（井上他1975）

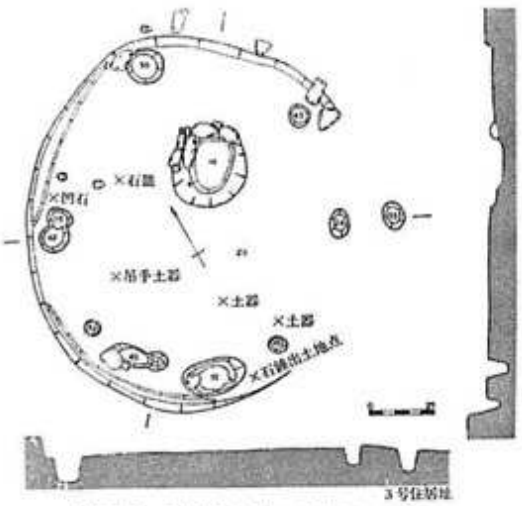
縄文中期末加曽利EⅣ式期。『石錘は，炉の北側70cmのところに，あたかも円悪をえがくかのように重なりあって10個出土した（第54図）』。10点の礫石錘は，長さ平均8.0cm



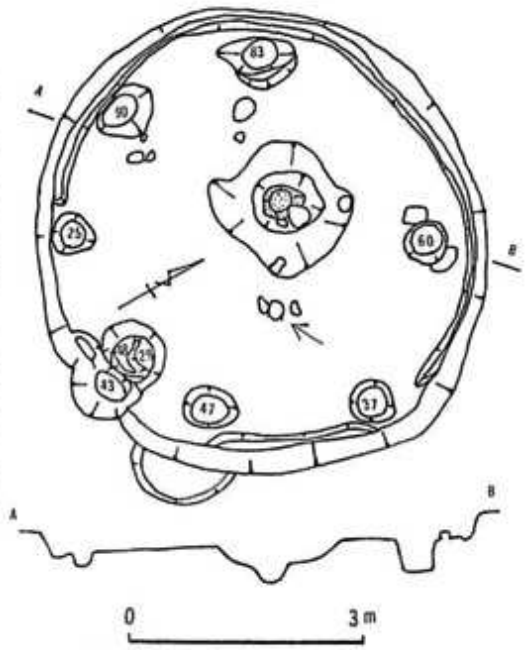
第54図　おんだし第5号住居址実測図（井上他1975による）



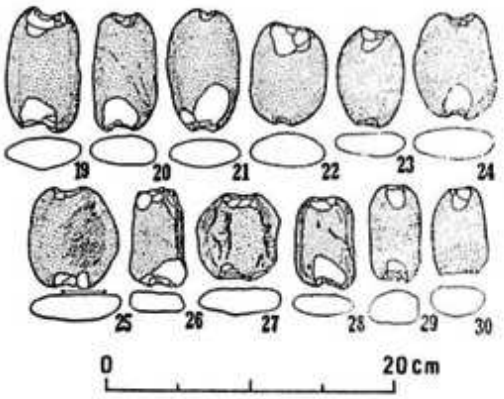
第55図　おんだし第5号住居址出土礫石錘実測図（井上他1975による）



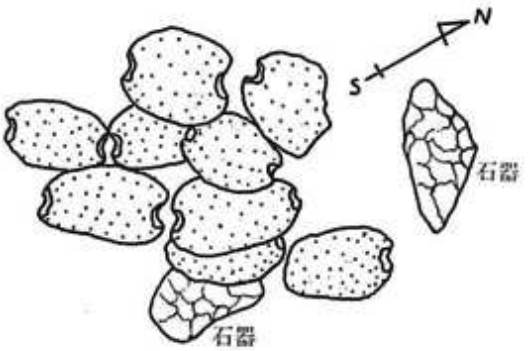
第56図　正木原Ⅰ第2号住居址実測図
（山岡1972による）



第58図　前の原第1号住居址実測図
（佐藤編1975による）



第57図　正木原Ⅰ第2号住居址出土礫石錘実測図
（山岡1972による）



第59図　前の原第1号住居址出土礫石錘出土状態図
（飯田高1974による）

巾平均6.9cm，厚さ平均1.8cm，重量平均138.5gである（第55図1～10・13）。他に離れた状態で，床面から2点出土している（同31・46）。

2.　神奈川県平塚市上ノ入遺跡第3号住居址（小島弘義氏御教示による）

縄文中期後半加曽利EⅡ式期。南壁寄りに礫石錘13点が重なりあって出土した。長さ平均10.2cm，重量平均383.8gである。

3.　同　　第25号住居址（同上）

同じく加曽利EⅡ式期。南壁寄りに礫石錘12点が重なりあって出土した。長さ平均6.4cm，重量平均84.1gである。

4.　長野県下伊那郡高森町正木原Ⅰ遺跡第2号住居址（山岡1972）

縄文中期後半加曽利E式期。『南端主柱穴にそって石錘が集中して12点出土した（第56図）』。計測値の報告はないが，実測図によれば長さ平均約7cmである（第57図）。

5.　長野県飯田市前の原第1号住居址（飯田高1974，佐藤編1975）

中期後半曽利Ⅱ式期。『住居址中央東南よりの床面に石錘10個と打石斧2個が集中して出土し注目される（第58・59図）』。礫石錘の計測値の報告はみられない。

以上の5住居址例は，それぞれおんだし第5号・前の原第1号が10点，上ノ入第25号・正木原Ⅰ第2号が12点，上ノ入第3号が13点（おそらく本来は12または14点）ずつ重なりあって出土している。これらの数量は，漁網錘としてはきわめて不完全であるが，〝もじり編み〟用錘具としては正にふさわしい数である。

また，住居址内での位置は，正木原Ⅰ第2号・前の原第1号に典型的に現われているが，炉址と入口部分を結ぶ中軸線の右側に偏在しており，他の3例も同様にみうけられる。民俗資料では，この作業の担い手は男性であり，性別による間仕切りが推定される。そして女性型とみられる石皿や凹石が，正木原Ⅰ第2号住居址では左空間において，右空間の礫石錘と相対するように出土している。

〝もじり編み〟で編まれる製品は多種多様であり，その製品の種類・サイズ・材質などによって，錘具の形態・サイズ・重量にはヴァライティーが存在する。そして製品と材質は，製作者の置かれている社会的・生態学的条件に基づくものであり，製品と錘具との関係は技術的条件によって規制されているとみなされる。したがって，この3条件を調査することによって，礫石錘による〝もじり編み〟の対象製品の，推定が可能になってくると予測される。そしてこの条件のヴァライティーが多ければ多いほど，推定の確率は高くなる。

このような前提に基づいた調査例は，すでに第1回目の報告を行なっているが（渡辺1973），上記のような理由から，古宮遺跡をめぐる本遺跡においても，単なる類例増加ではなく，本地域の保有する諸条件に基づくところの具体相を，調査する必要があったのである。

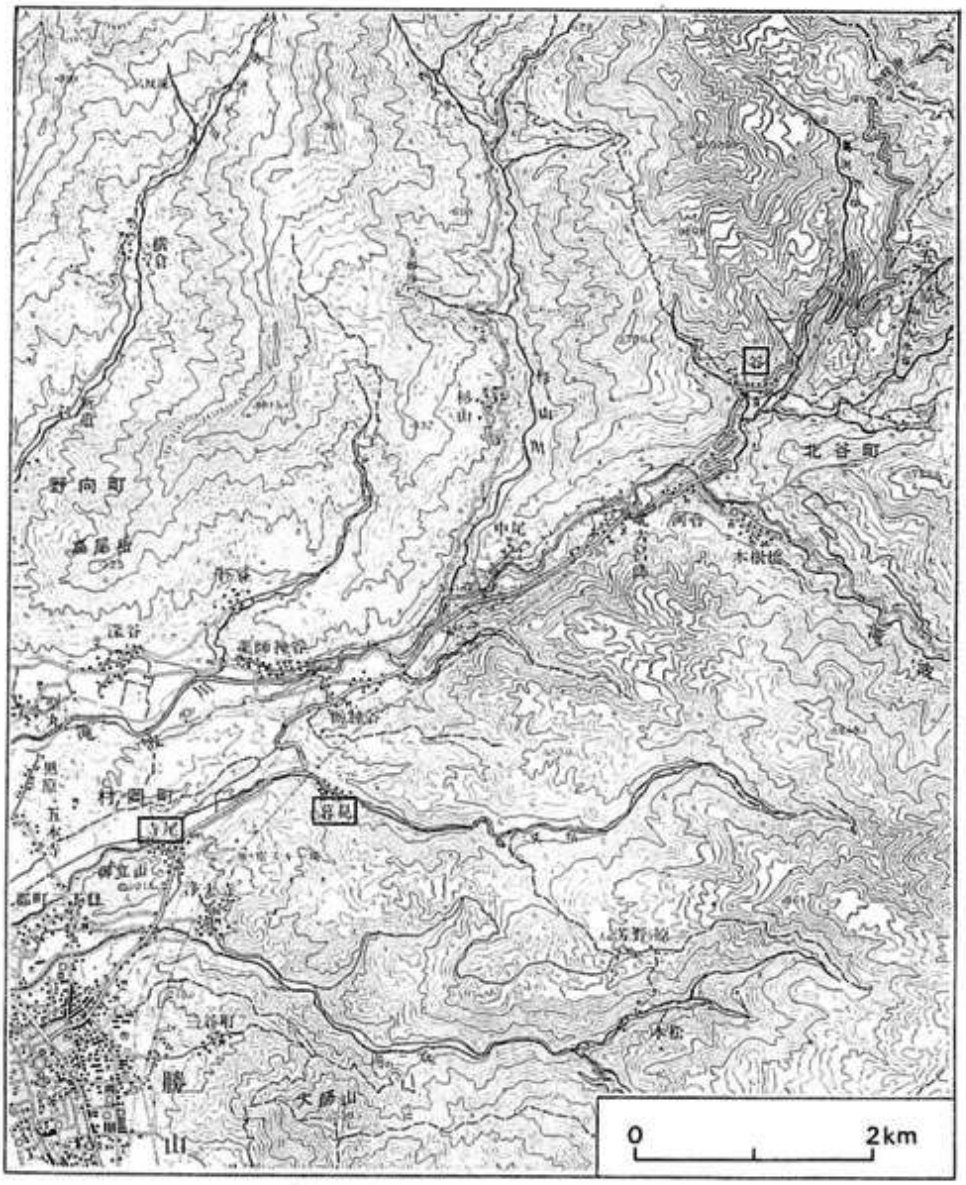
第2節　調査地点の概要（第60・61図参照）

調査地点は，古宮遺跡をめぐる次の3部落である（第60図）。いずれも勝山市街地より石川県白峰村に通じる国道157号線沿いの部落である。この3部落の4軒の家で調査させて頂くことができた。

1.　勝山市村岡町寺尾，前田家。

寺尾は勝山市街地の東北方約2km。御立山の東麓に接し，暮見川南岸の部落である。標高160～180m。前田家は，発掘調査中宿泊していた松原旅館の前にあり，国道157号線に南面している。

2.　勝山市村岡町暮見，嶋田家。



第60図　民俗調査の実施地点

暮見は勝山市街地より東北方約3㎞。国道157号線より分かれた暮見川沿いの部落である。標高320～340m。嶋田家は暮見川に南面し，田村家は北面している。嶋田みさをさんは，第2次発掘調査の折には，全期間に亘って参加協力されている。

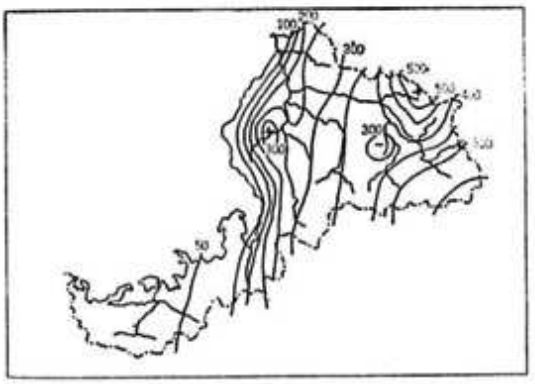
3.　勝山市北谷町谷，出水家。

約1㎞強で近接している上記2部落にくらべ，谷部落はさらに5㎞奥に入り，滝波川の支流奥河内川と，さらにその支流薬下谷川との合流点付近に位置している。石川県白峰村に通じる谷隘道へは，直線距離にして約3㎞であり，国道157号線沿いでは，もっとも石川県寄りの部落である。標高400～460m。勝山市教委皿沢賢一氏のご案内による。

以上の3部落を比較すると，前2者より後者は水田面積が少ない。そして白峰村に続く山間部には，近年まで焼畑が行なわれていたのであり，出作り小屋として，5万分の1地形図にその名残りをとどめている。また有数な豪雪地帯であることも重要な特徴である。

『勝山市史』第1巻には，「北谷における積雪」と題して，次のように記されている（佐野1974）。

加越山地の南斜面に位置する北谷は，昭和38年，日本の2大最深雪地域の一つとなった白山連峰の目付谷（石川県）の6メートル48センチを最高記録として，5メートル以上の積雪地域を構成した一部分にあり，福井県警の観測によれば5メートル45センチという記録を残している（第61図参照）。昭和41年から昭和48年までの最深積雪記録は昭和43年2月の3メートル63センチで，この時は勝山の2メートル13センチより7割ほど多かった。7カ年間の最深積雪の平均は11月13センチ，12月1メートル27センチ，1日1メートル77センチ，2月2メートル4センチ，3月1メートル62センチ，4月48センチである。北谷での積雪の初日は11月下旬である。早い積雪の初日は昭和41年11月2日，遅い積雪の初日は昭和43年12月15日であった。雪が消える積雪の終日は4月7日ごろであって3月末までに雪の消えることは少ない。早い積雪の終日は昭和46年，同47年の4月4日，遅い積雪の終日は昭和45年4月18日であった。積雪の初日は勝山とほとんど同じであるが，積雪の終日は勝山より15～20日くらい遅れるようである。



第61図　昭和38年1月豪雪積雪分布図
（1月31日9時，単位cm，佐野1974による）

昭和48年の冬は全国的に暖冬であったが，勝山でも雪が降っては消えたりして，最深積雪量27センチにすぎず，積雪量0センチという日が多かった。ところが，北谷においては昭和47年11月27日から翌年3月11日までは積雪量が0センチになった日はない。むしろ，勝山の4倍の最深積雪量1メートル10センチという記録を残している。北谷は日本の代表的豪雪地帯である。

第3節　事例報告（第8～11表，第62～68図，図版64～76参照）

本稿でとりあげるツチノコは，すべて同一形態であり，繁雑さを防ぐため，あらかじめその特徴を記しておく。

ツチノコは，タテ型とヨコ型に大別されるが，当地域例はヨコ型のみである。基本的な

製法は，丸太をミカン割りにするため，断面は3角形または雨滴状を呈す。懸垂用の孔は，厚さの薄い方の中央に穿たれている。筆者の分類（渡辺1976）では，Ba類である。

本地域の地方名はツチノコである。

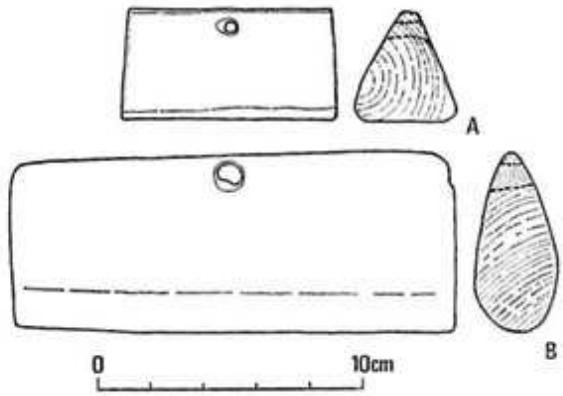
3—1.　寺尾部落の場合（第8表，第62・63図，図版64・65）

調査年月日　1976年10月26日

資料提供者　前田吉左衛門氏（明治35年1月2日生）

ツチノコ　大小2種類あるが，大は2組分ある（第62図・図版64左）。小をA，大をBとよぶことにする。

Aは10点あり，長さは平均8.3cm，巾は平均4.2cm，厚さは平均3.8cmで，重量の平均は50.8gである。Bは16点あり，1～8と9～16の2組分である。両者に差はなく，長さは平均16.8cm，巾は平均6.4cm，厚さは3.1cm，重量の平均は164.7gである。

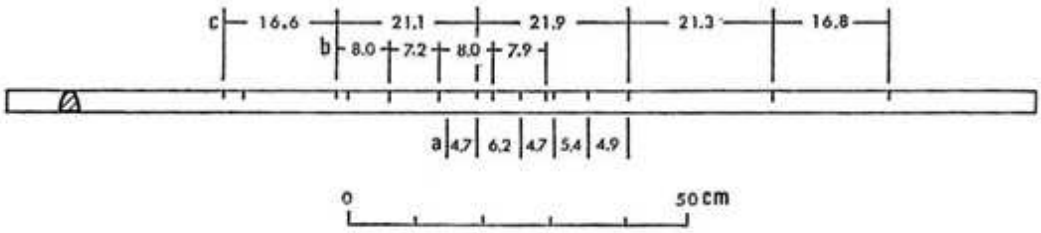


第62図　寺尾・前田家のツチノコ実測図

第8表　寺尾・前田家ツチノコ計測値一覧表

（単位 cm および g）

	長さ	巾	厚さ	重量	備　考
A　1	8.6	4.2	4.1	56	第62図A
A　2	8.0	4.1	3.8	51	
A　3	8.5	4.2	3.6	48	
A　4	8.5	4.2	3.6	48	
A　5	8.3	4.2	4.0	49	
A　6	8.2	4.2	3.8	49	
A　7	8.7	4.3	3.6	52	
A　8	8.2	4.1	3.9	50	
A　9	8.1	4.1	3.7	50	
A　10	8.1	4.3	4.0	55	
A平均値	8.3	4.2	3.8	50.8	
B　1	16.4	6.7	3.3	166	
B　2	16.9	6.6	3.3	178	
B　3	17.4	6.3	3.5	178	
B　4	17.0	6.4	3.1	173	
B　5	15.8	6.7	3.5	157	
B　6	15.7	6.0	3.2	155	
B　7	16.8	6.4	3.1	166	
B　8	16.7	6.7	3.0	157	第62図B
B　9	17.2	6.2	3.2	184	
B　10	16.7	6.8	3.2	161	
B　11	16.2	6.8	3.1	158	
B　12	16.9	6.8	3.3	162	
B　13	17.3	6.8	3.1	162	
B　14	17.0	5.4	2.6	140	新
B　15	17.8	5.8	2.9	192	新
B　16	16.8	5.4	2.6	146	新
B平均値	16.8	6.4	3.1	164.7	



第63図　寺尾・前田家の目盛板の図解

Bの16点中14～16の3点は，他の13点より新しい。製作時を異にするためか，長さにおいてはやや長く，巾・厚さはやや少な目の傾向をもつ。新しいものは約20年ぐらい使っており，古いものは50年ぐらい使っている。

Aは背中アテ・前カケ，Bは雪囲いス・米俵・フゴを編むのに用いた。

材質はすべてクリである。丸太をミカン割りにした後の面は，ナタで削って整形している。

編み台　編み台は，両側の脚と中間の目盛板で構成されている（図版65上）。脚はクリ材で，1本の木の枝分かれした部分を，タテに割って作っている。全体の高さは57.5cmで，作業面に相当する目盛板の高さは，50.0cmである。

目盛板は1本で，3種類の目盛をつけている。材質はスギで，長さ151.2cm，巾3.2cm，厚さ3.2cm，上端の厚さ1.5cmであり，断面は釣鐘状を呈す。

目盛板上の目盛は上面にのみみられ，図解（第63図）に示すように，a～cの3種がみられる。これらは使用頻度などによって，溝の大小・深浅・光沢などに差があるが，図示し得ないのは残念である。もっとも大きくて深く，光沢があるのはcである。

aはcとの重複2例を含め6目盛あり，間隔の平均5.2cmである。bはcとの重複1例を含め5目盛あり，間隔の平均7.7cmである。cは6目盛あり，間隔は，両端が5寸6分，中央3間隔は7寸である。aは背中アテ・前かけ，bはフゴ，cは米俵の間隔である。この間隔のことをフゲという。

雪囲いのスはさらに間隔が広く，長さも2間になり，この目盛板では役に立たないので，かつてはハシゴに目盛をつけて編んだ。

これらの間隔とツチノコの関係は，次のように対応している。

ツチノコ　A—間隔a—背中アテ・前カケ
〃　B—〃 b—フゴ
〃　B—〃 c—米俵
〃　B—〃 ?—雪囲いのス

現在では，フゴ以外にはほとんど使用されていない。

この編み台とツチノコの1部分は，新しいものである。昭和22年に近所からの火災で類焼し，その時消失したこれらを，新しく作り直したのである。

製品　編まれた製品は，次の5種類である。間隔の狭い小形品から順に記す。

1. 前カケ　ワラのスイゴをヨコ糸とし，タテをオの縄で編む。この縄は，染物屋で黒く染めてもらって使用した。その間隔は，次の背中アテの半分ぐらいである。

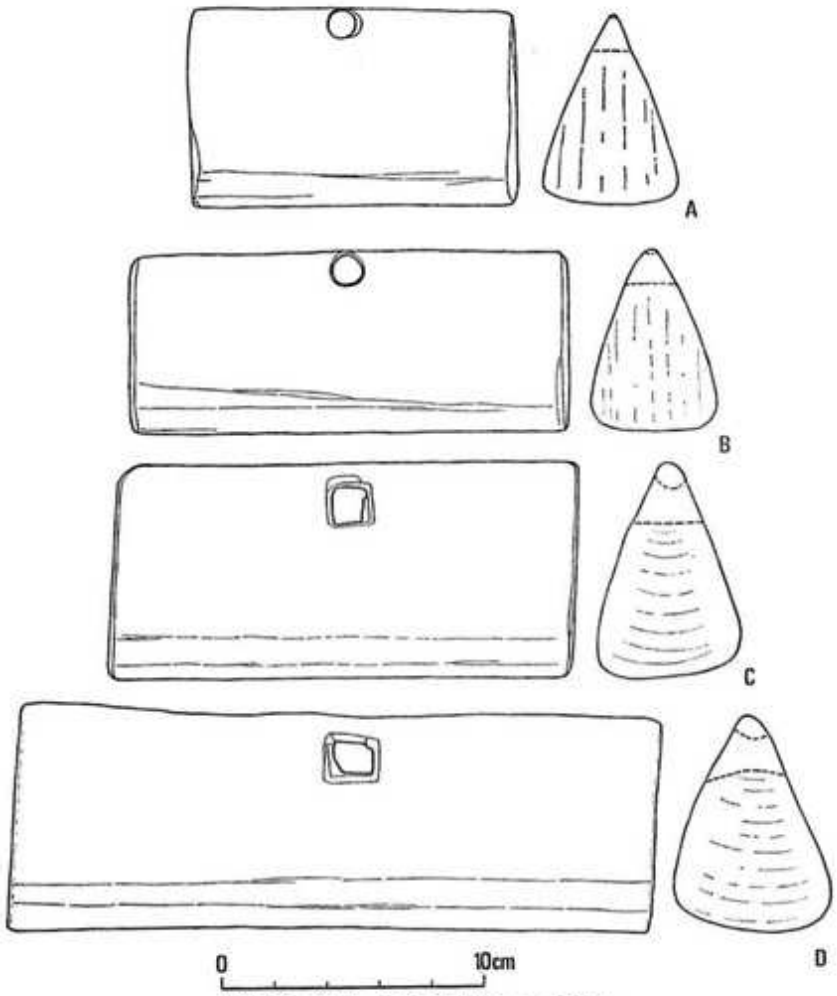
2. 背中アテ　図版64右に示すもので，全長32.3cm である。タテ・ヨコともワラである。タテ糸は6本で，その間隔は平均5.7cm である。

3. フゴ　図版65下に示すもので，高さ28.5cm である。タテ・ヨコともにワラである。タテ糸は5本みられるが，最下段のみは手編みであり，隣りとの間隔は3.8cm である。それ以外のタテ糸の間隔は平均7.3cm である。

4. 米俵　タテ・ヨコともにワラである。中央の4本のタテ糸間の間隔は7寸で，両端の5寸6分の目盛はヒレの長さの目印である。この上俵に対し下俵は，同様に7寸間隔であるが，ヒレを2，3寸短かくする。4斗俵である。

5. 雪囲いのス　ヨコはカヤで，タテ糸はワラ縄である。

3—2.　暮見部落の場合1（第9表，第64・65図，図版66～69）



第64図　暮見・鵜田家のツチノコ実測図

第9表　幕見・嶋田家ツチノコ計測値一覧表

（単位 cm および g）

	長さ	巾	厚さ	重量	備　考
A　1	12.5	7.3	4.7	256	
A　2	12.5	7.2	4.7	255	
A　3	12.5	7.2	4.4	238	
A　4	12.5	6.5	5.5	230	
A　5	12.5	6.8	5.0	253	第64図A
A　6	12.5	6.0	5.7	234	
A　7	13.0	6.8	4.2	240	
A平均値	12.6	6.8	4.9	243.7	
B　1	16.7	6.8	4.7	255	第64図B
B　2	17.0	5.2	4.5	235	
B　3	17.2	6.8	4.2	250	
B　4	17.0	6.2	4.2	235	
B　5	17.4	5.6	4.7	265	
B　6	16.2	6.7	4.3	240	
B　7	16.3	6.5	4.4	230	
B　8	16.5	6.8	4.4	250	
B　9	16.8	7.0	4.5	250	
B　10	16.7	5.6	4.2	230	
B平均値	16.8	6.3	4.4	244.0	

	長さ	巾	厚さ	重量	備　考
C　1	17.8	8.2	5.7	534	第64図C
C　2	17.2	7.8	5.8	531	
C　3	17.6	7.8	5.0	508	
C　4	17.5	7.2	5.5	415	
C　5	17.7	8.7	5.6	466	
C　6	17.4	8.2	4.8	466	
C　7	17.2	7.7	5.1	431	
C　8	17.4	7.2	5.2	424	
C平均値	17.5	7.9	5.3	471.9	
D　1	24.5	7.3	5.8	624	
D　2	24.4	6.8	5.5	572	
D　3	24.5	8.7	5.5	684	
D　4	24.4	8.3	5.4	739	
D　5	24.5	8.8	5.0	757	
D　6	24.7	7.9	5.2	748	
D　7	24.5	8.5	5.7	747	第64図D
D　8	24.7	8.2	4.8	658	
D平均値	24.5	8.1	5.4	691.1	

調査年月日　1976年10月28・29日

資料提供者　嶋田みさをさん（明治37年9月10日生）

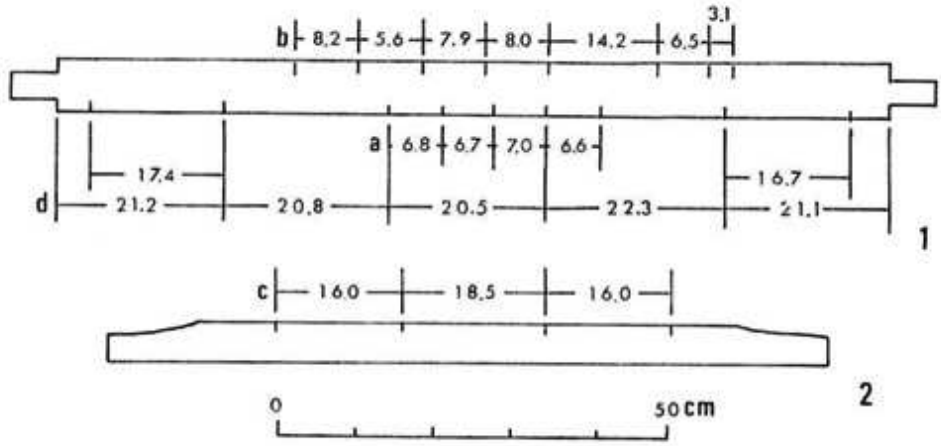
ツチノコ　大小4種ある（第64図，図版66上・67左）。小から順にA～Dとする。

Aは7点で，1点欠ける。長さは平均12.6cm，巾は平均6.8cm，厚さは平均4.9cmで，重量は平均243.7gである。

Bは10点あり，長さは平均16.8cm，巾は平均6.3cm，厚さは平均4.4cmで，重量は平均244.0gである。Aにくらべて長さが4.2cmと長いが，巾・厚さにおいてやや小さく，その結果重量はほぼ等しい。

Cは8点あり，長さは平均17.5cm，巾は7.9cm，厚さは5.3cmで，重量は平均471.9gである。Bより一まわり大きい。

Dは8点あり，長さは平均24.5g，巾は平均8.1cm，厚さは平均5.4cmで，重量は平均691.1gである。Cにくらべて，巾・厚さはほぼ等しいが，長さは7.0cm長くなり，重量



第65図　喜見・鳴田家の目盛板の図解

も増大している。

懸垂孔はA・Bが円形，C・Dが方形である。

Aは小さなコモ，Bは細かい背中アテ・米俵・カヤ製の炭俵，Cはワラ製の炭俵・粗い背中アテ・養蚕のス・フゴ，Dは雪囲いのスを編むのに使用する。

編み台　2例あるが，脚はともに寺尾例と同様に，1本の木の枝分かれした部分を，タテに割って作っている。不用意にもカヤ俵の編み台の高さを測り忘れたが，他の1例は47.5cmである。2例中鉄棒のついた1例が，木炭のカヤ俵専用である（図版66下）。他に雪囲いのスを編む場合にのみ，ハシゴに刻みをつけて編んだ。このハシゴは天井からつるして編んだ。

2本の目盛板のうち，カヤ俵専用でない例（第65図1）には，a・b・dの3種類の目盛がみられた。カヤ俵の目盛をcとする（同2）。1は全長118.0cm，脚に差し込んだ部分を除くと106cmである。巾約7cm。2は全長92.0cmで，両端の11～12cmは，上面が1.5cm削られている。厚さ1.3cm。

aは5目盛（これをホという）で，平均6.8cmである。

bも等間隔なのは5目盛で，平均8.2cmである。

cは4目盛で，中央が18.5cm，両脇がともに16.0cmである。中央の間隔は6寸，両脇は5寸5分という規定に相当する。

dは1部aと重複するが6目盛ある。米俵用で，ツチノコをつるすのは中央4目盛であるが，両端と脚の間は上俵のヒレの長さに相当する。この間隔には微差があるが，規定の7寸（21.0cm）に相当する。脚に接近する目盛は，下俵のヒレの目安であろう。

これらの間隔とツチノコの関係は，次のように対応している。

ツチノコA—間隔a？—小さなコモ

〃　　B—〃　a？—細かい背中アテ

〃　　B—〃　c—カヤ製炭俵

〃　　B—〃　　d—米俵

〃　　C—〃　　b—フゴ

〃　　C—〃　　b？—粗い背中アテ

〃　　C—〃　　c—ワラ製炭俵

〃　　C—〃　　？—養蚕のス

〃　　D—〃　　？—雪囲いのス

製　品　編まれた製品で，確認できたのは次の8種類である。間隔の狭い小形品から順に記す。

1.　背中アテ　図版68下に示す。タテ糸は6本で，その間隔は6.0cmである。

2.　フゴ　図版68上に示すもので，直径30cm。タテ糸はビニール紐で，ヨコはワラである。タテ糸は4本で，間隔平均8.3cmである。このフゴは大形で，ナスビやキュウリを入れる。豆などは小形のフゴに入れる。

3.　テゴ　フゴを大きくした形態で，図版69上に示す例は，高さ・口径ともに55.0cmである。ワラをワラ縄で編んでいる。豆がらを入れて馬に食べさせるのに使ったり，豆がらや落葉を燃やすために，田へ運ぶ時に使ったりする。タテ糸の間隔は，上より8.0，9.0，12.0，10.8，10.5cmで，これに相当する目盛板は不明である。

4.　米俵　4斗俵で，すでに記したように上俵はヒレともに7寸間隔で，下俵はヒレのみがやや短い。

5.　カヤ製炭俵　中央が6寸，両脇が5寸5分間隔であることはすでに記した。

6.　ワラ製炭俵　カヤ俵と同じであるが，さらに両端に6寸のヒレのつくことが異なる。

カヤ俵は四角で1等・2等品用，ワラ俵はまるくて3等・4等品用である（図版69下）。しかし，嶋田さんがお嫁にきた昭和12・13年頃は，カヤ俵はまだなく，すべてまるいワラ俵のみであった。

7.　養蚕のス　図版69下に示す。巾86.5cmで，ヨコはカヤ，タテはワラ縄である。目盛は5個で，その間隔は19.5cmであるが，これに相当する目盛板は不明である。

8.　雪囲のス　図版67上に示す。巾208cmで，カヤをワラ縄で編んでいる。タテ（ホ）は8本で，その間隔は26～27cmであり，ヒレ（ハナ）は14cmである。今では竹のスを，買ってくるようになった。今でも作るのはフゴぐらいである。

3—3.　暮見部落の場合2（第10表，第66・67図，図版70）

調査年月日　1976年10月28日

資料提供者　田村ハルノさん（大正2年3月16日生）

ツチノコ　大小3種類あり，小から順にA～Cとする（第9表，第66図，図版70上）。Aは8点あり，長さは平均15.4cm，巾は平均6.7cm，厚さは平均3.6cmで，重量は平均

第10表　暮見・田村家ツチノコ計測値一覧表

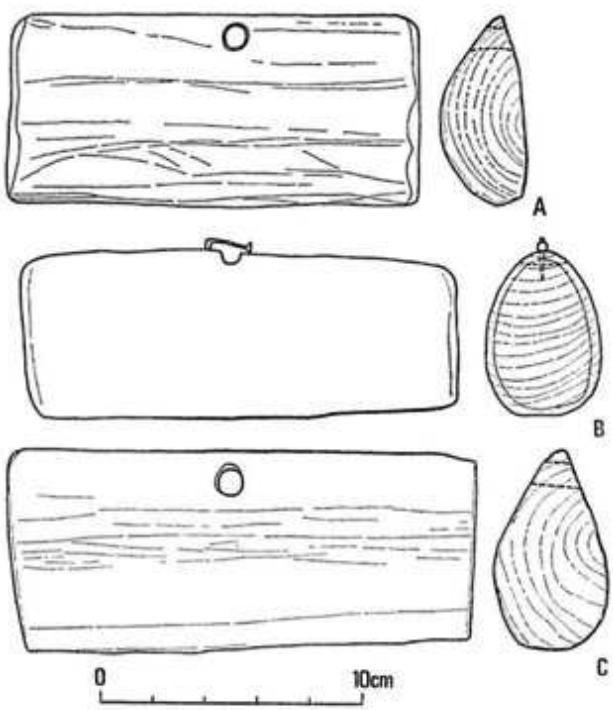
（単位 cm および g）

	長さ	巾	厚さ	重量	備　考
A　1	15.2	6.7	3.4	179	
A　2	15.0	6.0	3.8	181	
A　3	16.0	7.4	3.4	206	第66図A
A　4	15.9	7.1	3.3	213	
A　5	16.1	7.0	3.2	196	
A　6	14.3	6.2	3.9	176	
A　7	15.0	6.6	3.6	192	
A　8	15.4	6.2	4.2	192	
A平均値	15.4	6.7	3.6	191.9	
B　1	16.5	7.2	4.9	247	
B　2	16.6	6.6	5.2	233	釘
B　3	16.3	7.2	4.9	224	釘
B　4	16.8	6.8	4.8	248	釘
B　5	16.6	6.5	4.7	212	釘 第66図B
B　6	16.3	6.7	4.7	265	
B　7	16.8	7.0	4.6	224	
B　8	16.5	6.5	5.0	245	釘
B平均値	16.6	6.8	4.9	237.3	
C　1	16.7	7.5	5.6	414	
C　2	17.5	8.3	4.4	374	
C　3	18.1	7.3	4.5	354	第66図C
C　4	17.5	7.7	4.3	334	釘
C平均値	17.5	7.7	4.7	369.0	

191.9 g である。A 8を除く7点は，ミカン割りの変型で，丸太を2分割した断面を示す。

Bは8点あり，長さは平均16.6cm，巾は平均6.8cm，厚さは平均4.9cmで，重量は平均237.3 gである。パサパサした軟かい木肌で，スギ材であるらしい。8点中4点は，中央の懸垂孔が欠損したためか，釘をまげてそれに充当している。この欠損は，材質が軟かいためであろうか。

Cは4点のみで，不完全である。これらも丸太半割り型が多い。長さは平均17.5cm，巾は平均7.7cm，厚さは平均4.7cmで，重量は平均369.0 gである。1点にのみBと同様の釘がみられる。



第66図　暮見・田村家のツチノコ実測図

この他にDともいうべき極大形品があったが，現存していない。

Aはワゴ・背中アテ，Bは炭俵，Cは米俵を編むのに使用した。

これらはおじいさんの代から使われていた。

編み台と製品　脚は1組のみ現存する。寺尾・暮見1例と同様に，1本の木の枝分かれした部分を，タテに割って作っている。全体の高さは54.8cmで，作業面に相当する目盛板の高さは，目盛板1の場合は46.2cm，同2の場合は47.2cmと49.1cmである。

目盛板は第66図の2本で，アミ棒またはアンボという。

第66図1は，全長151.3cm，巾5.0cm，厚さ3.0cmである。作業面はこの3.0cm部分であり，その上面と下面に，7種類の目盛が刻まれている。第67図2は，全長145.1cmで，両端の脚に差し込む部分を除く作業面は，122.4cmである。巾9.1cm，厚さ2.0cmである。上下面に各1種類の目盛が刻まれている。合計9種類の目盛で識別されている。

a．11目盛あるが，左よりの8目盛が4.5～4.7cm間隔でまとまっている。平均4.6cm。小さいフゴ編み用。

b．6目盛あり，間隔は平均6.2cmである。背中アテ編み用。

c．7目盛あり，間隔は平均8.3cmである。フゴ編み用。

d．6目盛あるが，これはaの各2間隔を1つにまとめたものである。間隔は中央の3個が平均9.3cmで，両側が各8.8cmである。

e　5目盛あり，間隔は平均10.4cmである。大きいフゴ編み用。

f．カヤ製炭俵編み用で，これのみは鉄棒がついている。4目盛あり，平均16.6cmである。

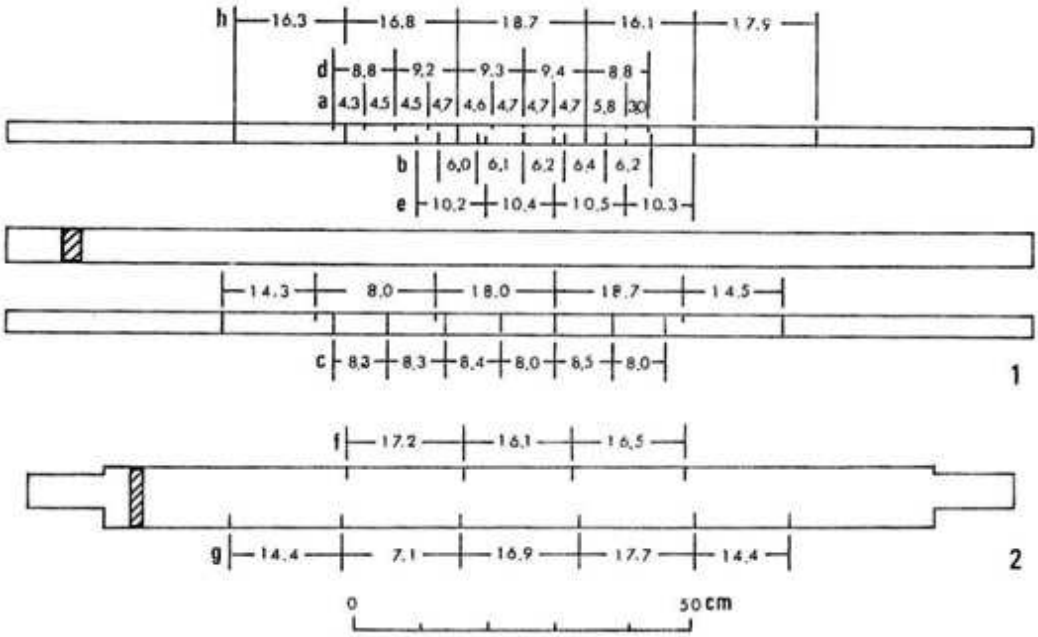
g．6目盛あり，中央の3個は17.2cm，両側は各14.4cmである。ワラ製の炭俵編み用。

h．f同様にワラ製の炭俵編み用であるが，間隔は少し異なる。6目盛あり，中央のみ18.7cmで，両側4個は平均16.8cmである。中央の18.7cmを2分割してd，さらに2分割してaの1部ができている。

i．6目盛あり，中央の4目盛間の平均は18.2cmであり，両側のヒゲの長さは平均14.4cmである。4斗俵であるが，前2者と巾が異なるので，おそらく長さが少し長いのであろう。

これらの間隔とツチノコは，次のように対応している。

ツチノコA—間隔a—小形フゴ
〃　A—〃　b—背中アテ
〃　A—〃　c—フゴ
〃　A—〃　d—ドラフゴ
〃　A—〃　e—大形フゴ
〃　B—〃　f—カヤ製炭俵
〃　B—〃　g—ワラ製炭俵
〃　B—〃　h—ワラ製炭俵
〃　C—〃　i—米俵



第67図　暮見・田村家の目盛板の図解

？ツチノコ　　D—間隔？—雪囲いのス

これらを編む仕事は男の仕事であるが，米俵や炭俵は女でも編んだ。田村さんは，夜なべで米俵を25枚も編んだことがある。しかし，雪囲いのスを編んだのはおじいさんだけであった。今はフゴしか作られていない。

3—4.　谷部落の場合（第11表，第68図，図版71～76）

調査年月日　1976年11月5日

資料提供者　出水みなさん（明治31年9月11日生）

ツチノコ　大小3種類ある（第10表，図版71・72左）。小から順にA～Cとする。

Aは12点あり，長さは平均9.5cm，巾は平均6.5cm，厚さは平均4.4cmで，重量は平均135.3gである。懸垂孔は直径6～10mmである（図版71上の右）。

Bは8点あり，長さは平均14.3cm，巾は平均6.5cm，厚さは平均4.9cmで，重量は平均253.8gである。Aにくらべて巾は同じであるが，やや厚く，長さは4.8cm長い。懸垂孔は7mmである（同左）。

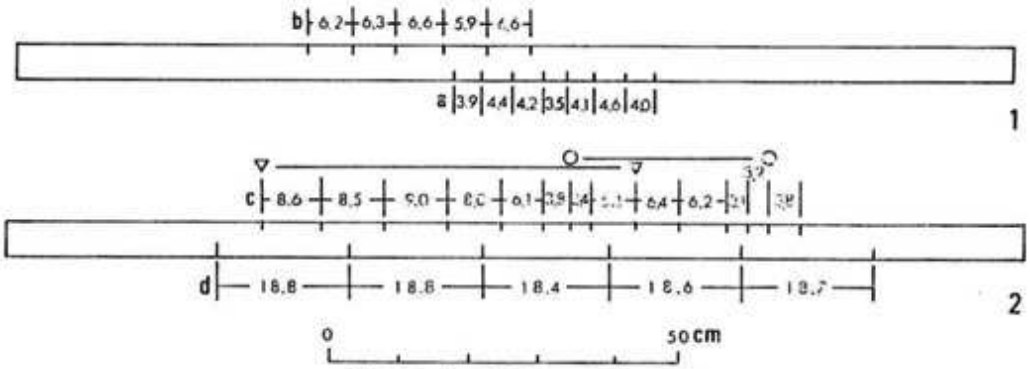
Cは16点あり，長さは平均24.2cm，巾は平均9.2cm，厚さは5.8cmで，重量は平均628.8gである。懸垂孔はノミで四角に穿たれ，サイズは1.7×1.8cmである（図版71下）。A・Bはミカン割りにして作られているが，Cは極大形品であるためであろうか，16点中ミカン割りは7点で，4分割の例が3点，2分割の例が6点みられる。

Aはフゴ・ベタベタ（寺尾・暮見部落の背中アテのこと）・背中アテ（上記2部落では作られていなかったもので，美濃などではテンゴとよんでいる），Bは俵，Cは雪囲いの

第11表　北谷・出水家ツチノコ計測値一覧表

（単位 cm および g）

	長さ	巾	厚さ	重量	備　考
A 1	9.8	5.8	4.6	157	
A 2	9.0	6.2	4.6	112	
A 3	9.5	6.2	4.3	139	
A 4	9.1	7.0	3.4	128	
A 5	9.5	6.0	4.8	118	
A 6	10.3	6.8	4.3	136	
A 7	10.2	7.0	4.1	131	
A 8	9.5	6.7	4.5	152	
A 9	9.1	6.2	4.5	140	
A 10	8.7	6.6	4.8	151	
A 11	9.1	6.6	4.4	136	
A 12	9.7	6.3	4.1	124	
A平均値	9.5	6.5	4.4	135.3	
B 1	14.5	6.6	5.2	252	
B 2	13.8	6.4	4.5	232	
B 3	14.8	6.2	4.5	243	
B 4	14.3	6.6	5.0	239	
B 5	14.8	7.1	5.2	298	
B 6	14.2	6.5	4.8	234	
B 7	14.4	6.2	5.5	284	
B 8	13.5	6.5	4.8	248	
B平均値	14.3	6.5	4.9	253.8	
C 1	24.9	8.2	6.8	650	
C 2	26.2	9.5	4.5	560	
C 3	23.0	8.7	4.7	490	
C 4	24.8	8.5	6.3	610	
C 5	24.6	9.8	5.0	590	
C 6	26.8	8.2	5.2	660	
C 7	20.5	10.1	6.9	560	
C 8	28.5	9.1	5.0	595	
C 9	20.5	6.9	5.7	440	
C 10	23.6	11.8	7.2	750	
C 11	26.0	9.2	4.6	665	
C 12	26.3	9.0	5.9	700	
C 13	20.2	9.3	6.9	580	
C 14	23.6	9.2	7.5	780	
C 15	22.3	9.2	6.6	790	
C 16	26.1	10.4	4.6	640	
C平均値	24.2	9.2	5.8	628.8	



第68図　谷・出水家の目盛板の図解

スを編むのに使用される。

編み台　脚の製法・形態は，寺尾・暮見部落例と同じである。高さは43.5cmで，作業面

の高さは38.9cmである。

目盛板は3本あり，目盛は5種類みられる。小さい目盛から順にa～eとする。

a・bは第68図1，図版73上，同下の左に示す目盛板に，c・dは第68図2，図版73下の右に示す目盛板に，eは図版72右に示す目盛板に刻まれている。

1は全長142.0cm，2は全長144.5cm，3は全長341.3cm，巾9.0cm，厚さ3.8cmである。3のみは広いところにつるし，立ったまま編んだ。

a．8目盛あり，間隔は平均4.1cmである。ベタベタ（寺尾・暮見の背中アテに同じ）編み用。

b．6目盛あり，間隔は平均6.3cmである。

c．14目盛あり，中央と右端には平均3.4cmの小目盛が刻まれている。これらを含め，○印間の各間隔は平均6.4cm，▽印間のそれは平均8.6cmである。谷部落でいう背中アテ（美濃ではテンゴ）編み用である。

d．6目盛あり，間隔は平均18.7cmである。

e．9目盛あり，間隔は平均30.8cmである。

これらの間隔とツチノコの関係は，次のように対応している。

ツチノコA—間隔a—フゴ・ベタベタ

〃　　A—〃　b—背中アテ

〃　　A—〃　c—背中アテ

〃　　B—〃　d—米俵

〃　　C—〃　e—雪囲いのス

製　品　編まれた製品は，次の6種類である。間隔の狭い小形品から順に記す。

1．ベタベタ（寺尾・暮見の背中アテ）　図版75下に示すもので，ヨコにはワラの他木綿の布を裂いて編みこんでいる。タテ糸は布を裂いた紐である。タテ糸は8本で，その間隔は平均4.1cmであり，Aとは一致する。

2．フゴ　図版75上に示す。高さ26.3cm，口径23.5cmである。ヨコはワラ，タテはワラ縄である。タテは麻糸で，その間隔は平均5.8cmである。このサイズに一致するものはないが，b・cはこれに近い。

3．背中アテ　その1はワラ製（図版74上）で，高さは38.3cm，巾は44.0cmである。タテ糸は麻糸を用い7本で，間隔は平均6.2cmで，最下段のみ3.5cmである。bにも一致するが，最下段の工夫からみて，目盛cの右寄りの○印部分が使用されているらしい。

4．背中アテ　その2はガマ製（図版74下）で，高さ40.5cm，巾51.5cmである。タテは8本で，間隔は平均6.2cmである。これも3と同じように，cを使用した可能性が強い。

5．米俵　タテ・ヨコともにワラで，4斗俵であった。目盛は6目盛みられた。その間隔は中央の3個，両脇のヒレ部分2個を含め，平均18.7cmである。その間隔は寺尾・暮見

1と異なり，暮見2に近い。

6. 雪囲いのス　2間ズといい，全長341.3cm，目盛は9目盛みられるが，間隔は平均30.8cmである。9目盛あっても，使用するのは8（ヤ）ホである。

谷部落では頼まれて雪囲いのスを編むことがあるらしく，お寺の縁先に出荷を待っている雪囲いのスを見かけた（図版76下）。

なお，ハバキなどは編まない。ガマハバキを白峰村から買った。

第4節　比較検討（第12表，第69図参照）

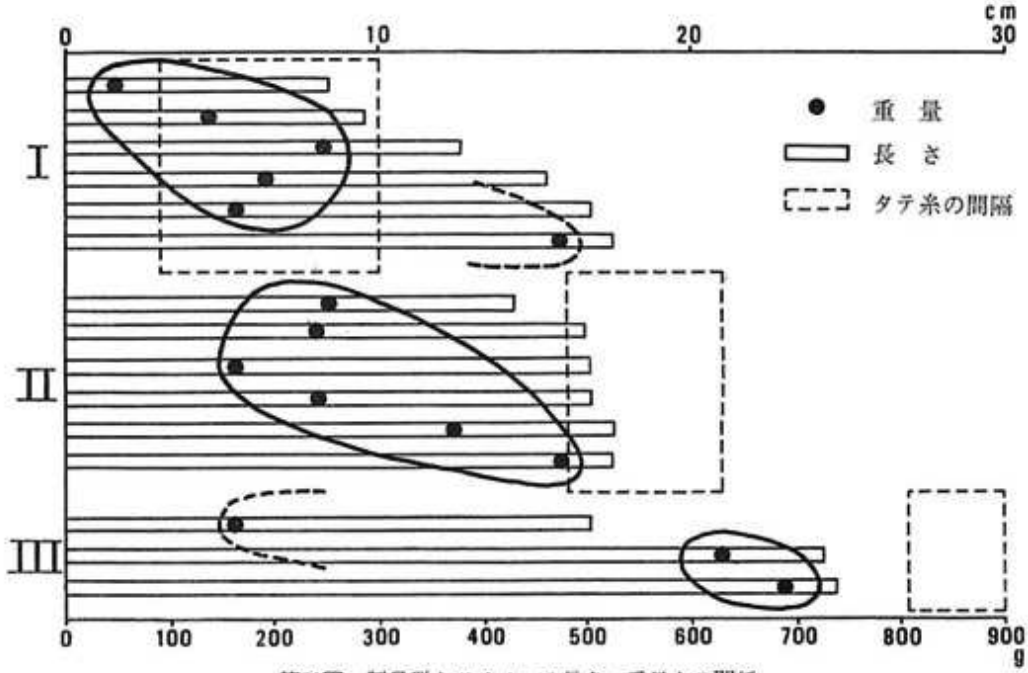
ツチノコで編まれた各種の製品は，大きさ・タテ糸の間隔・材質などで，3群に大別される。特にタテ糸は3群に明らかに集中している。

I群は，タテ糸の間隔が3～10cmのもので，前カケ・背中アテ（谷ではベタベタ）・フ

第12表　製品群とツチノコの関係

（上．長さ，cm．下．重量，g）

製品群	寺尾	暮見1	暮見2	谷
I（3～10）	A 8.3/50.8　B 16.8/164.7	A 12.6/243.7　C 17.5/471.9	A 15.4/191.9	A 9.5/135.3
II（16～21）	B 16.8/164.7	B 16.8/244.0　C 17.5/471.9	B 16.6/237.3　C 17.5/369.0	B 14.3/253.8
III（27～30）	B 16.8/164.7	D 24.5/691.1	D　?	C 24.2/628.8



第69図　製品群とツチノコの長さ・重量との関係

ゴ類・背中アテ（谷のしょいかご）・小さなコモなどである。ヨコはワラで，タテ糸はワラ縄・ビニール紐・布紐・麻・木綿などである。

Ⅱ群は，タテ糸の間隔が16～21cm（5寸5分～7寸）で，米俵・炭俵・養蚕のスなどである。ヨコにはワラの他にカヤが使われ，タテ糸はすべてワラ縄である。

Ⅲ群は，タテ糸の間隔が27～30cm（9寸～1尺）の雪囲いのスである。ヨコはカヤで，タテ糸はワラ縄である。

これらの製品群とツチノコの関係を整理すると，第12表・第69図のとおりである。

長さは製品のタテ糸の間隔と，巻きつけるタテ糸の量とに関係があり，重量はヨコの材質に関係がある。まず長さとタテ糸の間隔との関係においては，Ⅰ群はツチノコの方が長い場合が多く，Ⅱ群はかろうじて一致し，Ⅲ群ではツチノコの方が短い。したがって，Ⅲ群・Ⅱ群よりⅠ群の方が錯綜し易い。長さの絶対値においては，Ⅰ・Ⅱ群とⅢ群は明らかに異なるが，Ⅰ・Ⅱ群は重複する。しかし，13cmを境とし，Ⅰ群はそれ以下を半分含むが，Ⅱ群は含まない。

次に重量においても，Ⅰ・Ⅱ群とⅢ群には明確な差がある。Ⅰ・Ⅱ群は160～260gの間で重複するが，Ⅰ群はそれ以下を含み，Ⅱ群はそれ以上を含む。ワラ使用からカヤ使用にかけて，重量が増加する傾向にある。

例外的なのは，暮見1のⅠ群のツチノコCと寺尾Ⅲ群のツチノコBである。前者は個人差が推定され，後者は類焼による欠落が推定される。

また作業姿勢においても，作業面の目盛板上面が40～50cmで，腰を下ろして座って作業が行なわれることは，他地域と同様であるが，Ⅲ群のみは目盛板をつるし，立って作業する点は，積雪量の少ない地域ではまずみられない光景である。

以上の技術的，生態学的条件とともに重要なのは社会的条件である。前2者はいわば受動的条件であり，品物自体を必要とする能動的な条件は，社会的条件である。

このような観点からもっとも重視されるのは，Ⅲ群の雪囲いのスと，これに伴う600～700gにわたる重量をもつツチノコである。豪雪地帯であることを単的に示している。これはむしろ生態学的条件かもしれないが，近年の流通機構の変化を反映し，寺尾・暮見2ではすでに生産されなくなり，暮見1では明らかに購入するようになっている。いわばこの2部落は消費地と化し，逆に谷は自給体制に加えて生産地の様相を帯びてきている。

しかし，この傾向はも少し古くから胎動していたらしい。ツチノコによる〝もじり編み〟では最も間隔の狭いハバキを，3部落とも作っていないし，谷では石川県の白峰村から買うためであるという。ハバキにかぎらず，このような手工芸品は，勝山市市街地ではかつては白峰村から，近年では北谷から購入して販売するように変化してきている。

ハバキのタテ糸の間隔は1～2cmであり，タテ糸の間隔が錯綜するため，近接する濃飛山地では小形で重量のある河原石を用い，これをハバキ石とよんでいるところが多い。形態上もっとも腐心するこのもっとも小さいサイズを欠くために，大小の区別はあっても，

形態上はミカン割りで横型のＢａ類木製錘１種に統一されている。スダレ状圧痕でもこの１～２㎝の間隔の例は多い（渡辺1976）。

このことに関係があると考えられるが，谷を除いては，ヨコの材質にガマが使われることが少ない。そして谷でガマを使用するのは背中アテ（しょいかご）のみで，この背中アテ自体寺尾・暮見では作られていないし，同一名称でもその示す品物さえ異にしている。このあたりに２地域の伝統の違いを垣間見ることができる。

その次に注目されるのは，各種の使い分けが行なわれていたのにかかわらず，少なくとも寺尾・暮見では，現在ではフゴ以外ほとんど作られていないことである。これは養蚕・製炭の衰退と，カマスからポリ袋へと変化した米の運搬方法の変化に大きな原因がある。また全般的な農業の後退，プラスチック製品などの氾濫などが指摘される。

しかし，これらの近年の社会的変化を逆に，縄文時代まで遡ると，米作・養蚕・製炭は無縁になり，残るのはフゴのみとなって，外見上は現在の様相と一致してくる。しかし，材質のワラ自体も縄文時代にはないのであるから，他の材質を考慮しなければならない。これについては本稿の主題を離れるので，別の機会に論じることとし，省略する。

第５節　礫石錘の用途

以上の検討の結果，やっと本遺跡の礫石錘について，その用途を考察する段階となった。

本遺跡の礫石錘は，60g台をピークとする重量分布を示し，平均66.2g，長径平均6.0㎝，短径平均4.4g，厚さ平均1.9㎝であり，本地域のツチノコと比較すると，もっとも小さく軽い寺尾のツチノコＡのみが，かろうじてこれに匹敵する。したがって，その用途は，フゴとよばれる腰カゴがもっと無理のない推定と考えられるのである。ハバキや小さなコモなども考えられるであろう。

石川県下では，打製石斧と礫石錘は一緒になって中期中葉に急増することが指摘されており，高堀勝喜氏によってサケ・マス漁などの漁網錘と考えられている（高堀1965）。

しかし，この中期中葉を信州方面からの半栽培段階の影響と考える筆者の立場からは，打製石斧とともに，アク抜きをすれば大量に植物デンプンを確保し，貯蔵できるトチやドングリの堅果類の採取用具と考えれば，両者の関係は必然性をもってくるのであるが，如何であろうか。〝もじり編み〟の圧痕であるスダレ状圧痕の増加がこの時期頃からであることも，あわせて注目されるのである（渡辺1976）。

堅果類はまた十分に乾燥させる必要があり，そのためのムシロまたはコモが必要である。これらの重量は，Ⅱ群の俵類に相当する。コモを袋状にしたものが俵である。本地域のツチノコによる製品のなかに，この大形のコモがみられないのは，別にムシロ編み機があるからであろう。

礫石錘にこれに相当する重量がないのは不思議であるが，自然石または木製錘を使用した可能性を考えておきたい。この意味で注目されるのは，1例のみしか出土していない編物石である。これは重量485gで，Ⅱ群とⅠ群の重い部分に相当する。形態上たまたま中央に1カ所の溢れ部があり，有効に利用されたのであろう。

この問題は，本地域における類例の増加をまって，さらに検討を加えていきたいと思う。

引 用 文 献 目 録

赤星直忠・岡本　勇，1957：茅山貝塚。横須賀市博物館研究報告，人文科学1．1～30頁。横須賀。

飯田高校考古学班，1974：飯田市竜丘桐林前ノ原遺跡調査報告。長野県考古学会誌，17．1～18頁。松本。

井上義安・他，1975：茨城県おんだし遺跡。大洗町教育委員会。

上野　章・酒井重洋・神保孝造，1976：富山県福光町・城端町立野ケ原遺跡群第四次緊急発掘調査概要。富山県教育委員会。

――・山下正敏・岡上進一・松本幸治，1977：富山県福光町・城端町立野ケ原遺跡群第五次緊急発掘調査概要。富山県教育委員会。

上野与一，1953：石川県江沼郡橋立町の押型繩文（予報）。石川考古学研究会々誌，5．24頁。金沢。

上山春平・編，1969：照葉樹林文化論。東京・中公新書。

大野市教育委員会，1974：大野市右近次郎遺跡発掘出土品展パンフレット。大野。

大野郡教育会，1911：福井県大野郡誌。

堅田　直・編，1966：京都府丹後町平遺跡。奈良・帝塚山大学考古学研究室。

勝山市教育委員会，1970：勝山の歴史。勝山。

木下哲夫，1977：県内出土の押型文土器。破入遺跡．47～49頁。勝山。

小島俊彰，1974：北陸の繩文中期の編年―戦後の研究史と現状。大境，5．31～53頁。高岡。

――　1977：珠洲郡内浦町松波新保遺跡発掘資料再見。石川考古学研究会々誌，20．37～54頁。金沢。

――・西井龍儀・山本正敏，1973：富山県福光町鉄砲谷・向山島・是ケ谷遺跡発掘調査報告書。富山県教育委員会。

――・他，1972：富山県史。考古編。富山。

小杉高校地歴班，1952：串田新遺跡調査報告書。富山県大門町。

小林則夫，1974：植物。勝山市史，1．57～96頁。勝山。

佐々木高明，1971：稲作以前。ＮＨＫブックス。

佐藤甦信・編，1975：前の原・塚原。飯田市教育委員会。

佐野光臣，1974：地形と地質・気候と生活。勝山市史，1．3～56頁。勝山。

神保孝造・岡上進一・松本幸治，1977：富山県砺波町嚴照寺遺跡緊急発掘調査概要。富山県教育委員会。

高堀勝喜，1952：珠洲郡松波町新保遺跡の調査。石川考古学研究会々誌4．7～12頁。金沢。

――，1965：北陸。日本の考古学，Ⅱ・繩文文化．133～151頁。東京・河出書房。

巽　三郎・中村貞史，1969：鷹島遺跡発掘調査報告書。和歌山県広川町。

坪井清足・他，1956：滋賀県石山貝塚研究報告書。京都。

富山県教育委員会，1965：極楽寺遺跡発掘調査報告書。富山。

中村貞史，1971：地の島遺跡発掘調査概要。和歌山県教育委員会。

中司照世・編，1977：鹿谷本郷遺跡。勝山市埋蔵文化財調査報告書，1。勝山。

西井龍儀・上野　章・柳井　睦，1975：富山県福光町・城端町立野ケ原遺跡群第三次緊急発掘調査概要。富山県教育委員会。

仁科　章・編，1977：破入遺跡。勝山市埋蔵文化財調査報告書，2。勝山。
沼　弘・広嶋一良，1972：福井県における縄文式土器集成。福井県考古学研究会。
橋本　正，1968：回転押型文土器の問題—富山県の場合。大境，4．36～57頁。高岡。
——，1973：富山県大沢野町直坂遺跡発掘調査概要。富山県教育委員会。
——，1976：富山県大沢野町直坂Ⅱ遺跡発掘調査概要。富山県教育委員会。
氷見高校歴史クラブ，1964：富山県氷見地方考古学遺跡と遺物。氷見。
平田天秋，1975：尾口村御所の館縄文遺跡。石川県教育委員会。
藤森栄一，1970：縄文農耕。東京・学生社。
前田保夫，1977：照葉樹林の出現と拡大。考古学ジャーナル，138．2～5頁。東京。
村田文夫，1970：関東地方における縄文前期後半期の生産活動について。古代文化，22—4．75～88頁。京都。
柳井　睦・神保孝造，1975：富山県立山町吉峰第4次緊急発掘調査概報。富山県教育委員会。
——・池野正男・久々忠義，1977：富山県大沢野町布尻遺跡緊急発掘調査概要。富山県大沢野町。
山岡栄子，1972：正木原Ⅰ遺跡。長野県中央道文化財包蔵地発掘調査報告書，高森町その1．73～76頁。松本。
吉田　森，1963：三室住居址の概要。福井県文化財調査報告，13。福井。
四柳嘉章・編，1972：甲・小寺遺跡。石川県穴水町教育委員会。
若狭考古学研究会，1972：阿納塩浜遺跡。小浜。
渡辺　誠，1973：縄文時代の漁業。東京・雄山閣。
——，1975：縄文時代の植物食。東京・雄山閣。
——，1976：スダレ状圧痕の研究。物質文化，26．1～23頁。東京。
——，1978：低地の縄文遺跡。古代文化，30—2．37～43頁。東京。
——・編，1975：京都府舞鶴市桑飼下遺跡発掘調査報告書。舞鶴市教育委員会。
——・編，1976：福井県勝山市古宮遺跡第1次発掘調査概報。勝山市教育委員会。

謝　辞

本遺跡の発掘調査および報告書の作成に至るまでの過程では，いつものことながら多くの方々の御協力を仰いでいる。

まず発掘調査全般に亘って，福井県教育委員会文化課，勝山市教育委員会，および福井県勝山土木事務所よりは，多大なる御配慮を仰いだ。とりわけ県文化課の中司照世氏，市教委の皿沢賢一氏の御尽力には大なるものがある。

発掘作業に当っては，調査補助員および作業員として，下記の大学生および地区民の方々が，多数参加協力された。(敬称略)

調査補助員　奈良崎和典・佐々木広充・大河憲二（同志社大学），南　博史・河田智子・山口卓也（関西大学），上野修一（立命館大学），松井　章・小林和彦（東北大学），中山清隆（慶応義塾大学），中山修宏（立正大学），寺西健一（鳥取大学），栗田勝弘・黒田裕司（別府大学），酒井智子・三屋厚子・山根恵子（勝山高校）。

作業員　嶋田みさを（暮見），川岸イト・田中秋子・長谷川五右エ門・長谷川静子・福本しずを・前川ゆきを・前田はつえ・前田はなゑ・前田美津子（寺見），池田はるえ・梅原としを・木下みつ・水谷はなゑ・森口はるゑ（浄土寺），中村　薄・梨木藤吉・梨木　実（滝波）。

宿舎の松原旅館でも，大変お世話になった。

民俗資料の調査に際して，前田吉左衛門・嶋田みさを・田村ハルノ・出水はなの諸氏よりは，種々有益な御教示を仰いだ。

出土品の整理作業から報告書作成準備作業に当っては，分担執筆された諸氏の他に，奈良崎和典・佐々木広充・河田智子・徳永裕の4氏には，多大な御協力を頂いた。

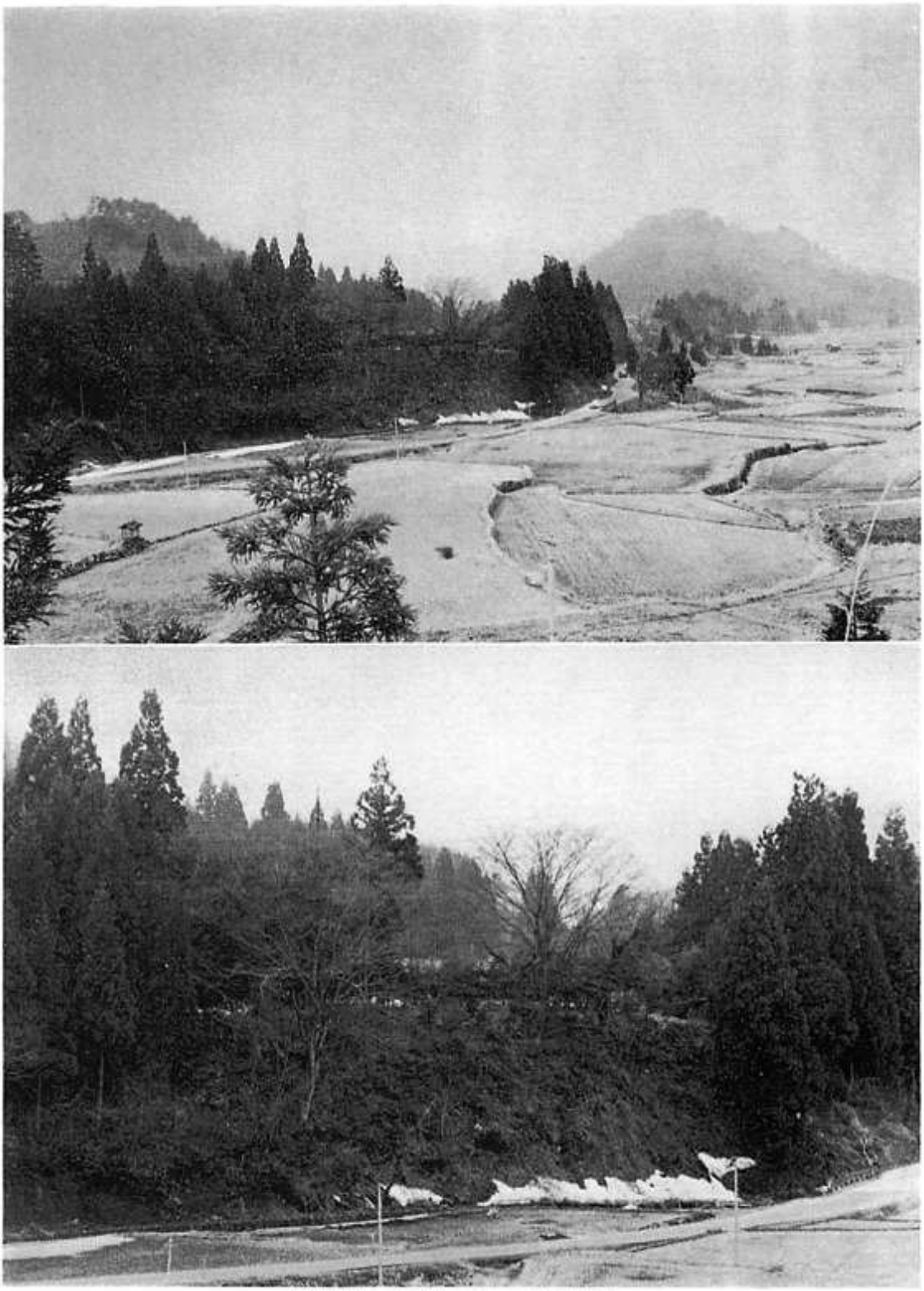
報告書の作成に際しても，下記の諸先生・学兄より多くの御教示を仰いだ。全般的には角田文衛（平安博物館館長），石質鑑定については亀井節夫（京都大学理学部教授），民俗資料については角山幸洋（関西大学経済学部教授）の3先生，関連遺跡ついては中司照世（福井県文化課），関連資料については小島俊彰（金沢美術工芸大学講師）・小嶋芳孝（石川県立郷土館）・橋本　正（富山県埋蔵文化財センター）・中村貞史（紀伊風土記の丘資料館）・片岡肇（平安博物館講師）の諸学兄。

とりわけ畏友小島俊彰氏の御教示と友情は，銘記させて頂きたい。

以上の方々の多大な御協力に対し，心より御礼申し上げる次第である。

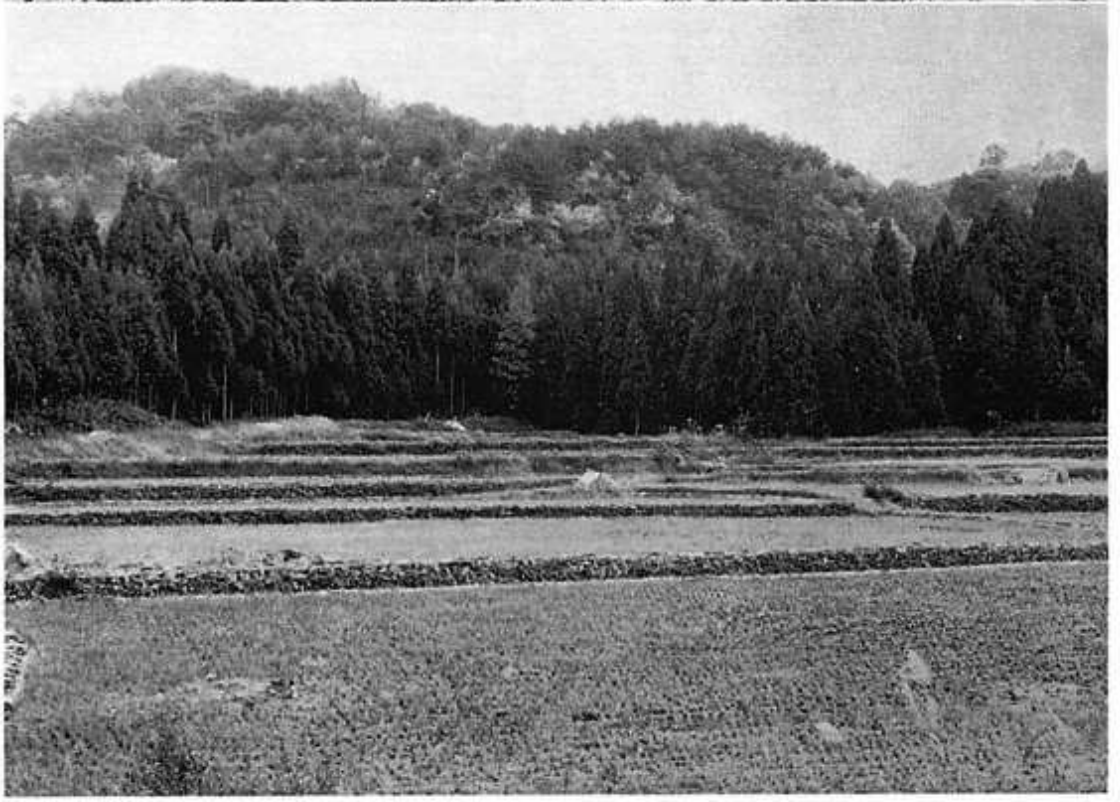
（渡辺　記）

図　　版



遺跡遠景　上:東北方より，下:同近接.

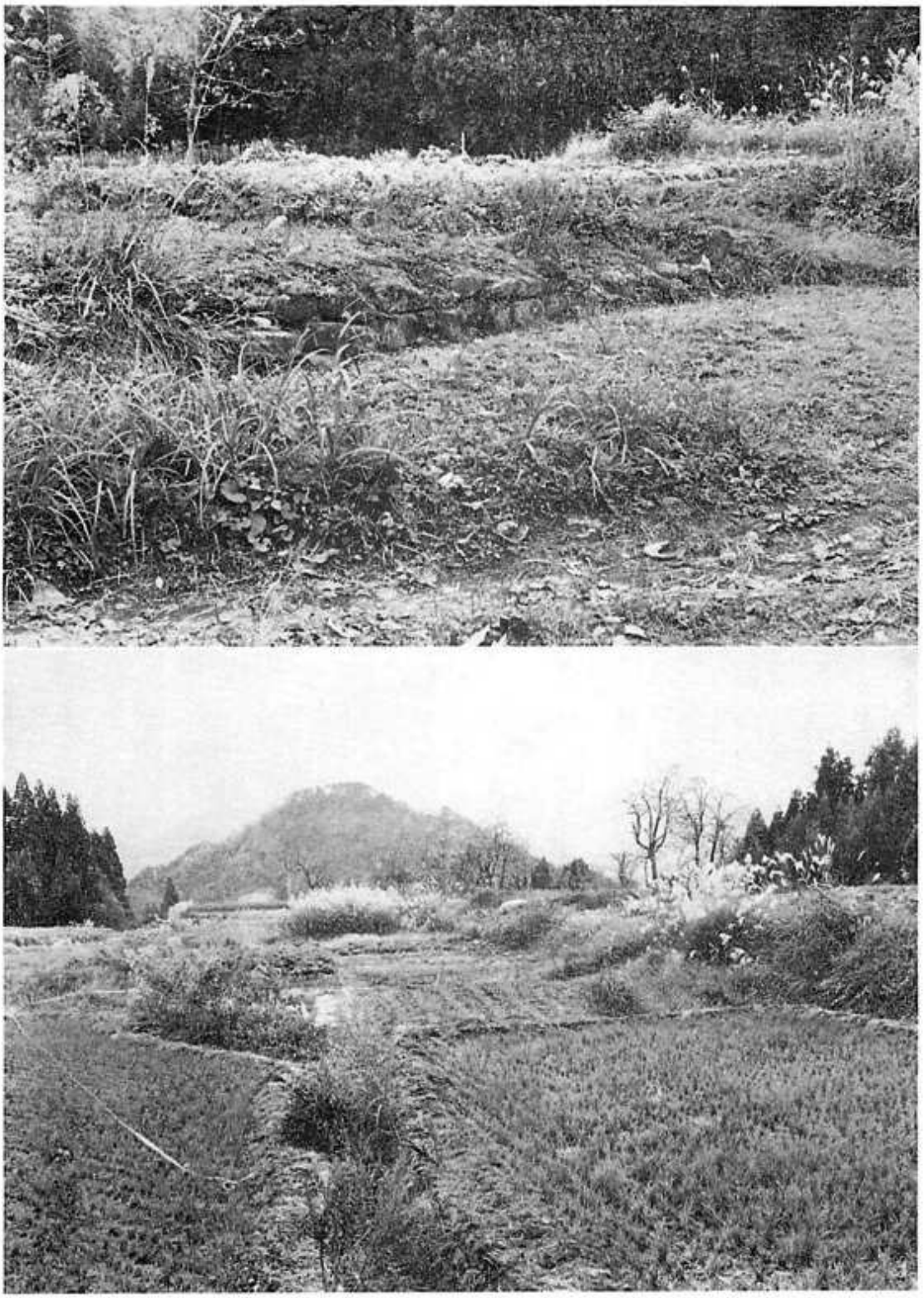
図版二



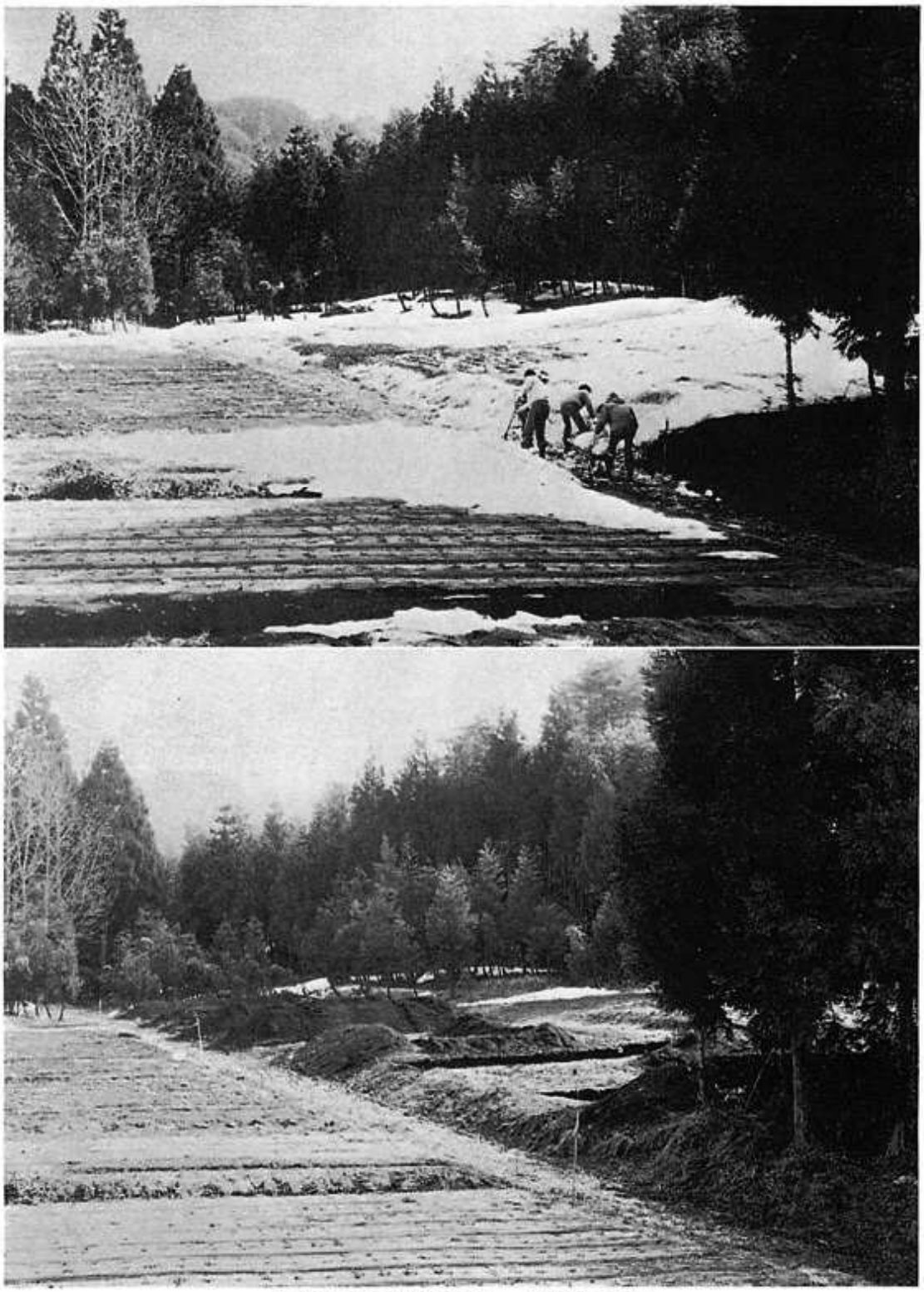
上：自然湧水点．　下：遺跡より自然湧水点のある林を望む．

上:旧北谷道脇の塚，西より。　下:もと同所にあったお地蔵様。

図版四



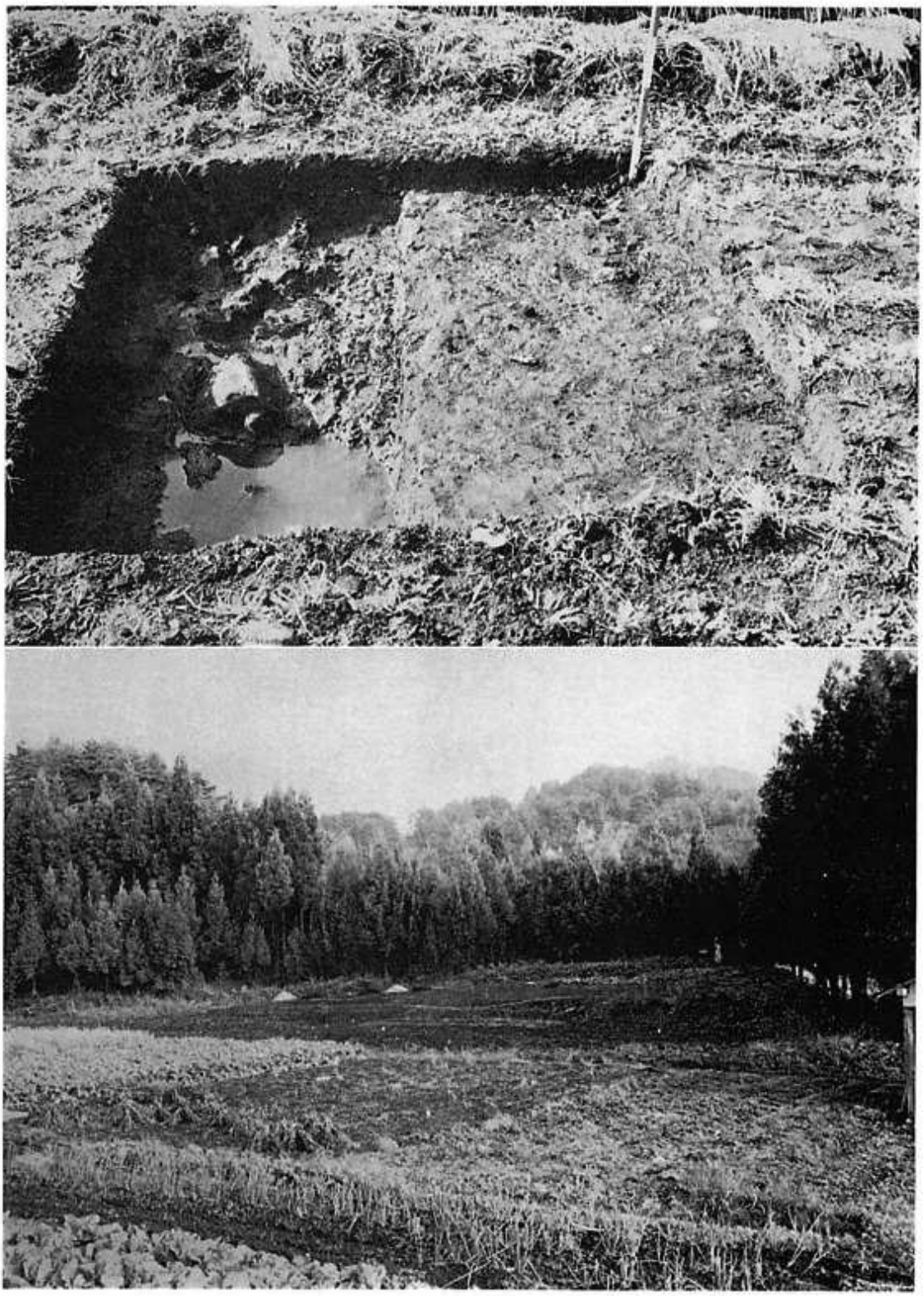
三叉路付近人家跡　上:三叉路西側，下:同南側.



上：第1次調査開始時の状態．　下：同終了状態．

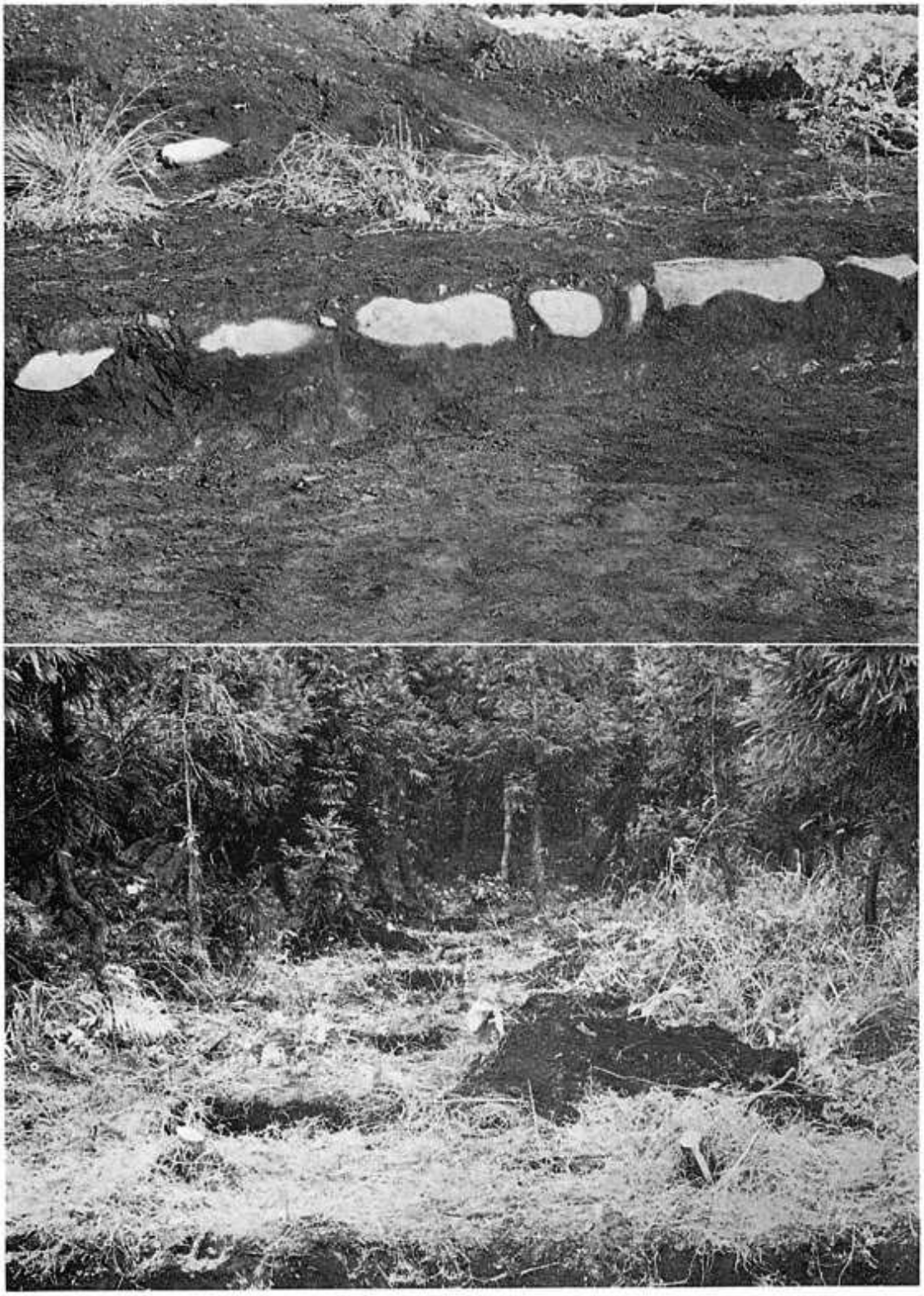
図版六

上:発掘終了後のⅡトレンチ，南より．　下:発掘終了後のⅨ～Ⅺトレンチ，東より．

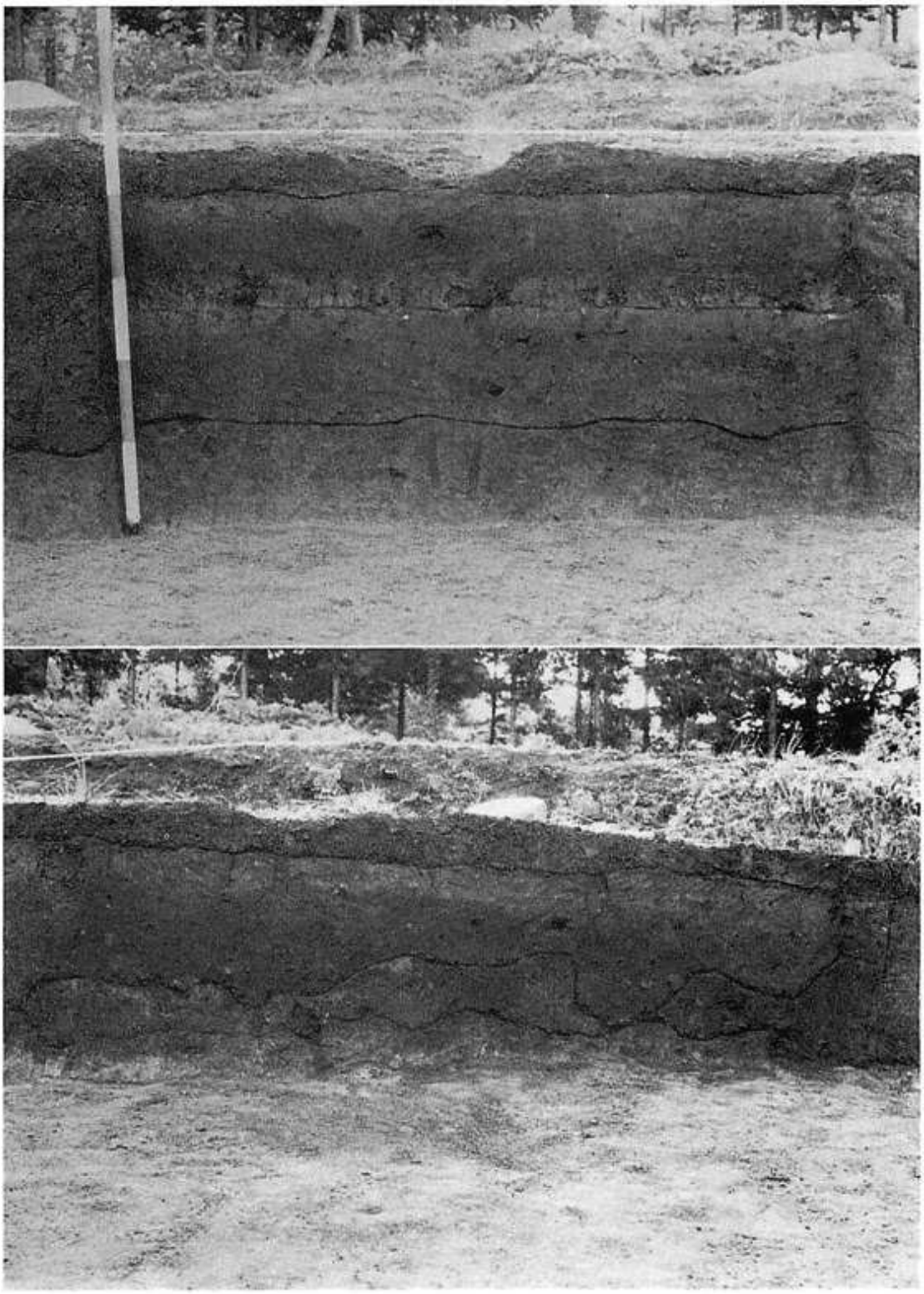


上:発掘終了後のIXトレンチ，南より． 下:第2次調査開始時の遺跡全景，西北より．

図版八

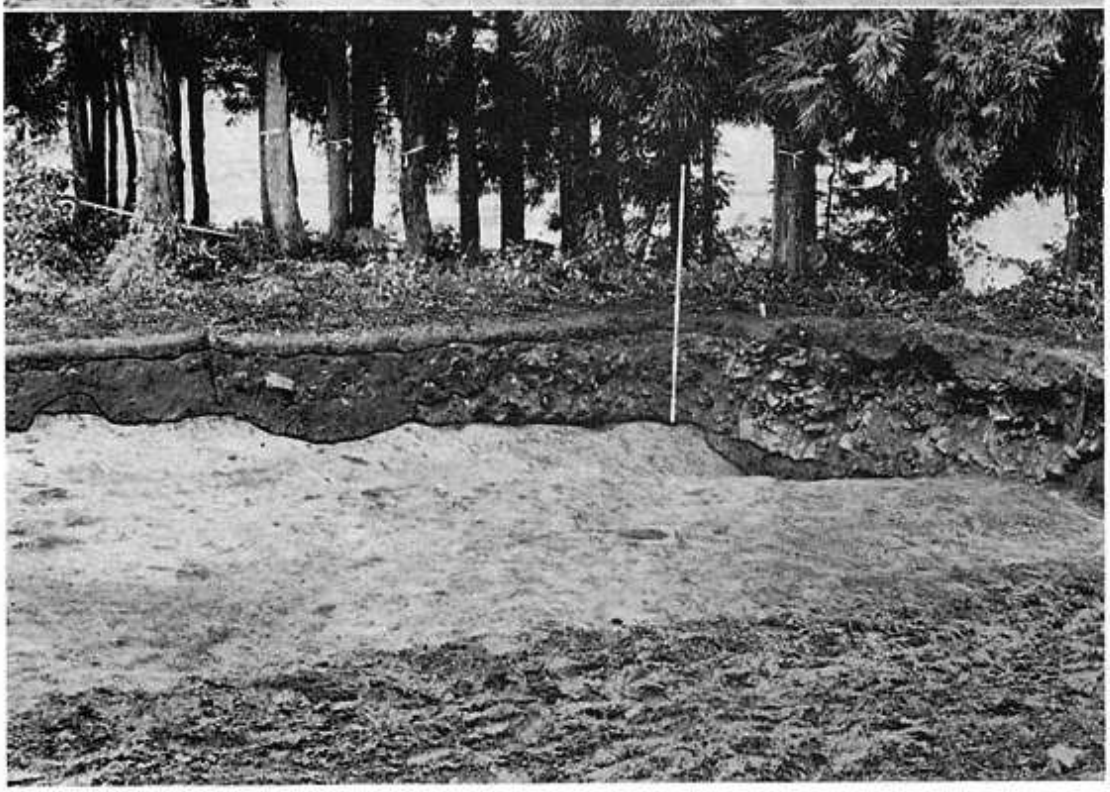


上:道路敷の石塊.　下:東部杉林中発掘光景.

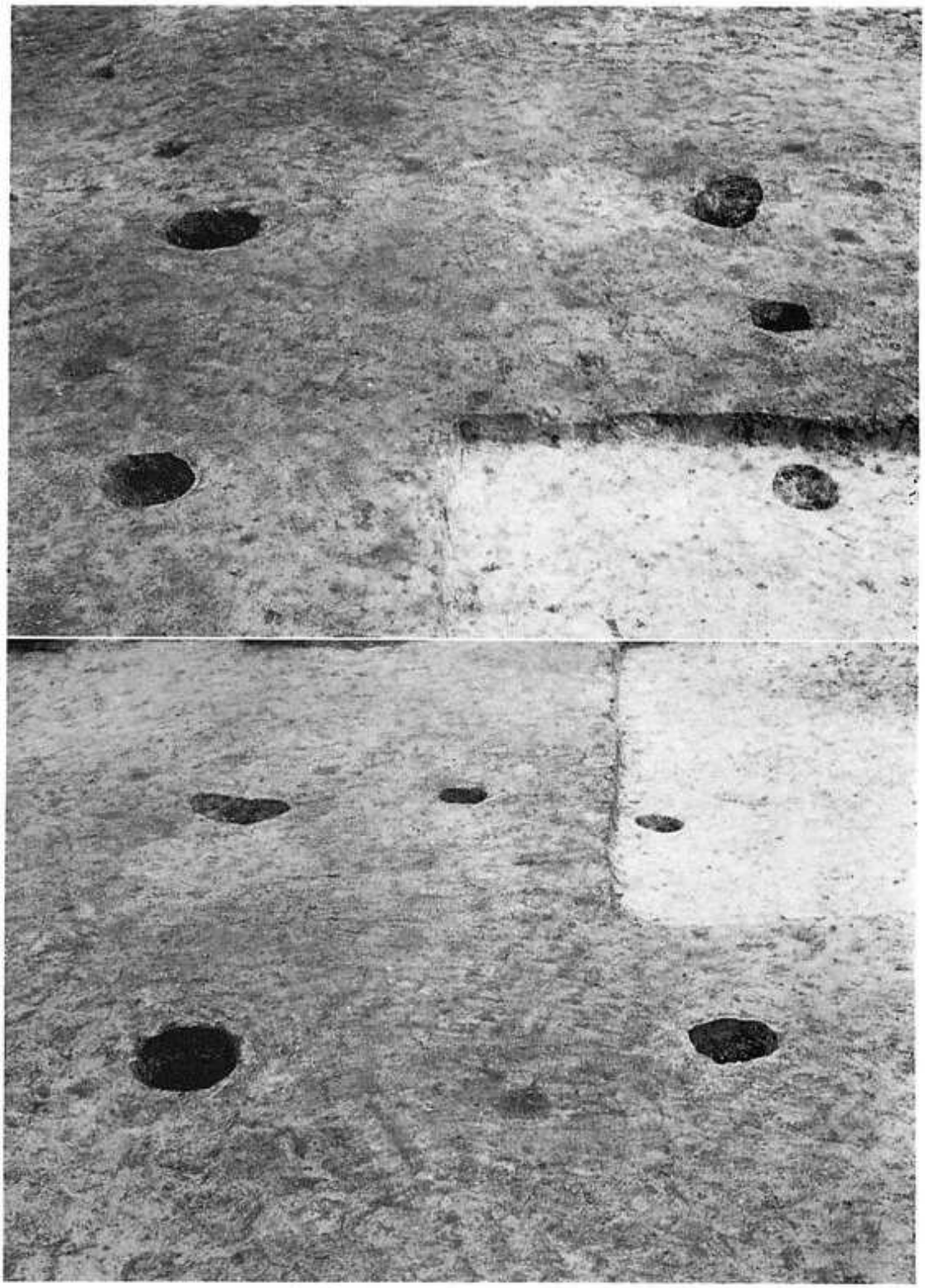


上:標準的な層序，フ３区南壁．　下:撹乱の著るしい層序，ミ３区南壁．

図版十

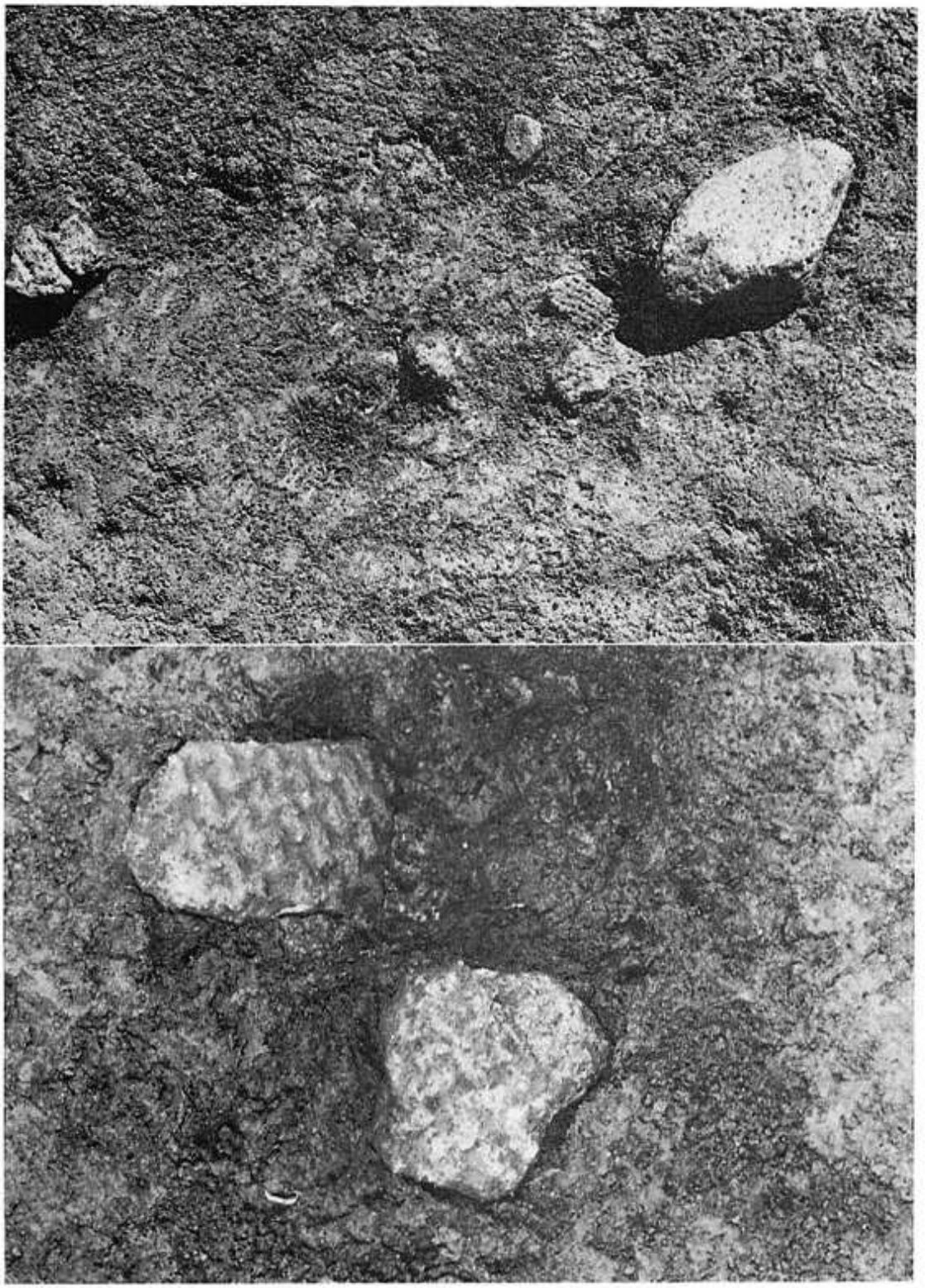


上:礫層断面，Ⅱ1～3区西壁．　下:礫層発掘終了光景，東北より．

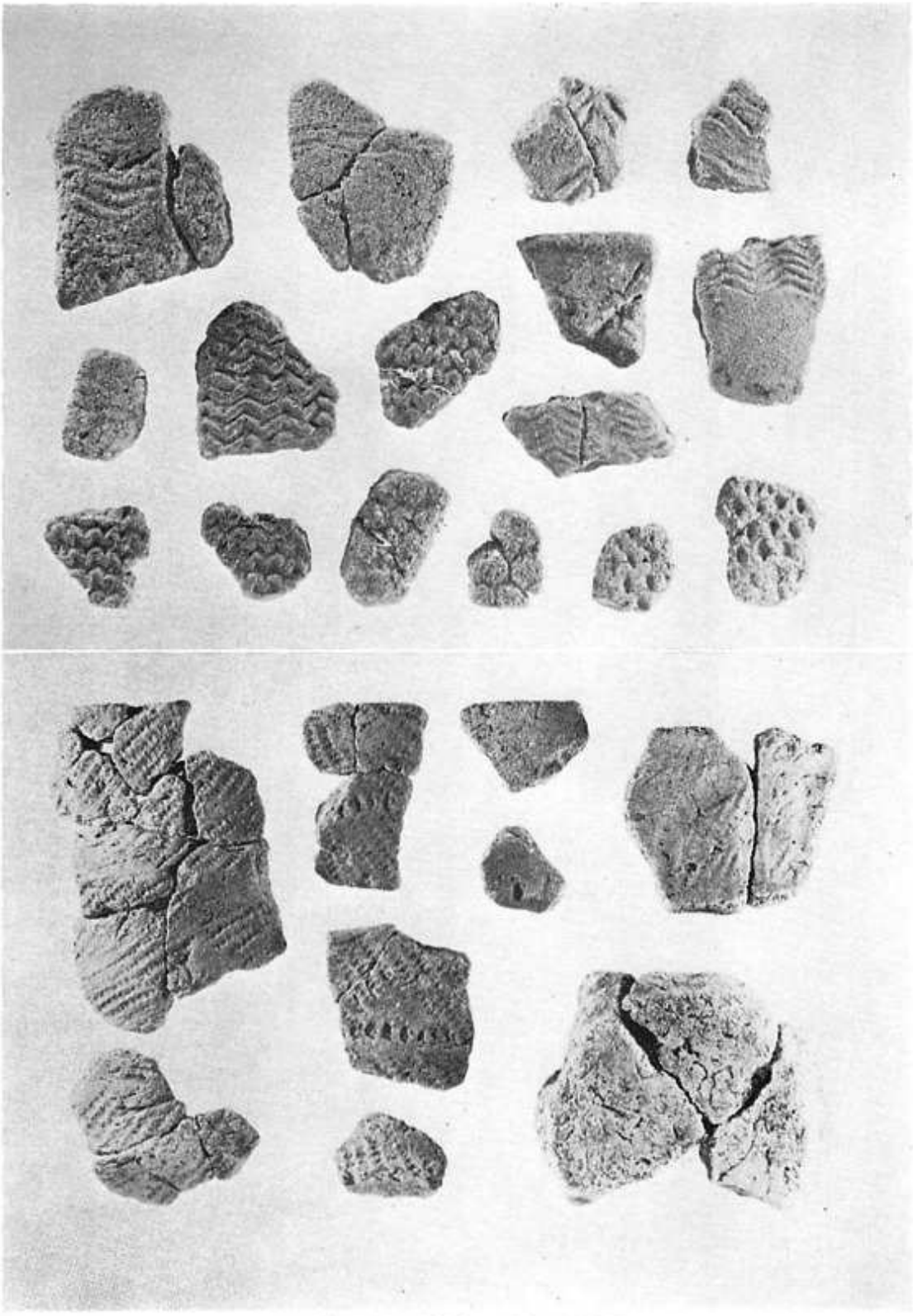


柱穴様ピット　上:北より，下:東より，

図版 十二

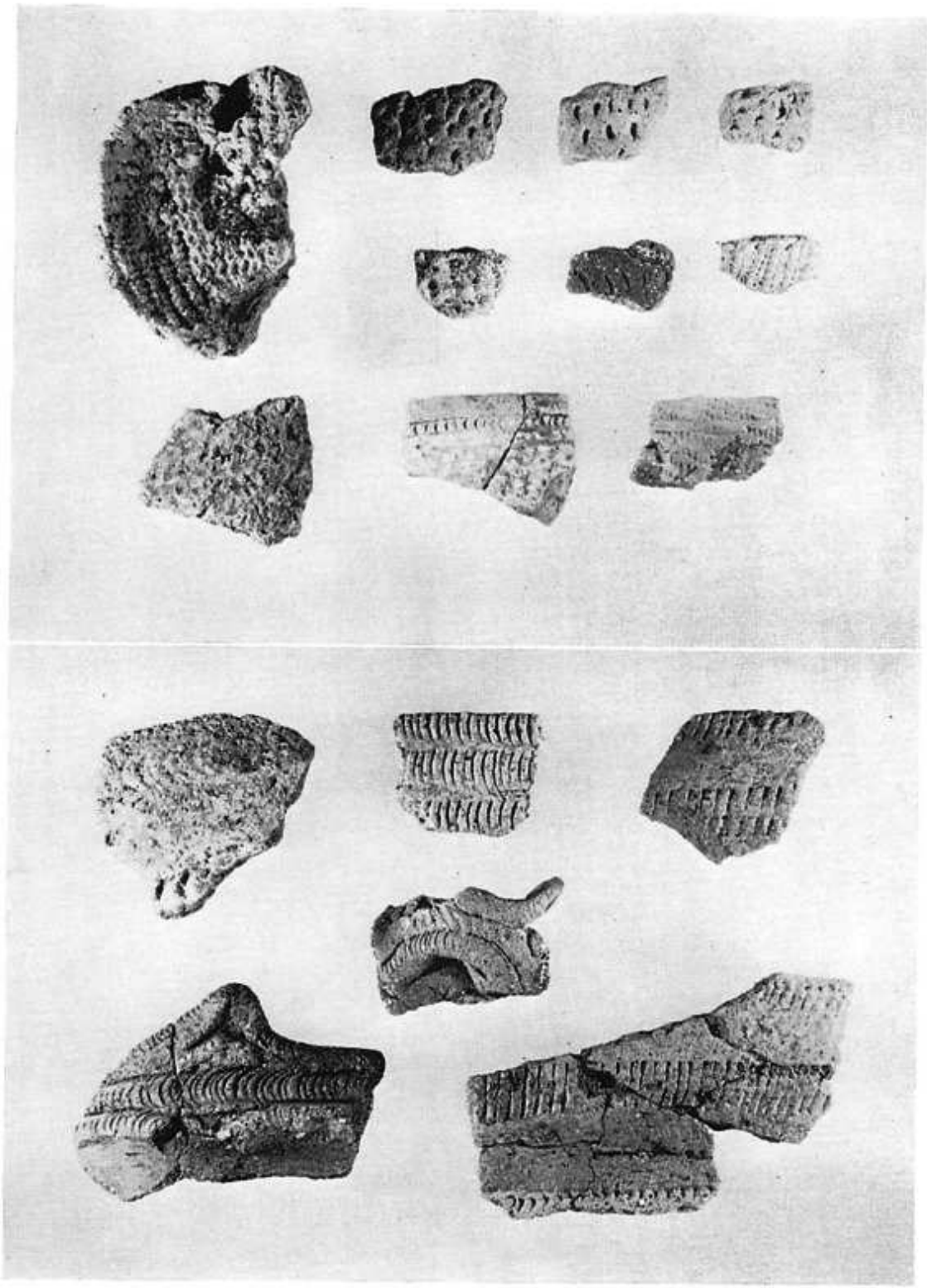


I群土器出土状態　上:ヘ4区,　下:同近接.

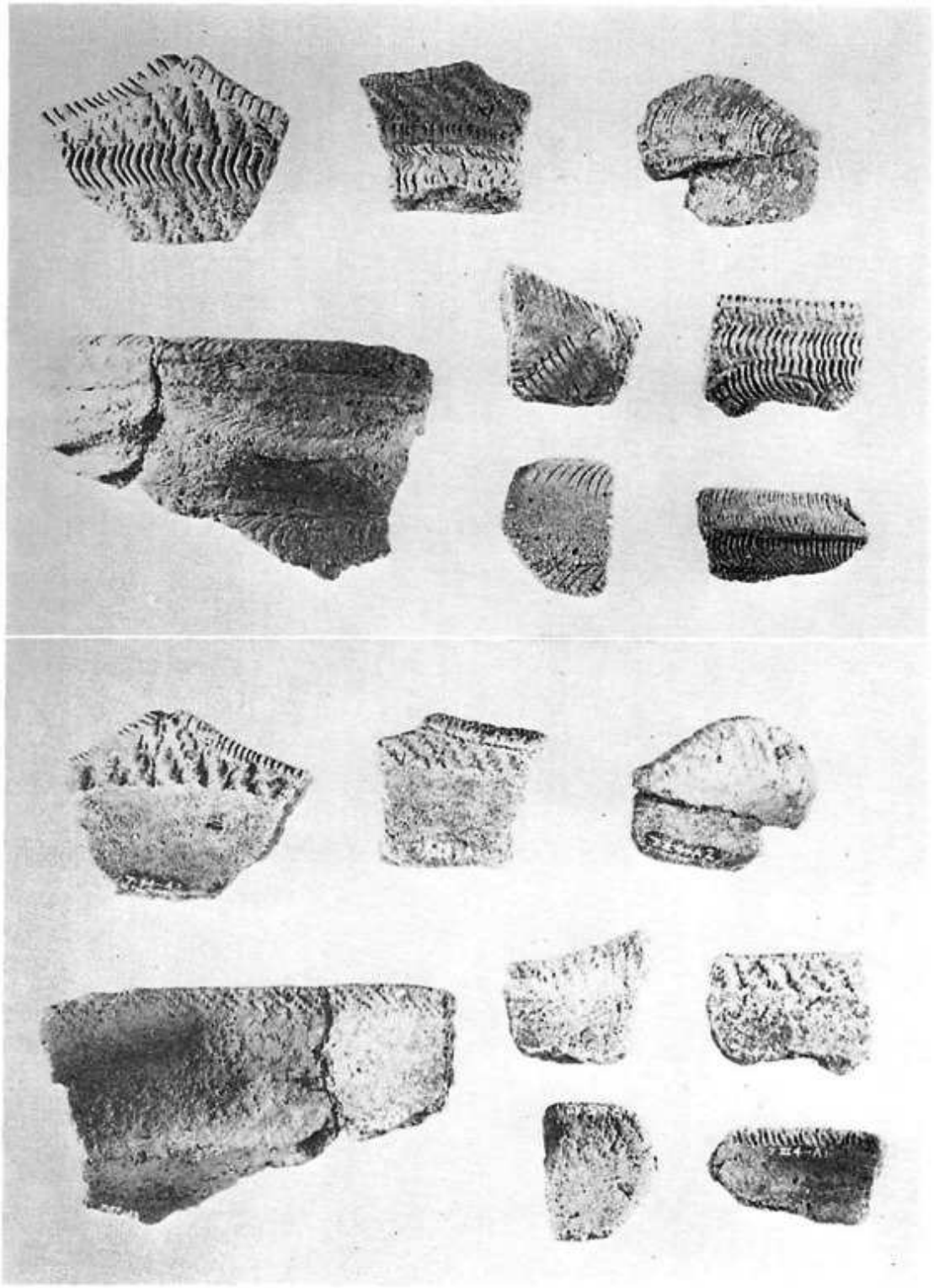


上：Ⅰ群土器（ほぼ実大），　下：ⅡA類土器．

図版十四

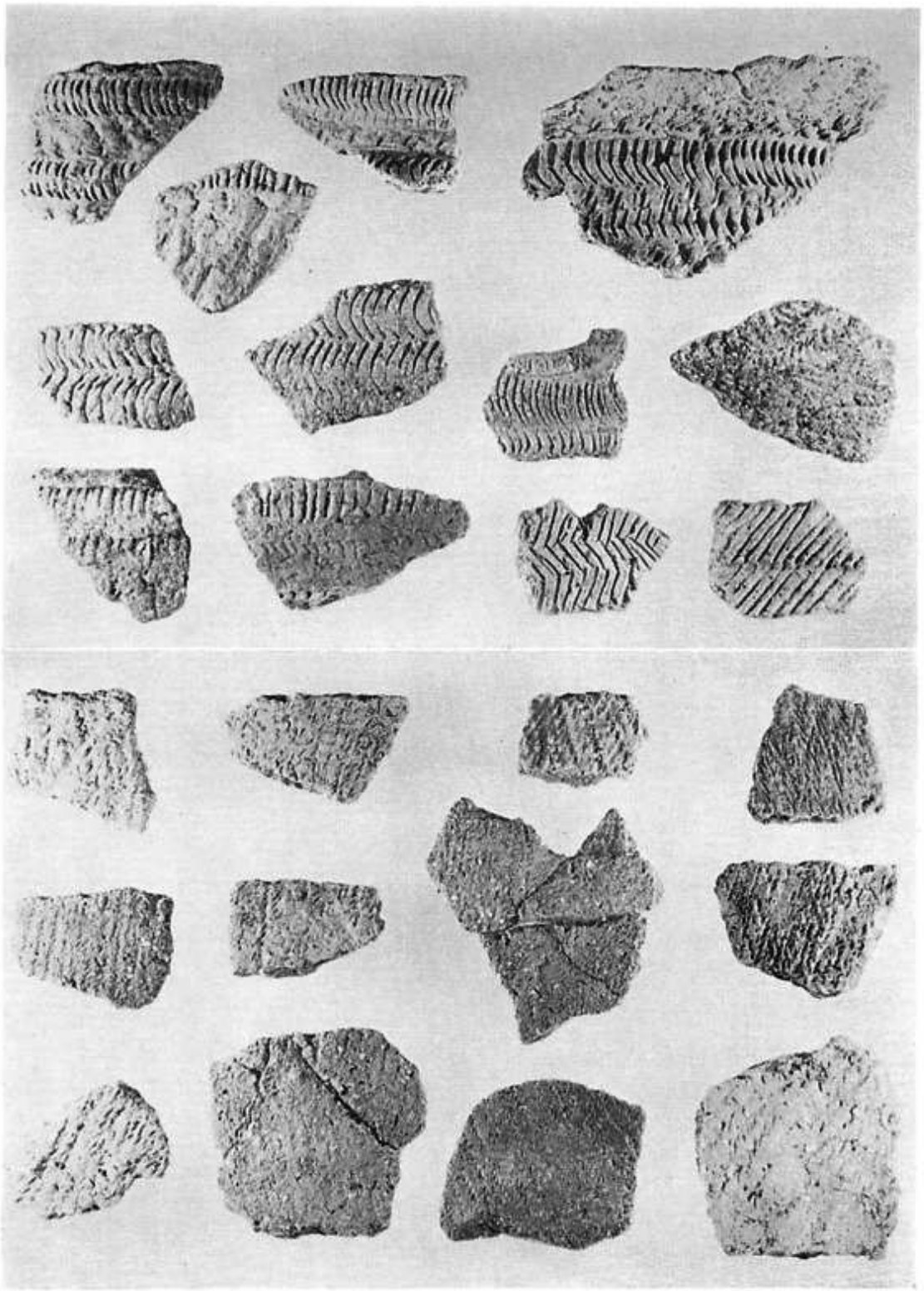


上：ⅡB～ⅡE類土器．　下：ⅢA類土器．

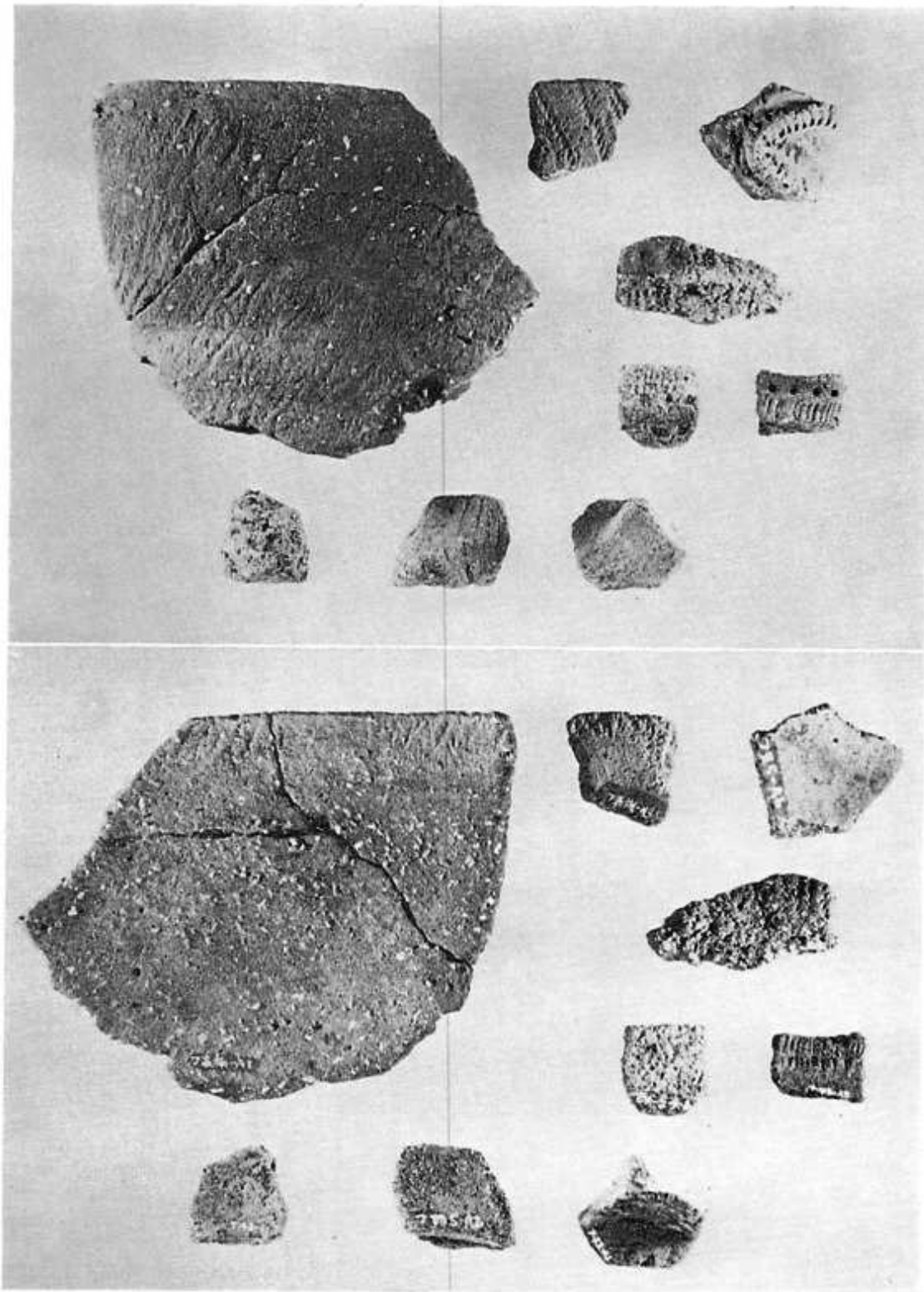


ⅢA類土器　上：表面，　下：裏面．

図版十六

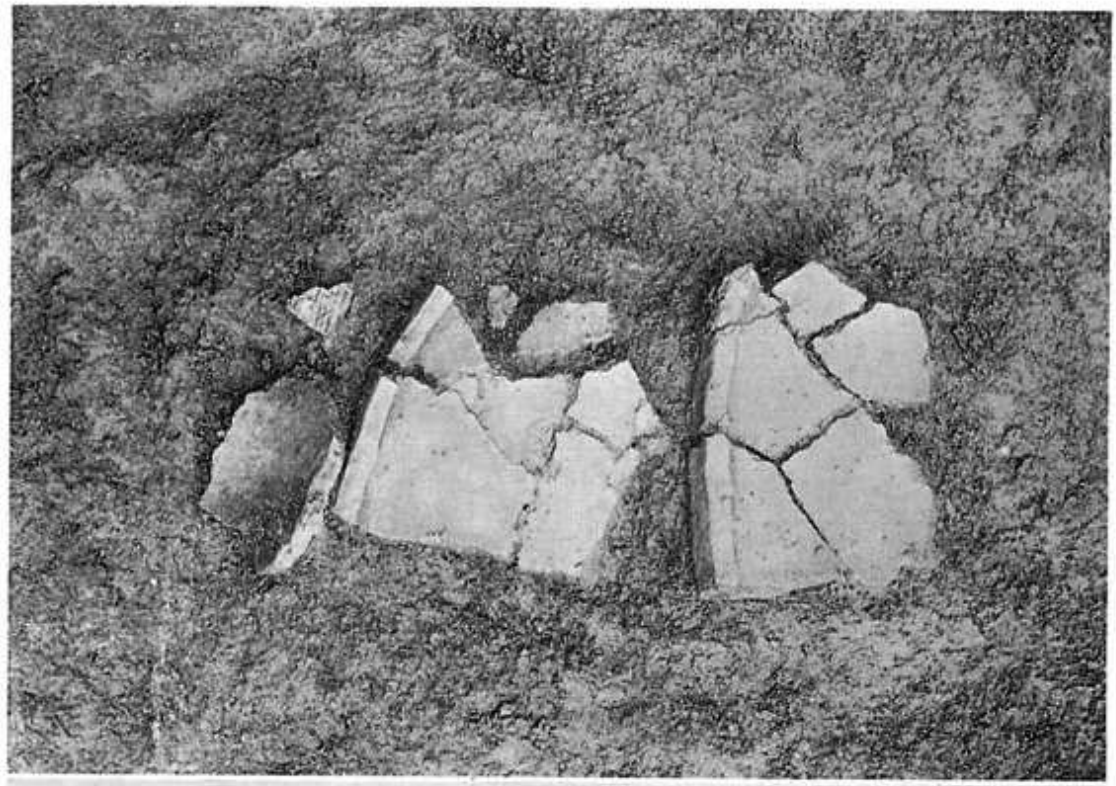


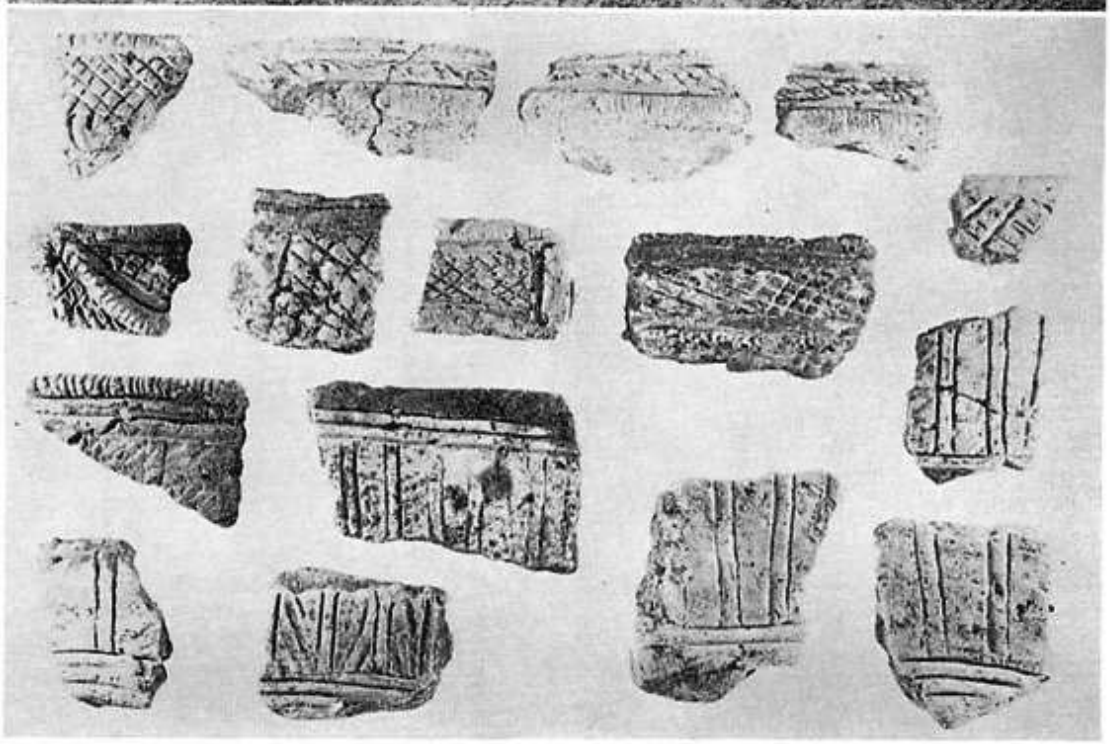
上：Ⅲ A 類土器．　下：Ⅲ C 類土器．



ⅢB・ⅢC類土器　上：表面，　下：裏面．

図版十八

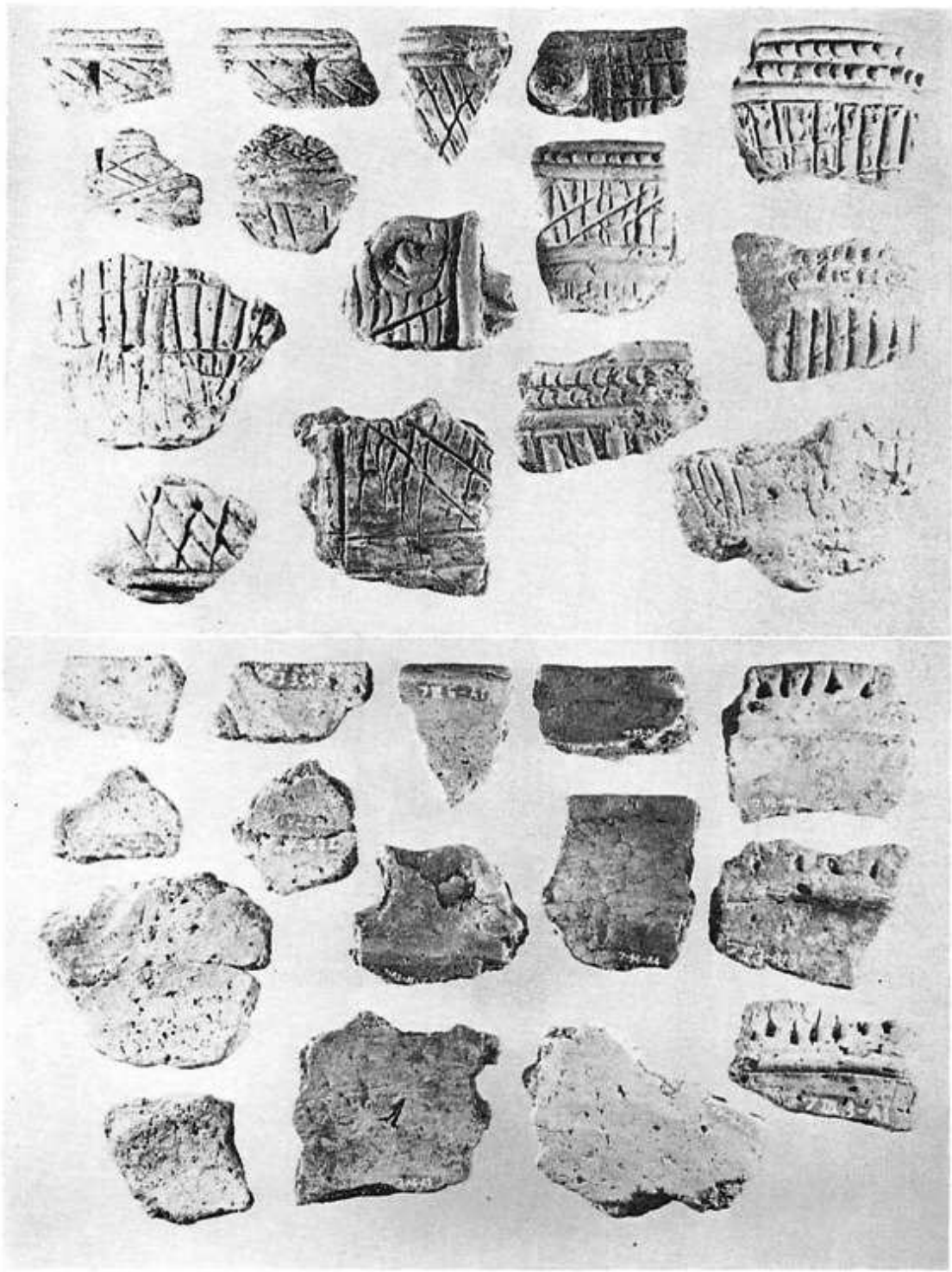




上:ⅣB類土器出土状態，七2区.　下:ⅣA・B類土器.

左：IVA類土器、復元　高31㎝、右：IVB類土器、復元　高30㎝。

図版十九

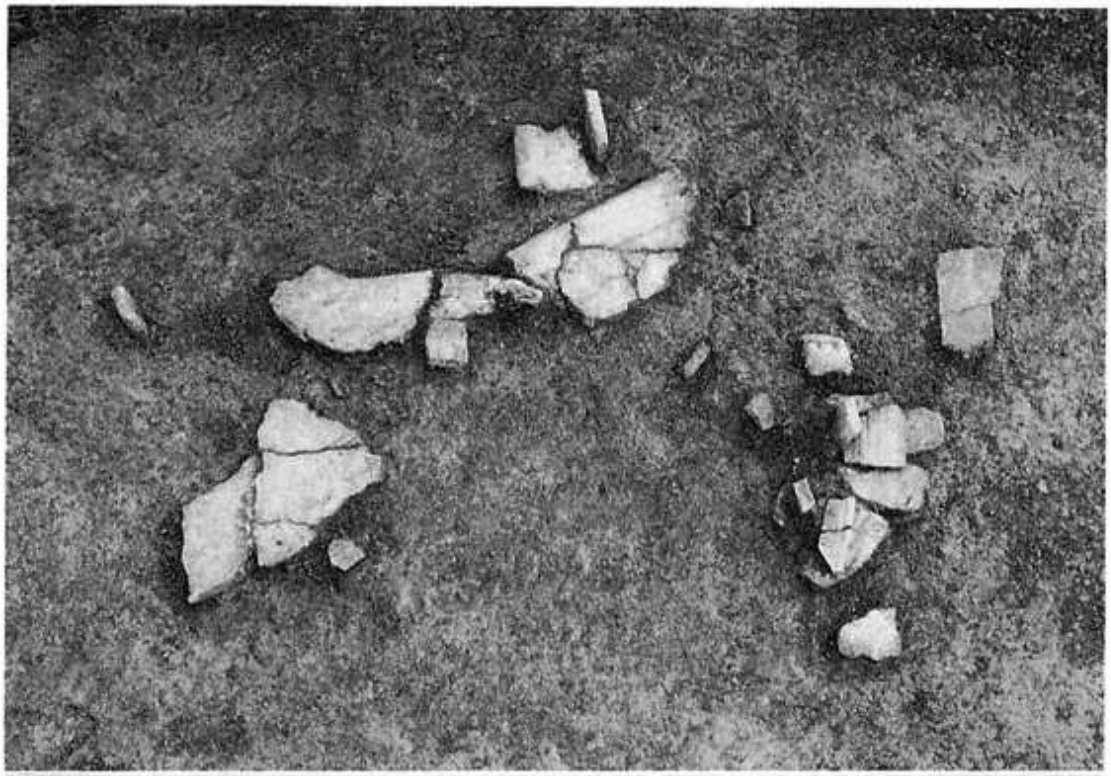


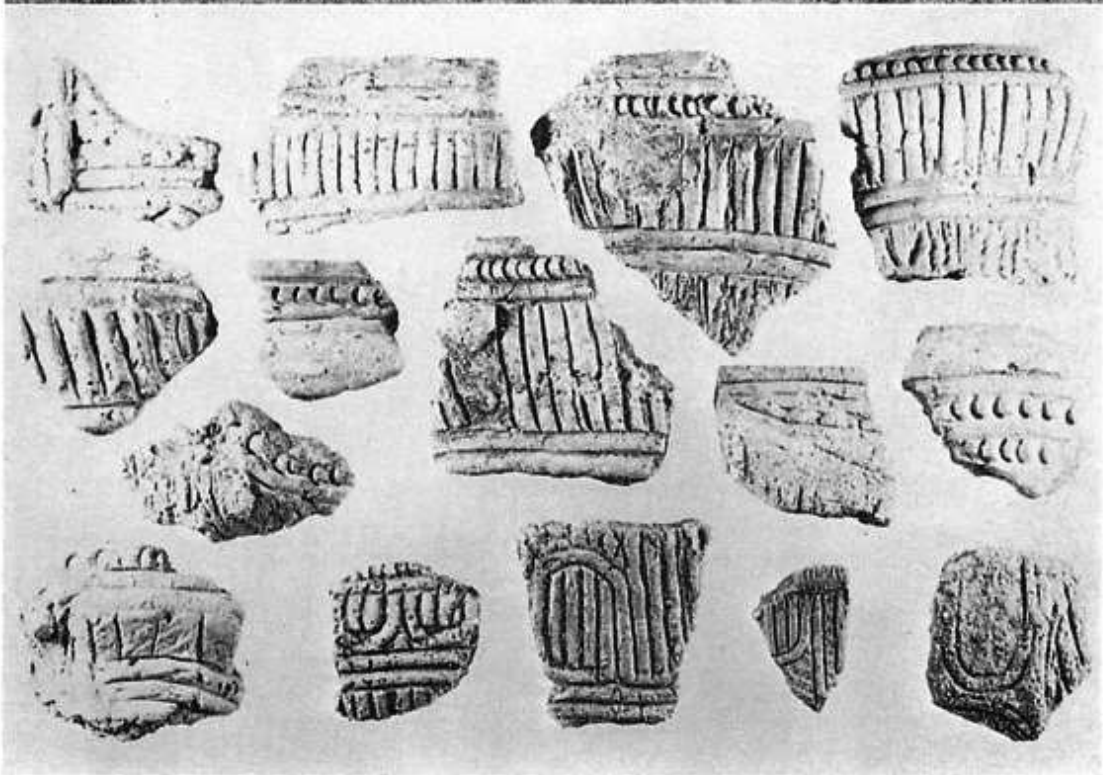
Ⅳ C・D類土器　上：表面，下：裏面．

左：ⅣD類土器，復元　高32㎝，右：ⅣE類土器，復元　高21㎝。

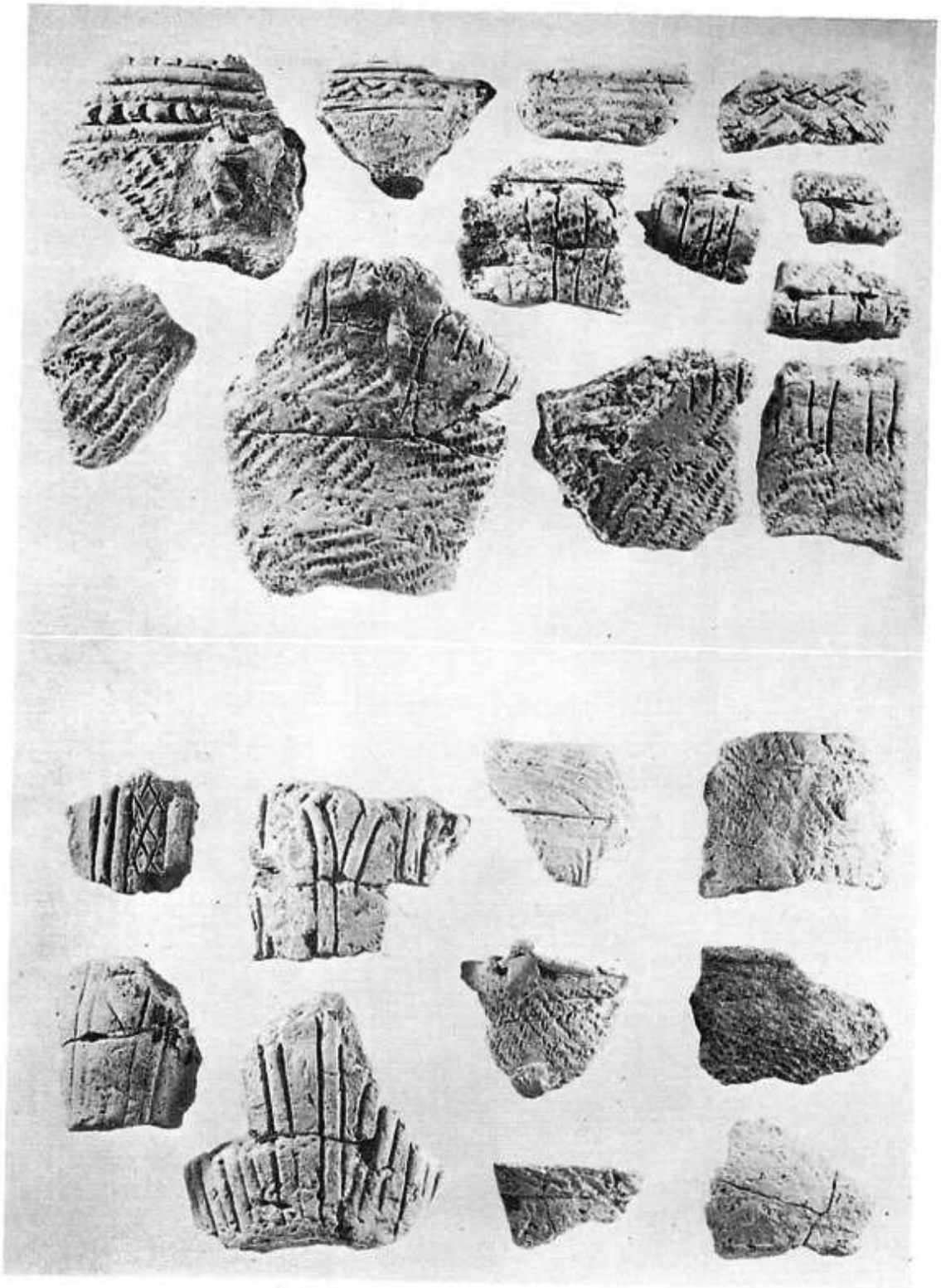
図版 111

図版二二

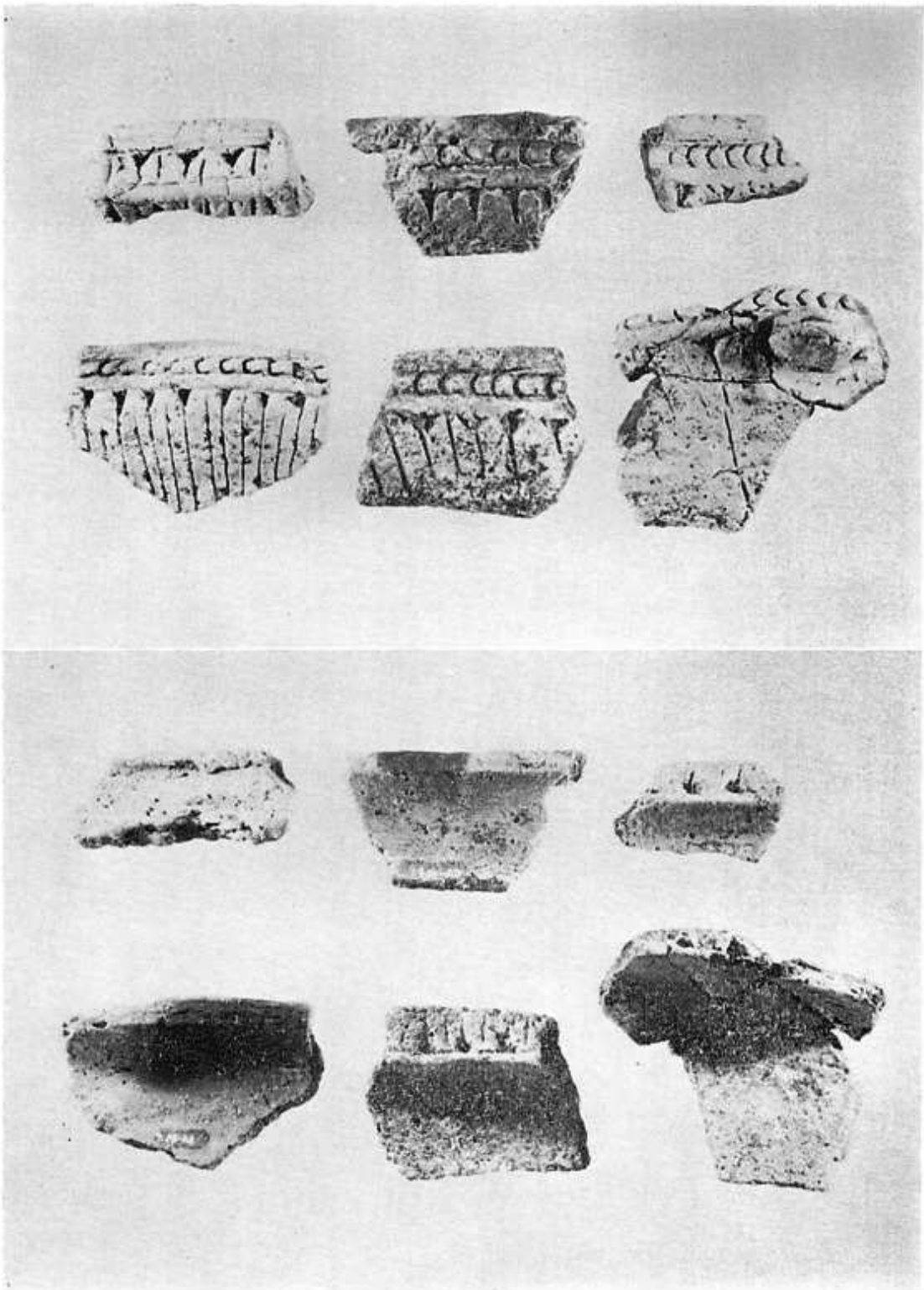




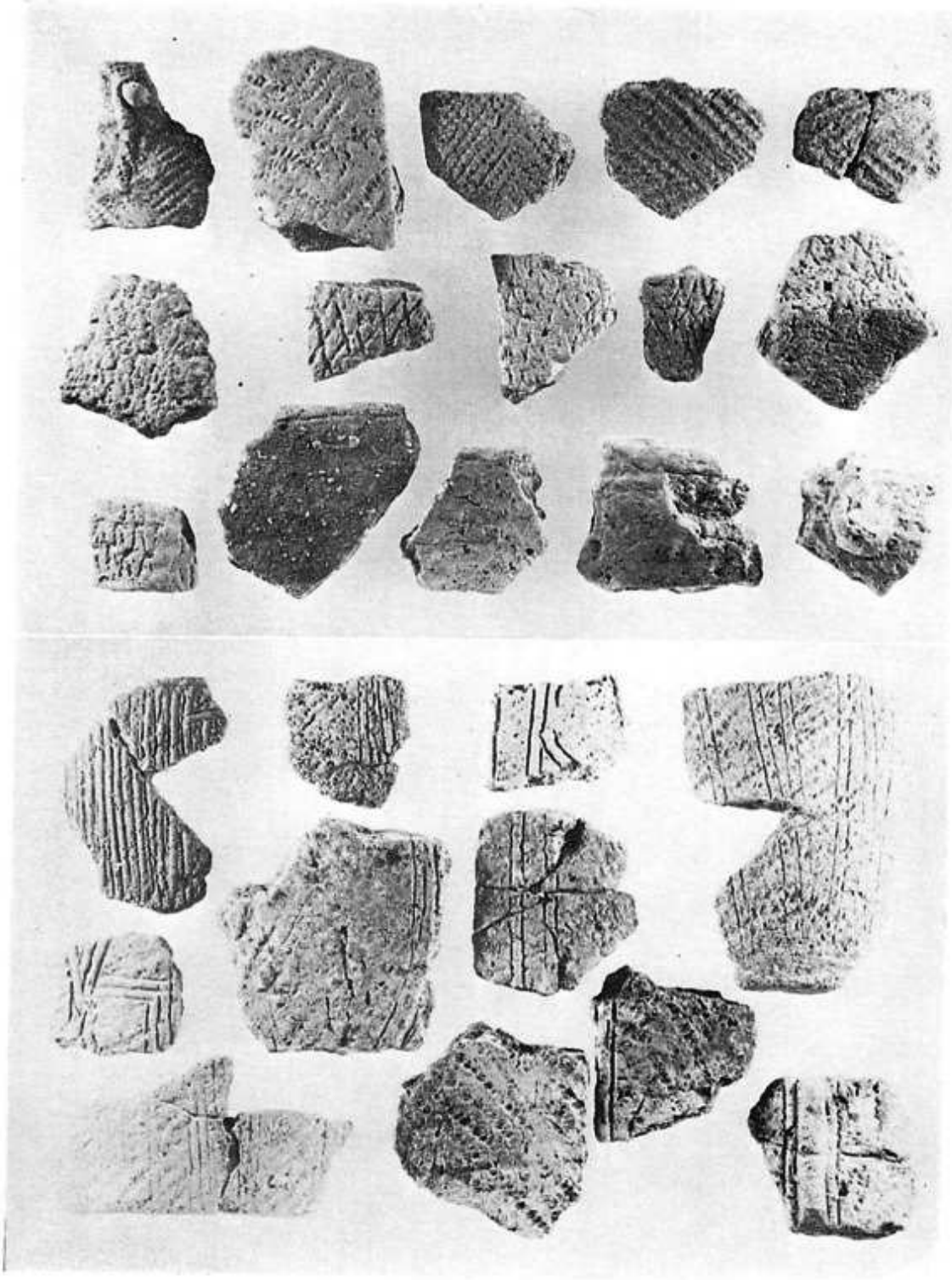
上:ⅣD類土器出土状態，ヲ5区.　下:ⅣE類土器.



上:ⅣE・F類土器.　下:ⅣE・G類土器.

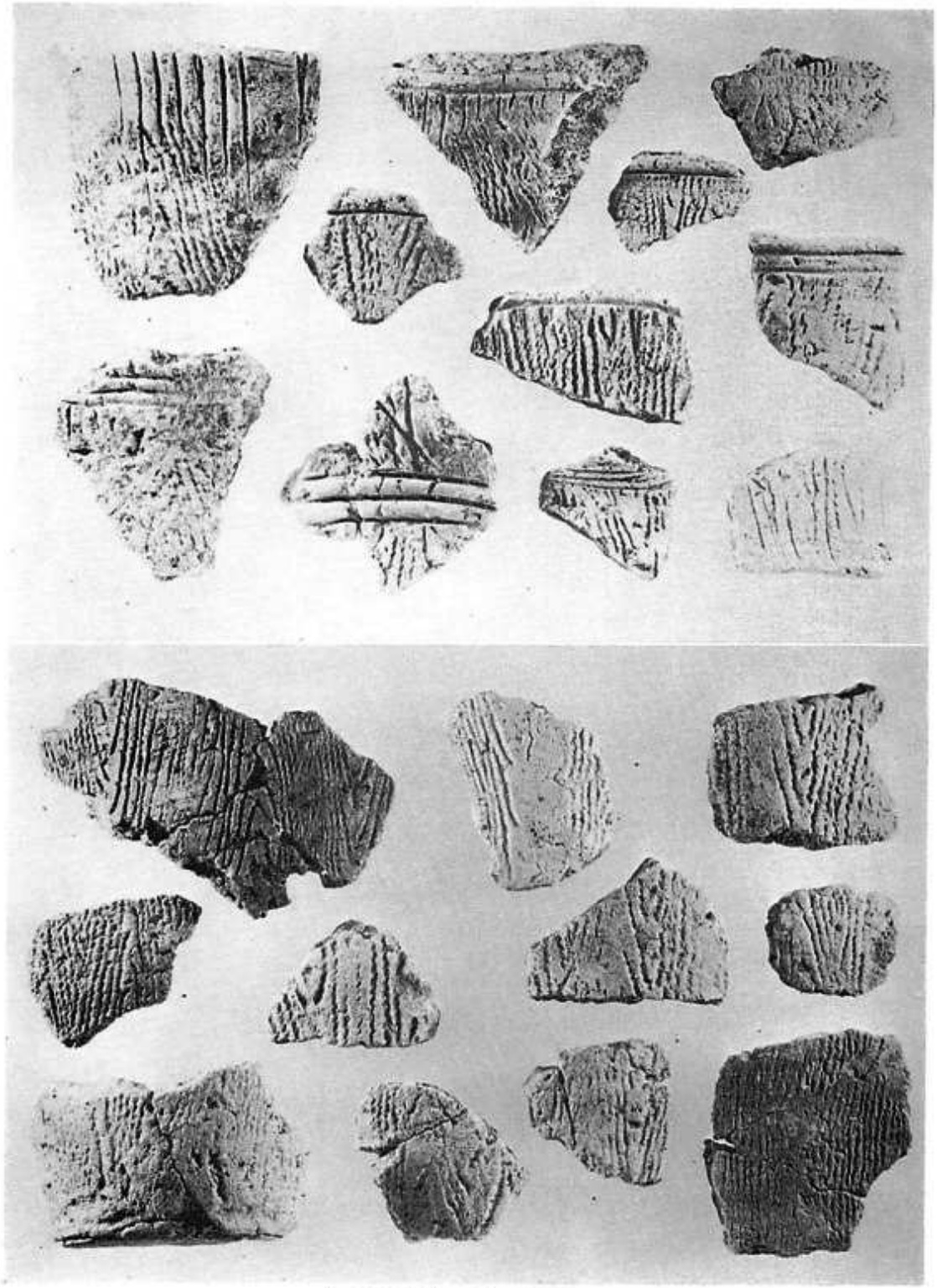


ⅣF類土器　上:表面，下:裏面.

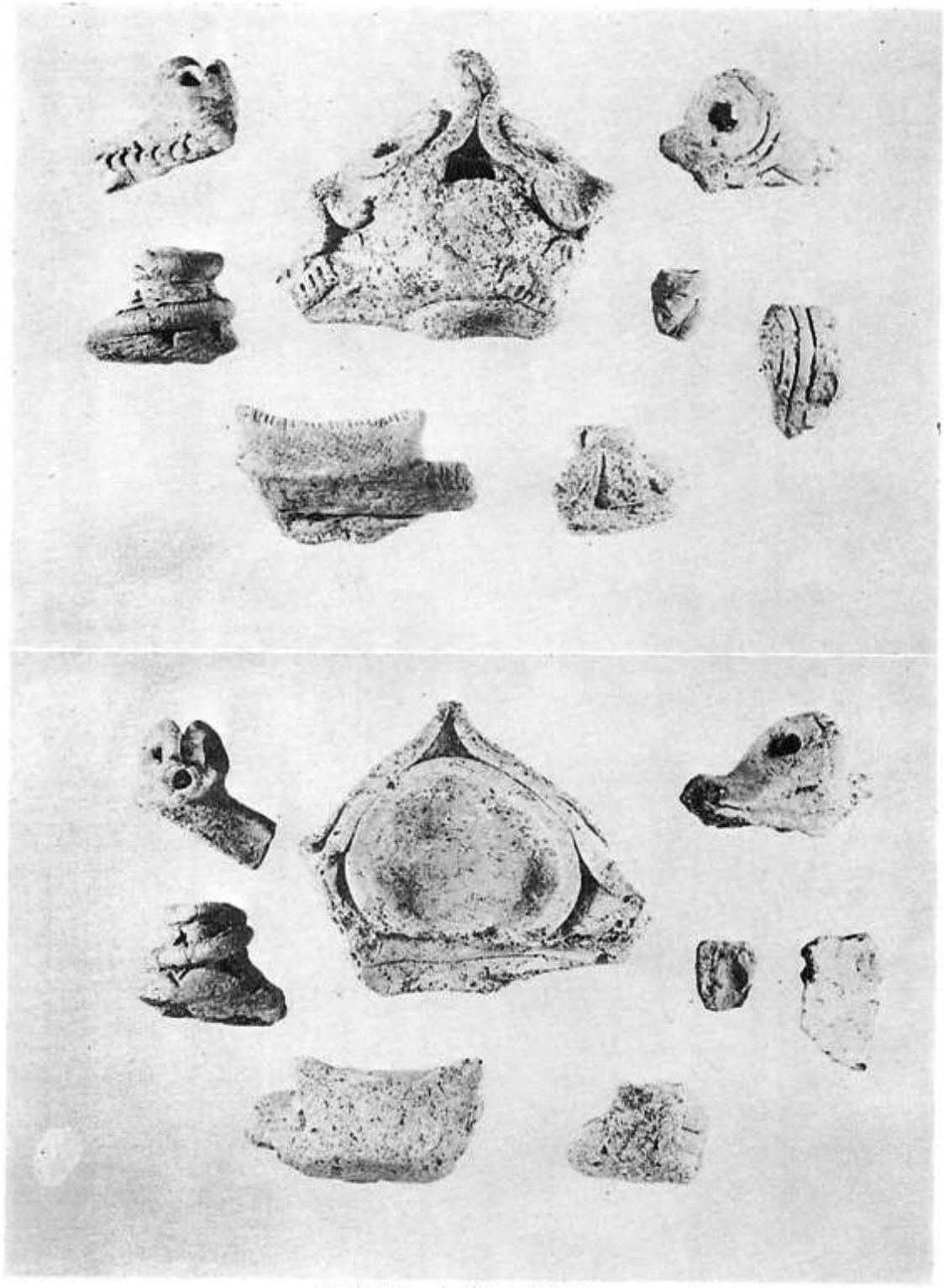


上:ⅣH・I・J類土器.　下:ⅣE類土器.

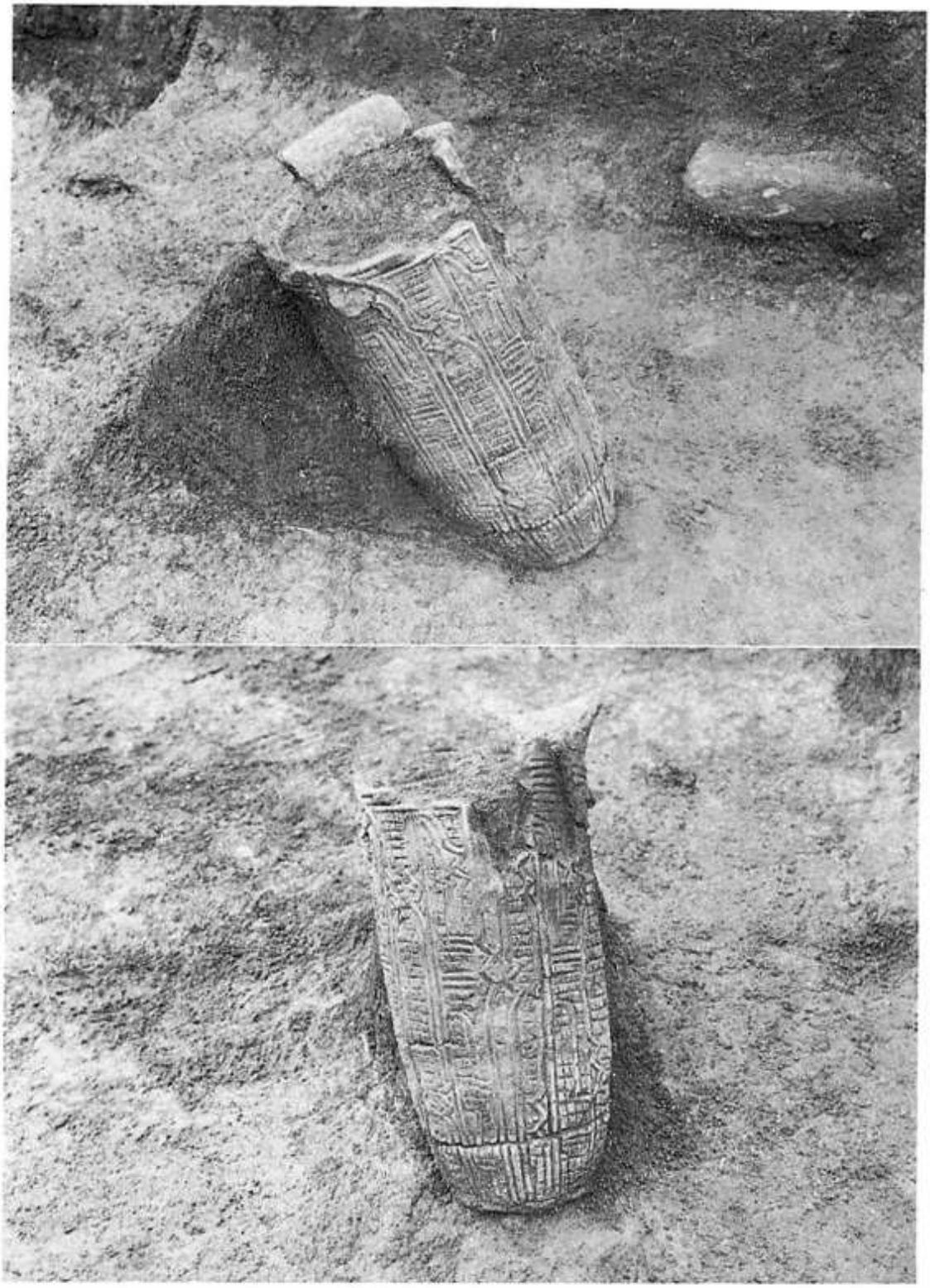
図版二六



上：Ⅳ E 類土器．　下：Ⅳ J 類土器．

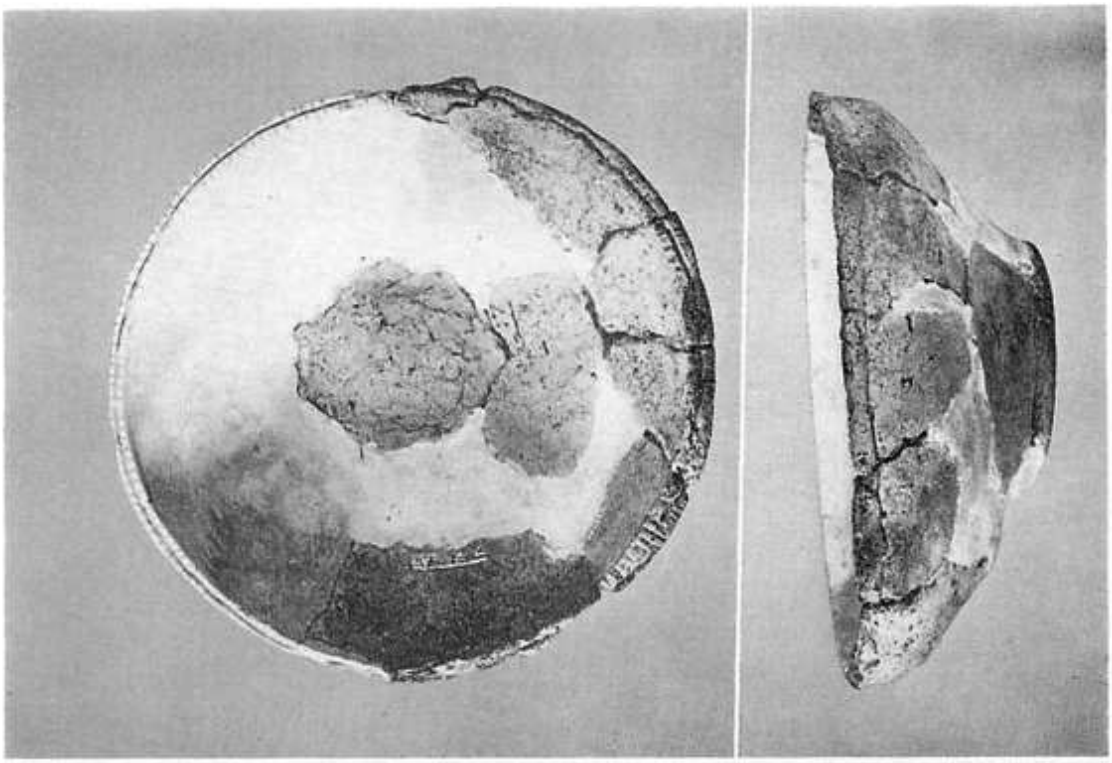


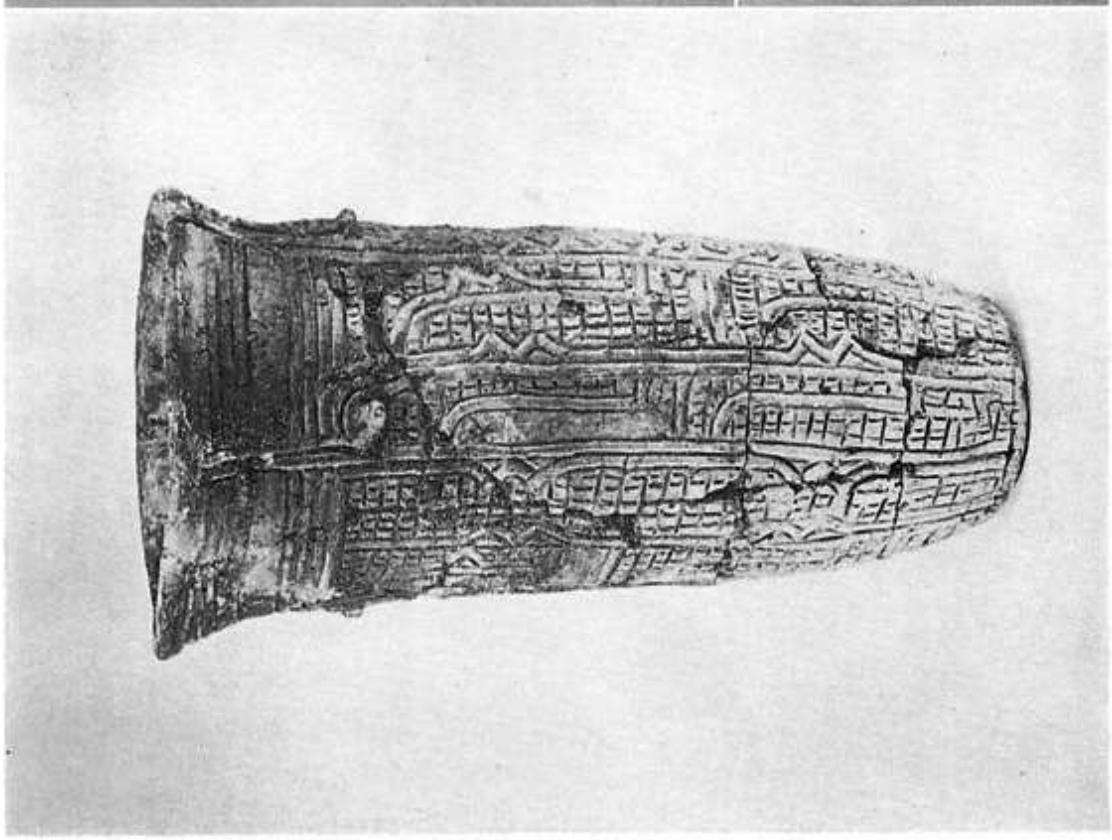
Ⅳ J 類土器　上：表面，下：裏面．



IVKa類土器出土状態，へ5区．

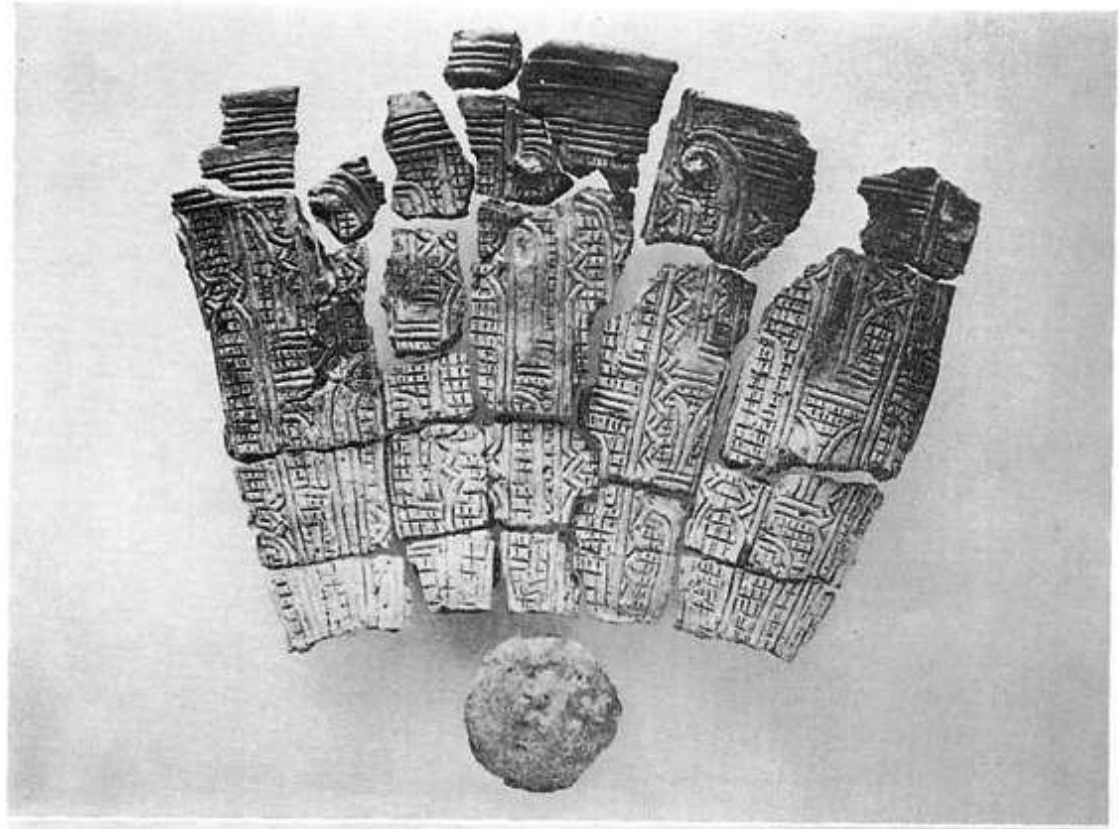
図版二九

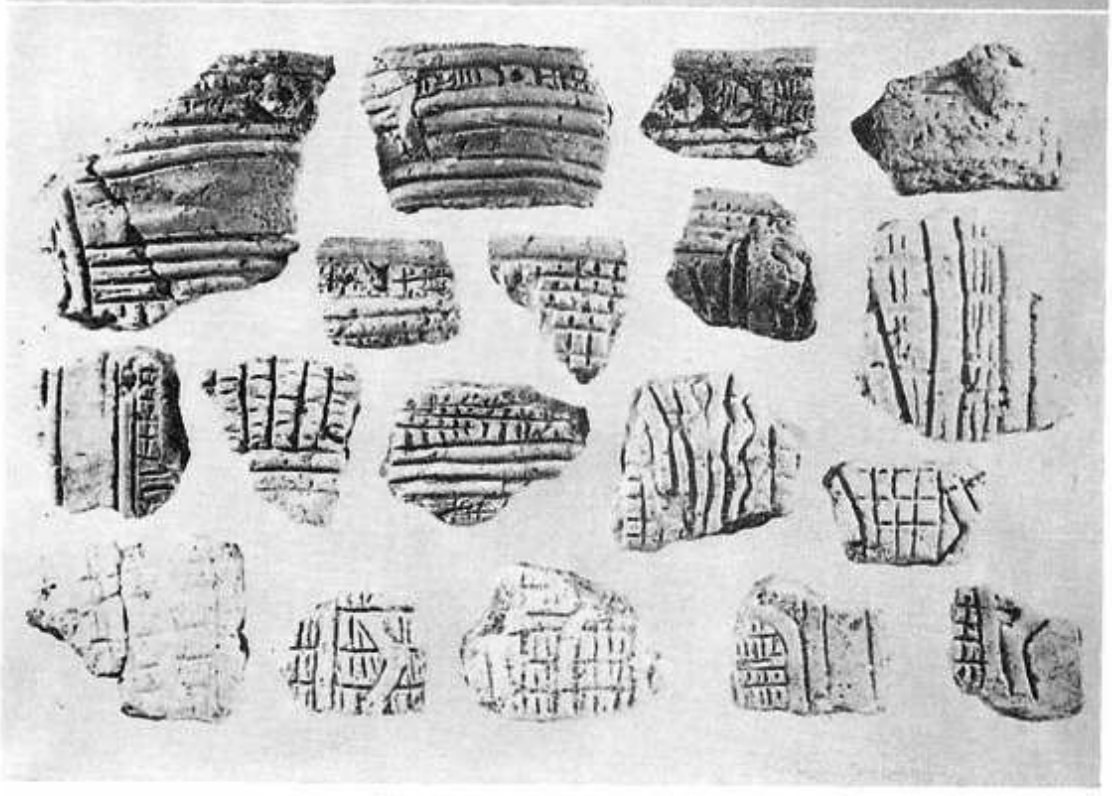




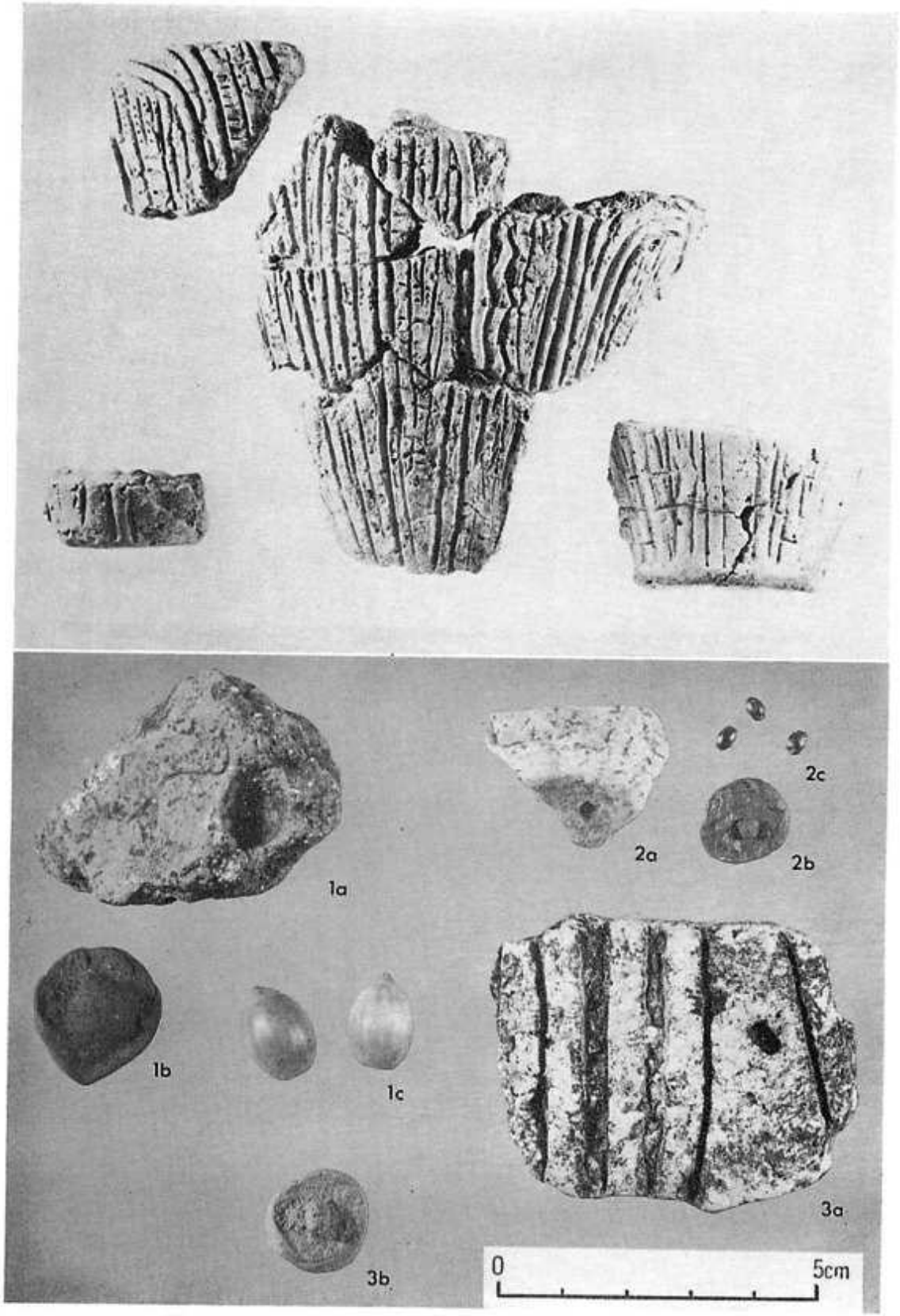
左：NKa類土器、高さ28cm．右：NKc類土器、口径19cm、高さ7cm．

図版三十



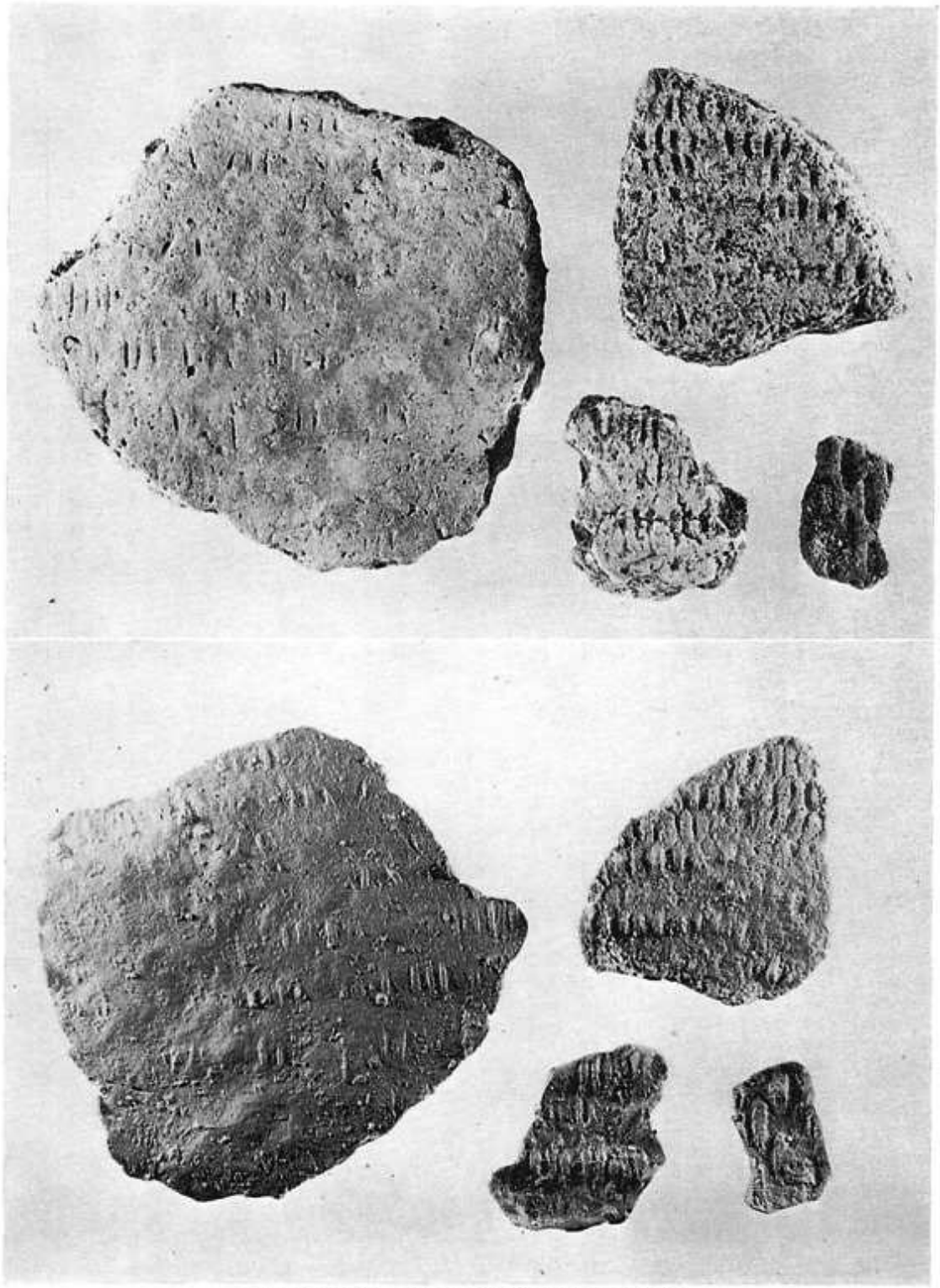


上：ⅣKa 類土器の展開．　下：ⅣKb 類土器．

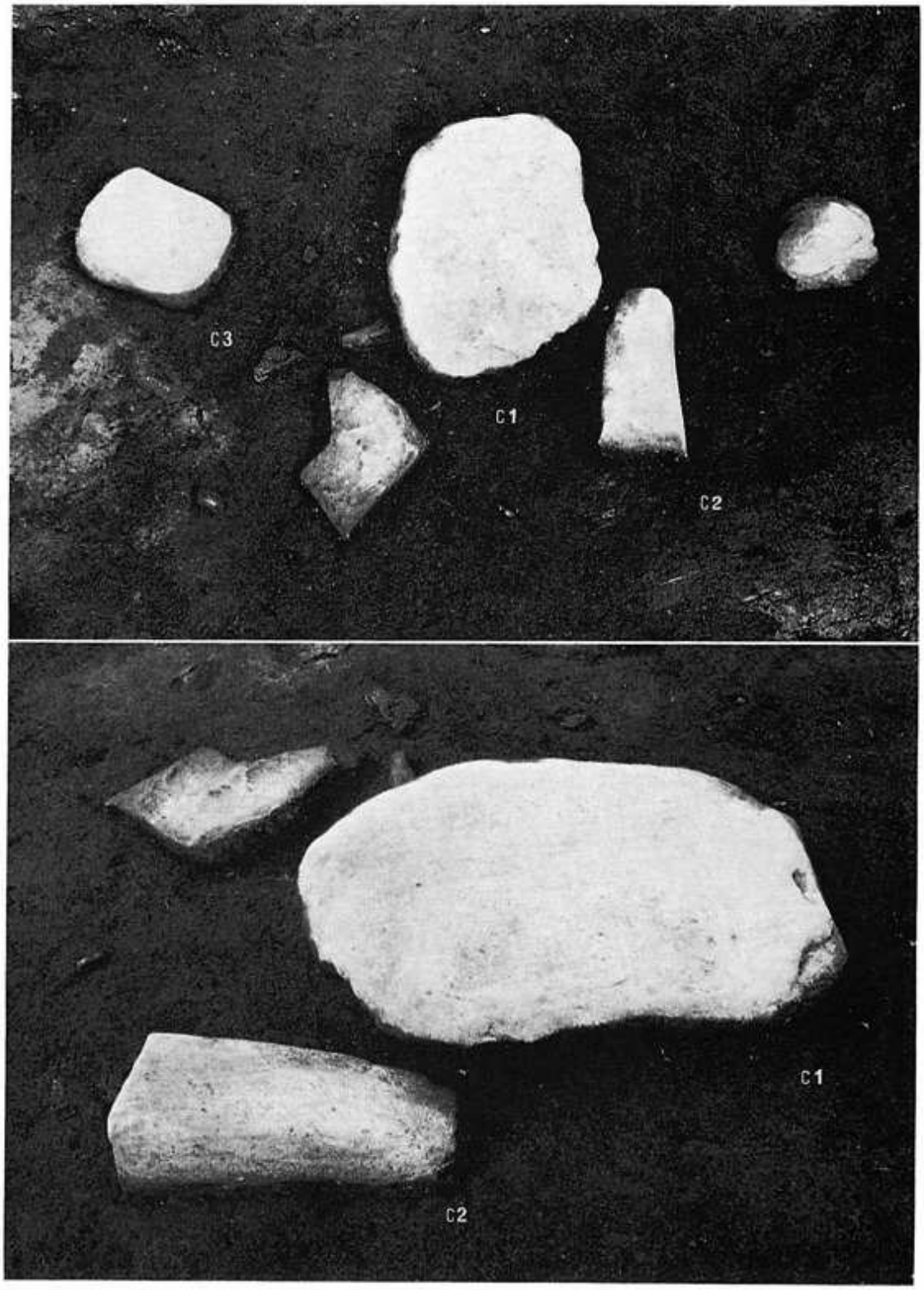


上:ⅣKb類土器.　下:種子類圧痕.　a・土器,　b・モデリング陽像,　c・参考種子類.

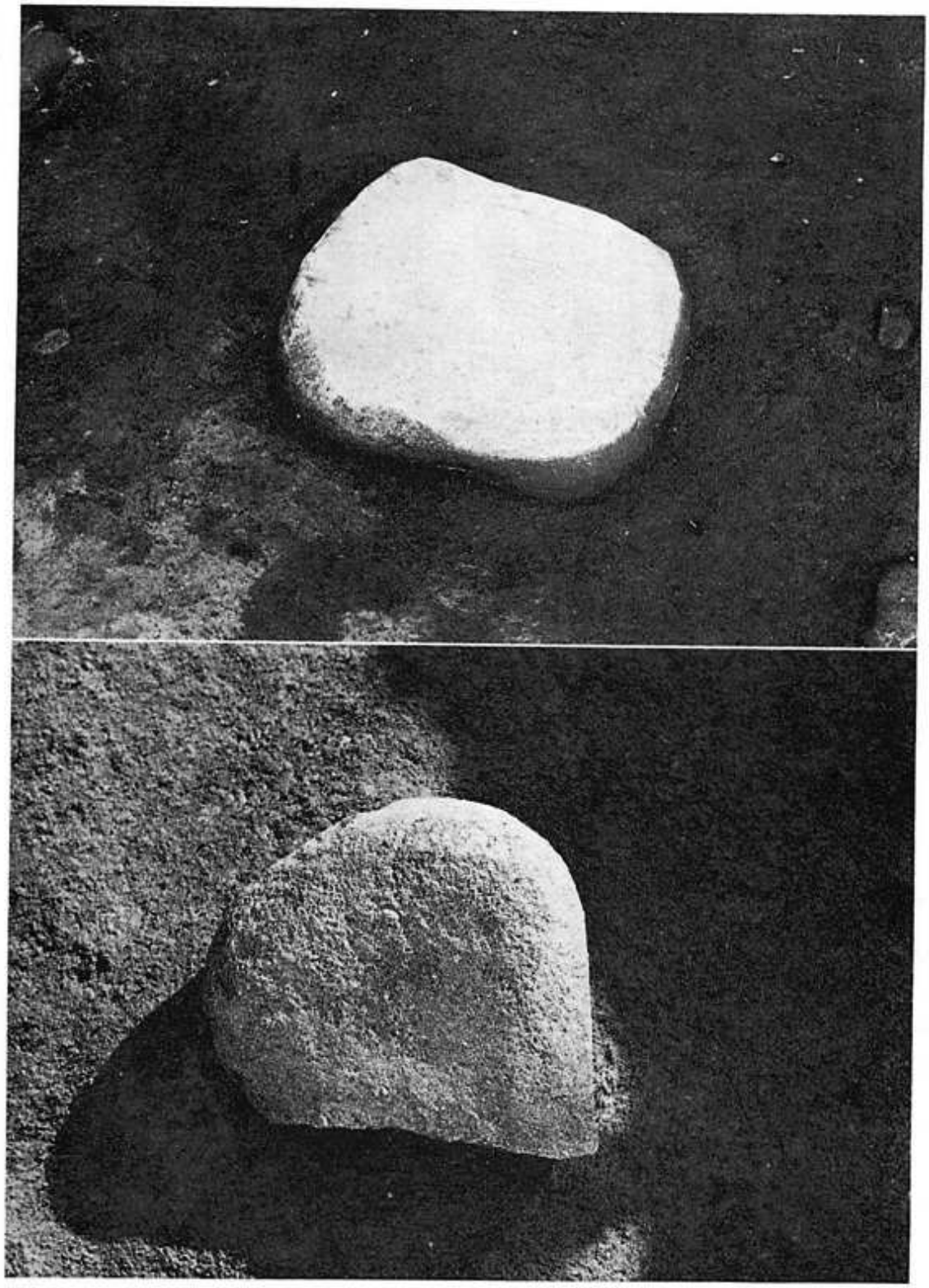
図版三二



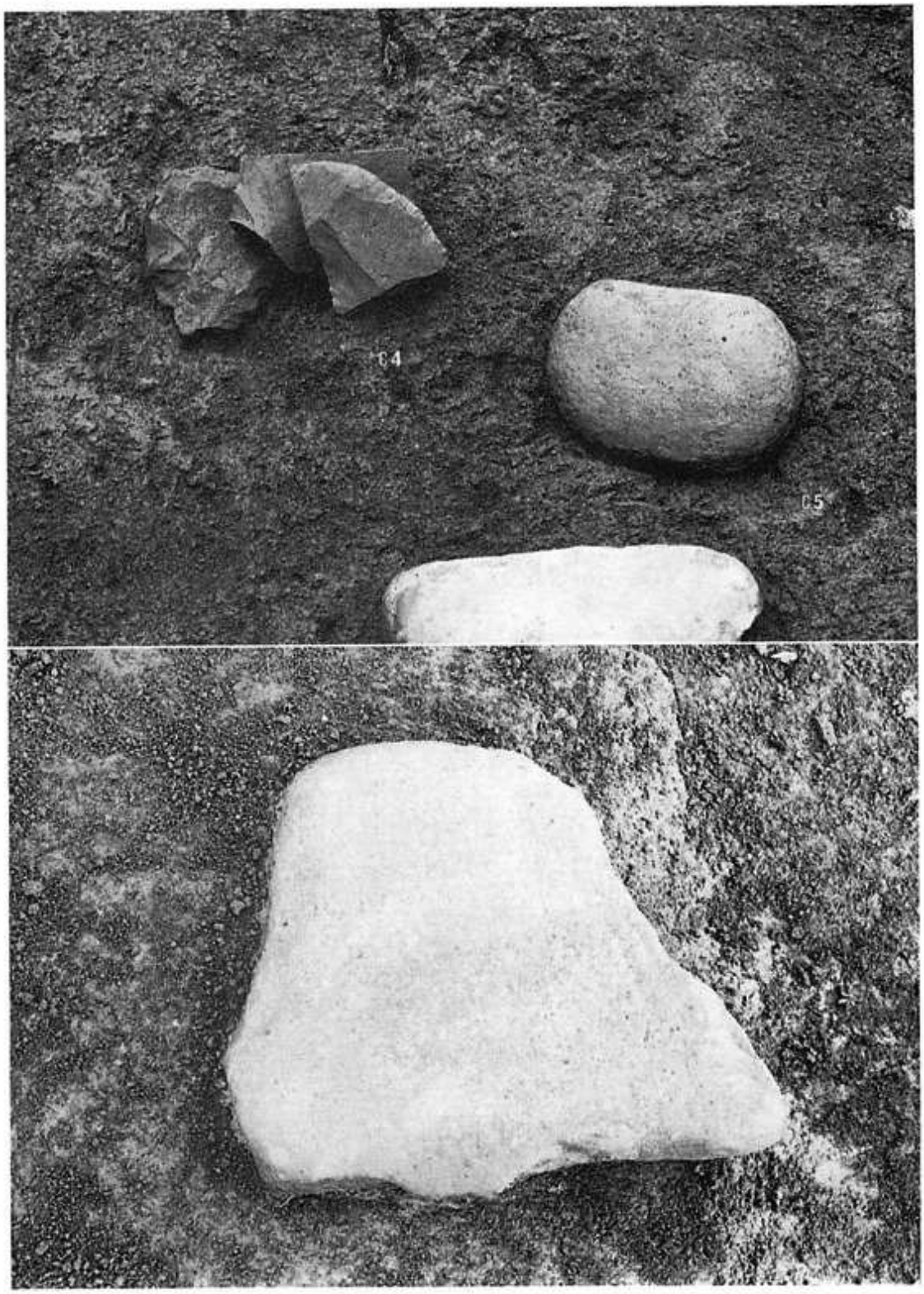
上:アンペラ圧痕.　下:同モデリング陽像（ほぼ実大）.



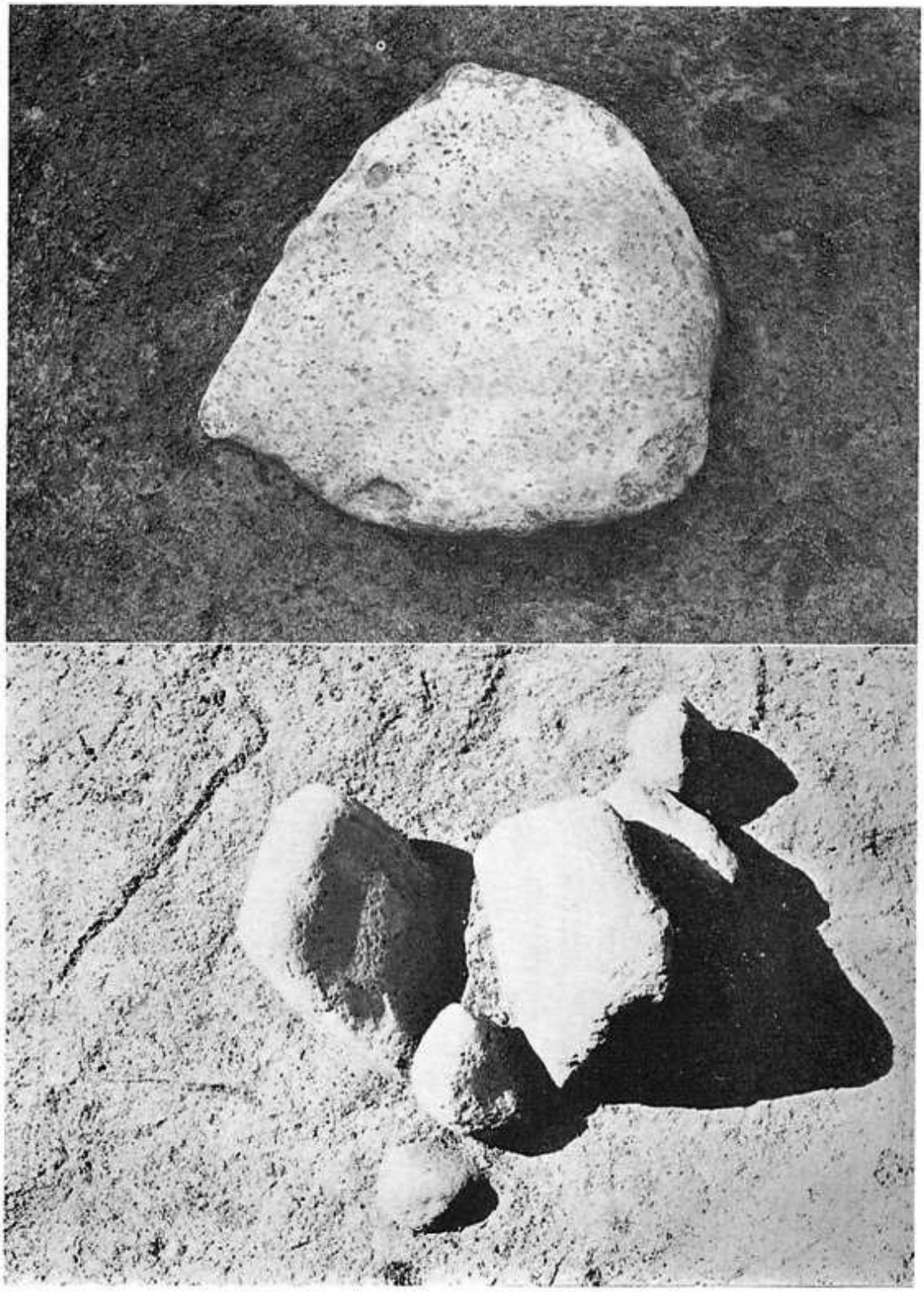
石皿出土状態，ト5－C1～3．



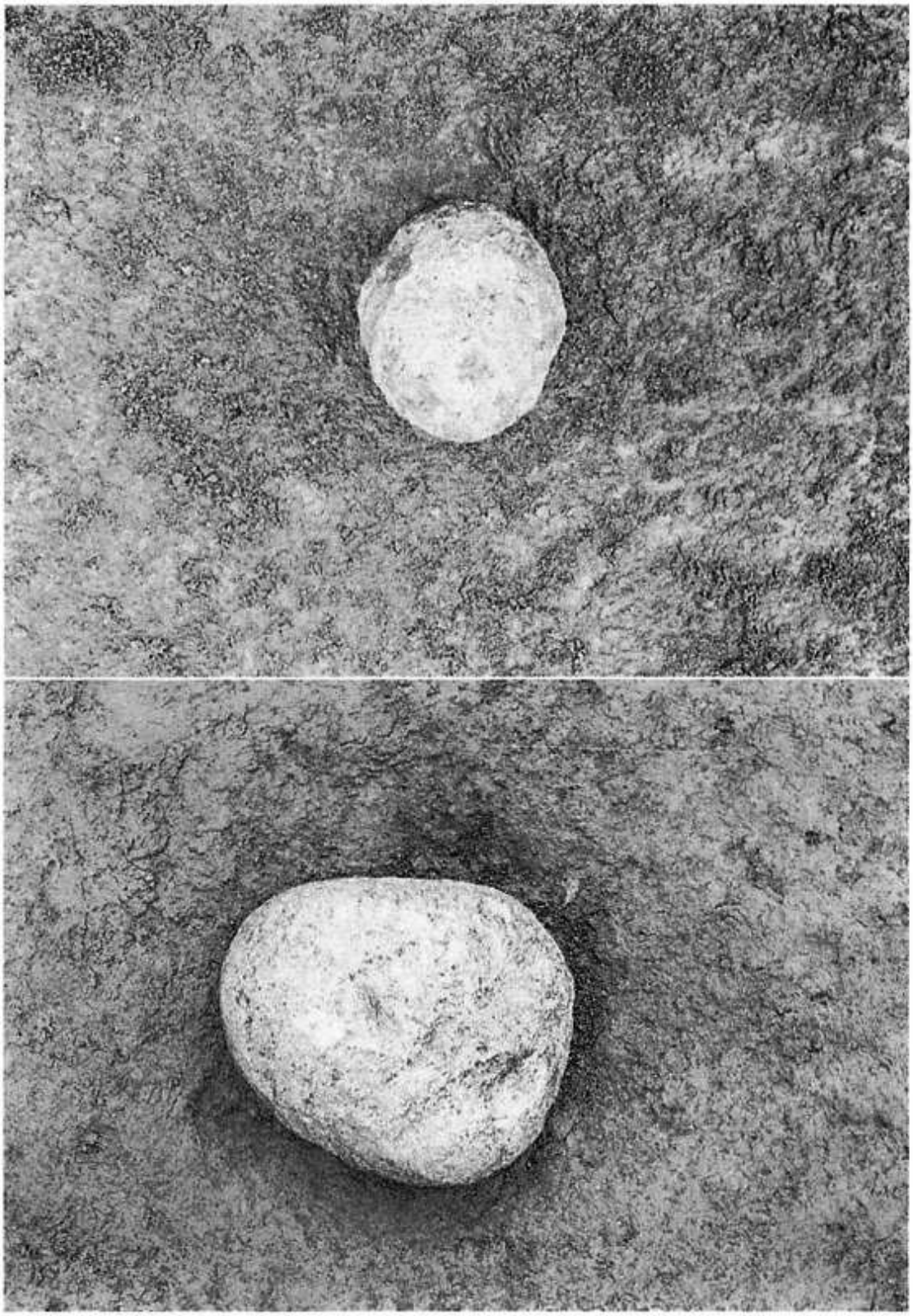
石皿出土状態　上：ト５－Ｃ３，下：ニ４－Ｃ６．



上:削器・石皿出土状態　ノ5－C4・5.　下:石皿出土状態, フ2－C4.

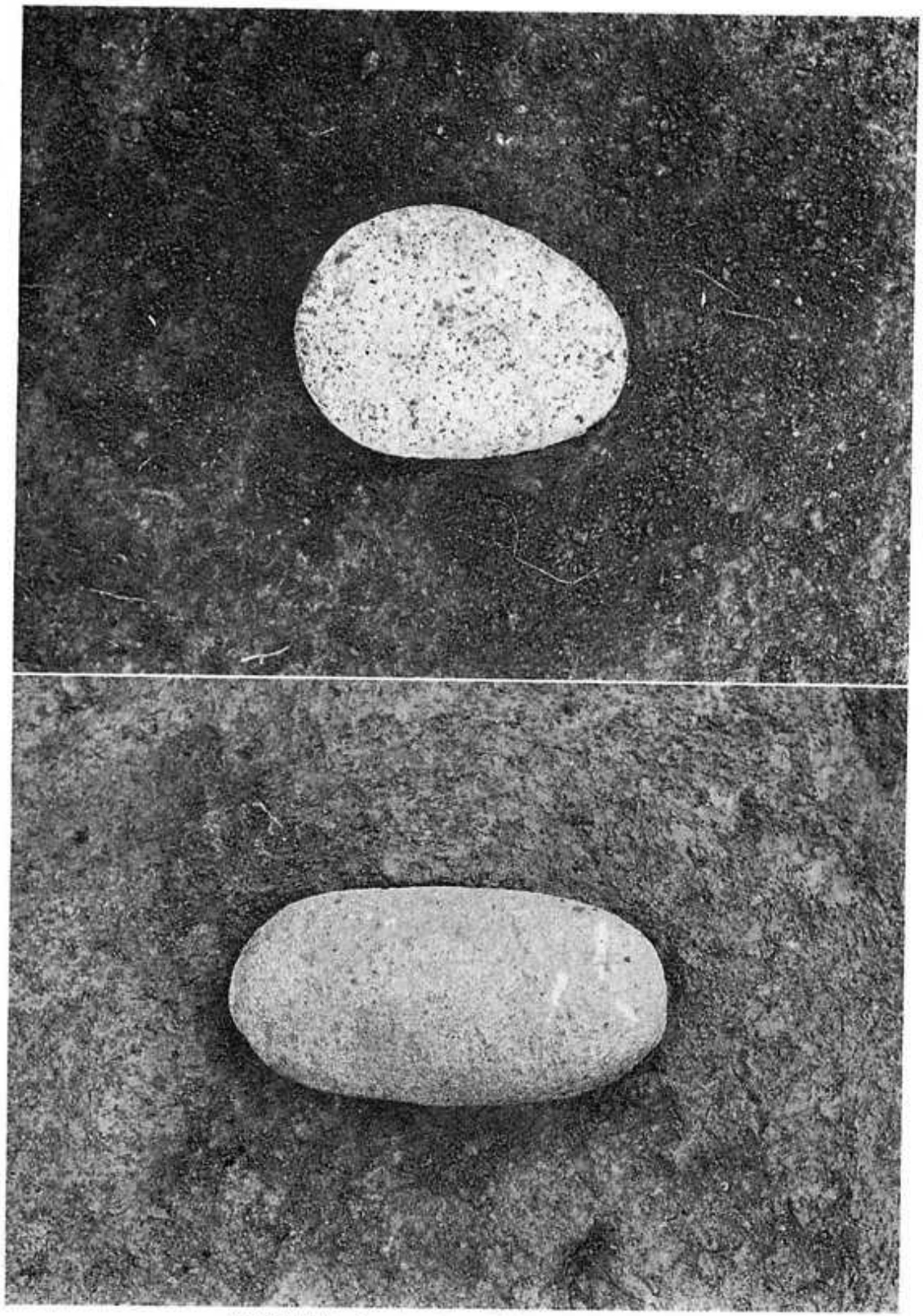


上:石皿出土状態　マ2－C3．　下:敲石出土状態，ヲ3－C3．

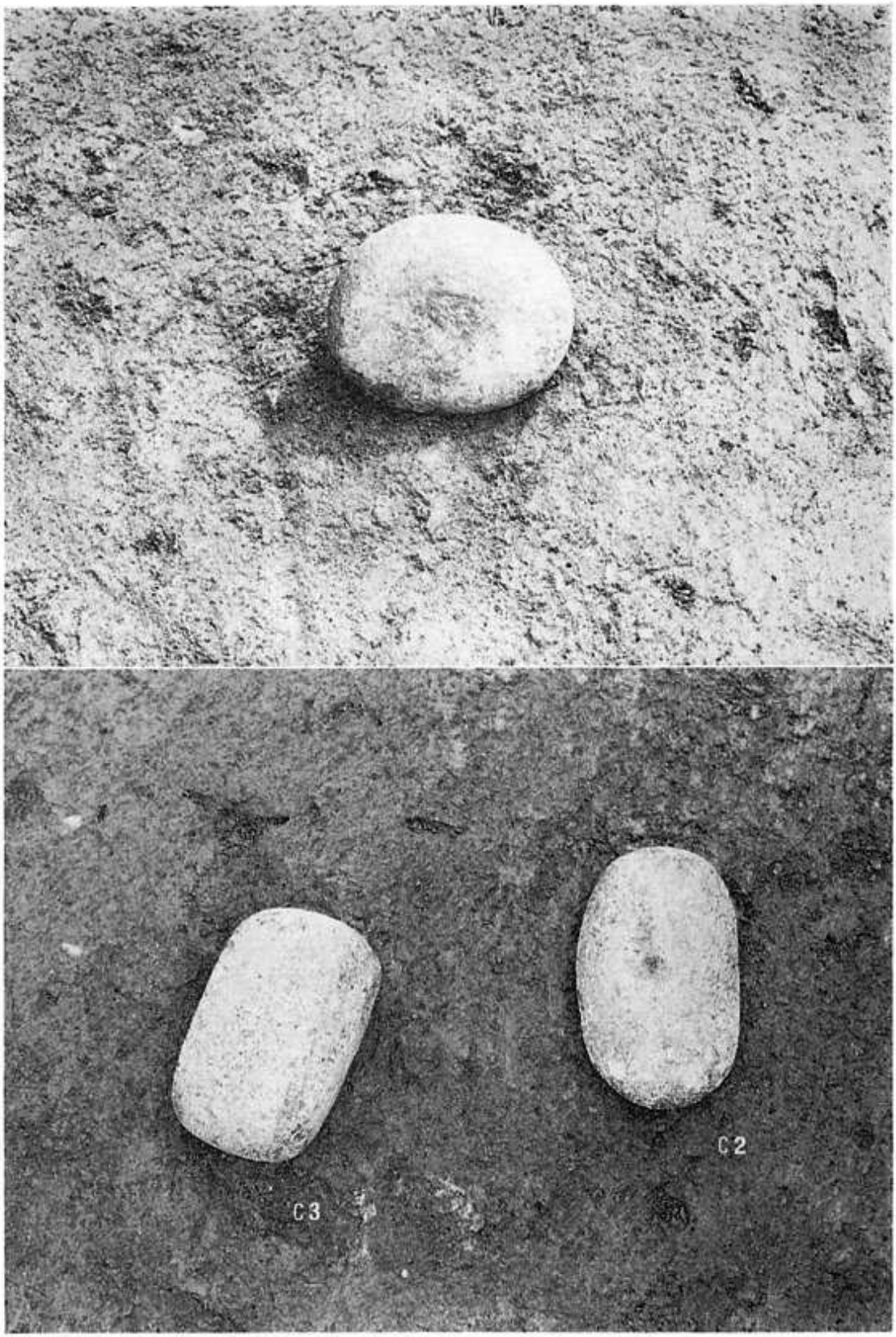


敲石出土状態　上:ハ3－C1，　下:Ⅷ1－C2．

図版三八

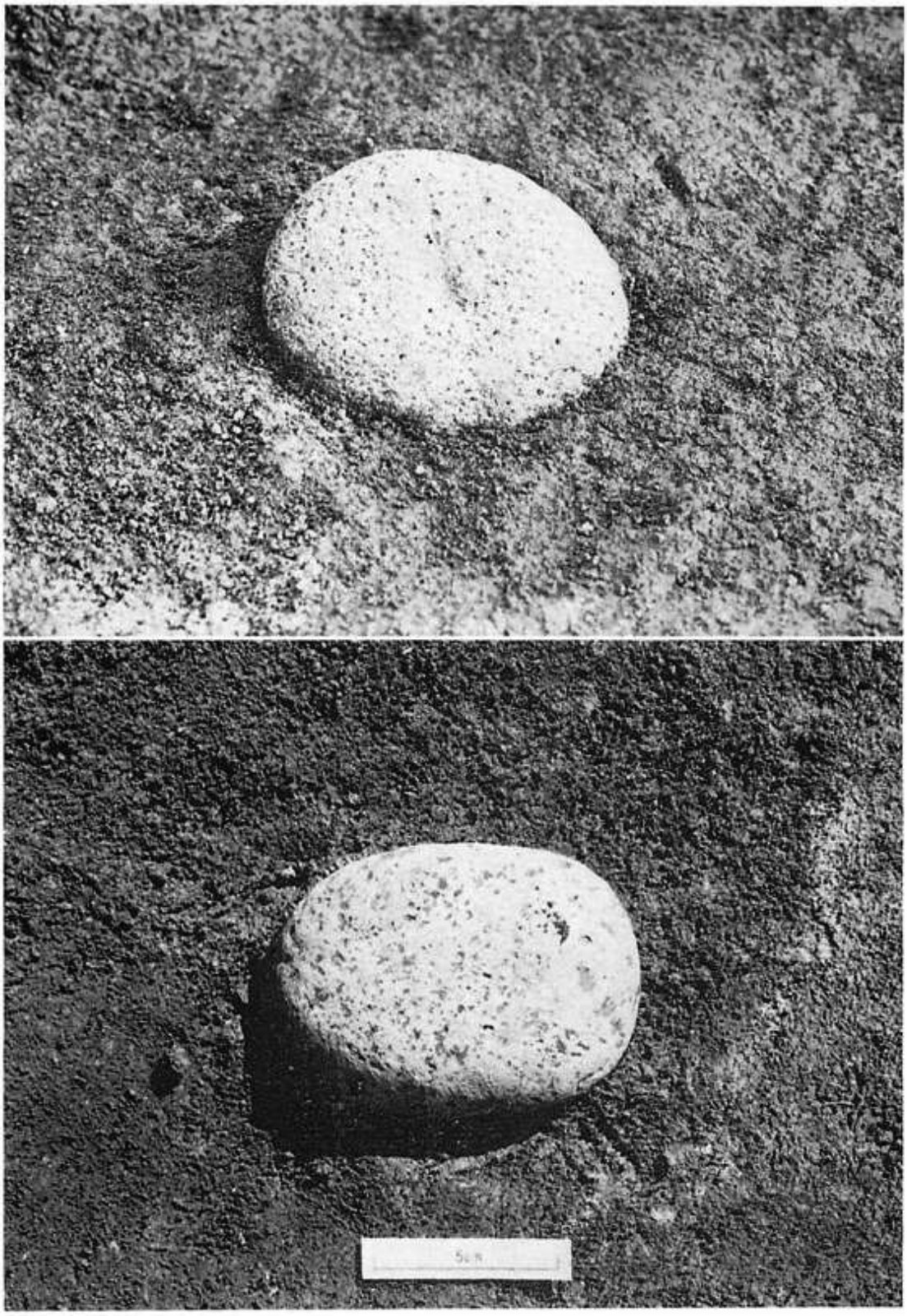


敲石出土状態　上:モ2—C1，　下:マ2—C4.

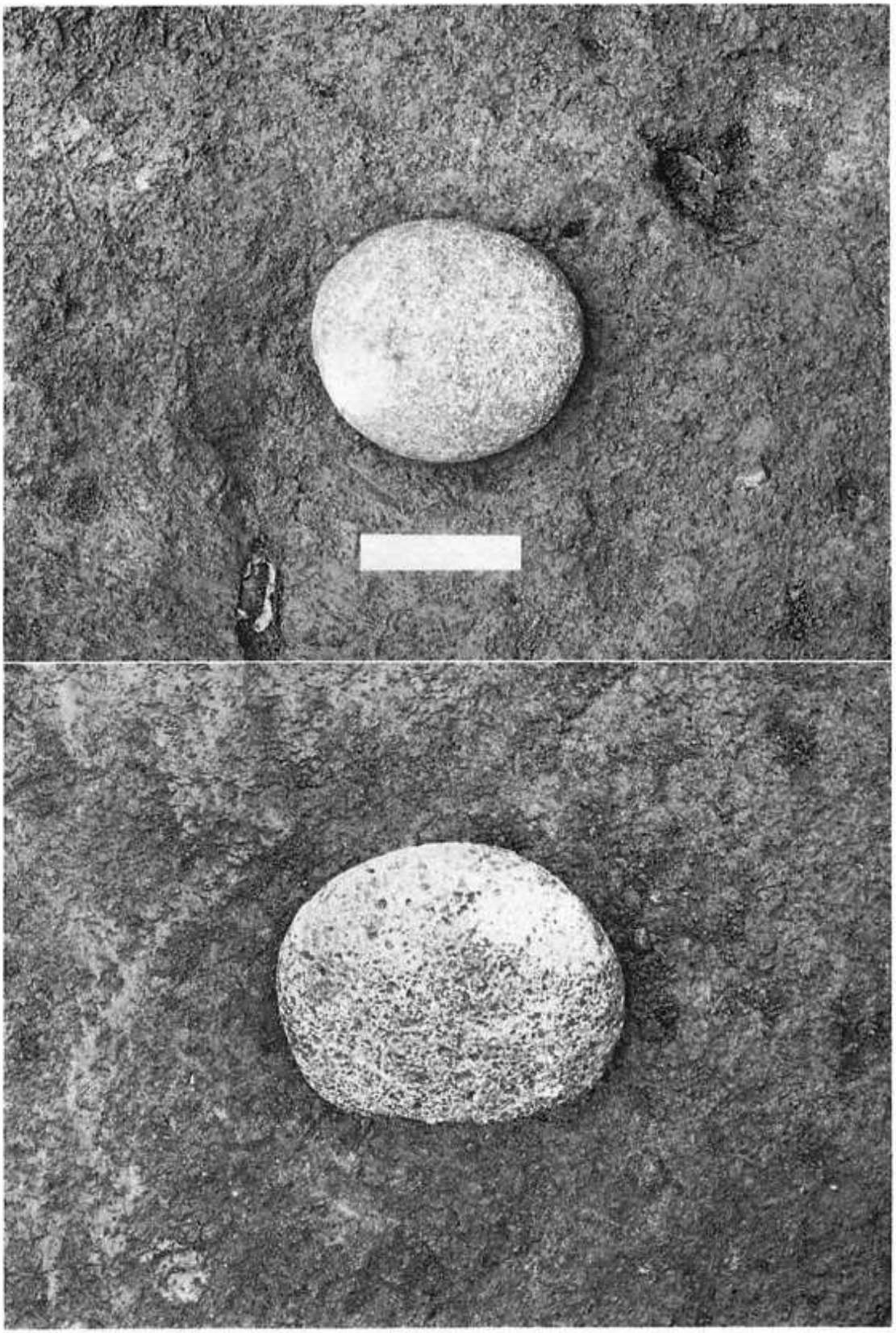


上:敲石出土状態，ノ5－C9．　下:磨石・敲石出土状態，フ4－C2・3．

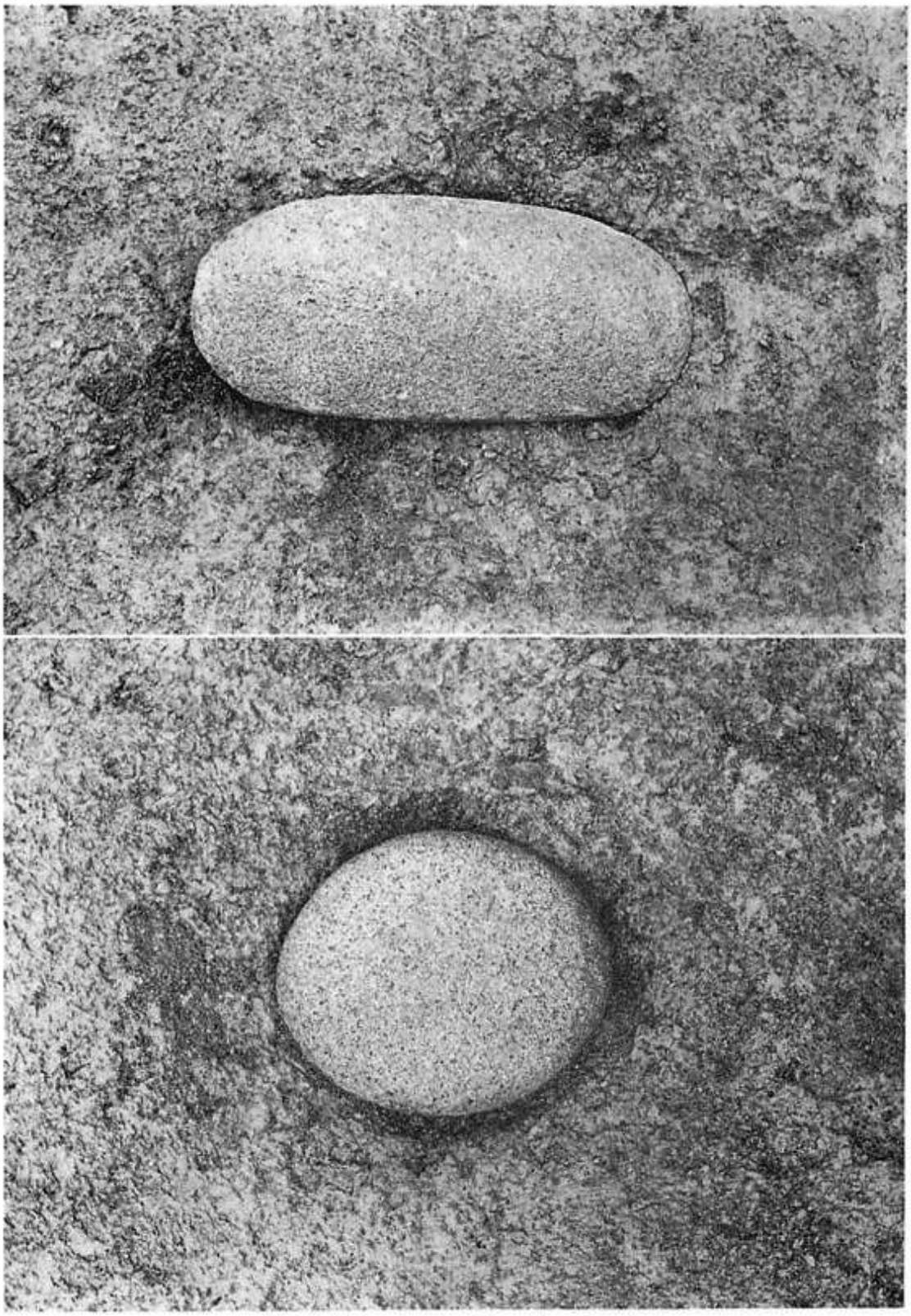
図版四十



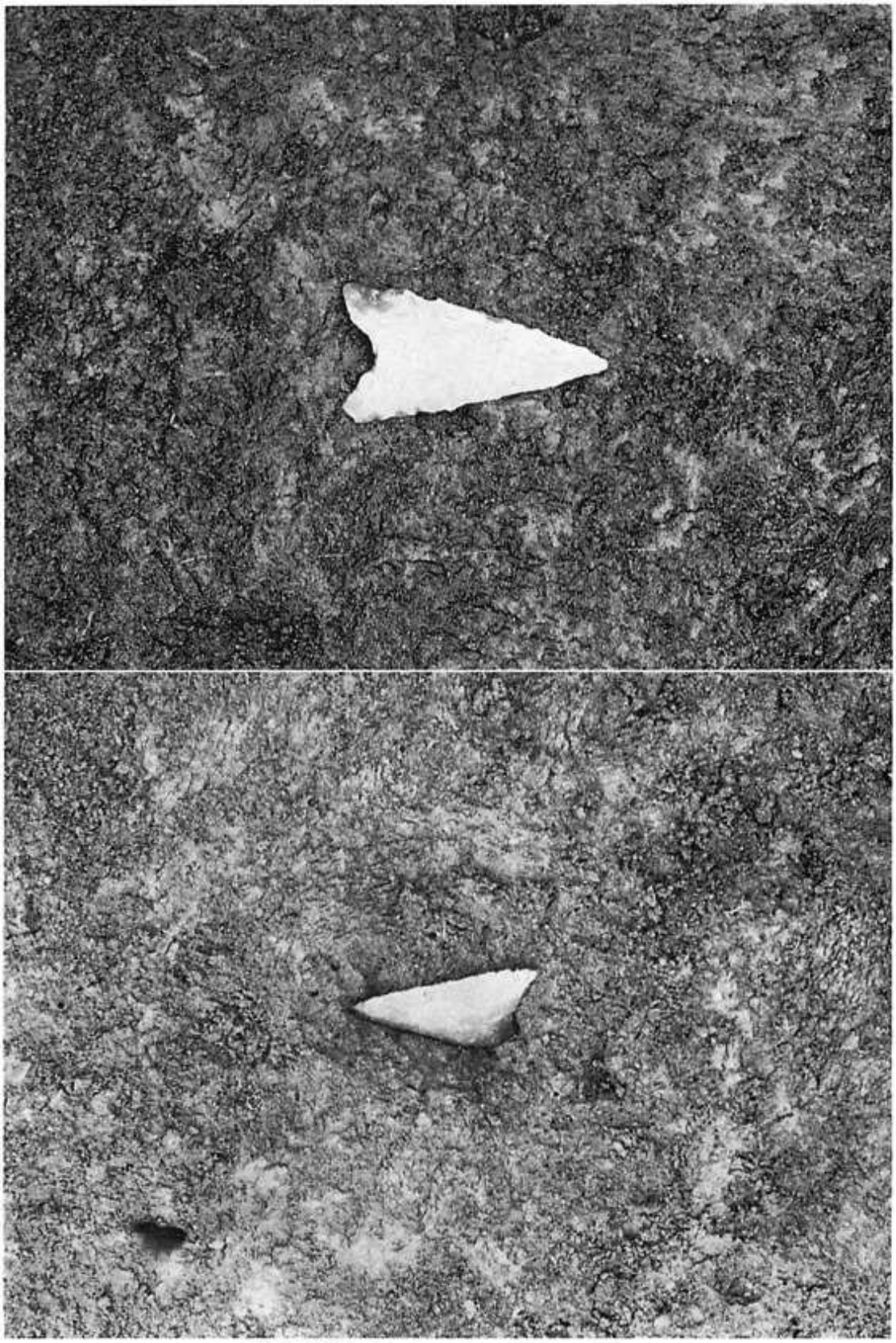
敲石出土状態　上:ヘ4－C2，下:ト3－C1．



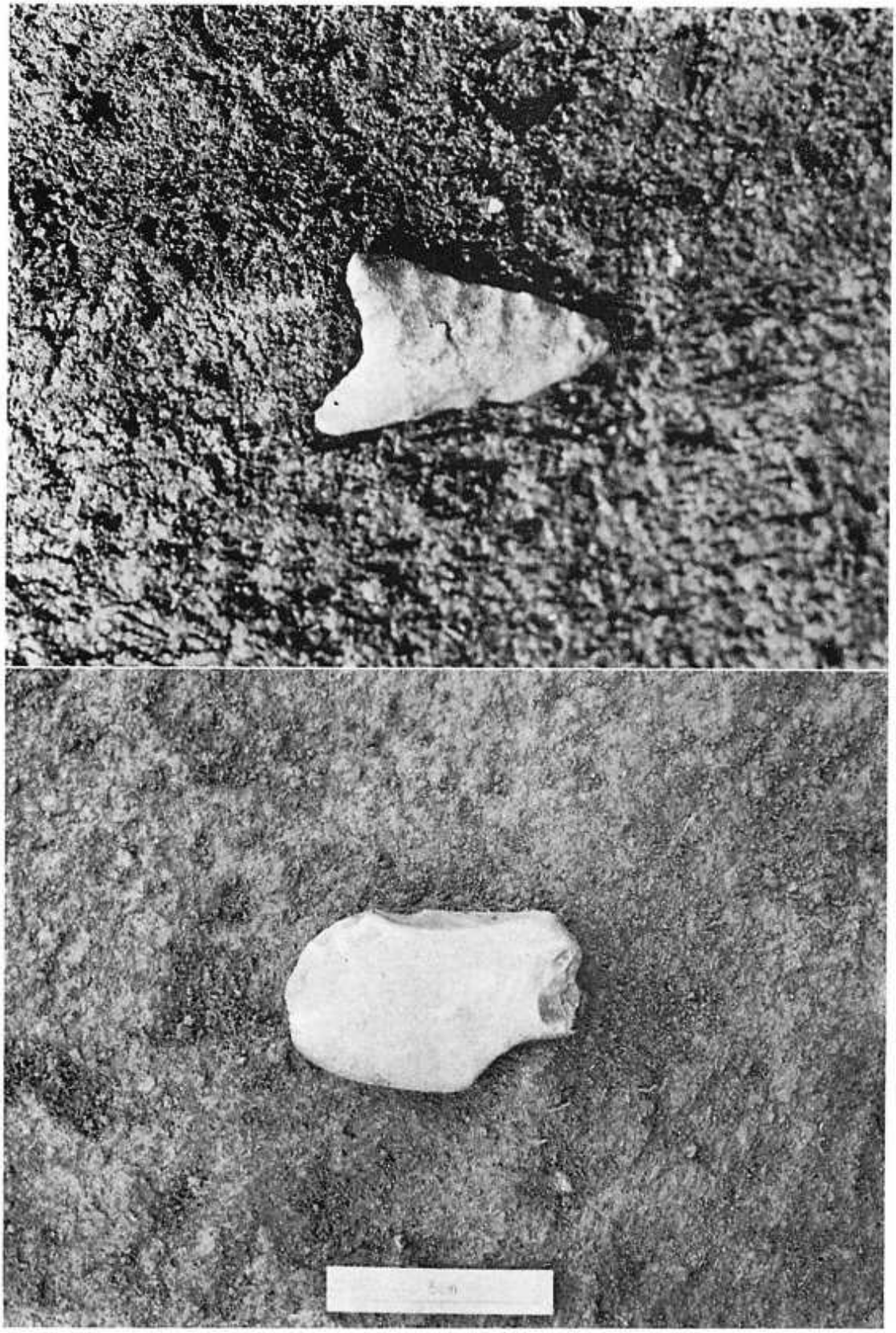
磨石出土状態　上:ノ2－C1，下:Ⅶ1－C1.



磨石出土状態　上:ヘ2－C1，下:ヲ3－C1．



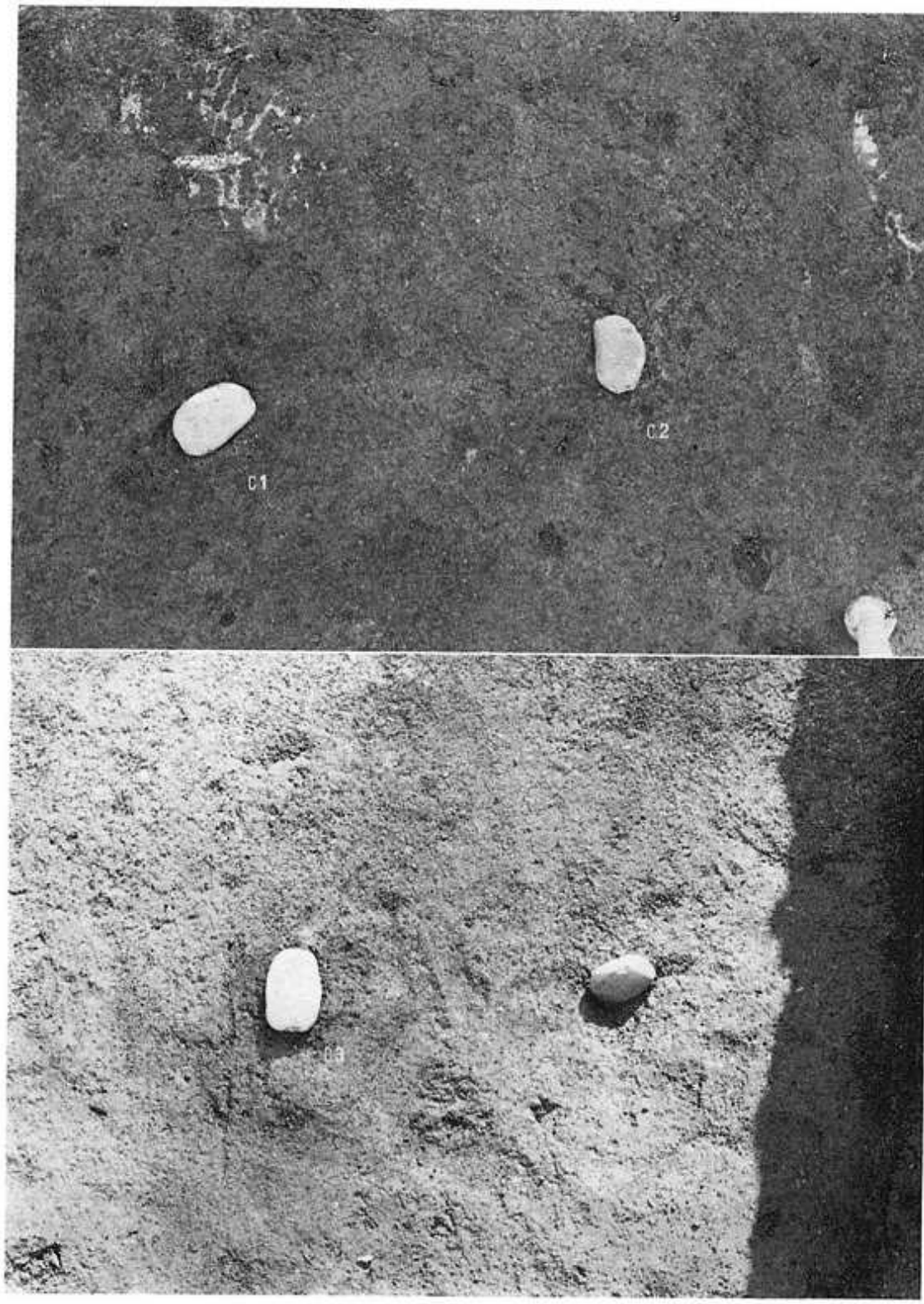
石鏃出土状態　上:チ4－C2，　下:Ⅵ4－C3．



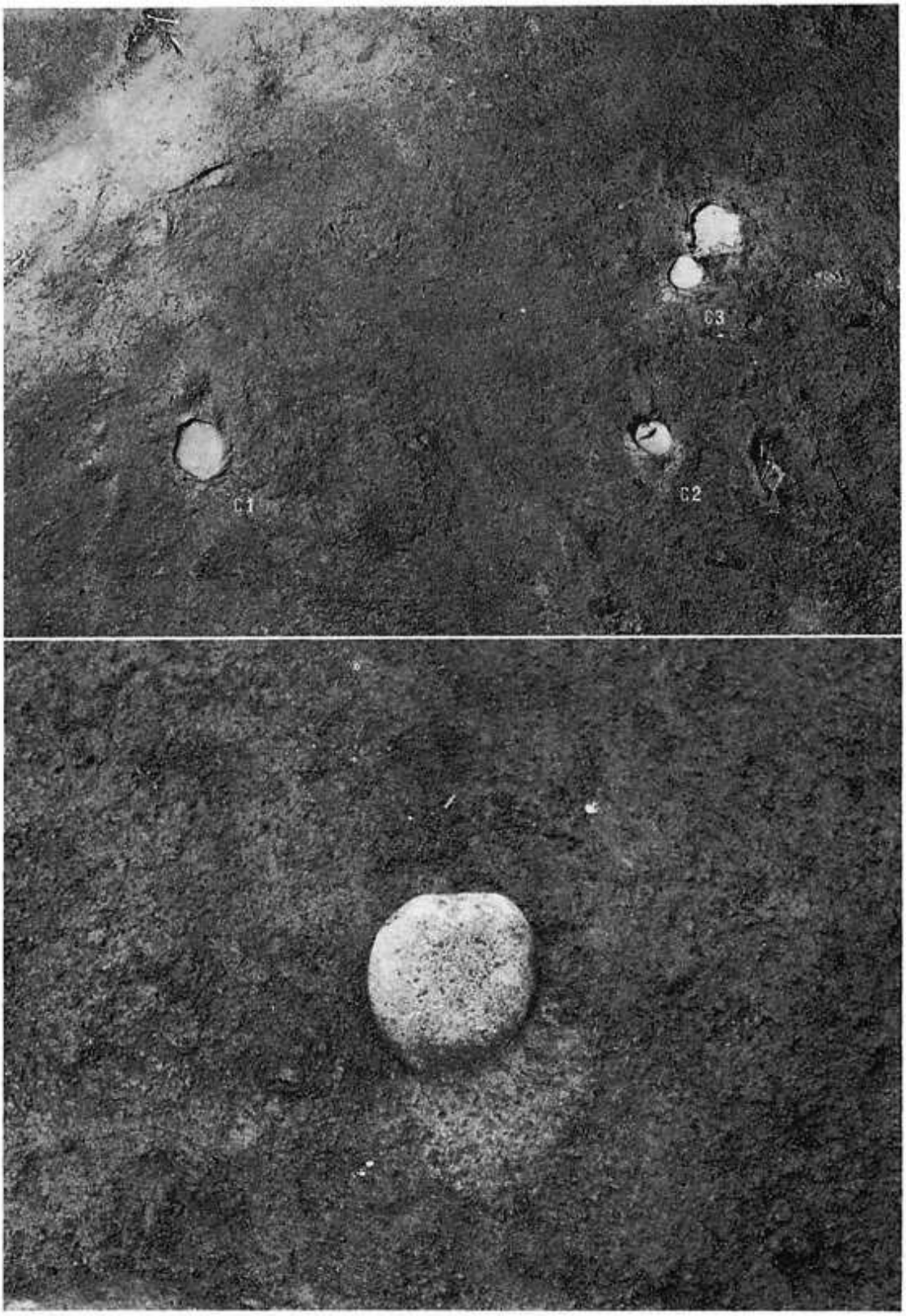
上：敲石出土状態，ニ5—C3．　下：敲石錘出土状態，セ4—C2．

ニ4区における礫石錘出土状態　上:北より，下:南より．

図版四六

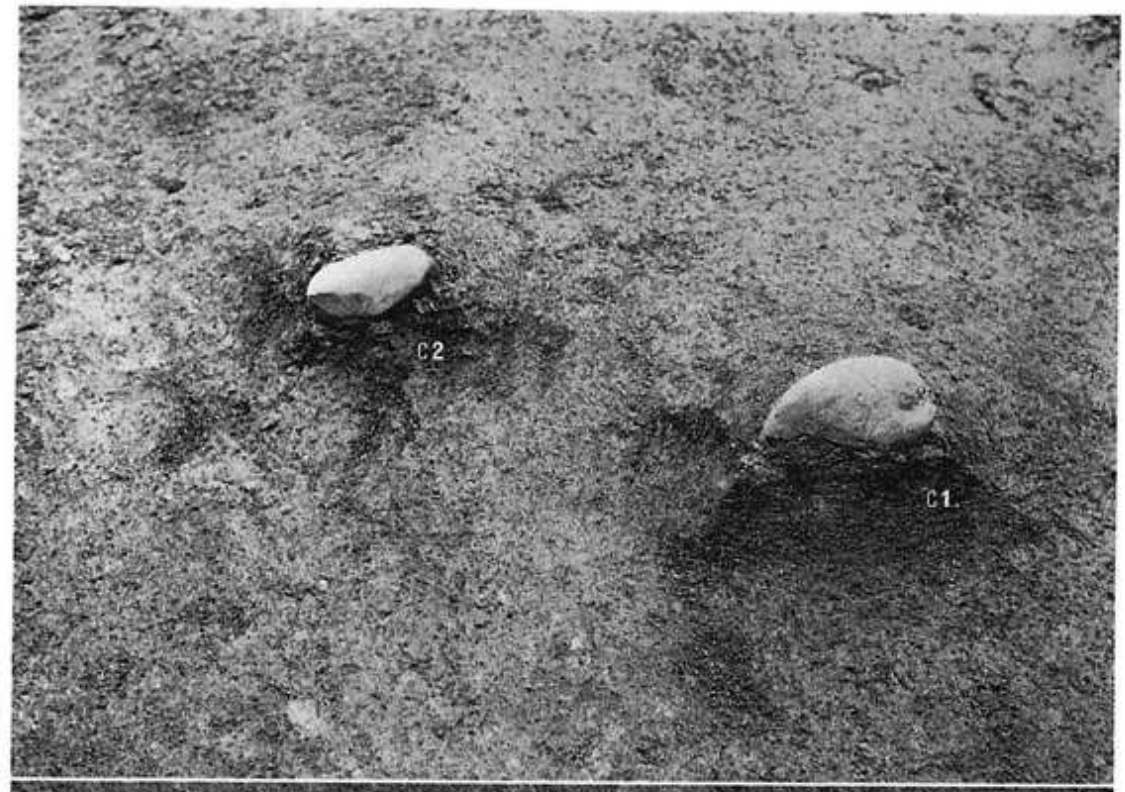


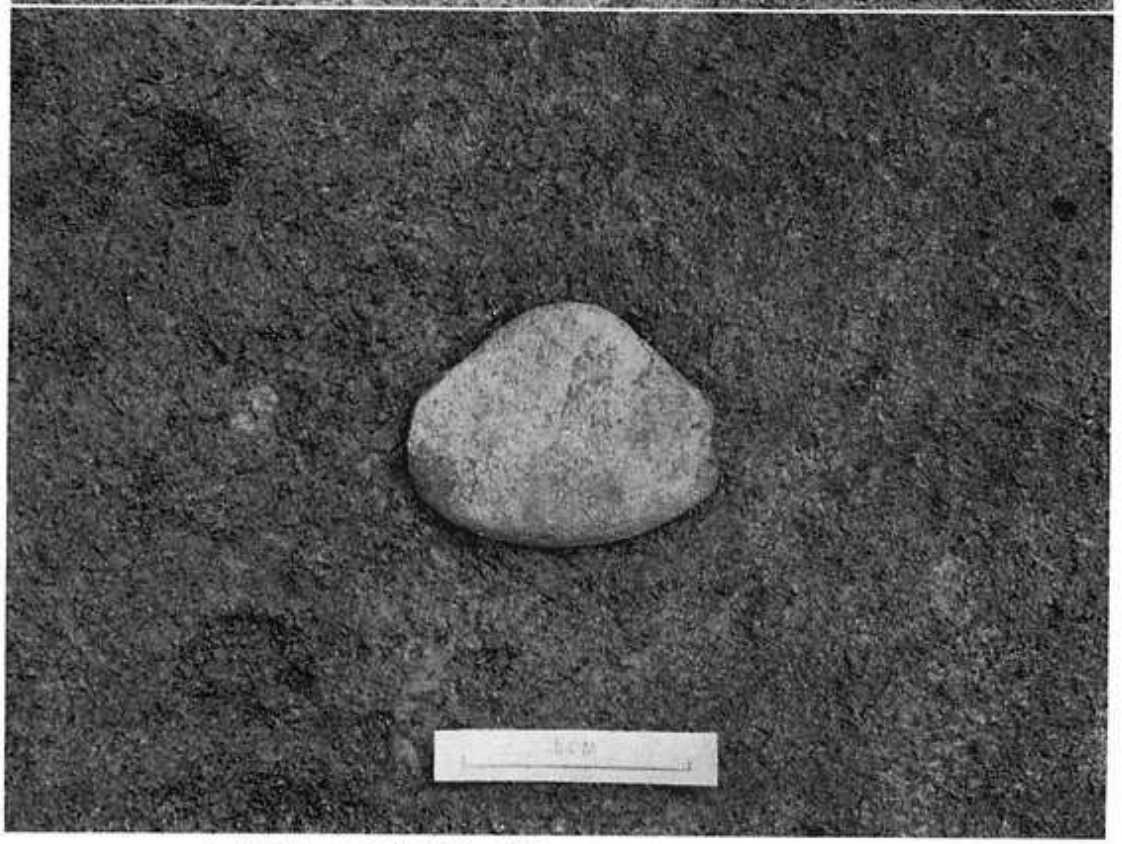
ニ4区における礫石錘出土状態近接　上:ニ4—C1・2，下:ニ4—C3・4.



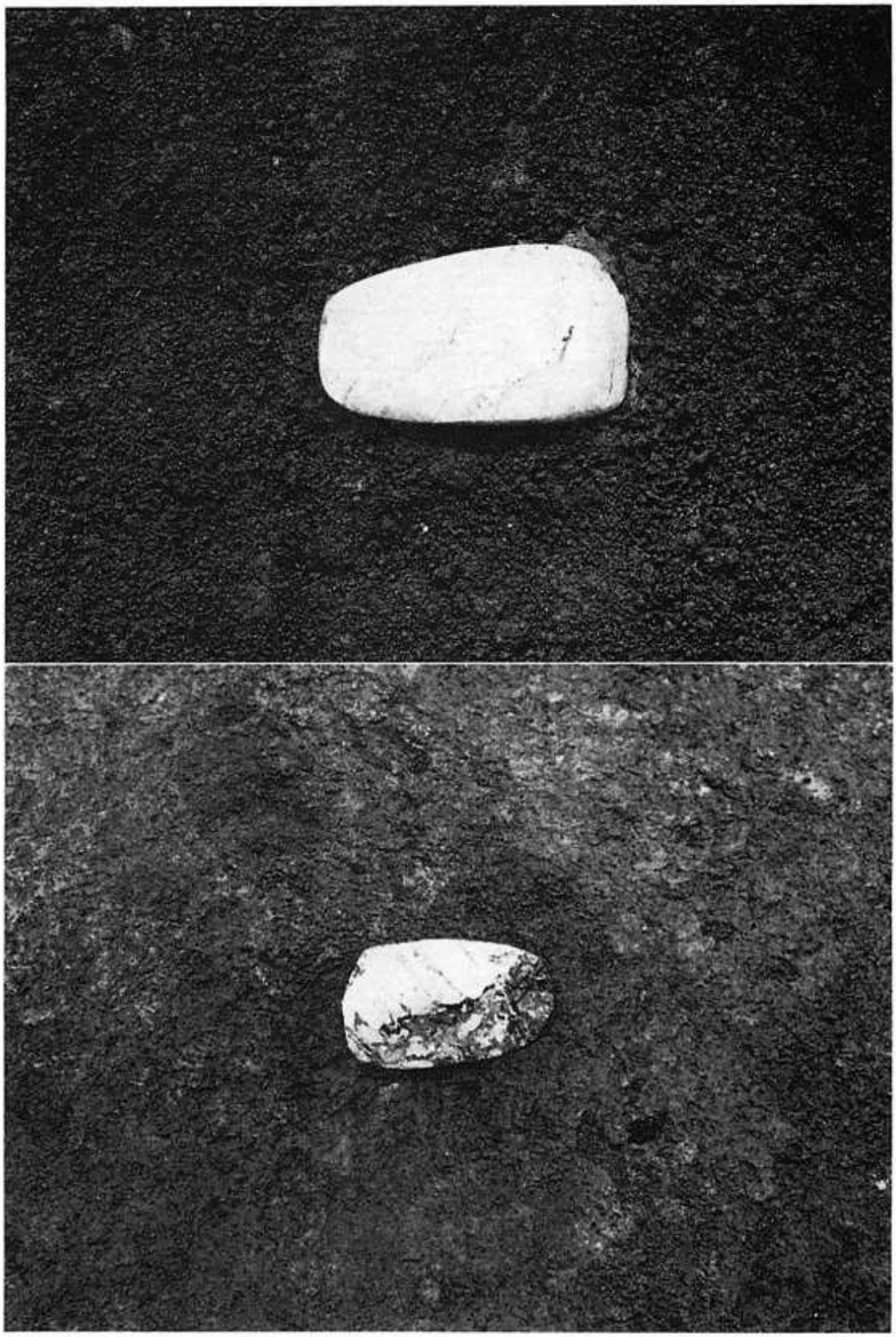
上:Ⅵ5区における礫石錘出土状態.　下:礫石錘出土状態, Ⅷ4－C3.

図版四八

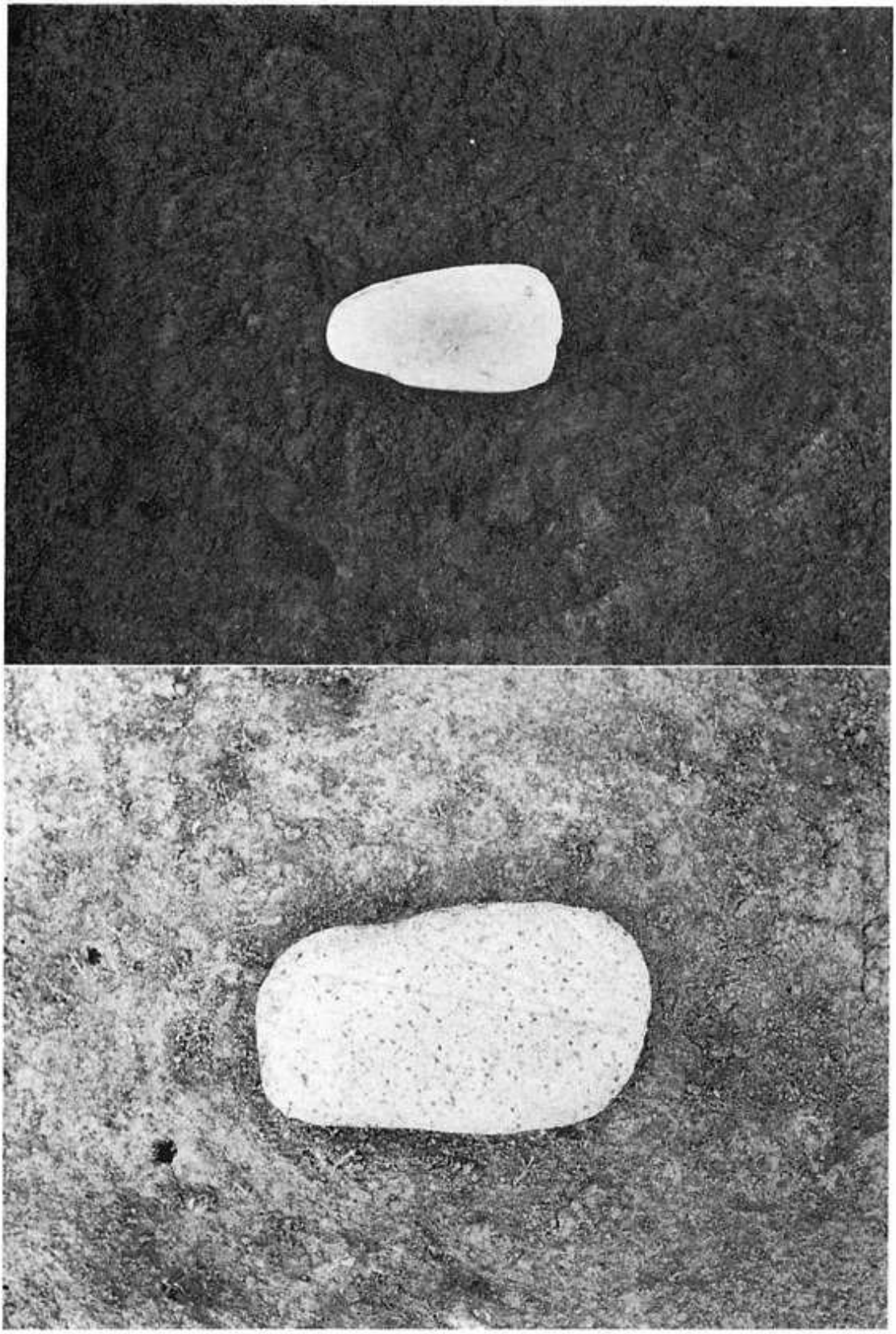




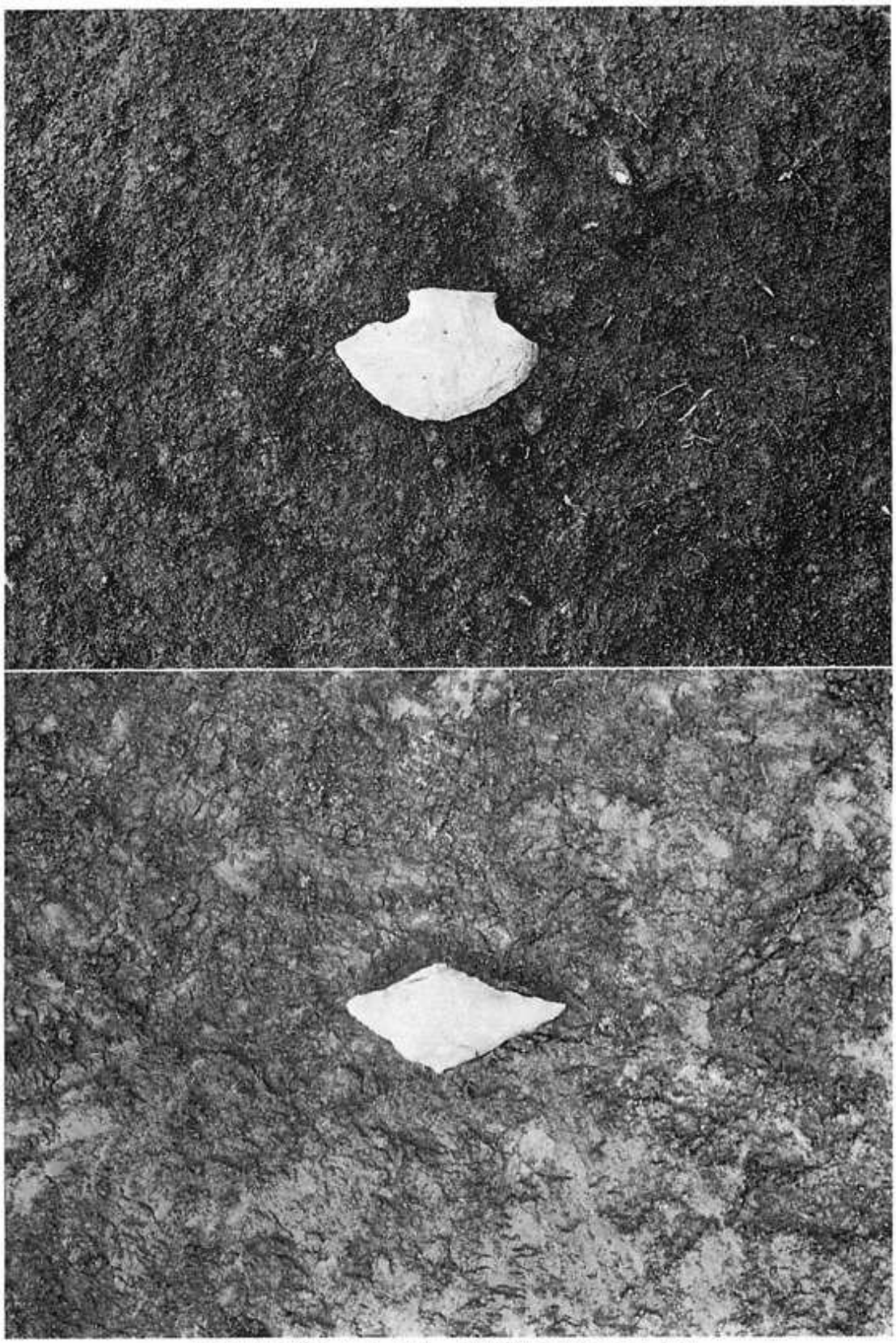
上：Ⅷ５区における礫石錘出土状態．　下：礫石錘出土状態，Ⅷ１－Ｃ３．



磨製石斧出土状態　上：I 2－C 4，下：ニ 5－C 5．

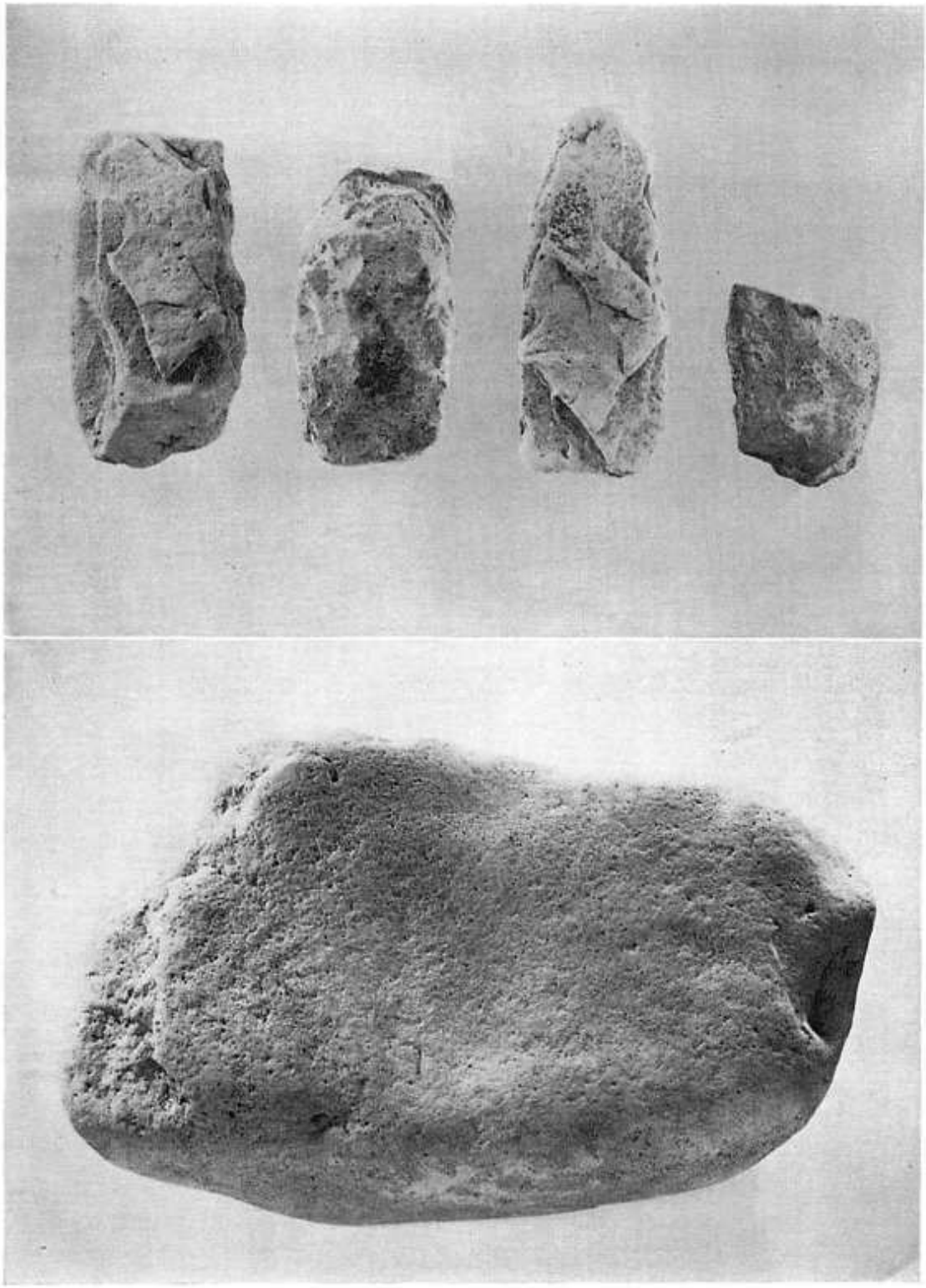


磨製石斧出土状態　上:Ⅷ2－C3，　下:セ4－C1．

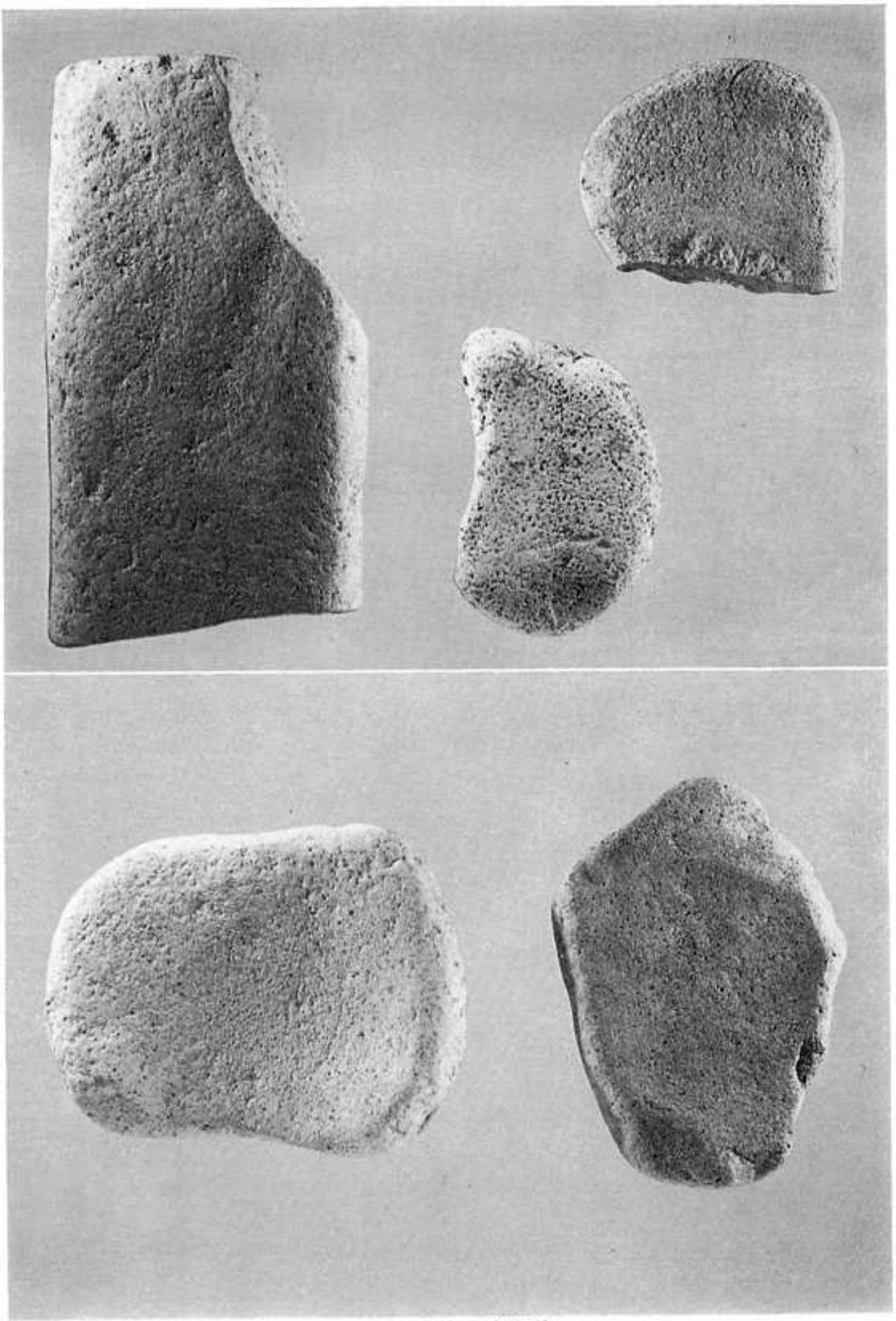


上：石匙出土状態，セ5－C1．　下：石錐出土状態，Ⅶ5－C4．

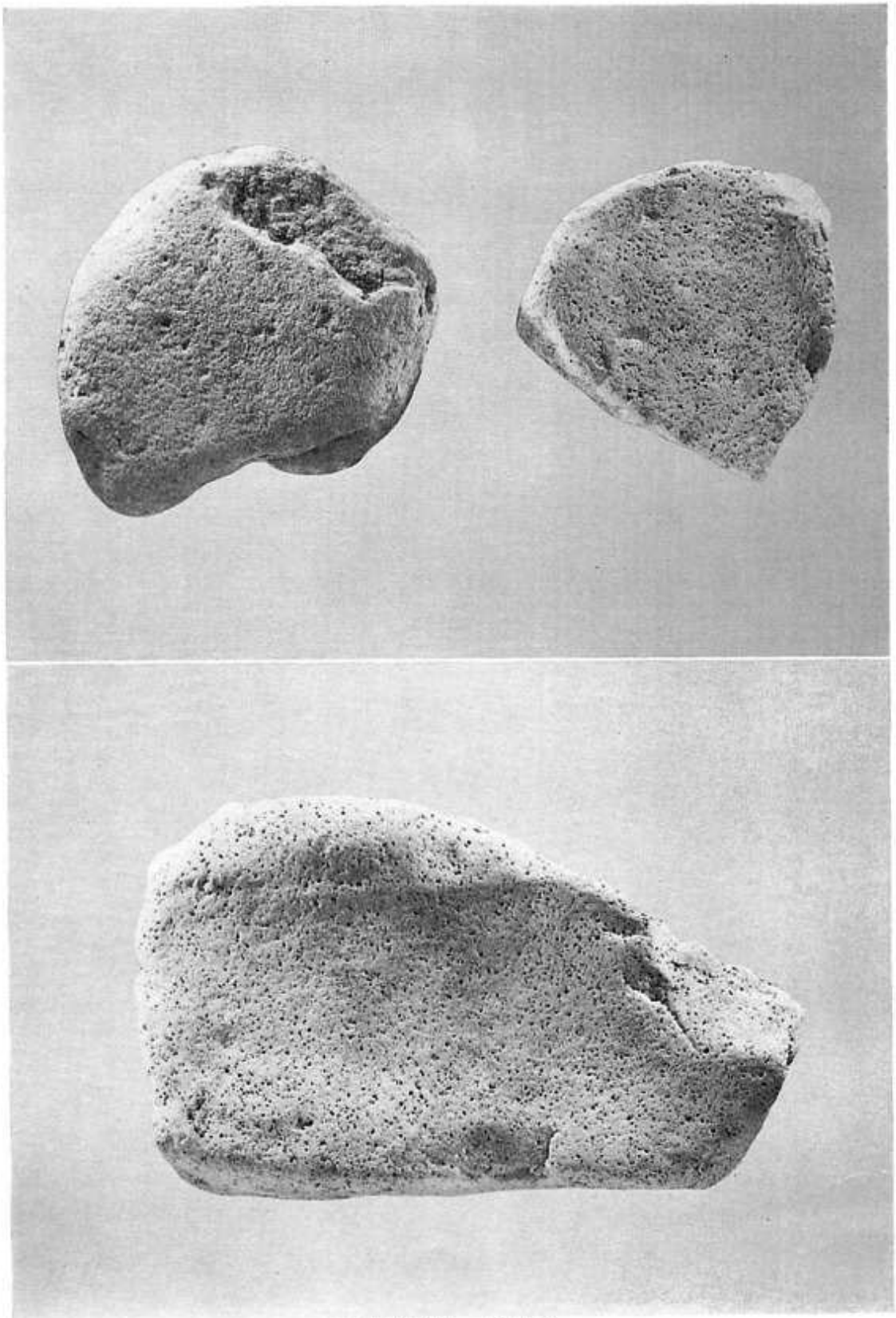
図版五二



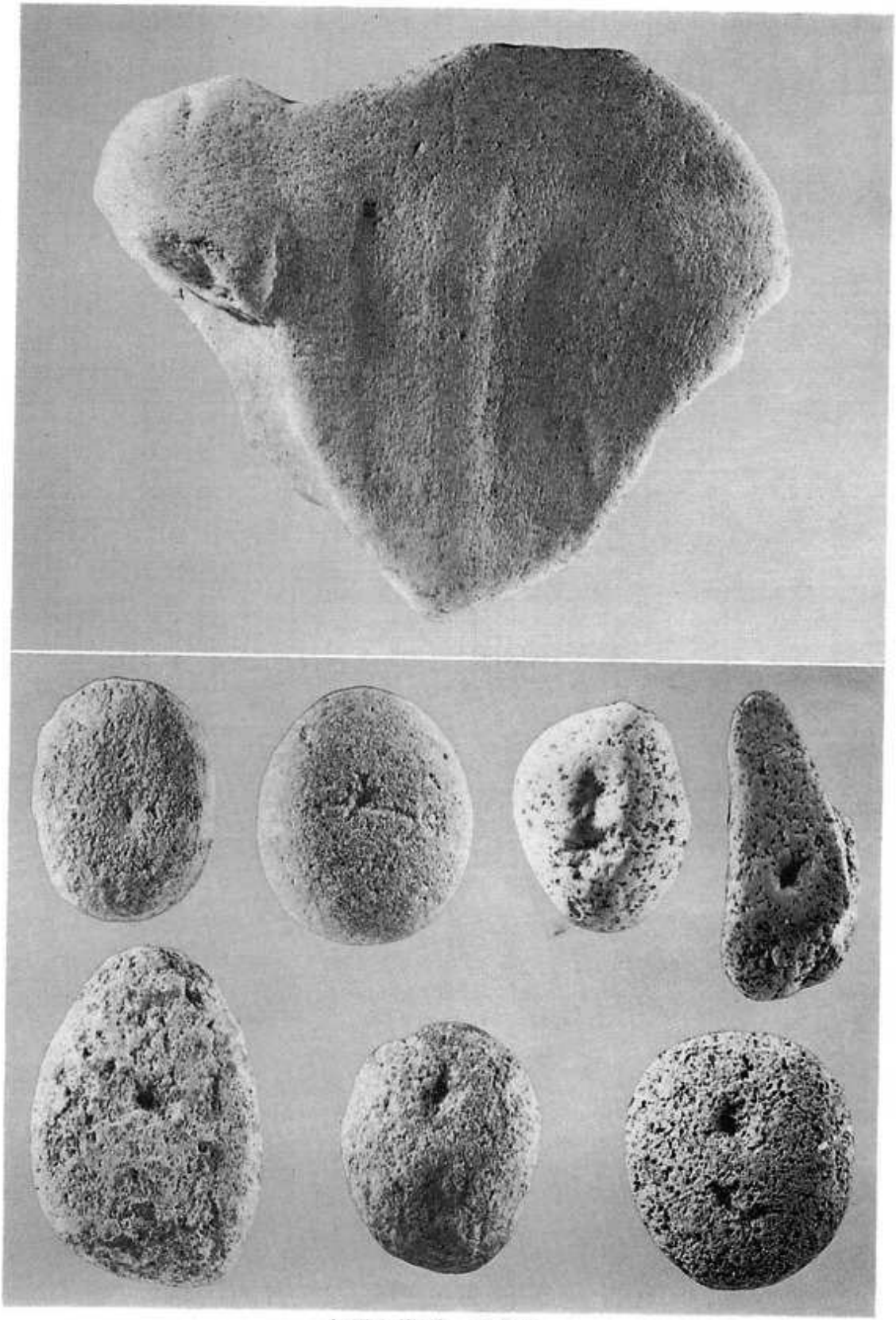
上：打製石斧．　下：石皿（約¼）．



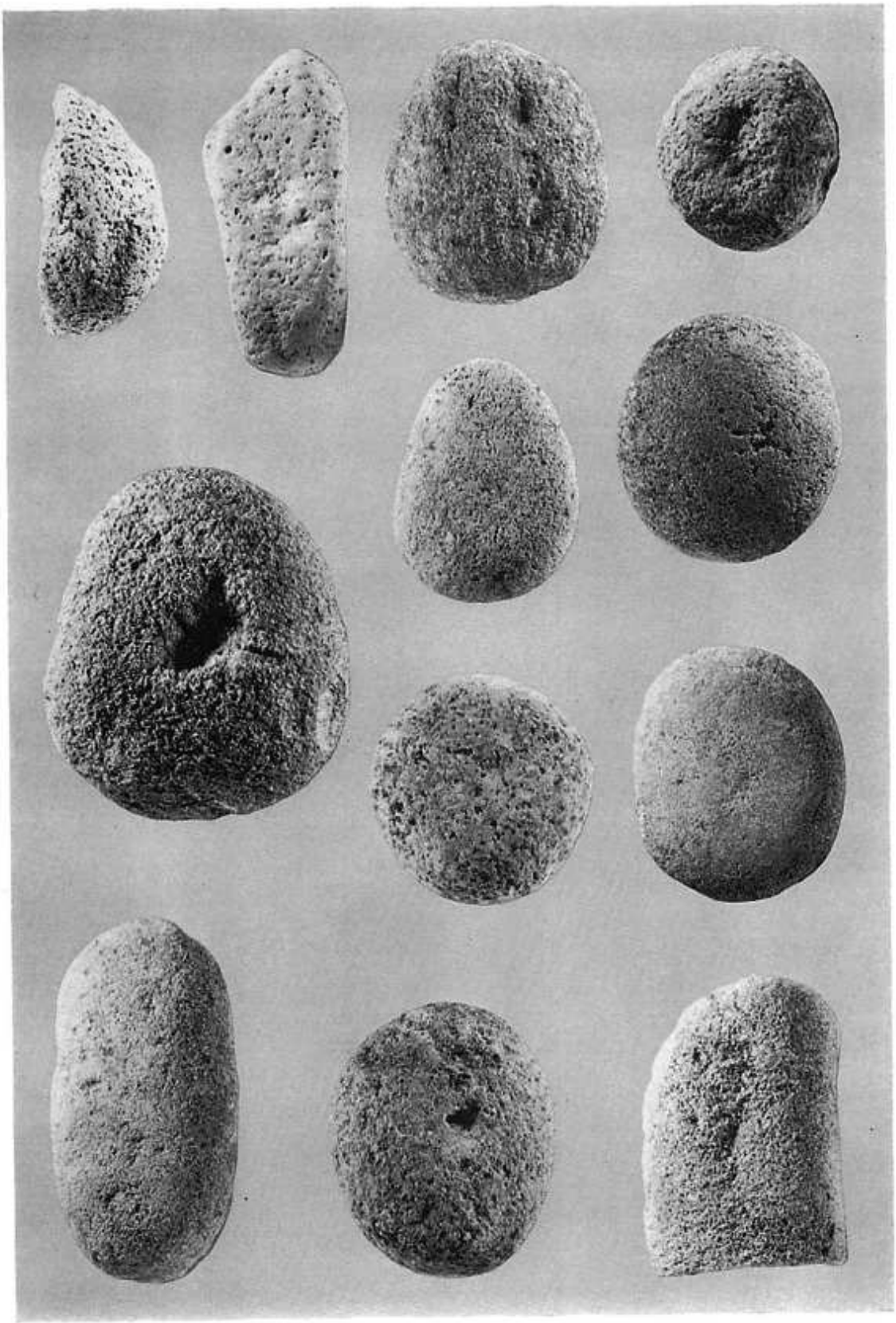
石　皿（上：約¼．　下：約⅛）．



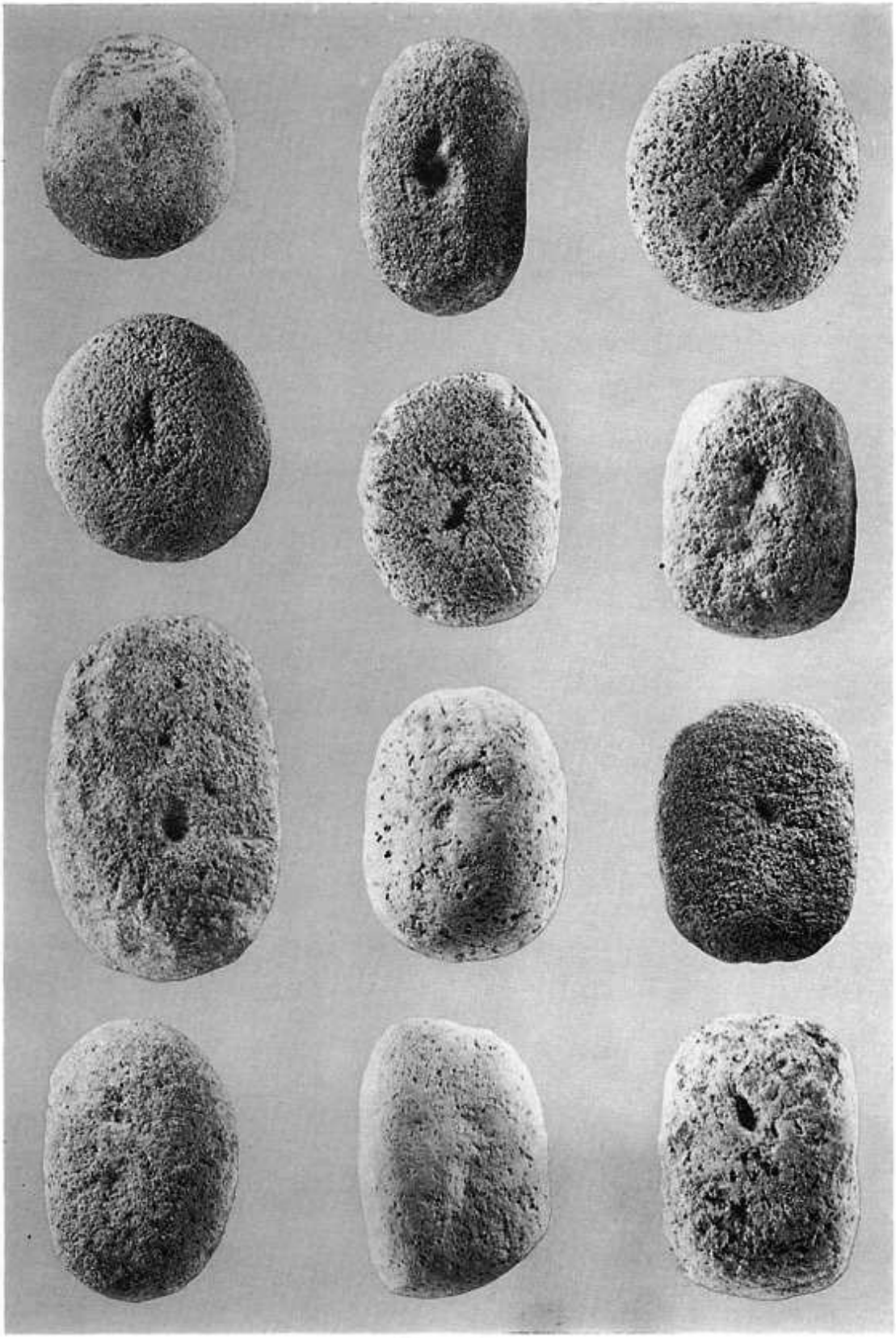
石　皿（上：約⅛．　下：約¼）．



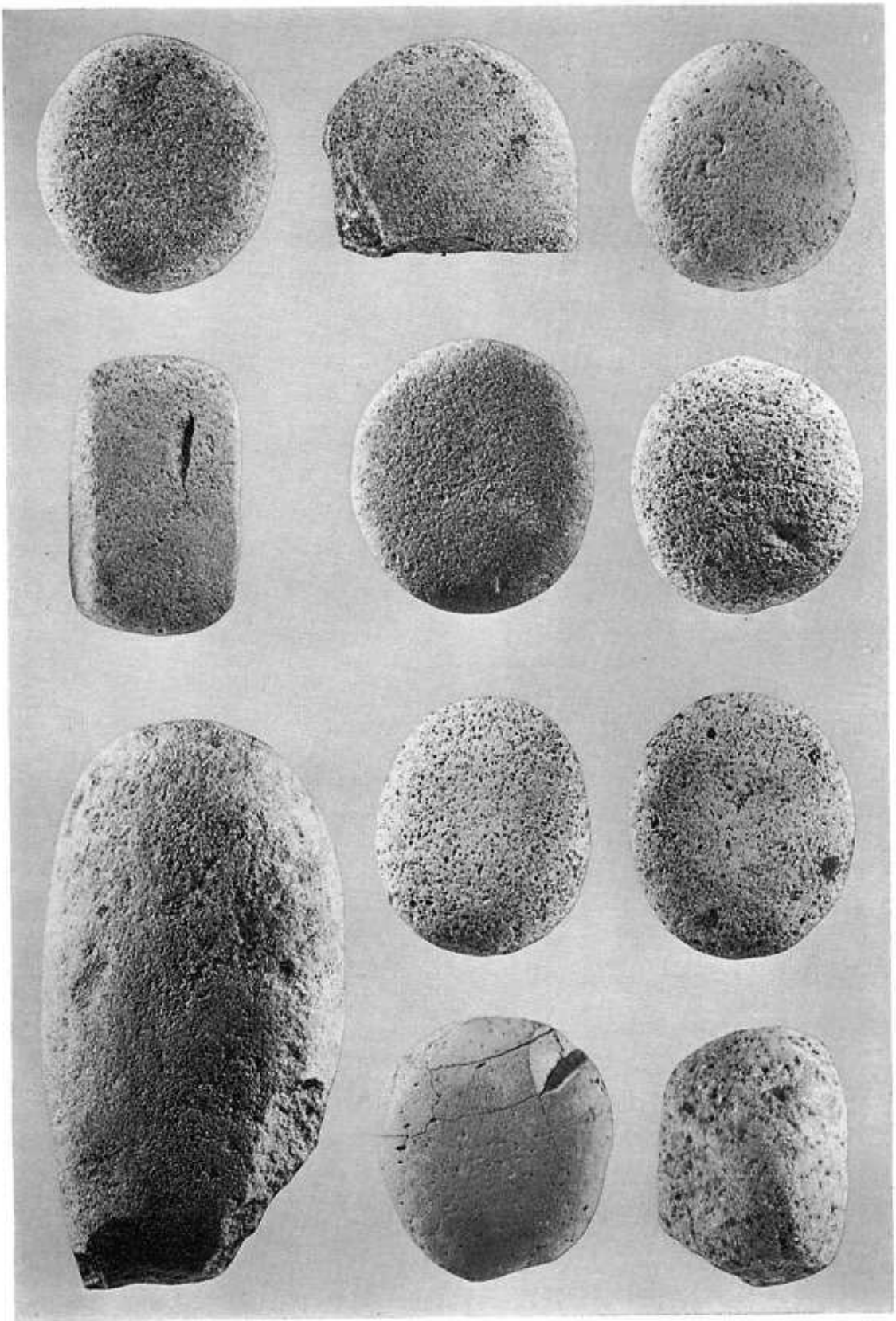
上：石皿（約⅛）．　下：敲石．



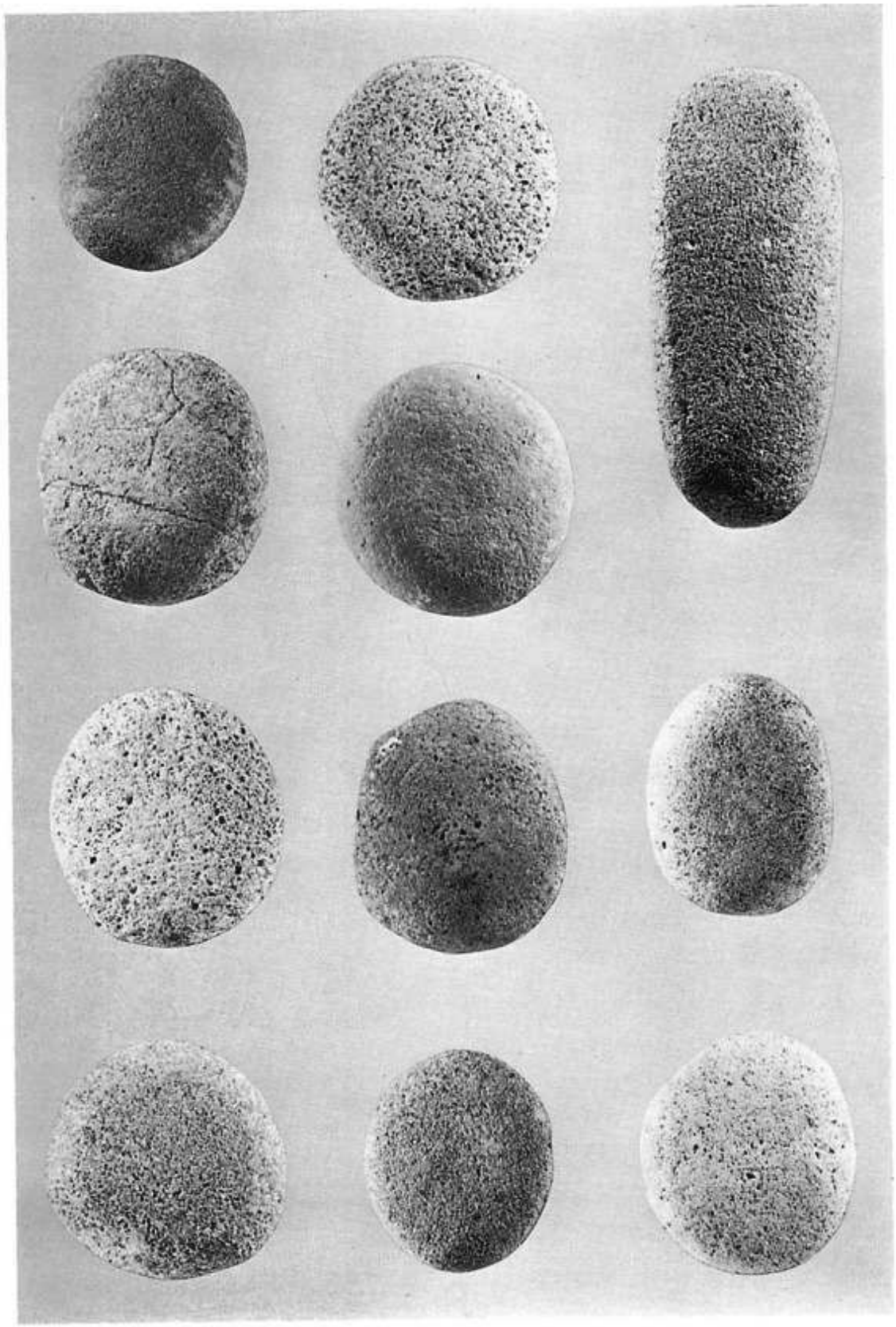
敲　石.



敲　石.

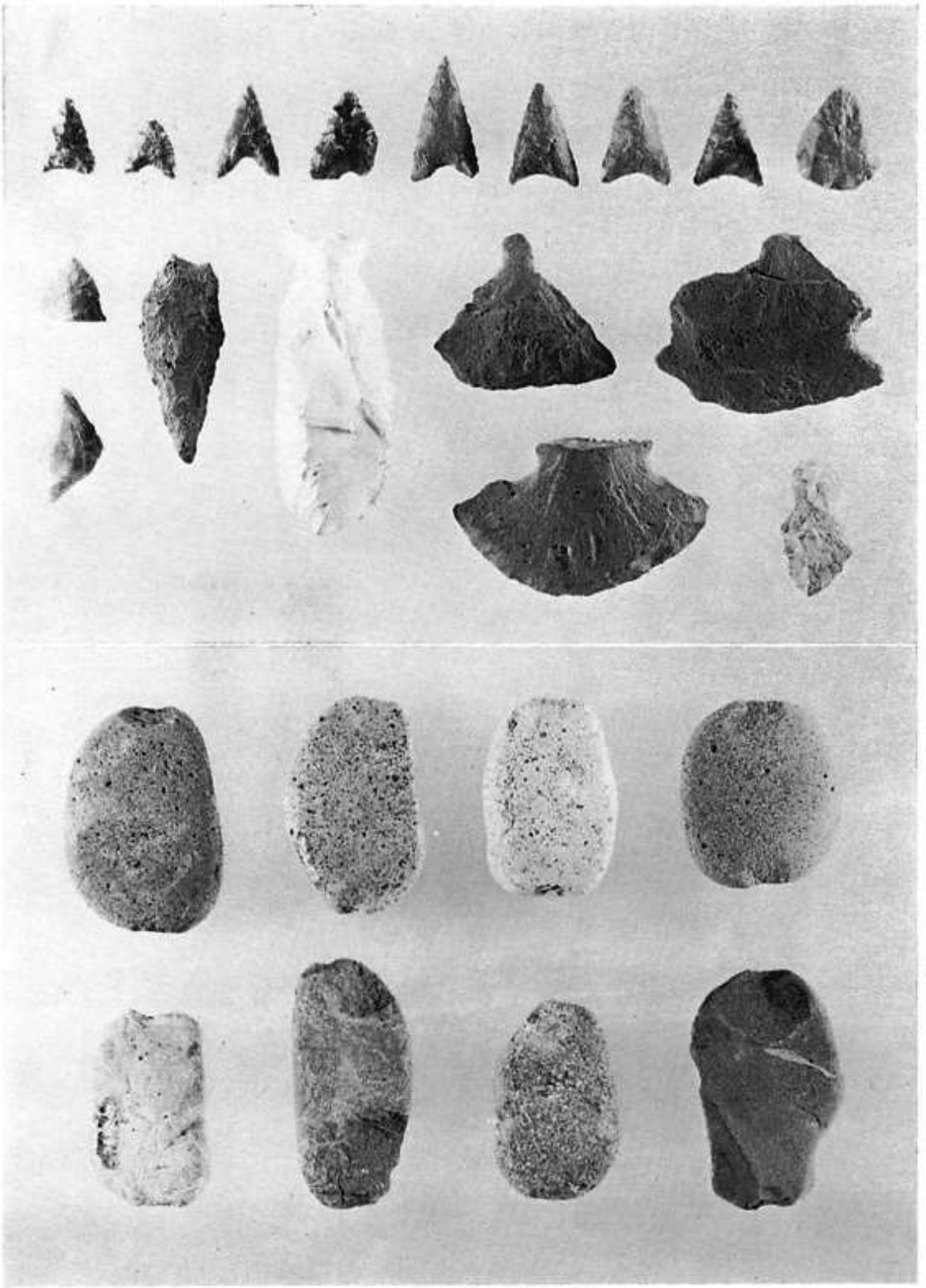


磨　石.

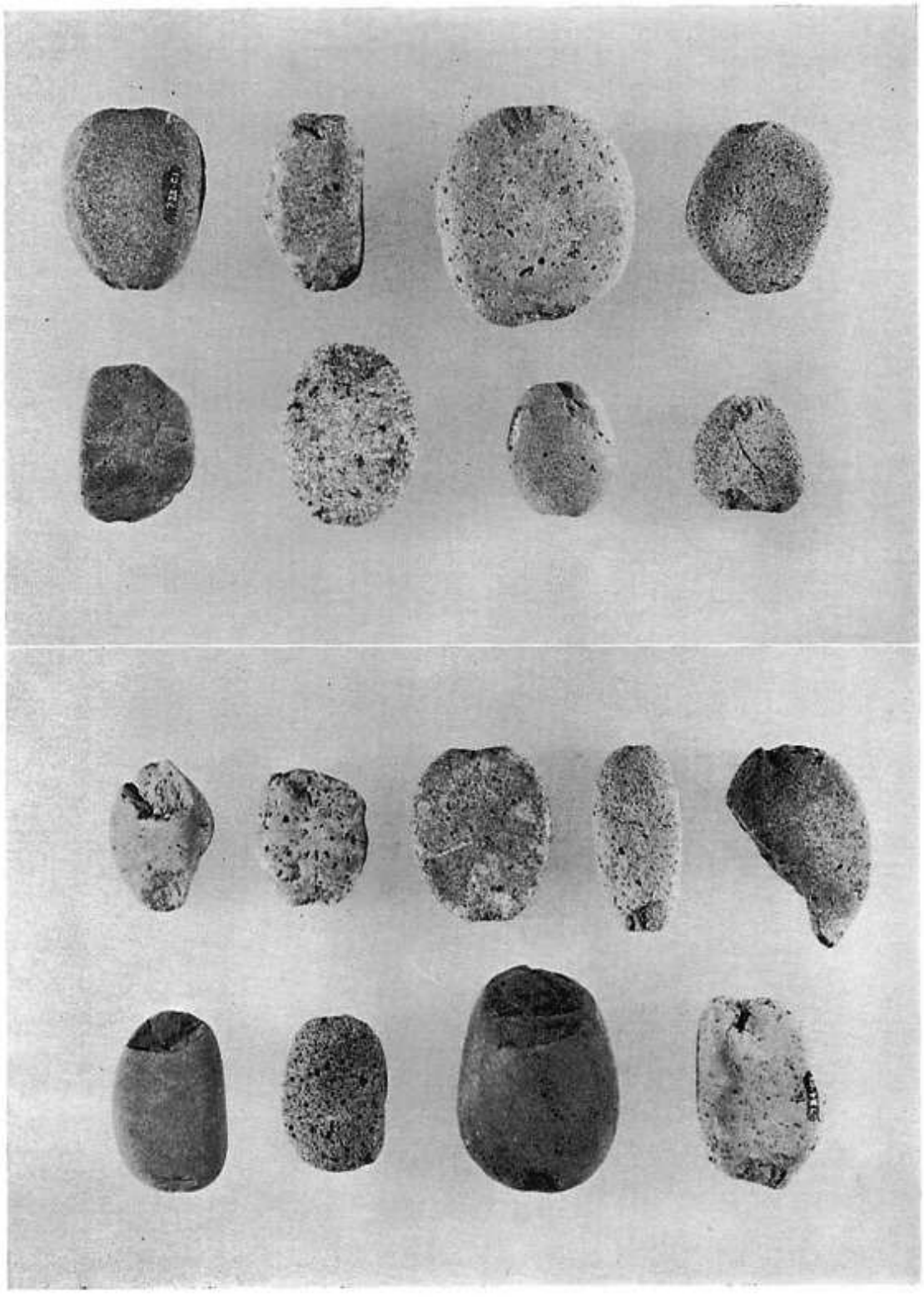


磨　石.

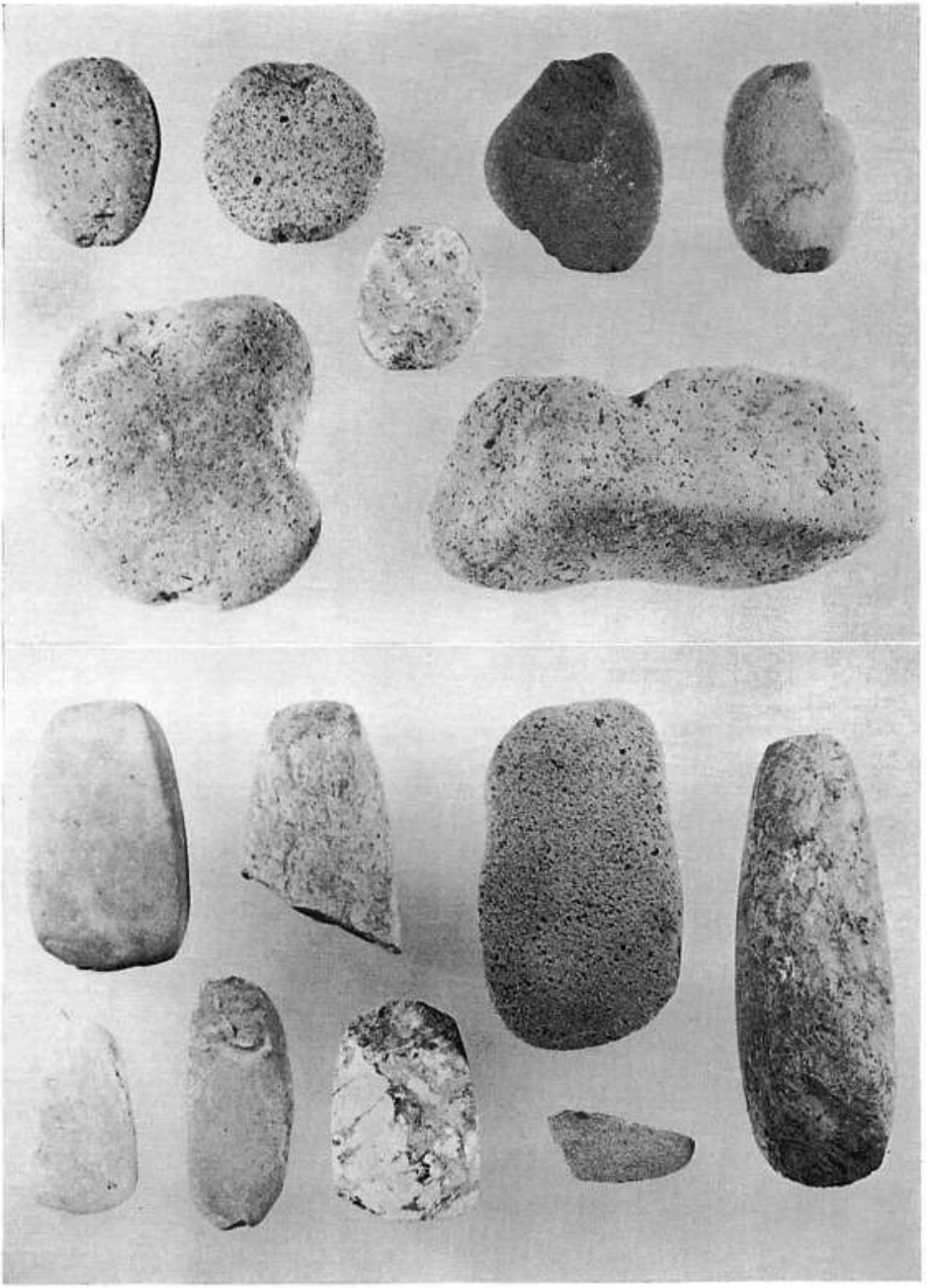
図版六十



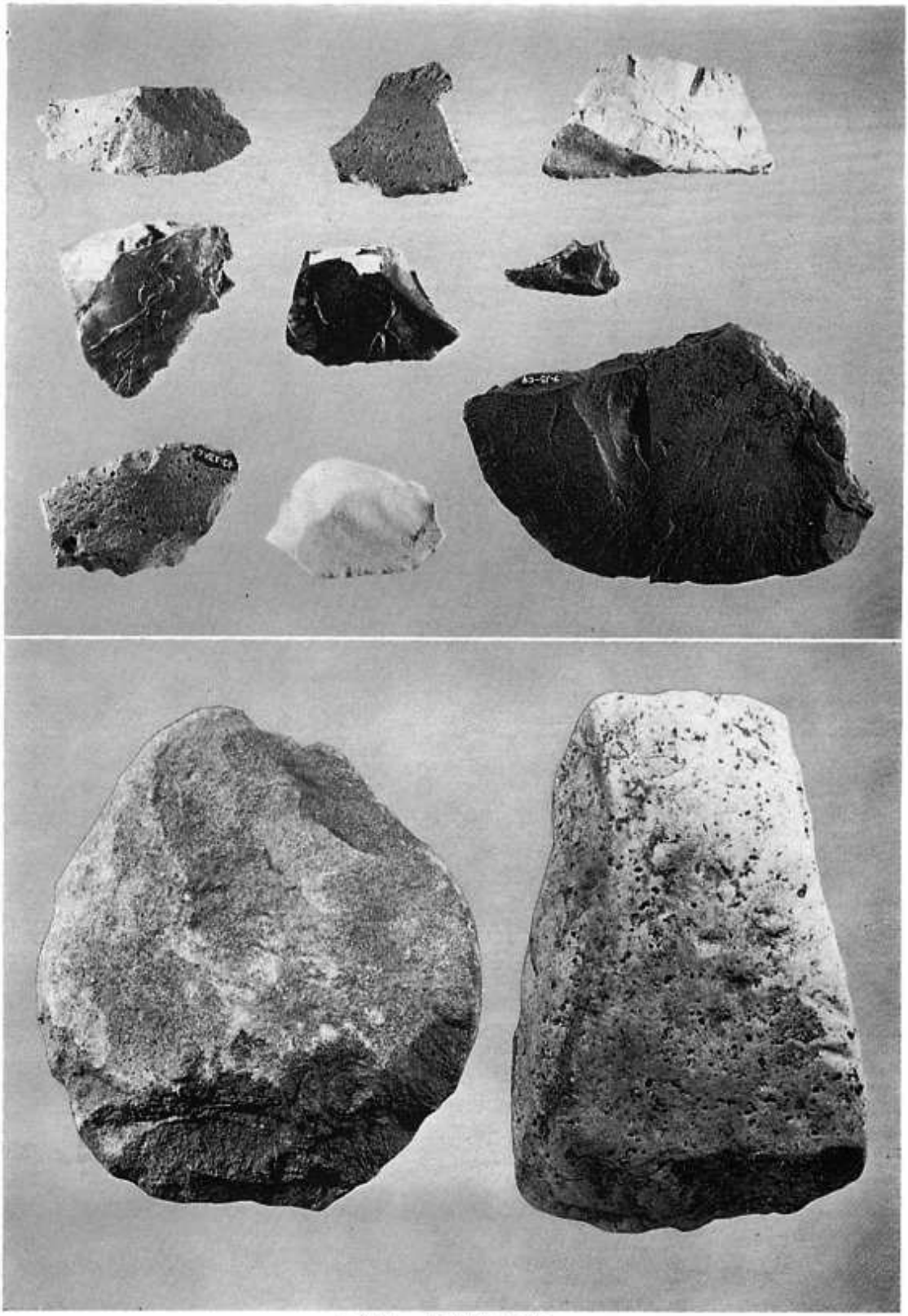
上:石鏃・石錐・石匙.　下:礫石錘.



礫石錘.

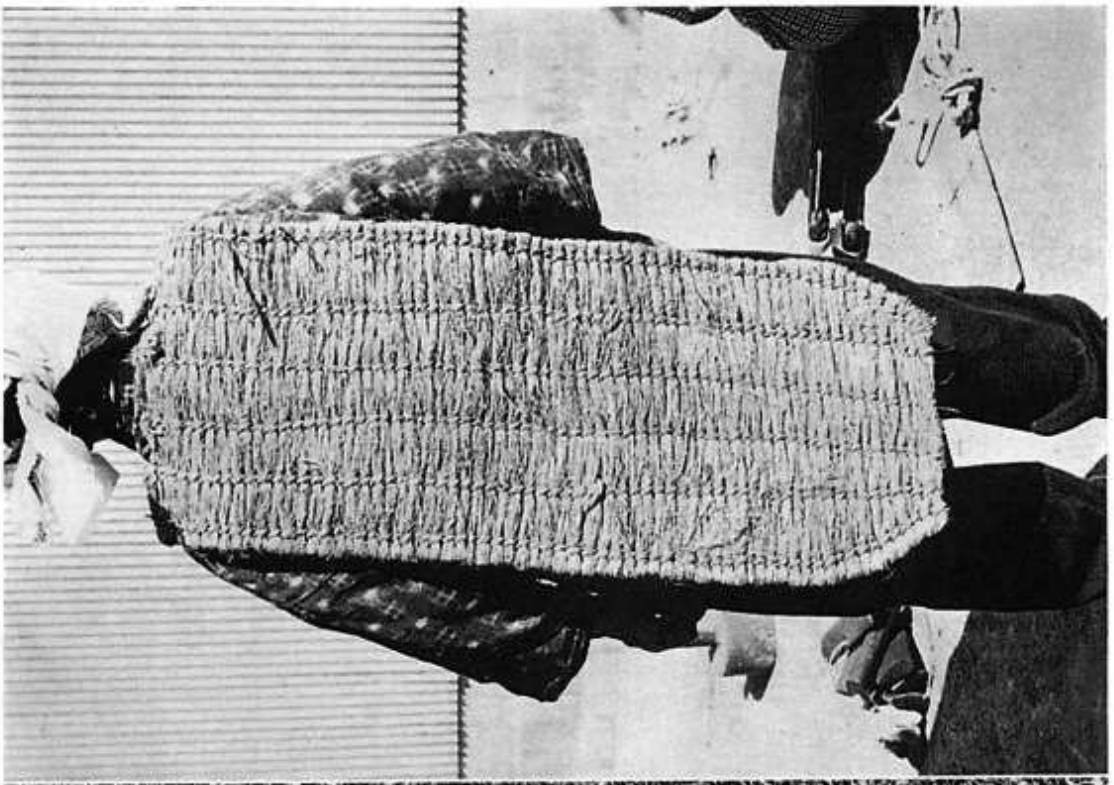


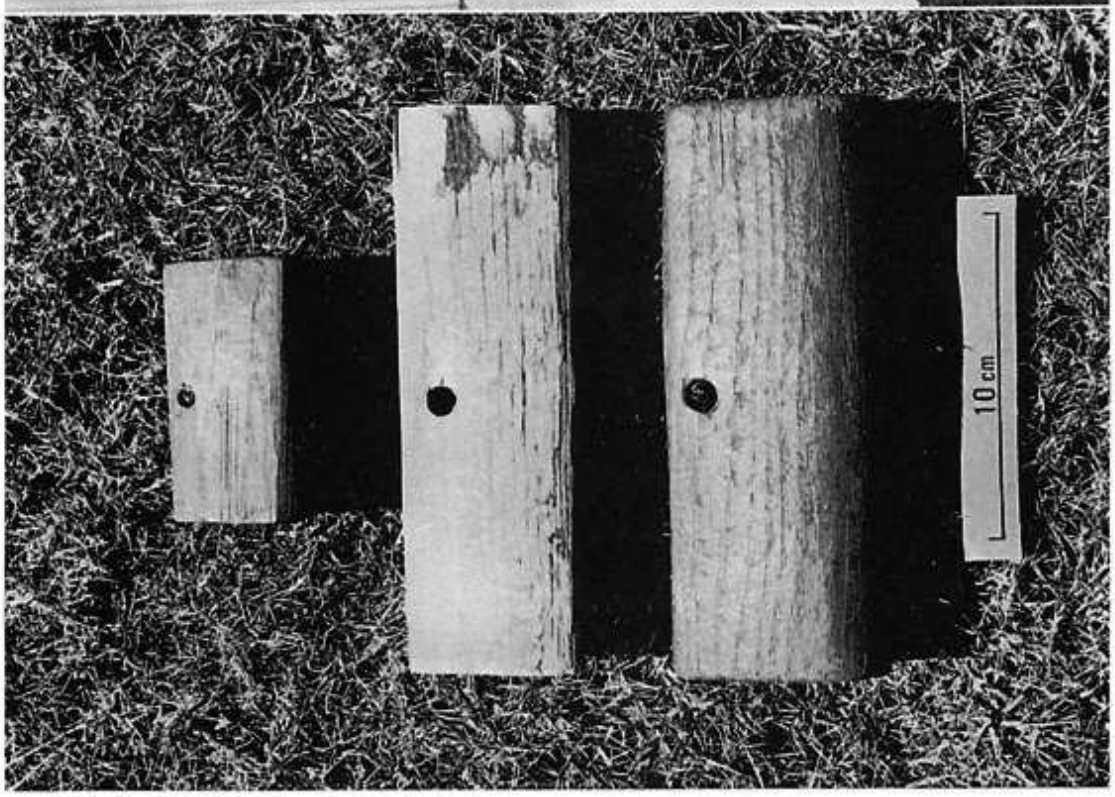
上:礫石錘・編物石。　下:磨製石斧。



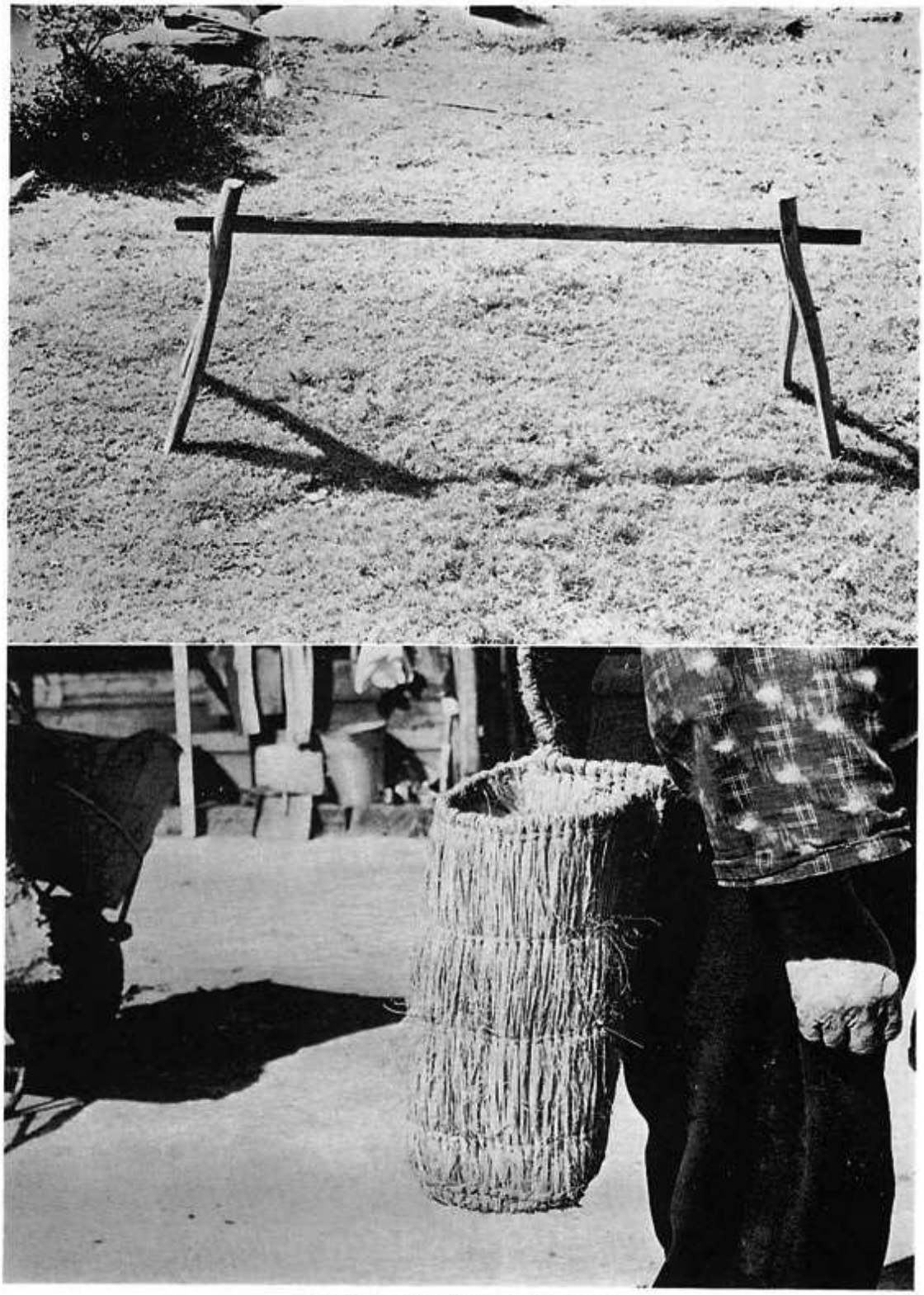
上:削器.　下:礫器 (約½).

図版 六四

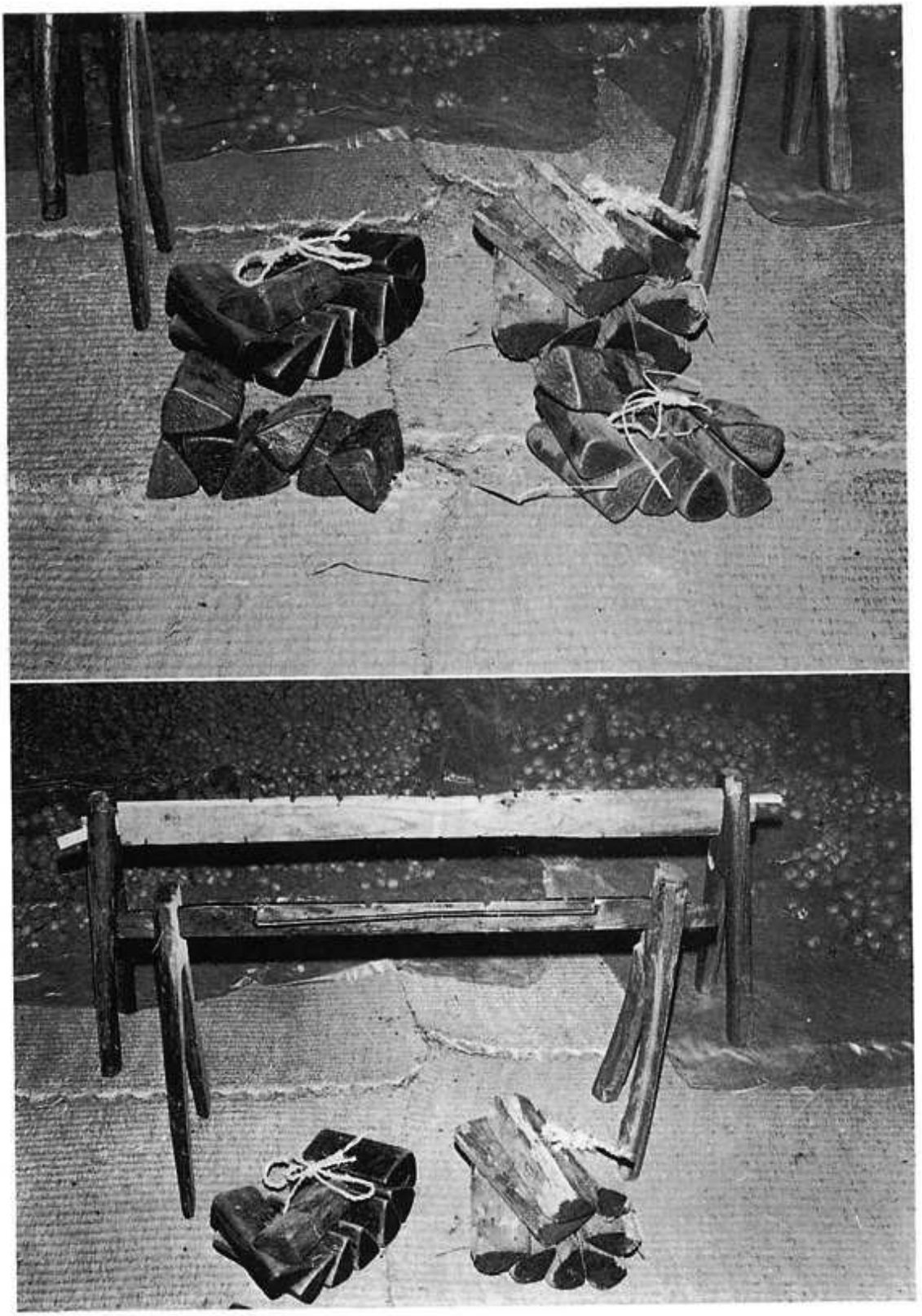




左：寺尾・前田家のツチノコ、右：同背中アテ、

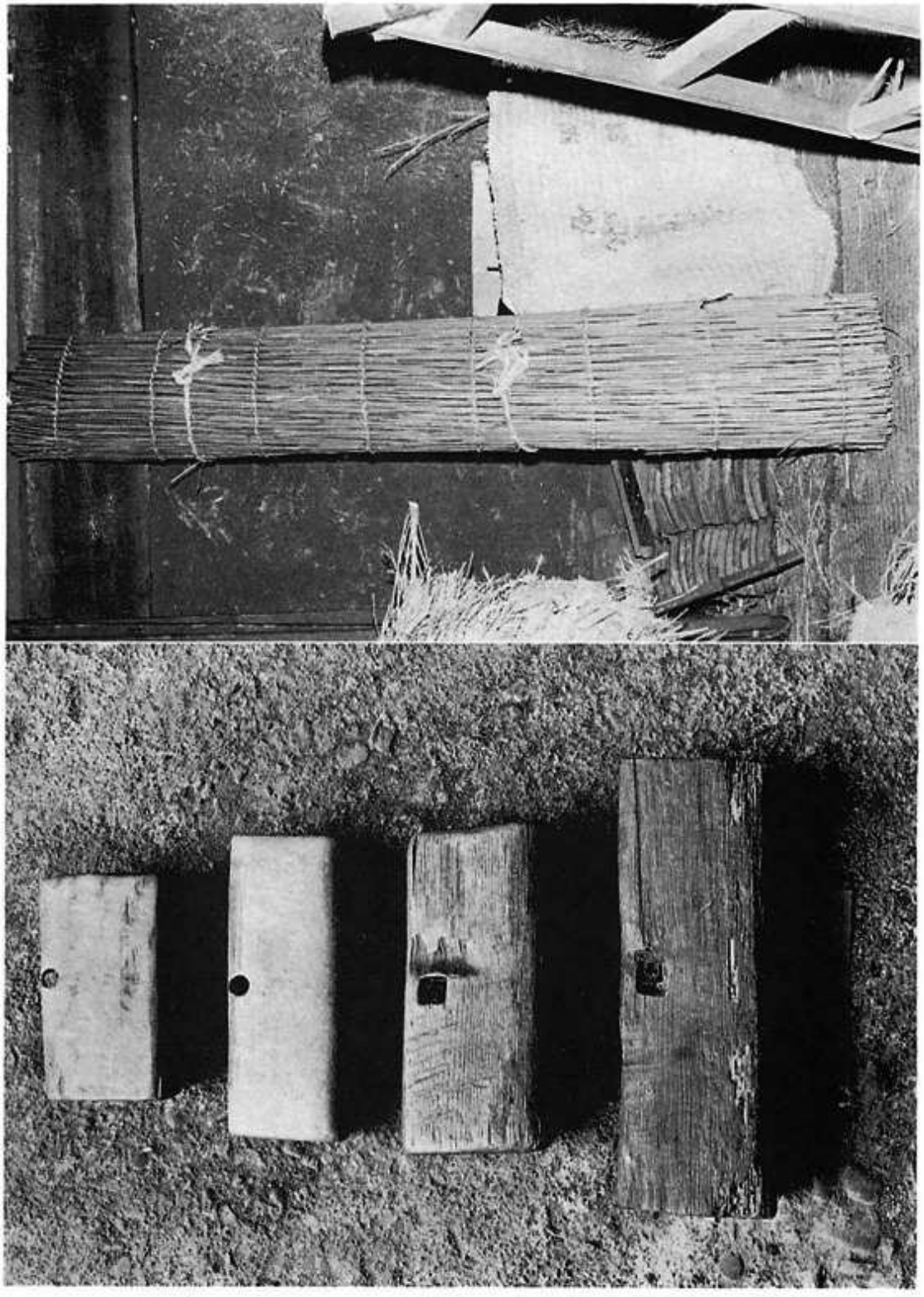


上:寺尾・前田家の目盛板.　下:同フゴ.

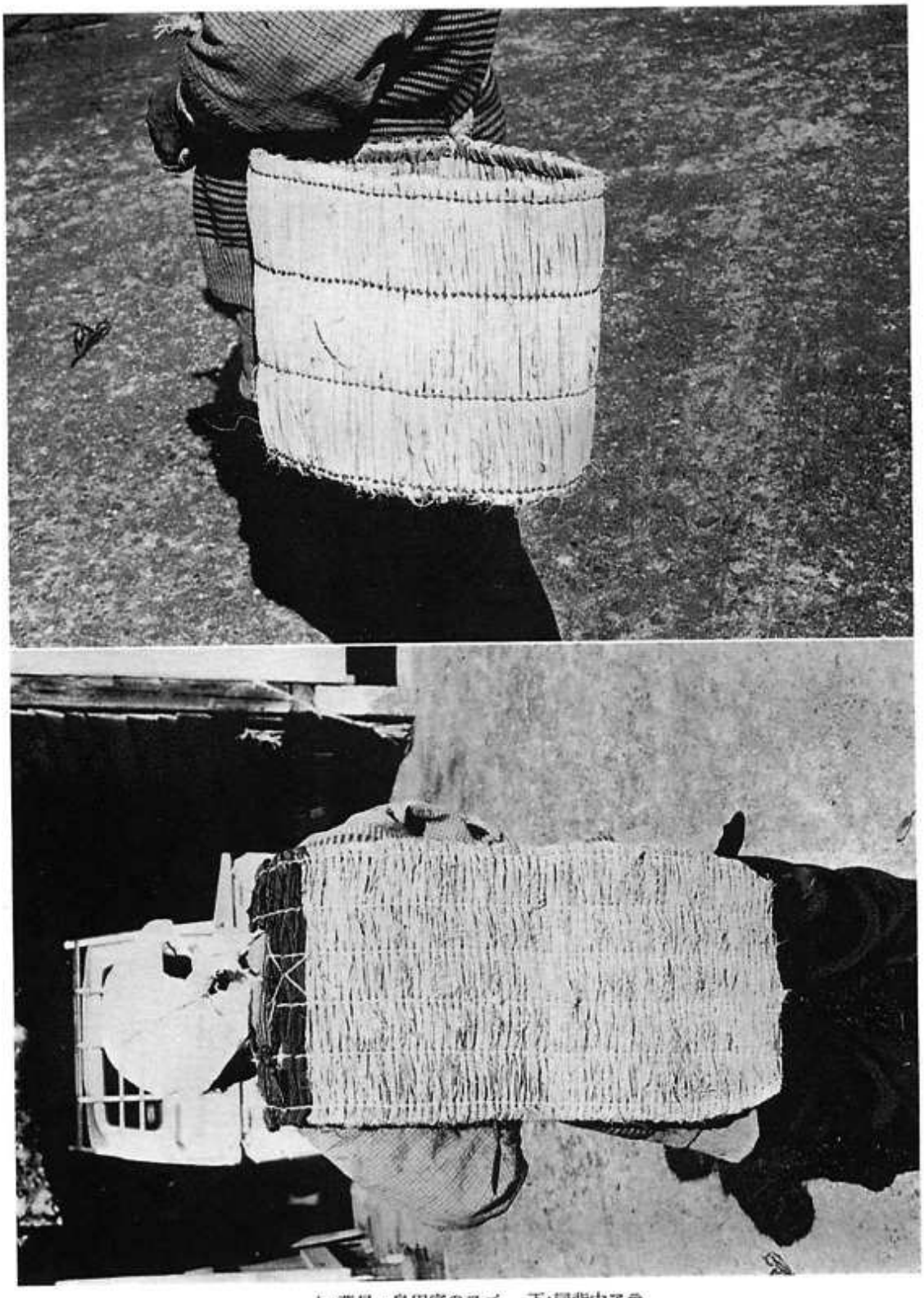


上:暮見・島田家のツチノコ。　下:同編み台。

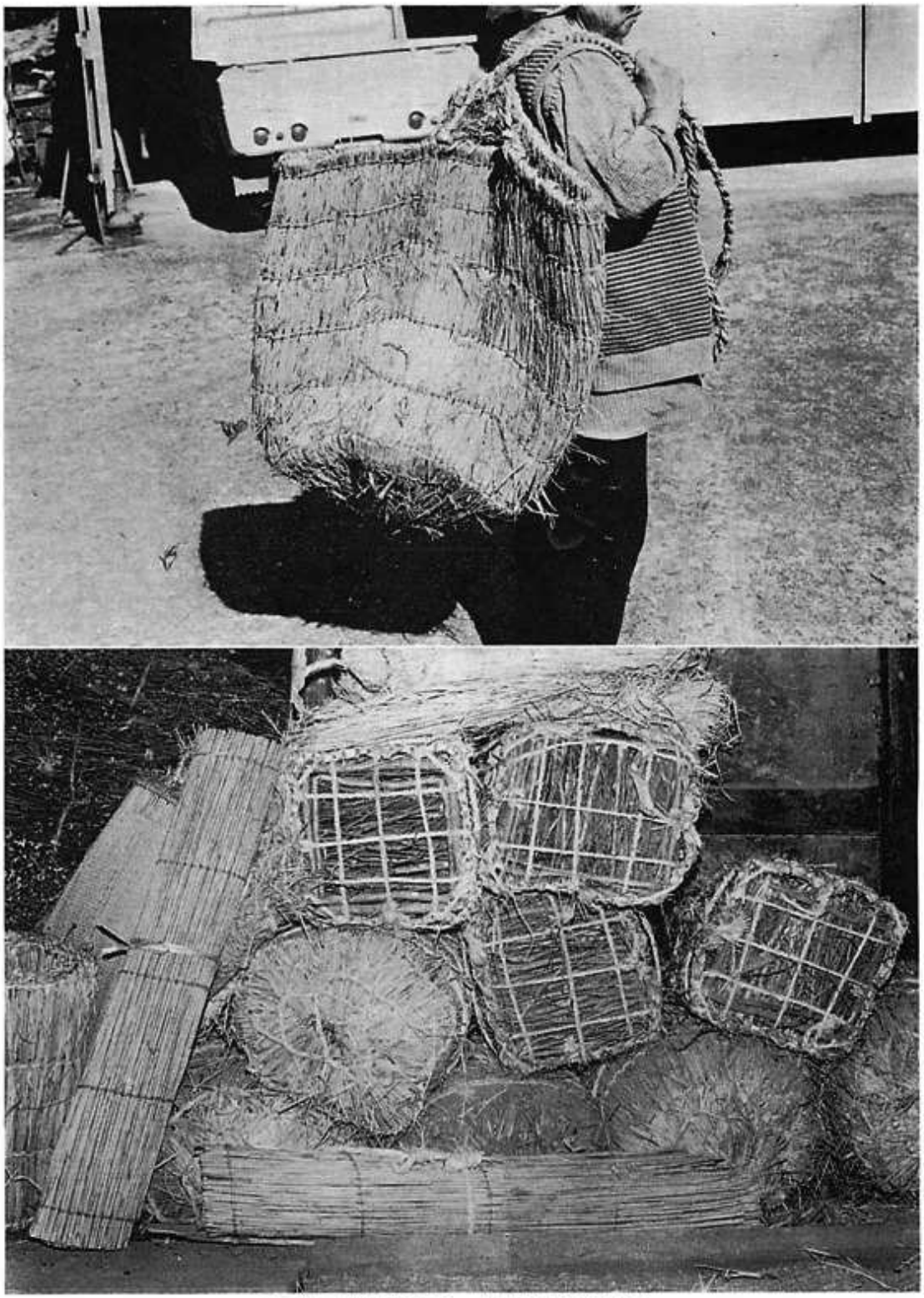
図版 六七



左：暮見・島田家のツチノコ、右：同雪囲のいス、

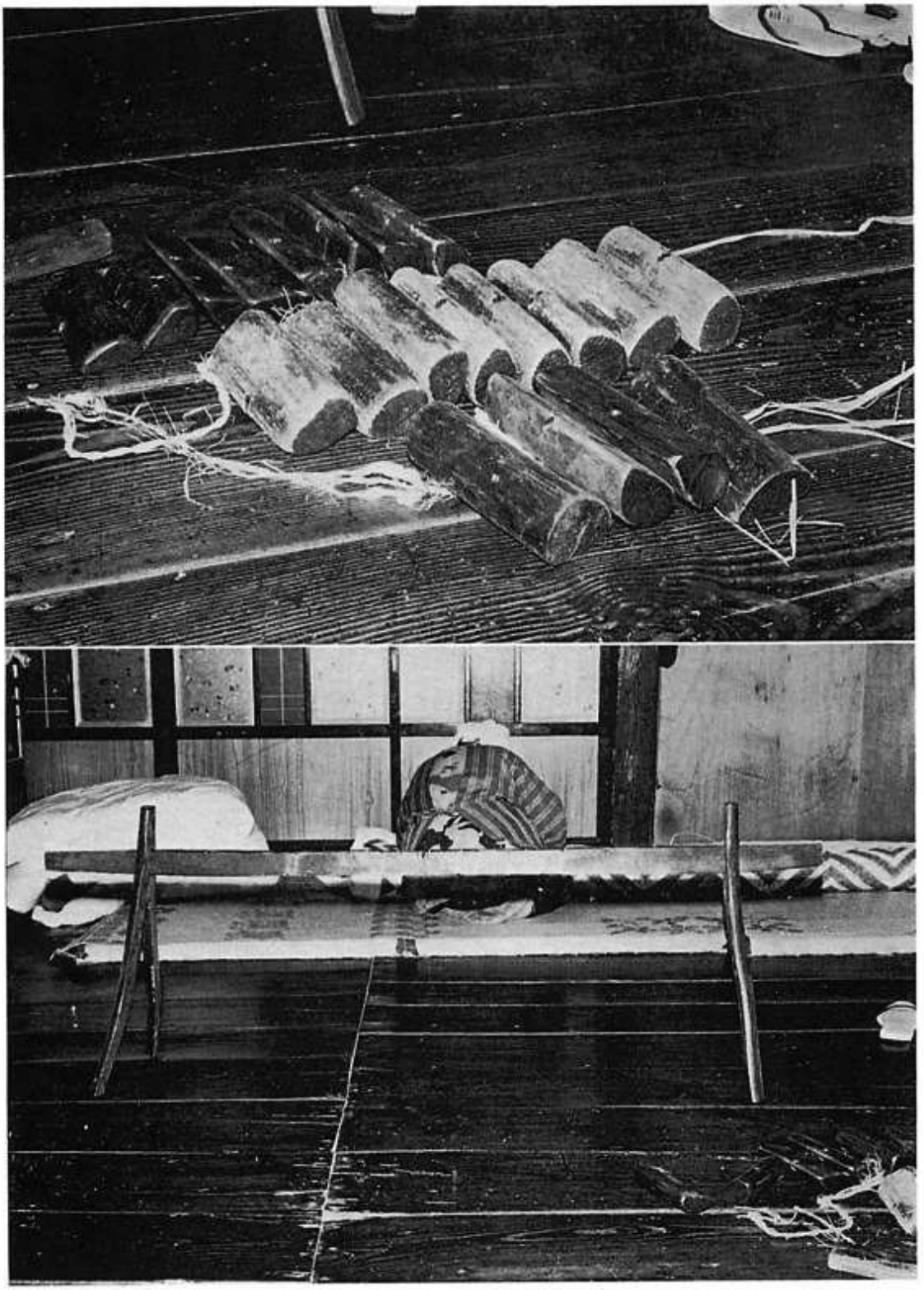


上:暮見・島田家のフゴ.　下:同背中アテ.

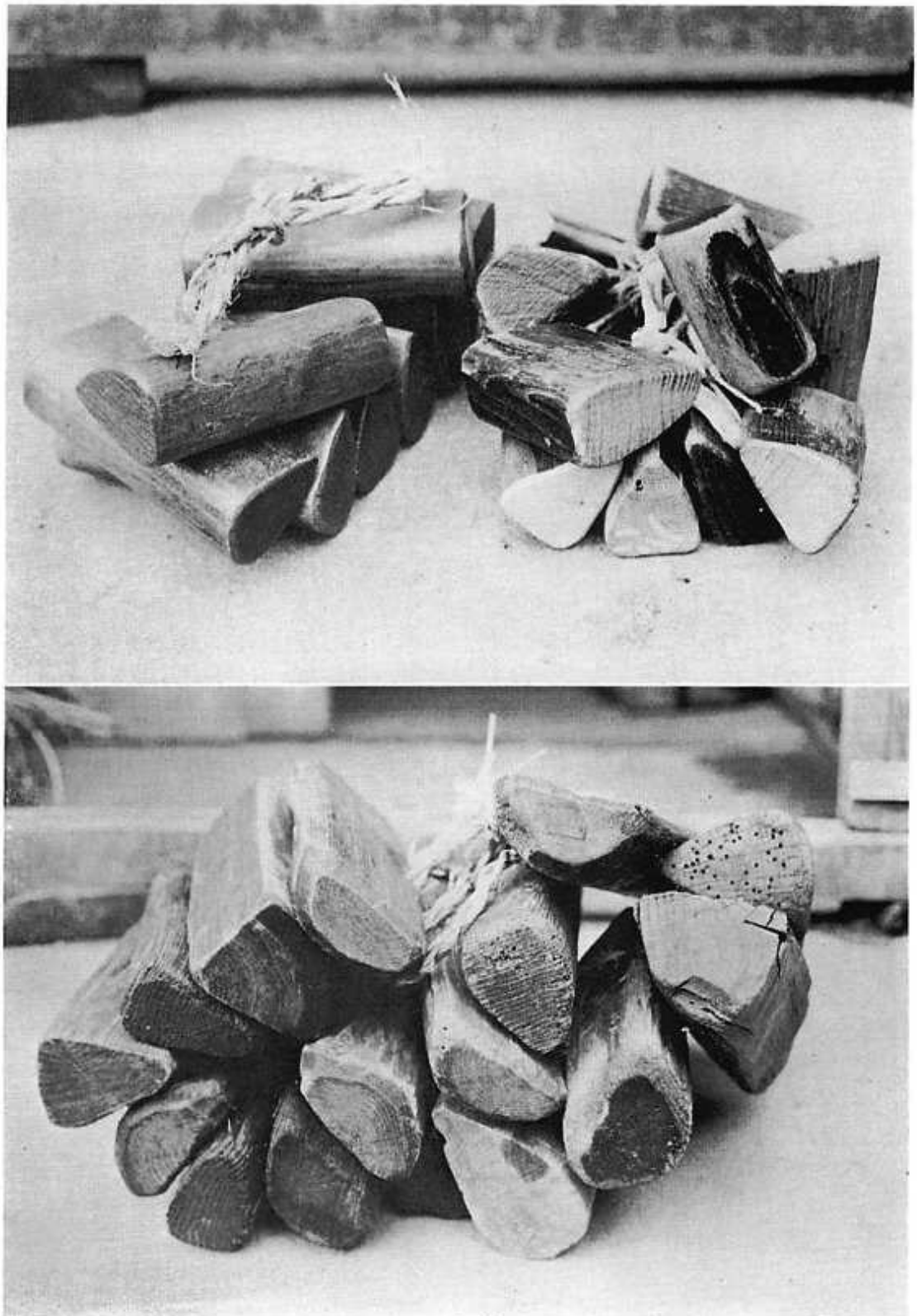


上：暮見・島田家のテゴ．　下：同炭俵と養蚕のス．

図版七十



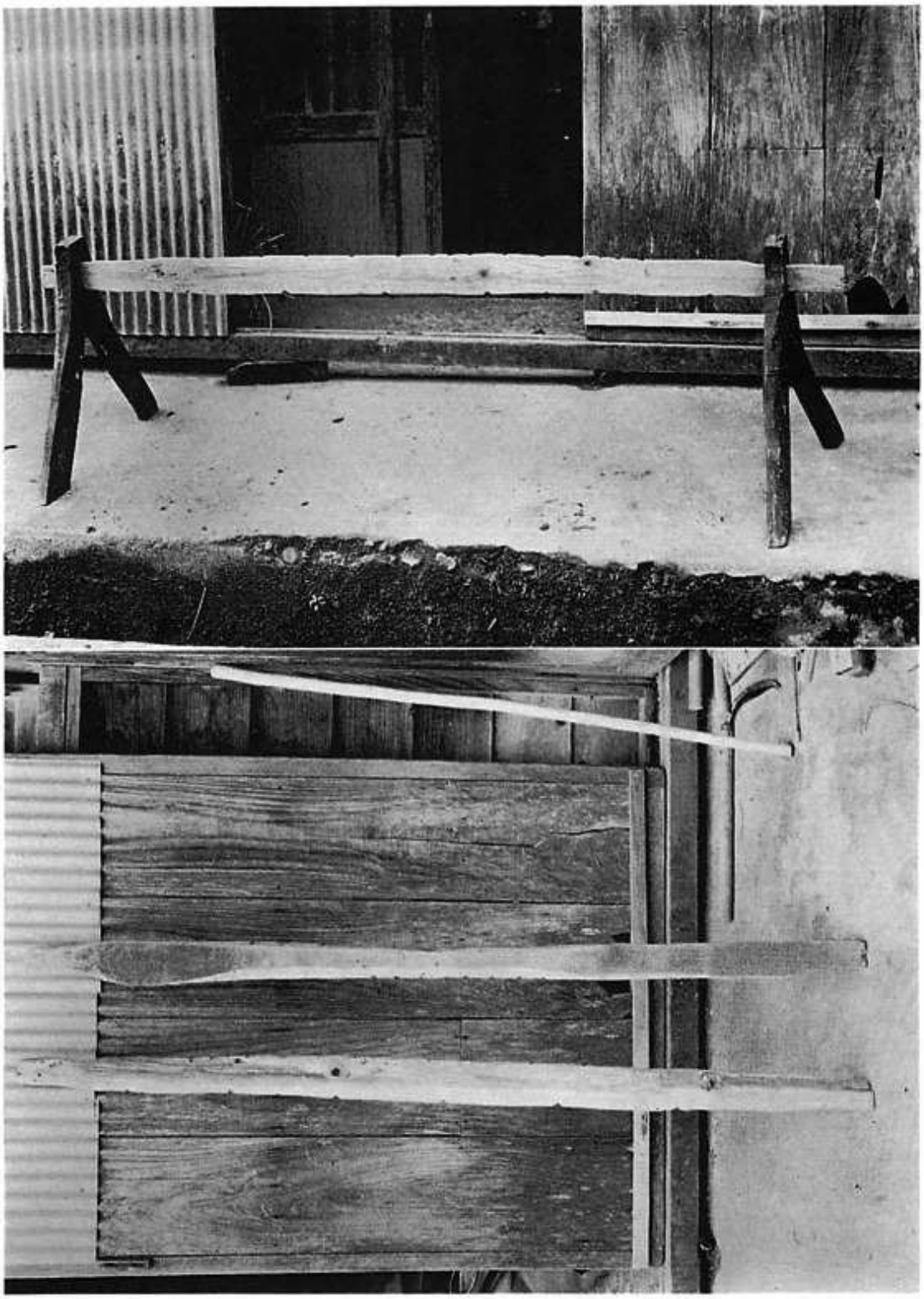
上:暮見・田村家のツチノコ.　下:同編み台.



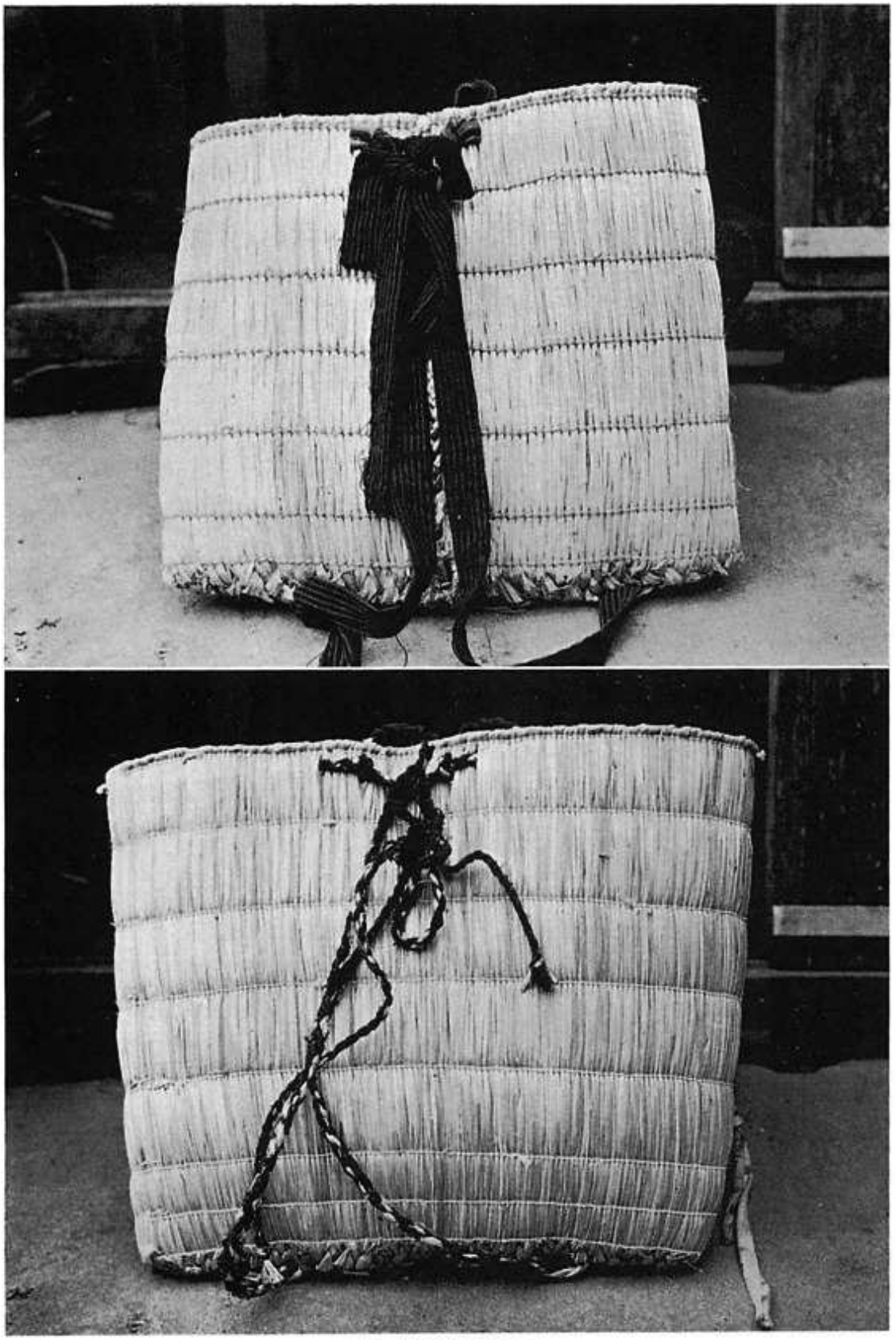
北谷・出水家のツチノコ.

図版七二

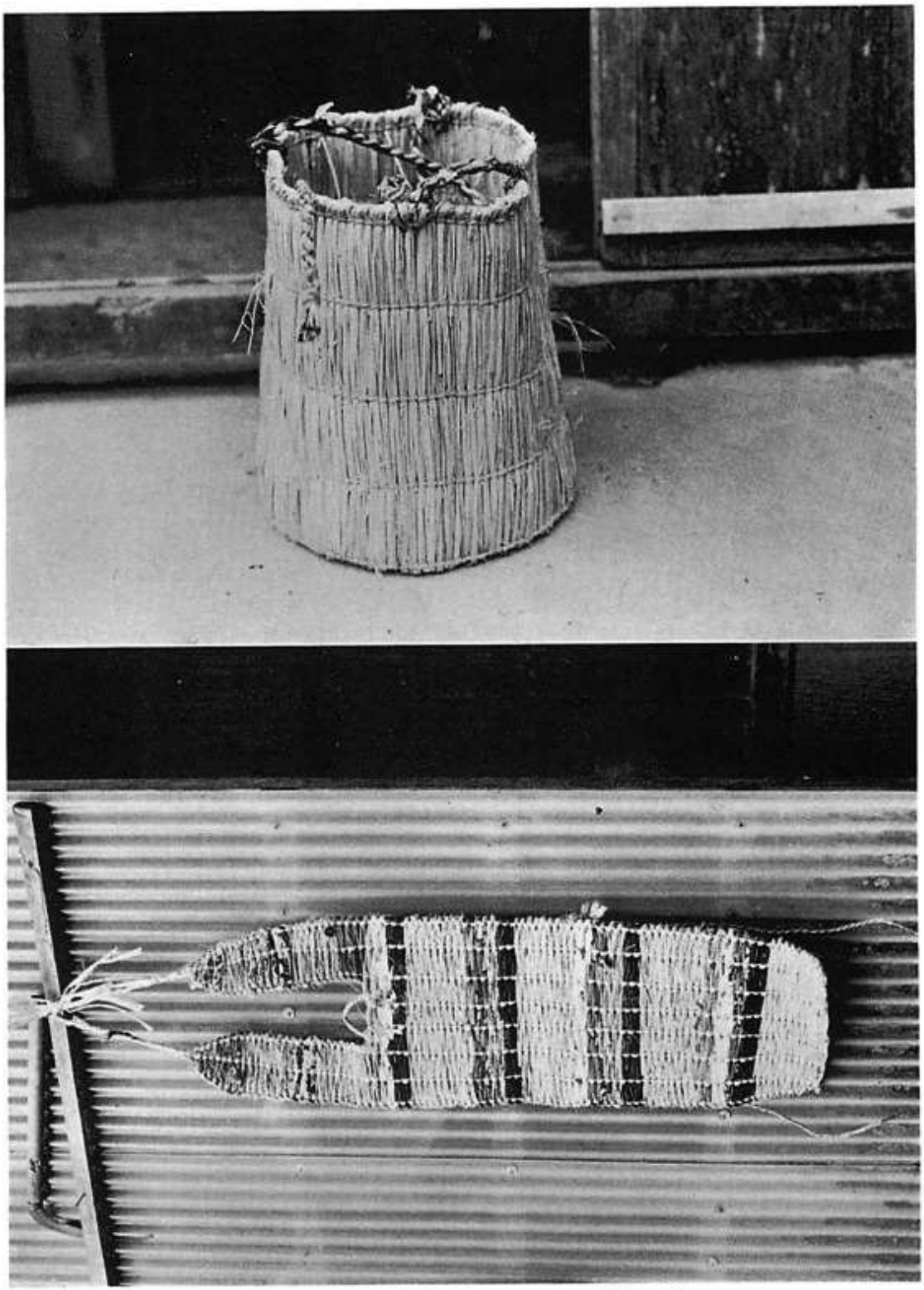
左：光谷・出水家のシキヘラ　右：岡田遺跡



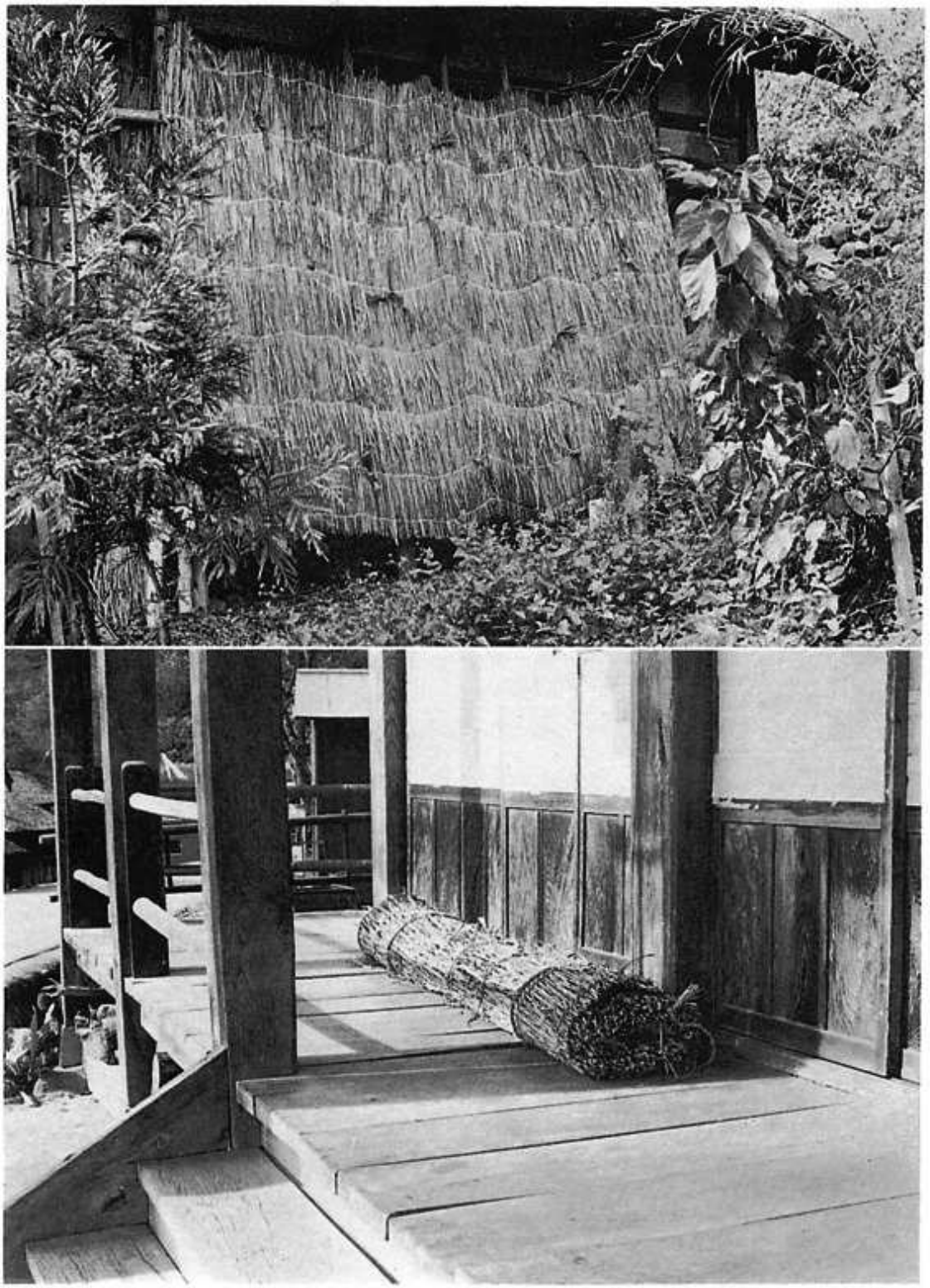
上:北谷・出水家の編み台.　下:同目盛板.



北谷・出水家の背中アテ.



上：北谷・出水家のフゴ，　下：同・ベタベタ（背中アテ）．



上：立てかけられた雪囲いのス．　下：出荷される雪囲いのス．

福井県勝山市古宮遺跡発掘調査報告書
発行日　1978年3月31日
編集者　平安博物館考古学第2研究室
渡辺　誠
発行者　平安博物館
京都市中京区三条高倉
制作　ピクトリー社
京都市中京区油小路通綾上ル